

第1章 教育課程のポリシー（P7）

②その他の資格

本学では、**学校図書館司書教諭の任用**資格を取得するための科目も開設しています。**この**資格を取得するためには、所定の単位を修得する必要がありますので、第17章をよく読んで履修計画を立ててください。

7 休学・復学・退学等

（1）休学

①「休学願」

病気等のやむをえない理由により、引き続き3か月以上修学できない場合は、休学を願い出ることができます。休学を希望する者は、「休学願」に理由と休学期間を書き、学資負担者と連署のうえ、クラス担任の承諾を得て、ポータルサイトから別途お知らせする期日までに教務課を通じて学長に許可を願い出てください。休学の理由が病気である場合は、医師の診断書も添付してください。

なお、授業料が納付されていないと、「休学願」は受理されません。休学を願い出る際は、授業料の納付状況を確認してください。

②休学の期間

休学の期間は、1年以内と定められています。ただし、特別の理由がある場合は、学長の許可を得て、引き続き休学することができます。休学の延長を希望するときは、「休学願」を改めて教務課に提出してください。休学の理由が病気である場合は、医師の診断書も添付してください。

休学の期間は、通算して3年を超えることはできません。

休学の期間は、在学期間には含まれません。

（2）復学

休学期間内に、休学の理由が消滅した場合は、学長の許可を得て復学することができます。復学を希望するときは、「復学願」に理由と復学予定日を書き、学資負担者と連署のうえ、クラス担任の承諾を得て、ポータルサイトから別途お知らせする期日までに教務課を通じて学長に許可を願い出てください。

なお、休学期間の終了に伴う復学については、自動的に復学扱いとなりますので手続きは必要ありません。

（3）退学

やむをえない理由で退学を希望する場合は、学長に願い出て、その許可を受けなければなりません。退学を希望する者は、「退学願」に理由と退学予定日を書き、学資負担者と連署のうえ、クラス担任の承諾を得て、ポータルサイトから別途お知らせする期日までに教務課を通じて学長に許可を願い出てください。退学の理由が病気である場合は、医師の診断書も添付してください。

なお、授業料が納付されていないと、「退学願」は受理されません。退学を願い出る際は、授業料の納付状況を確認してください。

（4）再入学

正 本学を退学した者、または授業料未納により除籍となった者が再入学を志願する場合、選考のうえ、許可することがあります。

誤 本学を退学した者が再入学を志願する場合、選考のうえ、許可することがあります。

第3章 履修方法等（P18）

3 履修型登録について

履修型登録（芸術体育・生活系教育専攻）

（1）履修型の登録

芸術体育・生活系教育専攻の学生は、卒業要件を満たすことで中学校教諭一種と高等学校教諭一種（※1）の免許状と、小学校教諭一種または中学校教諭一種（※2）の免許状の所要資格が得られます。

芸術体育・生活系教育専攻の学生は、小学校教諭一種免許状の所要資格を取得するか中学校教諭一種免許状の所要資格を取得するかを選択して、「履修型」の登録を行わなければなりません。

卒業要件として小学校教諭一種免許状の所要資格を取得する場合は「小中履修型」を、中学校教諭一種の免許状（※2）の所要資格を取得する場合は「中等連携履修型」を登録する必要があります。

履修型希望の申請時期と手続きの詳細は、1年次の10月頃にポータルサイト、掲示にてお知らせします。

※1 各コースに応じた教科。ただし、技術は中学校教諭一種免許のみ。

※2 国語、英語、数学のいずれか1教科選択

（2）履修型の変更

登録した「履修型」と「中等連携履修型の教科」の変更は、特別な事情が生じた場合を除いて認められません。

特別な事情が生じた場合は、「履修型変更願」あるいは「中等連携履修型の教科変更願」に理由等必要事項を記し、クラス担任の意見書を添えて、教務課を通じて **（正）学部長（誤）学務担当副学長** に願い出てください。

履修型登録（特別支援教育専攻）

（1）履修型の登録

特別支援教育専攻の学生は、卒業要件を満たすことによって特別支援学校教諭一種（取得単位によって2領域から5領域）の免許状と、小学校教諭一種または中学校教諭一種（1教科選択）の免許状の所要資格が得られますが、小学校教諭一種免許状の所要資格を取得するか中学校教諭一種免許状の所要資格を取得するかを選択して、「履修型」の登録を行わなければなりません。

卒業要件として小学校教諭一種免許状の所要資格を取得する場合は「小履修型」を、中学校教諭一種の免許状の所要資格を取得する場合は「中履修型」（教科を必ず一つ選択すること）を登録する必要があります。

履修型希望の申請時期と手続きの詳細は、1年次の10月頃にポータルサイト、掲示にてお知らせします。

（2）履修型の変更

登録した「履修型」と「中履修型の教科」の変更は、特別な事情が生じた場合を除いて認められません。

特別な事情が生じた場合は、「履修型変更願」あるいは「中履修型の教科変更願」に理由等必要事項を記し、クラス担任の意見書を添えて、教務課を通じて **（正）学部長（誤）学務担当副学長** に願い出てください。

第5章 芸術体育・生活系専攻 教育課程表（P32-33）

8 芸術体育・生活系教育専攻・教育課程表（卒業に要する単位数）

次の表は、芸術体育・生活系教育専攻の「教育課程表」です。

この表には、履修型別に、芸術体育・生活系教育専攻を卒業するために必要な単位数が記されています。授業科目の詳細と履修の決まりについては、備考欄に示された「授業科目表」を確認してください。

科目区分		授業科目群名等	小中履修型		中等連携履修型		備 考
			小1種	中1種	中1種	中1種	
専門 基盤科目	基礎科目	日本国憲法	2		2		授業科目表1 (38ページ～参照)
		情報活用の基礎	2		2		
		健康・運動系科目	2		2		
		外国語科目	4		4		
		外国語コミュニケーション	2		2		
		防災教育	2		2		
	教養科目	知る科目	2	(誤)10 (正) 8	2	(誤)10 (正) 8	授業科目表2 (39ページ～参照)
磨く科目		2	2				
育む科目		2	2				
専門 教育科目	教育の基礎的理解に関する科目	教育の原理	2		2		授業科目表6－1～6－4 (97ページ～参照)
		教職入門	2		2		
		教育の制度・経営	2		2		
		教育と地域社会	2		2		
		発達と学習の心理	2		2		
		特別支援教育理解	2		2		
		幼稚園教育課程論	－		－		
	道徳・総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目	道徳の理論及び指導	2		2		
		総合的な学習の時間の指導法（特別活動を含む。）	2		2		
		教育課程と教育方法	1		1		
		情報活用能力育成実践論	1		1		
		児童・生徒理解	2		2		
		幼児理解	－		－		
		教育相談(カウンセリングを含む。)	2		2		
	キャリアステップアップ科目	教育体験初年次演習Ⅰ	2		2		
		教育体験初年次演習Ⅱ	2		2		
		教育実践探究演習（各教科の中等実践指導法科目）	－	4	4	4	
		教育実習(事前・事後指導を含む。)	7		7		
		教職実践演習	2		2		
専門 教育科目	教科及び教科の指導法に関する科目	保育内容指導法	－		－		授業科目表6－5～6－18 (104ページ～参照)
		各教科の教育法（初等）	20	－	－		
		各教科の教育法（中等）	－	4	4	4	
		幼稚園の領域科目	－		－		
		小学校の専門科目	18	－	－		
		中学校の専門科目	－	20	30	20	
		コース専門科目	(誤) 6	(正) 8	(誤) 6	(正) 8	
		特別支援専門科目	－		－		
	卒業研究		4		4		第14章 (197ページ～参照)
専 門		－		－		第15章 (201ページ～参照)	
合 計		133		133			

第5章 特別支援教育専攻 教育課程表（P34-35）

Ⅱ 特別支援教育専攻・教育課程表（卒業に要する単位数）

次の表は、特別支援教育専攻の「教育課程表」です。

この表には、履修型別に、特別支援教育専攻を卒業するために必要な単位数が記されています。授業科目の詳細と履修の決まりについては、備考欄に示された「授業科目表」を確認してください。

科目区分		授業科目群名等	小履修型		中履修型		備 考
			小1種	特支1種	中1種	特支1種	
専門 基礎科目	基礎科目	日本国憲法	2		2		授業科目表1 (38ページ～参照)
		情報活用の基礎	2		2		
		健康・運動系科目	2		2		
		外国語科目	4		4		
		外国語コミュニケーション	2		2		
		防災教育	2		2		
	教養科目	知る科目	2	} 6	2	} 6	授業科目表2 (39ページ～参照)
		磨く科目	2		2		
		育む科目	2		2		
専門 教育科目	教育の基礎的理解に関する科目	教育の原理	2		2		授業科目表7-1 (131ページ～参照)
		教職入門	2		2		
		教育の制度・経営	2		2		
		教育と地域社会					
		発達と学習の心理	2		2		
		特別支援教育理解	2		2		
		幼稚園教育課程論	－		－		
		専門 教育科目	道徳・総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目	道徳の理論及び指導	2		
総合的な学習の時間の指導法（特別活動を含む。）	2				2		
教育課程と教育方法	1				1		
情報活用能力育成実践論	1				1		
児童・生徒理解	2				2		
幼児理解	－				－		
教育相談（カウンセリングを含む。）	2				2		
キャリアステップアップ科目	教育体験初年次演習Ⅰ		2		2		
	教育体験初年次演習Ⅱ		2		2		
	教育実践探究演習（中履修型は各教科の中等実践指導法科目）		4		4		
	教育実習（事前・事後指導を含む。）		7		7		
	教職実践演習		2		2		
教科及び教科の指導法に関する科目	保育内容指導法		－		－		
	各教科の教育法（初等）		20		－		
	各教科の教育法（中等）		－		4		
	幼稚園の領域科目		－		－		
	小学校の専門科目		20		－		
	中学校の専門科目		－		32		
	コース専門科目		(誤) 0 (正) 2		(誤) 0 (正) 2		
	特別支援専門科目		31		31		
卒 業 研 究			4		4		第14章 (197ページ～参照)
専 門		(誤) 4 (正) 2		(誤) 8 (正) 6		第15章 (201ページ～参照)	
合 計		136		136			

第6章 専門基盤科目（全専攻共通）（P39）

授業科目表2（教養科目）

次の表の区分（「知る科目」「磨く科目」「育む科目」）から各2単位以上を含めて、以下の通り履修してください。

○合計6単位以上修得

→初等教育専攻の幼年期教育創生コースと未来づくり教育創生コース、及び特別支援教育専攻の各コース

（誤）○合計10単位以上修得

→初等教育専攻の人文・社会系教育創生コースと理数・自然系教育創生コース、及び中等教育専攻、芸術体育・生活系教育専攻の各コース

（正）○合計8単位以上修得

→芸術体育・生活系教育専攻の各コース

○合計10単位以上修得

→初等教育専攻の人文・社会系教育創生コースと理数・自然系教育創生コース、及び中等教育専攻の各コース

なお、初等教育専攻（幼年期教育創生コース）及び芸術体育・生活系教育専攻（小中履修型（美術、技術、家庭）及び中等連携履修型）においては（※）の科目から合計2単位以上、芸術体育・生活系教育専攻（小中履修型（音楽・保健体育））においては、（※）の科目から合計4単位以上選択して履修し、単位を修得する必要があります。

<知る科目>

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
人権教育	人権教育は単なる法制度的知識にとどまらず、現実社会や日常生活における自他のありかた・かかわりかた問題としてとらえる必要がある。学校においても、児童生徒の生活の実践知として人権をとらえる必要がある。このような観点から、「国連人権教育の10年」や「子どもの権利条約」に関する国内外の行動に触れつつ、人権とは何か、学校の社会的役割、教師の役割について学ぶ。	2	(2)	講義	1～	2単位以上選択必修
日本の言語と文化	私たちは、日々の言語生活のなかで日本語の大切さに気付きながらも、それが日本人の生活や文化とどのような関係性をもつのか考える機会は少ない。本講義では、身近な日本語を出発点として日本語の種々相に触れるとともに、文学作品を通して言語・文化と能動的なかわりをもちながら、日本人のものの見方や考え方についても理解を深めていく。	2	(2)	講義	1～	

第7章 初等教育系教育専攻専門教育科目 (P58・60・62・64)

P.58 授業科目表4-8 (幼年期教育創生コース)

P.60 授業科目表4-9 (未来づくり教育創生コース)

P.62 授業科目表4-10 (人文・社会系教育創生コース)

P.64 授業科目表4-11 (理数・自然系教育創生コース)

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
(誤) 研究演習 (初等教育専攻) (正) 研究演習	(誤) 初等教育専攻における4つのコースのそれぞれのコースの教育理念に即しながら、学生各自の研究テーマについて卒業研究につなげていくことをめざした科目である。すなわち、これまで修得してきた大学での授業科目(専門基盤科目および専門教育科目)および大学内外での実践的な体験活動などについて、それらと卒業研究(卒業研究演習も含む)とを橋渡しする性格を持たせることによって、卒業研究(卒業研究演習も含む)の学修においても、教員養成大学としての学修成果にも配慮していくことをめざした科目である。履修については、卒業論文の指導教員(主査および副査)が4年次の学生を対象にして開講することを基本とする。 (正) この授業では、学生がこれまで修得した授業科目や大学内外での学修活動などを卒業研究へとつなぐことを目的とする。学生が、主体的に自らの研究対象への興味や関心を深め、論理的・批判的思考を含む研究手法の基礎を学び、卒業研究において学修を集大成するための準備を進める。卒業研究仮配属または本配属の指導教員が3年次または4年次の学生を対象に開講する。	2	2	演習	(誤) 4 (正) 3~	演習系科目 必修

第8章 中等教育専攻専門教育科目（P92・95）

授業科目表5-10（言語・社会系教育コース）

授業科目表5-11（理数系教育コース）

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
（誤） 応用演習（中等教育専攻） （正）研究演習	（誤） 中等教育専攻における言語・社会系教育コースのそれぞれの教科の教育理念に即しながら、学生各自の研究テーマについて卒業研究につなげていくことをめざした科目である。すなわち、これまで修得してきた大学での授業科目（専門基礎科目および専門教育科目）および大学内外での実践的な体験活動などについて、それらと卒業研究（卒業研究演習も含む）とを橋渡しする性格を持たせることによって、卒業研究（卒業研究演習も含む）の学修においても、教員養成大学としての学修成果にも配慮していくことをめざした科目である。履修については、卒業論文の指導教員（主査および副査）が4年次の学生を対象にして開講することを基本とする。 （正） この授業では、学生がこれまで修得した授業科目や大学内外での学修活動などを卒業研究へとつなぐことを目的とする。学生が、主体的に自らの研究対象への興味や関心を深め、論理的・批判的思考を含む研究手法の基礎を学び、卒業研究において学修を集大成するための準備を進める。卒業研究仮配属または本配属の指導教員が3年次または4年次の学生を対象に開講する。	2	2	演習	（誤）4 （正）3～	演習系科目 必修

第9章 芸術体育・生活系教育専攻専門教育科目（P112）

授業科目表6-11（保健体育）

正 芸術・体育系教育コース 教科保健体育の学生のうち、小中履修型の学生は20単位以上、中等連携履修型の学生は30単位以上、次の授業科目表から必修・選択必修の科目を含めて履修してください。

誤 芸術・体育系教育コース 教科保健体育の学生のうち、小中履修型の学生は23単位以上、中等連携履修型の学生は30単位以上、次の授業科目表から必修・選択必修の科目を含めて履修してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
中等保健体育科内容構成基礎論	ヒトの身体・機能およびスポーツ運動からみた体育という観点から、「スポーツとは何か」「体育とは何を教え・育てる教科か」を考察する。あわせて体育学・運動学・教育学・予防医学などの課題を探る。	2	(2)	講義	1～	必修
保健体育科内容講義（体育原理・体育史）	体育の歴史や原理（哲学）に関する知識を獲得するとともに、体育の在り方について検討できる能力を身につけることを到達目標とする。体育の歴史や原理を通じて、現代日本の体育が抱える諸問題を考える。	2	(2)	講義	1～	小中履修型は2単位以上選択必修 中等連携履修型は4単位以上選択必修
保健体育科内容講義（体育社会学・体育経営管理学）	産業形態やライフスタイルの変化、高齢化など様々に変容する現代社会において身体活動の意義は見直されつつある。生涯スポーツという語はますます耳慣れた言葉となっている。私たちはどのように身体とつきあおうとしているのだろうか。この授業では身体に着目しつつ学校教育や現代社会について講義する。 地域社会や学校教育における体育・スポーツについて経営管理学の立場から学習する。体育施設の整備やプログラム、クラブ、組織体などについて、その経営管理を具体的に検討し、学校体育のみならず社会体育や地域スポーツにまで範囲を広げ、それぞれの立場から経営管理の実情と方法について学ぶ。	2	(2)	講義	2～	

第9章 芸術体育・生活系教育専攻専門教育科目（P114）

授業科目表6-11（保健体育） つづき

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
※保健体育科内容実技（体育実技・球技 A）	サッカー及びバスケットボールの特性を理解するとともに、サッカー及びバスケットボールをプレイするための基本的技術、戦術（特に個人技術、個人戦術）の習得を主題にする。そして最終的にはチームプレイの最小単位である2対2におけるコンビネーションプレイからの攻防を理解して実践できるようになることがこの授業のねらいである。	2	2	実技	1～	小中履修型は2単位以上選択必修
※保健体育科内容実技（体育実技・球技 B）	・硬式テニスの特性やルールを理解するとともに、基本的技術の習得と技術練習、応用練習を通して、ゲームの進め方を学習する。また、ベースボール型球技の特性やルールを理解するとともに、基本的技術の習得を通してチームの進め方を学習する。 ・バレーボールのルールと競技特性を理解し、個人的及び集団の技術を習得するとともに、それらを基にした戦術を展開して、ゲームの展開方法を学習する。	2	2	実技	1～	中等連携履修型は2科目とも必修
※保健体育科内容実技（体育実技・武道）	剣道：剣道の基本動作と一本打ちの技の修得に重点をおいて行う。「技」の修得は、代表的な技のみに留めて、互格稽古及び簡易試合ができるまで展開する。 柔道：柔道の特性を理解し、投げ技、固め技の基本的な指導法を学び、中学校保健体育での柔道の授業を安全に効果的に実施できるようにする。	2	2	実技	1～	必修
※保健体育科内容実技（体育実技・器械運動）	各種目の基本技や組合せ、演技をある程度の技術的レベルで実施できるようになるとともに、器械運動の指導に必要な基礎的知識や理論を理解できることを目標とする。 マット運動、鉄棒運動、跳び箱運動、平均台運動の基本技や発展技、技の組合せ、演技の構成や実施の段階的習得と習熟を図る。また器械運動の特性、技の技術的要素や系統性、練習の方法・段階、安全確保・補助の仕方を学ぶとともに、技の出来映えを観察する能力の向上を図る。	1	(2)	実技	1～	小中履修型は1単位以上選択必修 中等連携履修型は2科目とも必修
※保健体育科内容実技（体育実技・陸上競技）	陸上競技の走・投・跳各種目の競技特性や基本的技能を、実技を通して学習する。	1	(2)	実技	1～	
※保健体育科内容実技（体育実技・ダンス）	ダンスの基本を学びながら「踊り表現するからだ」への気づきを深めること、創作ダンスの指導法を理解すること、ダンス作品を創作し発表する過程で培われる発想力やコミュニケーション能力を高めることを到達目標とする。	1	正(2) 誤 2	実技	1～	必修
※保健体育科内容実技（体育実技・野外活動 A）	本授業においては、学校教育における児童・生徒の野外における活動の指導はもとより、家庭や地域において行われる自然体験学習の指導に必要な知識、技術の基本を習得し、計画的なプログラムに沿って、自然の中での活動能力を高めることを目指す。 また、生涯スポーツとしてのスキー運動の特性を理論と実践を通して理解すると同時に、実際に冬山を体験することにより、冬季の自然を理解することをねらいとする。	1	2	実技	1～	1単位以上選択必修（中等連携履修型のみ）
※保健体育科内容実技（体育実技・野外活動 B）	遠泳における泳力の向上を図りながら、合宿経験を通して臨海学校などの海浜行事の運営や指導について体験的に学ぶ。 生涯スポーツとしてのスキー運動の特性を理論と実践を通して理解すると同時に、実際に冬山を体験することにより、冬季の自然を理解することをねらいとする。	1	2	実技	1～	

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

第9章 芸術体育・生活系教育専攻専門教育科目（P127・128・130）

（P127）

⑥コース専門科目

コース専門科目は、所属するコースに応じて得意分野の専門性を身につけるために設けられている科目で、必修・選択必修の科目を含めて（誤）6（正）8単位の履修が必要です。芸術体育・生活系教育専攻のコース専門科目は、「コース共通科目」、「コースピーク科目」、「**演習系科目**」の（誤）2（正）3種類の科目群で構成されています。「コース共通科目」については、芸術体育・生活系教育専攻における2つのコースごとに、隣接した分野・領域にも目を向けながら、芸術体育・生活系教育でのカリキュラムに対する総合的な資質・能力を身につけるための授業科目です。また、「コースピーク科目」については、それぞれのコースにおける教科の特徴に関連する教育内容をさらに深めて学んでいくための授業科目です。**「演習系科目」については、履修してきた各種の授業科目と卒業研究を橋渡しすることを目指した授業科目です。**

履修方法については以下の通りとなります。

- ・「コース共通科目」は自分の所属するコースの科目2単位が必修になりますので留意してください。なお、他コースの共通科目も授業担当教員の許可があれば履修可能です。
- ・「コースピーク科目」は、コース毎の授業科目表を参照して、4単位以上修得してください（授業科目表6-17～授業科目表6-18）。

（P128・130）

以下、既存の授業科目にそれぞれ追加

授業科目表6-17（芸術・体育系教育コース）

授業科目表6-18（生活系教育コース）

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
研究演習	この授業では、学生がこれまで修得した授業科目や大学内外での学修活動などを卒業研究へとつなぐことを目的とする。学生が、主体的に自らの研究対象への興味や関心を深め、論理的・批判的思考を含む研究手法の基礎を学び、卒業研究において学修を集大成するための準備を進める。卒業研究仮配属または本配属の指導教員が3年次または4年次の学生を対象に開講する。	2	2	演習	3～	演習系科目必修

第10章 特別支援教育専攻専門教育科目（P165）

授業科目表 7-15（保健体育）（中履修型のみ）

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講義・ 演習・ 実験等	対 象 年 次	備 考
※保健体育科内 容基礎実技（体 育実技）	体づくり運動、水泳およびダンス（日本の民謡）を中心に構成され、保健体育科の指導に必要な基本的知識・技術について学習し、技能の習熟を図る。またそれぞれの練習の方法、指導法を包括的に学ぶ。	2	2	実技	1～	必修
※保健体育科内 容実技（体育実 技・球技 A）	サッカー及びバスケットボールの特性を理解するとともに、サッカー及びバスケットボールをプレイするための基本的技術、戦術（特に個人技術、個人戦術）の習得を主題にする。そして最終的にはチームプレイの最小単位である2対2におけるコンビネーションプレイからの攻防を理解して実践できるようになることがこの授業のねらいである。	2	2	実技	1～	正 必修 誤 小中履修型は2 単位以上選択 必修 中等連携履修 型は2科目とも 必修
※保健体育科内 容実技（体育実 技・球技 B）	・硬式テニスの特性やルールを理解するとともに、基本的技術の習得と技術練習、応用練習を通して、ゲームの進め方を学習する。また、ベースボール型球技の特性やルールを理解するとともに、基本的技術の習得を通してゲームの進め方を学習する。 ・バレーボールのルールと競技特性を理解し、個人的及び集団的技術を習得するとともに、それらを基にした戦術を展開して、ゲームの展開方法を学習する。	2	2	実技	1～	正 必修 誤 小中履修型は2 単位以上選択 必修 中等連携履修 型は2科目とも 必修
※保健体育科内 容実技（体育実 技・武道）	剣道：剣道の基本動作と一本打ちの技の修得に重点をおいて行う。「技」の修得は、代表的な技のみに留めて、互格稽古及び簡易試合ができるまで展開する。 柔道：柔道の特性を理解し、投げ技、固め技の基本的な指導法を学び、中学校保健体育での柔道の授業を安全に効果的に実施できるようにする。	2	2	実技	1～	必修
※保健体育科内 容実技（体育実 技・器械運動）	各種目の基本技や組合せ、演技をある程度の技術的レベルで実施できるようになるとともに、器械運動の指導に必要な基礎的知識や理論を理解できることを目標とする。 マット運動、鉄棒運動、跳び箱運動、平均台運動の基本技や発展技、技の組合せ、演技の構成や実施の段階的習得と習熟を図る。また器械運動の特性、技の技術的要素や系統性、練習の方法・段階、安全確保・補助の仕方を学ぶとともに、技の出来映えを観察する能力の向上を図る。	1	正(2) 誤 2	実技	1～	正 必修 誤 小中履修型は 2単位以上選択 必修 中等連携履修 型は2科目とも 必修
※保健体育科内 容実技（体育実 技・陸上競技）	陸上競技の走・投・跳各種目の競技特性や基本的技能を、実技を通して学習する。	1	正(2) 誤 2	実技	1～	正 必修 誤 小中履修型は 2単位以上選択 必修 中等連携履修 型は2科目とも 必修
※保健体育科内 容実技（体育実 技・ダンス）	ダンスの基本を学びながら「踊り表現するからだ」への気づきを深めること、創作ダンスの指導法を理解すること、ダンス作品を創作し発表する過程で培われる発想力やコミュニケーション能力を高めることを到達目標とする。	1	正(2) 誤 2	実技	1～	必修
※保健体育科内 容実技（体育実 技・野 外 活 動 A）	本授業においては、学校教育における児童・生徒の野外における活動の指導はもとより、家庭や地域において行われる自然体験学習の指導に必要な知識、技術の基本を習得し、計画的なプログラムに沿って、自然の中での活動能力を高めることを目指す。 また、生涯スポーツとしてのスキー運動の特性を理論と実践を通して理解すると同時に、実際に冬山を体験することにより、冬季の自然を理解することをねらいとする。	1	2	実技	1～	1単位以上 選択必修
※保健体育科内 容実技（体育実 技・野 外 活 動 B）	遠泳における泳力の向上を図りながら、合宿経験を通して臨海学校などの海浜行事の運営や指導について体験的に学ぶ。 生涯スポーツとしてのスキー運動の特性を理論と実践を通して理解すると同時に、実際に冬山を体験することにより、冬季の自然を理解することをねらいとする。	1	2	実技	1～	

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

第10章 特別支援教育専攻専門教育科目（P169）

授業科目表 7-17（家庭）（中履修型のみ）

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講義・ 演習・ 実験等	対 象 年 次	備 考
家庭科内容講義 （保育学A）	本科目では、家庭科教育の「A 家族生活と家族」分野の内、保育領域に焦点を当て、その指導に必要とされる知識を身につける。とくに、生涯発達の視点に立ち、人の発達や生活における諸様相とその特徴を理解し、そこで求められる適切な保育者の援助や環境構成の在り方について検討を行い、専門的知識の修得を目指す。	2	(2)	講義	3～	必修
家庭科内容講義 （保育学B）	少子化、経済活動の悪化など、現代においては家族を取り巻く社会的な状況が急激に、多様に変化している。そのような中で、保育者に子育て家庭に対する支援が求められてきた。本科目では、(1) 子育て家庭を取り巻く社会的状況の在り方や歴史的な変遷を調査し、そこでどのような支援が保育所・幼稚園に求められているのか検討を行う。そして、(2) これから保育者に求められる専門性について理解する。さらに、(3) 保育に携わる者の専門性育成に関する時間的展望を把握することを目指す。	2	(2)	講義	3～	
家庭科内容講義 （家庭経営学）	私たちは多様な家族を形成し、ひとりひとりが一定の役割を担いながら家庭での生活を持続的に経営している。しかし、家庭とは家族だけの閉じられた環境ではなく、社会環境から様々な影響を受け、日々変化していくものである。そのため、私たちには現代社会の抱える困難と向き合いながら、主体的に生活経営する能力が求められている。そこでこの授業では、今日の家庭環境が形成されてきた歴史過程を学ぶとともに、現代の家庭生活に生じている問題を多面的に検討していく。	2	(2)	講義	1～	必修
家庭科内容講義 （家庭科教育）	「家族・家庭生活」、「衣食住の生活（食生活、衣生活、住生活）」、「消費生活・環境」の三つの基本的な知識を身につけ、中学校において各々の分野に関する授業を組み立てる理論について講義を行う。	2	(2)	講義	1～	必修
家庭科内容演習 （家庭科教育）	家庭科教育を支える基礎的な研究論文の抄読と家庭科の授業への展開を考える。各領域の研究に関わる研究論文や専門書を取り上げ、内容紹介や討論を通して理解を深める。	2	2	演習	3～	誤 必修 正 指定なし
家庭科内容実験 実習(被服学A)	人体と被服の関係を考慮し、被服構成について学び実習する。被服製作を行い、家庭科教育衣生活領域における被服の知識、技術の基礎、応用を身につける。立体構成としての作品（秋冬ものの裏付きセミタイトスカート、半袖ブラウス）を製作し、作品製作を通し、被服構成について、また縫製についての基礎、応用を学ぶ。	1	(3)	実験・実習	1～	必修
家庭科内容実験 実習(被服学B)	ものづくり技術の原理が理解でき、確かな技能を身につけることを目標とする。「ものづくりを」を通して、技能（操作法）の習得とものづくりにある原理・原則について学習する。最終的には繊維・糸・布の基本的な性質および構造について把握する。	1	(3)	実験・実習	1～	必修
家庭科内容実験 実習(食物学A)	様々な食品の性質に及ぼす成分について理解し、衛生面も含めた基本的な調理を身につけることを目標とする。調理における食品成分の役割について実験を行なうとともに、基本的な調理を行う。	1	(3)	実験・実習	2～	正 必修
家庭科内容実験 実習(食物学B)	調理に必要な感覚を意識し、加工に関わる実験や応用調理を通して調理技術を養う。官能評価実験、手作り食品と市販品との比較や応用的な調理実習を行う。	1	(3)	実験・実習	2～	正 必修
家庭科内容実験 実習(住居学A)	住居空間を、図法を踏まえて作図表現でき、また図面から設計意図を読みとることができるようになることを目標とする。住居形態に関する思想的背景や住居空間から生じる生活行為、家具配置、室内環境について取り上げながら、手書きおよびCADによる製図練習および設計を行う。	1	(3)	実験・実習	1～	正 必修
家庭科内容実験 実習(住居学B)	住居の仕組みや動きに関して、計測機器の特性を考慮しながら実験・調査することができるようになることを目標とする。住居環境、住居構造に関する実験・調査に基づいて、レポート・発表を行う。	1	(3)	実験・実習	3～	必修

正
(追加)

第10章 特別支援教育専攻専門教育科目 (P180)

授業科目表 7-21 (健康・運動障害教育コース)

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
聴覚・言語障害の教育課程・指導論	教育的係わり合いの場における係わり手と係わられ手のコミュニケーションの成立・促進に関する重要な諸点について事例をもとに解説し、それらを学校教育の中で展開する際に教育課程の編成とどのように関連をもたせるかを講義する。	2	(2)	講義	2～	
知的障害の教育課程・指導論	特別支援教育とは、一人一人の子ども固有のニーズを的確に把握し、必要な支援をきめ細かく提供する教育である。知的障害児とその周辺の子どもたちは、生活や学習等において種々の困難を示しており、この講義では、それらを改善・克服するための教育内容、指導の理論と技術について学習する。また、宮城県をはじめとする地域の特別支援学校(知的障害)での実践等についても適宜紹介する。	2	(2)	講義	2～	
視覚障害への教育支援 A	様々な視覚障害の教育的支援方法に関する知識や支援に関する具体的な技能を獲得する。視覚障害による様々な困難さについて、事例を通して理解を深め、それぞれに応じた支援方法を獲得する。特に、視覚を介さない盲児を対象とし、触覚を主とした感覚の特性に基づいた支援ができるようにする。	2	(2)	講義	2～	
視覚障害への教育支援 B	教育的見地から視覚障害児の困難を把握し支援につなげることができることを目指す。医学的な検査と教育的な評価の違いについて理解し、見えにくさを把握するための様々な評価について実践的に理解を深める。さらに、それを補助具や合理的配慮につなげることも実践的に取り組む。	2	(2)	講義	2～	
聴覚・言語障害への教育支援 A	この講義では、聴覚障害児に対する教育支援のあり方について、聴覚障害やコミュニケーション手段(聴能・手話・読話等)の基本知識、聴覚障害教育の歴史の変遷、聴覚障害児の教育的ニーズに応じた指導方法を学ぶ。あわせてその関連領域である言語学、発達心理学、認知心理学等も学習する。	2	(2)	講義	2～	
聴覚・言語障害への教育支援 B	この講義では、聴覚や言語に障害のある幼児、児童又は生徒に対する教育支援のあり方について、実践事例をもとに検討を進め、よりよい「教育的係わり合い」とは何かを検討する。	2	(2)	講義	2～	
知的障害への教育支援演習 A	この演習では、知的障害・自閉症・LD・ADHD等を含む内外の実践研究を中心とした文献講読、レポート発表と討議、学校又は施設見学、グループ研究を行い、これらを通じて発達障害児に関わる研究動向、教育・福祉・労働の現状と課題を把握し、教職において求められる基礎的な実践研究の方法とまとめ方を学ぶことをねらいとする。	2	2	演習	3～	2単位以上 選択必修
知的障害への教育支援演習 B	卒業研究を進める上で必要となる基礎的スキルを身に付けるとともに、知的障害及び関連する諸障害に関する文献講読や宮城県内の特別支援学校の見学または情報収集を通じて、各自の研究課題を明確化していくことをねらいとする。	2	2	演習	3～	
知的障害への教育支援演習 C	この演習では、文献講読や発表、ロールプレイング、討議を行い、知的障害・発達障害に関する先行研究や現代的課題をふまえた自らの研究課題を明確化し、それに関する専門的知識・技術・考え方について、実践を通して自らのものとすることをねらいとする。	2	2	演習	3～	

誤

第10章 特別支援教育専攻専門教育科目 (P183)

⑥コース専門科目 (追加)

コース専門科目は、所属するコースに応じて得意分野の専門性を身につけるために設けられている科目で、必修の科目 2 単位の履修が必要です。特別支援教育専攻のコース専門科目は、「演習系科目」で構成されており、履修してきた各種の授業科目と卒業研究を橋渡しすることを目指した授業科目です。

授業科目表7-22 (4コース共通)

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
研究演習	この授業では、学生がこれまで修得した授業科目や大学内外での学修活動などを卒業研究へとつなぐことを目的とする。学生が、主体的に自らの研究対象への興味や関心を深め、論理的・批判的思考を含む研究手法の基礎を学び、卒業研究において学修を集大成するための準備を進める。卒業研究仮配属または本配属の指導教員が3年次または4年次の学生を対象に開講する。	2	2	演習	3～	演習系科目必修

第14章 卒業研究 (P198)

(1) 卒業論文の作成

指導教員の決定、卒業論文題目の選定方法は、各専攻・コースによって定められています。卒業論文作成の手順、方法についても、各専攻・コースの指示に従ってください。

(2) 卒業論文題目の提出

卒業論文（制作・演奏を含む）提出者は、下記の日時までに、指導教員の承認を受けて「卒業論文題目届」を教務課に提出する必要があります。これを怠ると、卒業論文を提出することはできません。

ただし、海外に留学中の者（休学して海外の大学等で学んでいる者を含む）については、提出期限を8月31日（休日のときは次の平日）までとします。

卒業論文題目届

提出期限：卒業予定年度の5月31日（休日のときは次の平日）17時まで
提出先：教務課窓口

なお、届け出た論文題目を変更する必要がある場合は、指導教員の承認を受けて12月20日（休日のときは次の平日）17時までに「卒業論文題目変更届」を教務課に提出してください。

(3) 卒業論文の提出

卒業論文は、下記の日時までに教務課に提出しなければなりません。これに遅れた場合、卒業論文は受理されませんので注意してください。

卒業論文の提出期限は以下のとおりです。

卒業論文の提出

提出期限：1月16日（休日のときは次の平日）正午まで
ただし、以下の学生は、提出期限を2月8日（休日のときは次の平日）正午までとする。

- 正**・初等教育専攻の技術・家庭科に関する教員が指導教員である学生
誤・初等教育専攻の理科・技術・家庭科に関する教員が指導教員である学生
- ・芸術体育・生活系教育専攻の生活系教育コースに所属する学生
 - ・論文題目提出期限の日時において海外に留学中の学生（休学して海外の大学等で学んでいる者を含む）。

提出先：教務課窓口

《注》卒業論文の体裁については、各専攻・コースの指示に従ってください。

なお、卒業論文のほかに「論文抄録」を提出させる場合もあります。これについては、各専攻・コースの指示に従ってください。

(4) 卒業論文の審査

卒業論文の審査は下記の方法で行います。

- ①論文提出者には、試問（発表行事を含む）を行う。
- ②審査は、指導教員を含め2名以上の教員が行う。

3 専門拡充科目の推奨パッケージ例

専門拡充科目の推奨パッケージ例については、『開講科目一覧』に記載しているので、そちらを確認してください。
~~なお、入学年度以降に新たに開講された推奨パッケージについても、履修は可能です。~~

推奨パッケージには、履修単位数の多少という視点で見れば、20単位から30単位程度の比較的大きな単位数を履修する大型のパッケージがある一方で、10単位前後の小型のパッケージも用意しています。また、履修のねらいという視点で見れば、学校教員としての副免許状の取得をめざす推奨パッケージ例として、たとえば、特別支援学校教諭の2種免許状を取得するためのパッケージや、小中免許併有をめざして中等教育専攻の学生が小学校教諭2種免許状を取得するためのパッケージなどを用意しています。こうしたパッケージの他にも、学校教員としての特定の分野・領域に関する資質・能力を身につけるための推奨パッケージ例として、たとえば、「情報活用能力育成教育」関係の科目をプラスして学ぶためのパッケージや、「学校防災・安全教育」関係の科目をプラスして学ぶためのパッケージなどを用意しています。

第16章 副免許状の取得（P204）

（2）「各教科（保育内容）の指導法に関する科目」の履修

「各教科（保育内容）の指導法に関する科目」については、取得を希望する免許状の種類に応じて、次の《表4》にしたがって必要単位を修得してください。

《表4》

区分	授業科目	単位	幼1種	幼2種	小1種	小2種	中1種	中2種	高1種
幼稚園	各保育内容の指導法	各2	10 ※1	6 ※2	—	—	—	—	—
小学校	初等国語科教育法	2	—	—	10教科 20単位	音・図・ 体から 2教科 を含め 6教科 12単位	—	—	—
	初等社会科教育法	2							
	初等算数科教育法	2							
	初等理科教育法	2							
	初等生活科教育法	2							
	初等音楽科教育法	2							
	初等図画工作科教育法	2							
	初等家庭科教育法	2							
	初等体育科教育法	2							
	初等外国語活動・外国語教育法	2							
中学校 高等学校	各教科の中等教育法	各2	—	—	—	—	8	2	4
	各教科の中等実践指導法	各2	—	—	—	—		—	—
合 計			10	6	20	12	8	2	4

留意事項

1. 幼1種を取得する場合、上の表で※1を付した「各保育内容の指導法」に関する科目は、4単位まで小学校教諭免許状にかかわる各教科初等教育法（ただし、社会、理科、家庭、外国語は除く）をもってあてることができます。この取り扱いを受けるためには、同時に小学校教諭免許状を取得する必要があります。幼2種を取得する場合、上の表で※2を付した「各保育内容の指導法」に関する科目は、2単位まで小学校教諭免許状にかかわる各教科教育法（初等）（ただし、社会、理科、家庭、外国語は除く）をもってあてることができます。この取り扱いを受けるためには、同時に小学校教諭免許状を取得する必要があります。
2. 中2種（国語）を取得する場合は、「中等国語科教育法 A」の1科目2単位を修得すること。
3. 中1種（社会）を取得する場合、「中等社会科教育法 A」、「中等社会科教育法 B」、**（誤）「中等社会・地歴科教育法」、「中等社会・公民科教育法」（正）「中等社会科実践指導法A」、「中等社会科実践指導法B」**の4科目8単位を修得すること。中2種（社会）を取得する場合は、「中等社会科教育法 A」または「中等社会科教育法 B」のどちらか1科目2単位を修得すること。
4. 高1種（地理歴史）を取得する場合、「中等社会科教育法 A」、「中等社会・地歴科教育法」の2科目4単位を修得すること。
5. 高1種（公民）を取得する場合、「中等社会科教育法 B」、「中等社会・公民科教育法」の2科目4単位を修得すること。
6. 中2種（数学）を取得する場合は、「中等数学科教育法 A」の1科目2単位を修得すること。

第16章 副免許状の取得（P207）

（6）「大学が独自に設定する科目」の履修

「大学が独自に設定する科目」については、次の《表8》①～④に該当する授業科目の単位を修得し、取得を希望する免許状の種類に応じた必要単位を修得してください。

《表8》

授業科目		単位	幼1種	幼2種	小1種	小2種	中1種	中2種	高1種
①「教科（領域）に関する科目」《表3》			「教科（領域）に関する科目」の最低修得単位数をこえて修得した単位						
②「教育の基礎的理解に関する科目」《表5》			「教育の基礎的理解に関する科目」の最低修得単位数をこえて修得した単位						
③「教育実践に関する科目」《表7》			「教育実践に関する科目」の最低修得単位数をこえて修得した単位						
④ 大学が独自に設定する科目	学校論	2		—	—	—		—	
	適応支援論	2		—	—	—		—	
	生涯学習論	2		—	—	—		—	
	子ども学	2		—	—	—		—	
	幼年期の育ちと学び（幼1種のみ）	2		—	—	—	—	—	—
合 計			8	—	—	—	2	—	12 ※家庭は6

留意事項

- ①欄の「教科（領域）に関する科目」については、取得しようとする教科の「免許法相当科目」から修得すること。「免許法相当科目」は《表10-1》から《表10-10》までの「免許法相当科目表」(211ページ～221ページ)を参照すること。
- ④欄の「幼年期の育ちと学び」については、幼1種の免許状を取得する場合にのみ、「大学が独自に設定する科目」の修得単位数に含めることができる。

3. 高1種を取得する場合（ただし、地理歴史、公民を除く）、取得しようとする教科の中等実践指導法を「大学が独自に設定する科目」の修得単位数に含めることができる。

第16章 副免許状の取得のページ (P209)

《表9-1》

【令和4（2022）年度以降入学者用】

特別支援学校教諭 1種 免許（初等教育専攻、中等教育専攻、芸術体育・生活系教育専攻学生用）※1

免 許 の 域		5領域		4領域				3領域※3										2領域
	視覚障害	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	聴覚障害	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	知的障害	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	肢体不自由	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	病弱	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第1欄	特別支援教育基礎理論	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第2欄	心理	視覚障害の心理・生理・病理	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		聴覚・言語障害の心理・生理・病理	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		知的障害の心理・生理・病理	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		肢体不自由の心理・生理・病理	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		病弱の心理・生理・病理	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	教育	視覚障害の教育課程・指導論	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		聴覚・言語障害の教育課程・指導論	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		知的障害の教育課程・指導論	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		肢体不自由の教育課程・指導論	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		病弱の教育課程・指導論	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	心理又は教育	視覚障害への教育支援A	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		視覚障害への教育支援B	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		聴覚・言語障害への教育支援A	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		聴覚・言語障害への教育支援B	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		(第2欄合計単位数)	28	24	24	24	20	20	20	20	16	16	16	16	16	16	16	16
第3欄		発達障害への教育支援A	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修
		発達障害への教育支援B	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		発達障害への教育支援C	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		重度・重複障害への教育支援	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		特別支援教育総論	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第4欄	特別支援学校実習※2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(総単位数)		41	37	37	37	33	33	33	33	33	29	29	29	29	29	29	29	29

※1 知的障害・肢体不自由・病弱の3領域を最低限修得することが望ましい。その上で視覚障害や聴覚障害も希望があれば修得すること。

※2 初等教育専攻、中等教育専攻、芸術体育・生活系教育専攻の学生は原則として知的障害・肢体不自由・病弱特別支援学校で教育実習を行う。

※3 知・肢・病の3領域では単位不足のため免許要件を満たさない。

第16章 副免許状の取得のページ (P210)

《表9-2》

【令和4（2022）年度以降入学者用】
特別支援学校教諭 **2種** 免許（初等教育専攻、中等教育専攻、芸術体育・生活系教育専攻学生用）※1

免 許 の 域		5領域					4領域					3領域					2領域 ※3	
		視覚障害					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		聴覚障害					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		知的障害					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		肢体不自由					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		病弱					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第1欄		特別支援教育基礎理論	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第2欄	心理	視覚障害の心理・生理・病理	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		聴覚・言語障害の心理・生理・病理	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		知的障害の心理・生理・病理	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		肢体不自由の心理・生理・病理	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		病弱の心理・生理・病理	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	教育	視覚障害の教育課程・指導論	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		聴覚・言語障害の教育課程・指導論	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		知的障害の教育課程・指導論	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		肢体不自由の教育課程・指導論	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		病弱の教育課程・指導論	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(第2欄合計単位数)		20	16	16	16	16	16	12	12	12	12	12	12	12	12	12	8	
第3欄	発達障害への教育支援A	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	
	発達障害への教育支援B																	
	発達障害への教育支援C	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	重度・重複障害への教育支援	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	特別支援教育総論	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
第4欄		特別支援学校実習※2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		(総単位数)	33	29	29	29	29	29	25	25	25	25	25	25	25	25	21	

※1 知的障害・肢体不自由・病弱の3領域を最低限修得することが望ましい。その上で視覚障害や聴覚障害も希望があれば修得すること。

※2 初等教育専攻、中等教育専攻、芸術体育・生活系教育専攻の学生は原則として知的障害・肢体不自由・病弱特別支援学校で教育実習を行う。

※3 2領域については、第2欄の5領域すべてのうちから任意の2領域の「心理・生理・病理」、「教育課程・指導論」の単位を修得することで、その2領域の免許が取得可能。表は「視覚」「聴覚」2領域の場合を例示したもの。

履修のしおり

令和 5 年度（2023 年度）入学生用



Miyagi University of Education

履修に関する問合せ・手続きは、教務課(2号館1階)へ

取扱時間は、月曜日から金曜日の8:30～17:00

窓口番号	担当内容	電話番号
②	履修関係書類の交付、履修手続き、履修に関する相談 学生証の発行 電子化シラバス関係 授業用機器の貸し出し 教室使用関係	022(214)3331 022(214)3626 kyom-g@grp.miyakyo-u.ac.jp
③	非常勤講師関係 各種証明書関係(卒業見込証明書、成績証明書 等) 教育職員免許状取得見込証明書等の発行 (使用目的が教員採用試験および就職関係以外のもの) 休学・退学等の手続き 研究生・科目等履修生の受け入れ 学校図書館司書教諭関係	022(214)3332 022(214)3717 022(214)3416 kyom-k@grp.miyakyo-u.ac.jp
④	教育職員免許状の一括申請 教育実習・介護等体験等について	022(214)3333 022(214)3683 k-jitsu@grp.miyakyo-u.ac.jp

宮城教育大学附属校園連絡先

施設名	所在地	電話番号
附属幼稚園	〒980-0011 仙台市青葉区上杉6丁目4-1	(234)0305
附属小学校	//	(234)0318
附属中学校	//	(234)0347
附属特別支援学校	〒980-0845 仙台市青葉区荒巻字青葉395-2	(214)3353

はじめに

1 『履修のしおり』とは

『履修のしおり』は、**本学の教育課程と、授業科目の履修方法等を説明するルールブック**です。

みなさんが在学中に履修できる科目、取得できる資格が示されています。また、卒業までに、どのような授業科目を、どの順に、どれだけ取らなければならないのか、授業科目の履修にはどのような手続きが必要なのかが記されています。

『履修のしおり』に記載されているルールに従って、しっかりと履修計画を立て、必要な授業を履修してください。

なお、『履修のしおり』は、**入学時に渡されたものを卒業まで使います**。入学年度によって内容が異なる場合があり、**他年度のものでは代用できません**ので、なくさないように注意してください。

2 『履修のしおり』と『開講科目一覧』との関係

『履修のしおり』には、みなさんが在学中に履修できる授業科目が掲載されていますが、すべての科目が毎年開講されるわけではありません。**その年に開講されている科目の具体的な情報(授業担当教員名や時間割も含む)は、『開講科目一覧』に記載されています**ので、年度の初めに『開講科目一覧』により、その内容を確認して履修登録をしてください。

3 履修に関する諸連絡の伝達方法

履修に関わる手続きの締め切り日時や、集中講義・教育実習等に関する連絡、授業の教室変更や休講・補講、試験等の情報は、原則的にポータルサイトで情報配信します。また、教務関係の個人呼び出しも、ポータルサイトを通して行います。

ポータルサイトは、毎日必ず確認するようにしてください。

ポータルサイトを見なかったことによって生じる不利益については、各自の責任になりますので、十分に注意してください。

なお、ポータルサイトの詳細については、第2章「**6** 授業情報の調べ方」及び第3章「**4** 授業科目の履修登録」を参照してください。

目次

はじめに

第1章

教育課程のポリシー、卒業要件等

- 001 ❶ 本学の教育目標(ディプロマ・ポリシー)
- 002 ❷ 教育課程の特色(カリキュラム・ポリシー)
- 004 ❸ 入学者受入方針(アドミッション・ポリシー)
- 005 ❹ 専攻・コース
- 005 ❺ 卒業するための要件
 - (1) 卒業するためには
 - (2) 修業年限と在学期間
- 006 ❻ 学位と取得資格
 - (1) 学位
 - (2) 取得資格
- 007 ❼ 休学・復学・退学等
 - (1) 休学
 - (2) 復学
 - (3) 退学
 - (4) 再入学
 - (5) 除籍

第2章

授業

- 009 ❶ 学期と授業期間
- 009 ❷ 授業の形態
- 009 ❸ 単位制と授業時間、学修時間
- 009 ❹ 授業科目の区分
 - (1) 専門基盤科目
 - (2) 専門教育科目
 - (3) 専門拡充科目
- 011 ❺ 「授業科目表」の見方
- 013 ❻ 授業情報の調べ方
 - (1) 『履修のしおり』(本冊子)掲載の「授業科目表」
 - (2) 『開講科目一覧』
 - (3) 電子化シラバス
 - (4) ポータルサイト
- 015 ❼ 充実した学習のための諸制度
 - (1) 留学(海外派遣留学制度)
 - (2) 学都仙台単位互換ネットワーク(単位互換制度)
- 016 ❽ 学生による授業評価アンケート

第3章

履修方法等

017 1 履修計画の立て方

- (1) 卒業要件を満たすために
- (2) 副免許状の取得
- (3) 資格取得を希望する場合
- (4) 留学を希望する場合

018 2 コース配属について

コース配属(初等教育専攻・特別支援教育専攻)

- (1) コースの配属
- (2) コースの変更

018 3 履修型登録について

履修型登録(芸術体育・生活系教育専攻)

- (1) 履修型の登録
- (2) 履修型の変更

履修型登録(特別支援教育専攻)

- (1) 履修型の登録
- (2) 履修型の変更

019 4 授業科目の履修登録

- (1) 「履修届」の提出
- (2) ポータルサイトによる履修登録
- (3) 履修登録の変更・取消し

020 5 履修にあたっての留意事項

- (1) 履修登録単位数の上限〔CAP制〕
- (2) 履修条件と履修制限
- (3) 授業のクラス分けとクラス指定
- (4) 「重ね履修」
- (5) 再履修
- (6) 履修登録前の授業
- (7) 履修登録以外に手続きが必要な科目

021 6 履修関係の相談、学修支援

第4章

成績評価・単位認定等

023 1 成績評価

023 2 追試験・再試験

- (1) 追試験
- (2) 再試験

023 3 成績評価の評語・評点と単位認定

023 4 GPA

- (1) GPAとは
- (2) GPAの算出方法

024 5 成績の確認

024 6 入学前に修得した単位の認定

024 7 留学や単位互換制度によって修得した単位の認定

025 8 単位認定に関する留意事項

- (1) 単位の取消し
- (2) 不合格となった科目の単位修得

第5章

各専攻の教育課程と教育課程表

- 027 1 初等教育専攻の教育課程**
 (1)教育目的と教育課程
 (2)コース配属と卒業するために必要な単位数
 (3)教育職員免許状取得の資格およびその他の資格
- 028 2 初等教育専攻・教育課程表(卒業に要する単位数)**
- 029 3 初等教育専攻の授業科目と履修方法**
 (1)専門基盤科目
 (2)専門教育科目
 (3)専門拡充科目
- 029 4 中等教育専攻の教育課程**
 (1)教育目的と教育課程
 (2)卒業するために必要な単位数
 (3)教育職員免許状取得の資格およびその他の資格
- 029 5 中等教育専攻・教育課程表(卒業に要する単位数)**
- 031 6 中等教育専攻の授業科目と履修方法**
 (1)専門基盤科目
 (2)専門教育科目
 (3)専門拡充科目
- 031 7 芸術体育・生活系教育専攻の教育課程**
 (1)教育目的と教育課程
 (2)履修型登録と卒業するために必要な単位数
 (3)教育職員免許状取得の資格およびその他の資格
- 032 8 芸術体育・生活系教育専攻・教育課程表(卒業に要する単位数)**
- 033 9 芸術体育・生活系教育専攻の授業科目と履修方法**
 (1)専門基盤科目
 (2)専門教育科目
 (3)専門拡充科目

- 033 10 特別支援教育専攻の教育課程**
 (1)教育目的と教育課程
 (2)コース配属・履修型の登録と卒業するために必要な単位数
 (3)教育職員免許状取得の資格およびその他の資格
- 034 11 特別支援教育専攻・教育課程表(卒業に要する単位数)**
- 035 12 特別支援教育専攻の授業科目と履修方法**
 (1)専門基盤科目
 (2)専門教育科目
 (3)専門拡充科目

第6章

専門基盤科目(全専攻共通)

- 037 1 基礎科目**
- 037 2 教養科目**
- 038 3 授業科目表**
 授業科目表1(基礎科目)
 授業科目表2(教養科目)

第7章

初等教育専攻専門教育科目

049 1 専門教育科目 その1

教育の基礎的理解に関する科目 授業科目表4-1

050 2 専門教育科目 その2

道徳・総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目 授業科目表4-2

052 3 専門教育科目 その3

キャリアステップアップ科目 授業科目表4-3

053 4 専門教育科目 その4

教科及び教科の指導法に関する科目

①保育内容の指導法 授業科目表4-4

②各教科の教育法(初等) 授業科目表4-5

③幼稚園の領域科目 授業科目表4-6

④小学校の専門科目 授業科目表4-7

⑤コース専門科目

授業科目表4-8(幼年期教育創生コース)

授業科目表4-9(未来づくり教育創生コース)

授業科目表4-10(人文・社会系教育創生コース)

授業科目表4-11(理数・自然系教育創生コース)

064 5 専門教育科目 その5 卒業研究

第8章

中等教育専攻専門教育科目

065 1 専門教育科目 その1

教育の基礎的理解に関する科目 授業科目表5-1

066 2 専門教育科目 その2

道徳・総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目 授業科目表5-2

068 3 専門教育科目 その3

キャリアステップアップ科目 授業科目表5-3

071 4 専門教育科目 その4

教科及び教科の指導法に関する科目

①各教科の教育法(中等) 授業科目表5-4

②中学校の専門科目 授業科目表5-5(国語)

授業科目表5-6(社会科)

授業科目表5-7(英語)

授業科目表5-8(数学)

授業科目表5-9(理科)

③コース専門科目

授業科目表5-10(言語・社会系教育コース)

授業科目表5-11(理数系教育コース)

096 5 専門教育科目 その5 卒業研究

第9章

芸術体育・生活系教育専攻専門教育科目

- 097 1 専門教育科目 その1**
教育の基礎的理解に関する科目 授業科目表6-1
- 098 2 専門教育科目 その2**
道徳・総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目 授業科目表6-2
- 100 3 専門教育科目 その3**
キャリアステップアップ科目 授業科目表6-3
キャリアステップアップ科目 授業科目表6-4
(中等連携履修型のみ)
- 104 4 専門教育科目 その4**
教科及び教科の指導法に関する科目
①各教科の教育法(初等) 授業科目表6-5
(小中履修型のみ)
②各教科の教育法(中等) 授業科目表6-6
(小中履修型および中等連携履修型)
③各教科の教育法(中等) 授業科目表6-7
(中等連携履修型のみ)
④小学校の専門科目 授業科目表6-8
(小中履修型のみ)
⑤中学校の専門科目
授業科目表6-9(音楽)
授業科目表6-10(美術)
授業科目表6-11(保健体育)
授業科目表6-12(技術)
授業科目表6-13(家庭科)
授業科目表6-14(国語)(中連携履修型のみ)
授業科目表6-15(英語)(中連携履修型のみ)
授業科目表6-16(数学)(中連携履修型のみ)
⑥コース専門科目
授業科目表6-17(芸術・体育系教育コース)
授業科目表6-18(生活系教育コース)
- 130 5 専門教育科目 その5 卒業研究**

第10章

特別支援教育専攻専門教育科目

- 131 1 専門教育科目 その1**
教育の基礎的理解に関する科目 授業科目表7-1
- 132 2 専門教育科目 その2**
道徳・総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目 授業科目表7-2
- 134 3 専門教育科目 その3**
キャリアステップアップ科目 授業科目表7-3
(小履修型のみ)
キャリアステップアップ科目 授業科目表7-4
(中履修型のみ)
- 139 4 専門教育科目 その4**
教科及び教科の指導法に関する科目
①各教科の教育法(初等) 授業科目表7-5
(小履修型のみ)
②各教科の教育法(中等) 授業科目表7-6
(中履修型のみ)
③小学校の専門科目
授業科目表7-7(小履修型のみ)
④中学校の専門科目
授業科目表7-8(国語)(中履修型のみ)
授業科目表7-9(社会科)(中履修型のみ)
授業科目表7-10(英語)(中履修型のみ)
授業科目表7-11(数学)(中履修型のみ)
授業科目表7-12(理科)(中履修型のみ)
授業科目表7-13(音楽)(中履修型のみ)
授業科目表7-14(美術)(中履修型のみ)
授業科目表7-15(保健体育)(中履修型のみ)
授業科目表7-16(技術)(中履修型のみ)
授業科目表7-17(家庭科)(中履修型のみ)
⑤特別支援専門科目
授業科目表7-18(視覚障害教育コース)
授業科目表7-19(聴覚・言語障害教育コース)
授業科目表7-20(発達障害教育コース)
授業科目表7-21(健康・運動障害教育コース)
※特別支援専門科目履修上の注意(各領域要件科目一覧表)
- 183 5 専門教育科目 その5 卒業研究**

第11章

キャリアステップアップ科目

- 185 ■1 キャリアステップアップ科目の履修
 - (1) キャリアステップアップ科目の目的
 - (2) キャリアステップアップ科目の全体構成
 - (3) 卒業までに修得する必要がある単位数
- 186 ■2 教育体験初年次演習
 - (1) 教育体験初年次演習のねらい
 - (2) 単位数と履修方法
 - (3) 履修上の留意点
- 187 ■3 教育実践探究演習
 - (1) 教育実践探究演習のねらい
 - (2) 単位数と履修方法
 - (3) 履修上の留意点
- 188 ■4 教育実習
- 188 ■5 教職実践演習
 - (1) 教職実践演習のねらい
 - (2) 単位数と履修方法
 - (3) 教職実践演習と履修カルテ

第12章

教育実習

- 191 ■1 教育実習の履修資格
- 192 ■2 実習校・実習期間
- 192 ■3 教育実習の履修登録
- 192 ■4 教育実習履修の留意事項
 - (1) 「教育実習生記録」の提出
 - (2) 「事前・事後指導」
- 192 ■5 追実習
- 193 ■6 成績評価等
- 193 ■7 教育実習等特例措置

第13章

介護等体験

- 195 ■1 介護等体験
- 195 ■2 実施学年・実施施設・体験期間
- 195 ■3 実施施設の種類
- 195 ■4 体験内容
- 195 ■5 介護等体験の費用
- 195 ■6 介護等体験を行うための要件
- 196 ■7 介護等体験の参加手続き
- 196 ■8 介護等体験の証明書の提出

第14章

卒業研究

- 197 ❶ 卒業研究
- 197 ❷ 卒業研究の参加資格
- 197 ❸ 卒業論文の作成・提出・審査
 - (1) 卒業論文の作成
 - (2) 卒業論文題目の提出
 - (3) 卒業論文の提出
 - (4) 卒業論文の審査

第15章

専門拡充科目

- 199 ❶ 専門拡充科目の趣旨
- 199 ❷ 専門拡充科目の履修
 - (1) 単位数と履修方法
 - (2) 履修上の留意点
- 200 ❸ 専門拡充科目の推奨パッケージ例

第16章

副免許状の取得

- 201 ❶ 本学で所要資格を取得できる免許状
- 201 ❷ 副免許状の取得に関わる教育実習の履修
- 202 ❸ 幼稚園、小学校、中学校、高等学校教諭の免許状取得を希望する場合
 - (1) 「教科(領域)に関する科目」の履修
 - (2) 「各教科(保育内容)の指導法に関する科目」の履修
 - (3) 「教育の基礎的理解に関する科目」の履修
 - (4) 「道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目」の履修
 - (5) 「教育実践に関する科目」の履修
 - (6) 「大学が独自に設定する科目」の履修
- 207 ❹ 特別支援学校教諭の免許状取得を希望する場合
- 211 ❺ 中学校、高等学校教諭の免許状の「教科に関する科目」(免許法相当科目表)

第17章

その他の資格の取得

- 223 ❶ 学校図書館司書教諭の任用資格の取得
 - (1) 学校図書館司書教諭とは
 - (2) 任用資格の取得
 - (3) 履修上の留意点
- 224 ❷ 授業科目表
 - 授業科目表11-1(学校図書館司書教諭)

I

第 1 章

教育課程のポリシー、卒業要件等

- 1 本学の教育目標(ディプロマ・ポリシー)
- 2 教育課程の特色(カリキュラム・ポリシー)
- 3 入学者受入方針(アドミッション・ポリシー)
- 4 専攻・コース
- 5 卒業するための要件
 - (1) 卒業するためには
 - (2) 修業年限と在学期間
- 6 学位と取得資格
 - (1) 学位
 - (2) 取得資格
- 7 休学・復学・退学等
 - (1) 休学
 - (2) 復学
 - (3) 退学
 - (4) 再入学
 - (5) 除籍

第1章

教育課程のポリシー、卒業要件等



1 本学の教育目標（ディプロマ・ポリシー）

みなさんは宮城教育大学で4年間、教員となるための学修を重ね、「学士（学校教育学）」の学位（ディプロマ）を取得して卒業することになります。本学では以下のようなディプロマ・ポリシー（学位授与方針）を定め、卒業に際してみなさんが身につけているべき力を明示しています。

宮城教育大学（教育学部）ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）

宮城教育大学は、教員養成に責任を負う大学として、専門性や実践的な指導力を有するとともに、高い倫理観と使命感、情熱を持ちつつ、児童生徒・保護者・地域・同僚との関わりを大切にしながら、生涯にわたり学び続ける優れた資質・能力を持った教員を養成します。

教育の未来と子どもたちの未来を担う教師となるための学修を重ね、4年間に、次の項目に示す資質・能力を身につけた者に対して卒業を認定し、「学士（学校教育学）」の学位（ディプロマ）を授与します。

1. 学校教育や教職に関する専門的知識および技能を身につけている。
2. 学習指導に関する理論および方法を活かしながら、教育実践を展開する基礎を身につけている。
3. 幼児・児童・生徒に対する理解・尊重を基盤としながら、生徒指導に向けて協働しつつ適切に対応する姿勢を身につけている。
4. 学校の構成員としての役割を理解し、教職員や保護者や地域等と連携・協働しながら、学校を運営していこうとする態度を身につけている。
5. 教員としての倫理観と使命感、幅広い教養と知性を基にした適切な行動ができる。
6. 学校教育における様々な課題を認識し探求心を持って主体的に学び続ける基盤ができている。
7. 上記1～6のほか、専攻における学修に応じた資質・能力を身につけている。

【初等教育専攻】

・発達段階に応じた指導力とともに、小学校の各教科等に関する知識・技能を身につけている。

【中等教育専攻】

・専門的教科等に関する知識・技能を基盤として、生徒に適切に対応する学習指導力を身につけている。

【芸術体育・生活系教育専攻】

・芸術体育・生活系の教科等を中心としつつ、異校種または複数教科にわたる教科等に関する知識・技能を基盤として、生徒に適切に対応する学習指導力を身につけている。

【特別支援教育専攻】

・学校における教育活動を通して、児童生徒が障害による学習上または生活上の困難を主体的に改善・克服できるよう、個性や障害の特性に応じた支援ができる指導力を身につけている。

2 教育課程の特色（カリキュラム・ポリシー）

教育課程（カリキュラム）とは、学部・専攻の教育目的に応じて必要な授業科目を段階的・系統的に編成した教育内容の系列のことです。本学では以下のようなカリキュラム・ポリシー（教育課程編成方針）に基づいてカリキュラムを編成しています。

宮城教育大学（教育学部）カリキュラム・ポリシー（教育課程編成方針）

宮城教育大学のすべての学生が、卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）に掲げる資質・能力を身につけて、学校現場で活躍することを目標として、以下に示す3つの科目区分を基盤とした教育課程を編成し、実施します。

1. 専門基盤科目

専門基盤科目は、すべての学生が、幅広い視野を養い、教員としての基礎的な資質・能力を培うことを目的として授業科目を構成しています。

(1) 基礎科目

基礎科目は、教育職員免許法で履修が義務づけられている「日本国憲法」、「情報機器の操作」、「健康・運動系科目（体育）」および「外国語コミュニケーション」の4科目と、教員養成大学として学校現場で必須と捉えている「防災教育」に、「外国語科目」を加えた6科目を必修科目として設定しています。

(2) 教養科目

教養科目は、人間・社会・自然に関する知識を得て視野の拡大をはかるための「知る科目」、課題解決力・思考力・応用力・人間性等を磨くための「磨く科目」、教職への志向性・使命感・教育の基盤となる力を育むための「育む科目」の3つのカテゴリーから、それぞれ所定の単位数を履修することにより、学校教員の基盤となる教養や資質・能力を醸成します。

2. 専門教育科目

専門教育科目は、各専攻で卒業要件として設定された教育職員免許状を取得するために必要となる授業科目として、次の4つのカテゴリーから、それぞれ所定の単位数を履修することにより、教育職員免許状の取得を目指します。また、生涯にわたり学び続ける教師としての資質を身につけるために「卒業研究」を必修科目として設定しています。

(1) 教育の基礎的理解に関する科目

教育の理念、教職の意義・役割、学校教育の社会的・制度的な知識、児童生徒の心身の発達および学習の過程、特別の支援を必要とする児童生徒に対する理解、学習指導要領を基準とした教育課程の意義および編成方法など、教育職員として理解しておくべき基礎的な内容を学修します。

(2) 道徳・総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目

道徳、総合的な学習の時間、特別活動、教育相談、進路指導などに関する理論や指導法について学修します。

(3) キャリアステップアップ科目

「教育体験初年次演習Ⅰ・Ⅱ」「教育実践探究演習」「3年次教育実習」「4年次教育実習」「教職実践演習」など、4年間継続した観察・参加・実習という方法により教育実践に関わることによって、学校教育の実際を体験的・総合的に理解します。

(4) 教科及び教科の指導法に関する科目

教科及び教科の指導法に関して、各専攻で設定した授業科目を履修します。また、専攻・コースの特色を示す「コース専門科目」を履修することにより、学生の専門分野・得意分野を形成します。

3. 専門拡充科目

専門性の更なる高度化、副免許や資格の取得などの科目群「パッケージ」を設定し、将来を見据えた明確な計画のもとで、学生が主体的・自覚的に履修します。

1 専門基盤科目

専門基盤科目は、すべての学生が、幅広い視野を養い、教員としての基礎的な資質・能力を増うことを目的として、以下の2つのカテゴリーから科目を履修します。

基礎科目

- 日本国憲法
- 情報活用の基礎
- 健康・運動系科目
- 外国語科目
- 外国語コミュニケーション
- 防災教育

教養科目

- ◆知る科目
 - 人権教育
 - 人間と自然
 - 持続可能な社会
 - 性・文化・ジェンダー など
- ◆磨く科目
 - コミュニケーション論
 - 環境教育
 - 情報メディアの活用
 - 多文化教育入門 など
- ◆育む科目
 - 適応支援論
 - 子ども学
 - 生涯学習論
 - 学校の安全管理と防災教育 など

2 専門教育科目

専門教育科目は、各専攻で卒業要件として設定された教育職員免許状を取得するために必要となる授業科目として、以下の4つのカテゴリーから、それぞれ所定の単位数を履修することにより、教育職員免許状の取得を目指します。

教育の基礎的理解に関する科目

- 教育の原理
- 教育の制度・経営
- 発達と学習の心理
- 幼稚園教育課程論
- 教職入門
- 教育と地域社会
- 特別支援教育理解

キャリアステップアップ科目

- 教育体験初年次演習I
- 教育体験初年次演習II
- 教育実践探究演習
- 3・4年次教育実習
- 教職実践演習

道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目

- 道徳の理論及び指導
- 総合的な学習の時間の指導法（特別活動を含む。）
- 教育課程と教育方法
- 情報活用能力育成実践論
- 児童・生徒理解
- 幼児理解
- 教育相談（カウンセリングを含む。）

教科及び教科の指導法に関する科目

- 保育内容の指導法
- 各教科の教育法（初等）
- 各教科の教育法（中等）
- 幼稚園の領域科目
- 小学校の専門科目
- 中学校の専門科目
- コース専門科目
- 特別支援専門科目
 - ・各教科の内容基礎論
 - ・各教科の内容概論
 - ・各教科の内容講義
 - ・各教科の内容演習

卒業研究

3 専門拡充科目

専門性の更なる高度化、副免許や資格の取得などの科目群「パッケージ」を設定し、将来を見据えた明確な計画のもとで、学生が主体的・自覚的に選択しながら履修します。

特別支援教育に関するパッケージ

初等教育専攻および中等教育専攻の学生が、特別支援学校2種免許状を取得する場合など

小学校1種および2種のパッケージ

中等教育専攻の学生が、小学校1種または2種免許状を取得する場合など

中学校1種および2種のパッケージ

初等教育専攻の学生が、中学校1種または2種免許状を取得する場合など

小型パッケージ

- 学校防災・安全教育
 - 学校防災教育関係の科目をプラスして取得する場合など
- 情報活用能力教育
 - 情報活用能力教育関係の科目をプラスして取得する場合など
- 小学校英語教育
 - 小学校英語関係の科目をプラスして取得する場合など
- グローバル教育
 - グローバル教育関係の科目をプラスして取得する場合など
- 特別支援教育
 - 特別支援教育に関する科目をプラスして取得する場合など
- 小学校教科専門
 - 小学校教科専門に関する科目をプラスして取得する場合など
- 学校図書館司書教諭
 - 学校図書館司書教諭任用資格を取得する場合

各専攻の教育課程の特色と、授業科目の詳細については、本冊子の第5章～第10章に示しています。第5章、第6章および自分の所属する専攻の章をよく読んでください。

3 入学者受入方針（アドミSSION・ポリシー）

宮城教育大学は、広い視野と高度な専門性を見え、実践的な指導力を身につけた教員、また強い使命感と責任感を持ち、豊かな人間力を具えた教員を養成する教員養成大学です。将来、幼稚園・小学校・中学校・特別支援学校等において優れた資質・能力をもった教員として活躍するために、第一に、教員となることへの強い目的意識を持ち、教員として、人間としての成長を目指す使命感・向上心を有する学生を求めています。そして、基礎的な知識および技能の上に、これらを活用して、課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力を育み、主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度を有した学生を受け入れます。

宮城教育大学（教育学部）アドミSSION・ポリシー（入学者受入方針）

1. 基本理念・目標

宮城教育大学は、幅広い視野と教養、高度の専門性、実践的な指導力を有するとともに、強い使命感と情熱、高い倫理観をそなえた教員を養成する教員養成大学です。将来、幼稚園・小学校・中学校・特別支援学校等において、児童生徒・保護者・地域・同僚との関わりを大切にしながら、生涯にわたって学び続ける、優れた資質・能力を持つ教員の養成を使命としています。

2. 求める学生像

- ・教員となることに強い目的意識を持つ者
- ・協調性と向上心を持ち、教員や人間として成長を目指す者
- ・教員としての資質・能力を身につけるのに十分な基礎的な知識・技能を有する者
- ・基礎的な知識・技能を活用して、課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力を有する者

3. 入学者選抜の基本方針

宮城教育大学では、上記の基本理念・目標にふさわしい学生を受け入れるために、学校推薦型選抜、総合型選抜および一般選抜（前期日程、後期日程）を実施し、学力の3要素（①基礎的な知識および技能、②思考力・判断力・表現力等の能力、③主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度）等を多面的・総合的に評価して、入学者を選抜します。

【学校推薦型選抜】

初等教育専攻および特別支援教育専攻において、学校長の推薦に基づいて出願する者に関し、出願時の調査書および「学校推薦型選抜レポート」により教員への志向性や基礎的な知識および技能を確認しつつ、「専攻別課題」により知識・技能、思考力・判断力・表現力等の能力、「集団面接」および「個人面接」により教員への志向性や主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度を総合的に評価して、入学者を選抜します。なお、大学入学共通テストは課しません。

【総合型選抜】

芸術体育・生活系教育専攻において、出願時の「総合型選抜レポート」により教員への志向性および思考力・判断力・表現力等の能力を確認しつつ、「個人面接」により教員への志向性や主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度、「実技（芸術・体育系教育コースのみ）」により各教科への志向性と技能、大学入学共通テストにより基礎的な知識および技能を総合的に評価して、入学者を選抜します。ただし、仙台市および宮城県以外の地域において教職に就くことを強く希望する者を対象とした地域定着枠での合格者については、大学入学共通テストは課しません。

【一般選抜（前期日程）】

初等教育専攻、中等教育専攻および特別支援教育専攻において、大学入学共通テストにより基礎的な知識および技能、個別学力検査等として課す「教育小論文」により教員への志向性および思考力・判断力・表現力等の能力、各教科の学力試験によりそれぞれの分野を中心とした基礎的な知識および技能を総合的に評価して、入学者を選抜します。

【一般入試（後期日程）】

初等教育専攻において、出願時の「教員志望理由書」により教員への志向性を確認しつつ、大学入学共通テストにより基礎的な知識および技能、個別学力検査等として課す「個人面接」により教員への志向性や主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度を総合的に評価して、入学者を選抜します。

4 専攻・コース

本学の教育学部は、幼稚園・小学校・中学校・高等学校・特別支援学校等における教育を担う、優れた資質・能力をもった教員を養成することを目的として、学校教育教員養成課程の中に「初等教育専攻」、「中等教育専攻」、「芸術体育・生活系教育専攻」、「特別支援教育専攻」の四つの専攻を設置しています。各専攻には、次のとおり、コースが置かれています。

課程・専攻・コース			
学校教育教員養成課程	初等教育専攻	幼年期教育創生コース	
		未来づくり教育創生コース	
		人文・社会系教育創生コース	
		理数・自然系教育創生コース	
	中等教育専攻	言語・社会系教育コース	国語
			社会
			英語
		理数系教育コース	数学 理科
	芸術体育・生活系教育専攻	芸術・体育系教育コース	音楽
			美術
			保健体育
		生活系教育コース	技術 家庭科
	特別支援教育専攻	視覚障害教育コース	
		聴覚・言語障害教育コース	
		発達障害教育コース	
		健康・運動障害教育コース	

5 卒業するための要件**（1）卒業するためには**

本学を卒業するためには、4年（修業年限）以上在学し、定められた履修方法に従い、定められた単位数を修得しなければなりません。

卒業に必要な単位数（授業科目区分別の単位数、および総単位数）は、専攻・コース別に示された「教育課程表」に記載されています。初等教育専攻については49ページ～64ページを、中等教育専攻については65ページ～

ジ～96ページを、芸術体育・生活系教育専攻については97ページ～130ページを、特別支援教育専攻については131ページ～184ページを確認してください。

(2) 修業年限と在学期間

修業年限とは、教育課程を修了して卒業するために必要な在学期間で、本学では4年間と定められています。休学期間は在学期間に含まれません。

在学期間については、本学では「6年を超えることができない。ただし、別に定める特別の事由がある場合に限り、2年を超えない範囲内で、在学期間の延長を許可することがある」(学則第28条)と定められています。

6 学位と取得資格

(1) 学位

卒業の要件を満たした者は、卒業が認定され、学士（学校教育学）の学位を授与されます。

(2) 取得資格

①教育職員免許状

各専攻・コースの卒業の要件を満たすことにより、次の表に掲げる教員の免許状を取得する所要資格が得られます。ただし、卒業要件以外に「介護等体験」(詳細は、195～196ページ参照)を行うことが必要です。

また、卒業するために必要な単位に加えて、さらに所定の単位を修得すれば、次の表の右の欄に掲げた教員免許状取得の所要資格も得られます。この冊子ではこれを「副免許状」と呼んでいます。

ただし、副免許状については、次の表に記載されていても、時間割の都合等で、修業年限内での所要単位の修得ができない場合があります。また、副免許状の特別支援学校教諭免許状については、希望者数が特別支援学校教育実習の受入人数を大幅に超える場合は、人数制限を行う可能性があるため、必ずしも希望者全員が取得できるとは限りません。

所属する課程・専攻・コース				卒業の要件を満たせば取得資格が得られる 教員免許状		副免許状
学校教育教員養成課程	初等教育専攻	幼年期教育創生コース		幼稚園1種 小学校1種		中学校1種（2種） 高等学校1種 特別支援学校1種（2種）
		未来づくり教育創生コース		小学校1種		幼稚園1種（2種） 中学校1種（2種） 高等学校1種 特別支援学校1種（2種）
		人文・社会系教育創生コース				
		理数・自然系教育創生コース				
	中等教育専攻	言語・社会系 教育コース	国語	中学校1種（国語） 高等学校1種（国語）		幼稚園1種（2種） 小学校1種（2種） 中学校（他教科）1種（2種） 高等学校（他教科）1種 特別支援学校1種（2種）
			社会	中学校1種（社会）※1		
			英語	中学校1種（英語） 高等学校1種（英語）		
		理数系 教育コース	数学	中学校1種（数学） 高等学校1種（数学）		
			理科	中学校1種（理科） 高等学校1種（理科）		
	芸術体育・生活系 教育専攻	芸術・体育系 教育コース	音楽	中学校1種（音楽） 高等学校1種（音楽）	小学校1種 または中学校 （国語、英語、 数学のいずれ か1つ）1種	幼稚園1種（2種） 小学校1種（2種） 中学校（他教科）1種（2種） 高等学校（他教科）1種 特別支援学校1種（2種）
			美術	中学校1種（美術） 高等学校1種（美術）※3		
			保健体育	中学校1種（保健体育） 高等学校1種（保健体育）		
		生活系 教育コース	技術	中学校1種（技術）※2		
			家庭科	中学校1種（家庭） 高等学校1種（家庭）※4		
	特別支援教育専攻	視覚障害教育コース		特別支援学校1種 （取得単位によって2領域から5領域）		幼稚園1種（2種） 小学校1種（2種） 中学校1種（2種） 高等学校1種
		聴覚・言語障害教育コース				
		発達障害教育コース		小学校1種または中学校1種（1教科選 択）		
		健康・運動障害教育コース				

※1：高等学校1種免許の地理歴史、公民科を取得するには、卒業要件のほか、所定の単位を取得する必要があります。詳しくは第16章をご確認ください。

※2：本学では高等学校1種(工業)の免許を取得することはできません。

※3、4：小中履修型の場合、卒業要件のほか、所定の単位を取得する必要があります。詳しくは第16章をご確認ください。

②その他の資格

本学では、次の資格を取得するための科目も開設しています。これらの資格を取得するためには、所定の単位を修得する必要がありますので、第17章をよく読んで履修計画を立ててください。

- 学校図書館司書教諭の任用資格（詳細は、223ページ～224ページ）
- 社会教育主事の任用資格（詳細は、224ページ～226ページ）

7 休学・復学・退学等

(1) 休学

①「休学願」

病気等のやむをえない理由により、引き続き3か月以上修学できない場合は、休学を願い出ることができます。休学を希望する者は、「休学願」に理由と休学期間を書き、学資負担者と連署のうえ、クラス担任の承諾を得て、ポータルサイトから別途お知らせする期日までに教務課を通じて学長に許可を願い出てください。休学の理由が病気である場合は、医師の診断書も添付してください。

なお、授業料が納付されていないと、「休学願」は受理されません。休学を願い出る際は、授業料の納付状況を確認してください。

②休学の期間

休学の期間は、1年以内と定められています。ただし、特別の理由がある場合は、学長の許可を得て、引き続き休学することができます。休学の延長を希望するときは、「休学願」を改めて教務課に提出してください。休学の理由が病気である場合は、医師の診断書も添付してください。

休学の期間は、通算して3年を超えることはできません。

休学の期間は、在学期間には含まれません。

(2) 復学

休学期間内に、休学の理由が消滅した場合は、学長の許可を得て復学することができます。復学を希望するときは、「復学願」に理由と復学予定日を書き、学資負担者と連署のうえ、クラス担任の承諾を得て、ポータルサイトから別途お知らせする期日までに教務課を通じて学長に許可を願い出てください。

なお、休学期間の終了に伴う復学については、自動的に復学扱いとなりますので手続きは必要ありません。

(3) 退学

やむをえない理由で退学を希望する場合は、学長に願い出て、その許可を受けなければなりません。退学を希望する者は、「退学願」に理由と退学予定日を書き、学資負担者と連署のうえ、クラス担任の承諾を得て、ポータルサイトから別途お知らせする期日までに教務課を通じて学長に許可を願い出てください。退学の理由が病気である場合は、医師の診断書も添付してください。

なお、授業料が納付されていないと、「退学願」は受理されません。退学を願い出る際は、授業料の納付状況を確認してください。

(4) 再入学

本学を退学した者が再入学を志願する場合、選考のうえ、許可することがあります。

(5) 除籍

除籍とは、大学の命によって学籍から名を除く措置のことで、次のいずれかに該当する者は、教授会で審議のうえ、学長が除籍します。

- ①入学料の免除もしくは徴収猶予を願い出て、免除もしくは徴収猶予が許可されなかった者で、所定の日ま

- でに入学料を納付しない者。
- ②入学料の免除もしくは徴収猶予が許可された者で、所定の日までに入学料を納付しない者。
 - ③授業料の納付を怠り、督促してもなお納付しない者。授業料が未納の場合は、当該学期末で除籍となる。
 - ④学則に定める在学期間を超えた者。
 - ⑤休学期間が通算して3年を超えて、なお復学できない者。
 - ⑥死亡または長期にわたって行方不明の者。



第2章

授業

- 1** 学期と授業期間
- 2** 授業の形態
- 3** 単位制と授業時間、学修時間
- 4** 授業科目の区分
 - (1) 専門基盤科目
 - (2) 専門教育科目
 - (3) 専門拡充科目
- 5** 「授業科目表」の見方
- 6** 授業情報の調べ方
 - (1) 『履修のしおり』(本冊子)掲載の「授業科目表」
 - (2) 『開講科目一覧』
 - (3) 電子化シラバス
 - (4) ポータルサイト
- 7** 充実した学習のための諸制度
 - (1) 留学(海外派遣留学制度)
 - (2) 学都仙台単位互換ネットワーク
(単位互換制度)
- 8** 学生による授業評価アンケート

第2章 授業



1 学期と授業期間

本学では、1年を前期（4月1日～9月30日）と後期（10月1日～3月31日）の2学期に分けて授業期間を設定しています。各学期の授業期間等の詳細は、毎年、年度当初に公開される『開講科目一覧』に掲げてある「授業計画」で確認してください。

授業科目には、前期だけ、または後期だけに開講される科目と、1年を通して開講される科目（通年科目）があります。原則、前期または後期だけに開講される科目は15週、通年科目は30週にわたって行われますが、一定期間に集中して行われる集中講義もあります。

2 授業の形態

授業は、「講義」「演習」「実験」「実習」「実技」のいずれかの形態で行われます。

授業形態	典型的な授業の特徴
講義	教員が学生に対して、学問研究の内容を説明することによって知識を授ける、という授業形態
演習	学生が主体的に研究発表や討議を行いながら教員の指導を受ける、という授業形態
実験	理論や推論が正しいかどうか、いろいろな条件下で実際に試してみる、という授業形態
実習	学んだ知識をもとに、実践しながら学修する、という授業形態
実技	学んだ知識をもとに、実際に技を活用しながら技術を磨く、という授業形態

3 単位制と授業時間、学修時間

本学は、教育上の目的に沿って多様な履修が可能となるように単位制を採用しており、単位数を定めて各授業科目を開講しています。

単位とは、授業科目を修得するために必要な学修量を数で表したもので、1単位の授業科目は、45時間（授業時間と授業外の学修時間の合計）の学修を必要とする内容で構成することを標準としています。

この標準をもとに、本学における授業科目の単位数は、授業の形態に応じて次の基準により計算しています。「講義」の場合、1単位あたりの授業時間は15時間ですが、これは授業時間以外に30時間分の学修をする必要があることを示しています（授業15時間＋教室外での学修30時間＝45時間）。

なお、本学では、上記単位制度の趣旨を踏まえて、履修科目の過剰登録を防ぐことにより、学生の主体的な学修を促し、教室及び教室外を合わせて充実した学修ができるように履修登録単位数の上限を定めています（20ページ参照）。

授業形態	1単位あたりの授業時間
講義	15時間
演習	15～30時間
実験・実習・実技	30～45時間

4 授業科目の区分

本学の授業科目は、教育目的・内容によって「専門基盤科目」「専門教育科目」「専門拡充科目」の三つに区分されています。

(1) 専門基盤科目

専門基盤科目は、全専攻に共通して設けられている科目です。

学校教育教員養成課程の基盤となる教養を養い、豊かな人間性や教員としての基礎的な資質・能力を培うことを目的として、「基礎科目」と「教養科目」で構成されています。

(2) 専門教育科目

専門教育科目は、教職という職業を遂行していく際の核となる資質・能力を育成するための授業科目であり、「教育の基礎的理解に関する科目」「道徳・総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目」「キャリアステップアップ科目」「教科及び教科の指導法に関する科目」「卒業研究」の五つのカテゴリーで構成されています。

「教育の基礎的理解に関する科目」では、教育の理念、教職の意義・役割、学校教育の社会的・制度的な知識、児童生徒の心身の発達および学習の過程、特別の支援を必要とする児童生徒に対する理解、学習指導要領を基準とした教育課程の意義および編成方法など、教育職員として理解しておくべき基礎的な内容を学修します。

「道徳・総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目」では、道徳、総合的な学習の時間、特別活動、教育相談、進路指導などに関する理論や指導法について学修します。

「キャリアステップアップ科目」では、「教育体験初年次演習」「教育実践探究演習」「3年次教育実習」「4年次教育実習」「教職実践演習」など、教育実践に関わる授業科目、あるいは学問体系に基づいた学修と教育現場での体験的な学修とを有機的に結び付けるための授業科目によって、学校教育の実践を体験的・総合的に学んで実践的指導力を身につけるとともに、生涯にわたって学び続ける教員としての資質・能力を培います。

「教科及び教科の指導法に関する科目」では、教科の専門的事項及び教科の指導法に関して、各専攻で設定した授業科目を履修します。また、専攻・コースの特色を示す「コース専門科目」を履修することにより、学生の専門分野・得意分野を形成します。

「卒業研究」は、4年間の学修成果を集約するとともに、学び続ける教員としての専門性を確かなものとするために、指導教員を定めて取り組みます。

(3) 専門拡充科目

専門拡充科目は、〈専門性の拡大〉あるいは〈専門性の充実〉という方向で、専門性のさらなる高度化をめざすための授業科目です。将来を見据えた明確な計画のもと、学生が主体的・自覚的に選択しながら、パッケージとして設定された科目群を履修します。副免許や資格の取得などにつながる科目群も設定されています。

見方

②「授業概要」

この欄には、開講年度や担当者が異なっても変わらない、各授業科目の基本的なねらい・概要が簡潔にまとめられています。ねらいを達成するために取りあげる題材をはじめ、その年度に開講されている授業の具体的な内容については、電子化シラバスを確認してください。

見方

③「単位数」

「単位数」の欄には、その授業科目を履修し、成績評価が合格圏内であった場合に修得できる単位数が示されています。

見方

④「毎週授業時数」

この欄には、授業が行われる期間と時間数が示されています。

欄内の数字にカッコが付されている場合は半年間（前期のみ、または後期のみ）の科目、カッコがない場合は通年（1年間）の科目です。本学の時間割上の1時限は授業時数2となっていますので、毎週授業時数欄に「2」とある場合は、1年間、毎週1時限（90分間）の授業が行われることを意味しています。「(2)」のように、数字がカッコでくくられている場合は、半年間（前期のみ、または後期のみ）、毎週1時限（90分間）の授業が行われるという意味です。「(4)」とある場合は、半年間、毎週2時限（1時限90分が週に2回）授業が行われます。

見方

⑤「講義・演習・実験等」

「講義・演習・実験等」の欄には、その授業科目の授業形態が記されています。用語の意味については、第2章「2 授業の形態」(9ページ)に記されている説明を参照してください。

見方

⑥「対象年次」

各授業科目には「対象年次」の指定があります。

「対象年次」は、指示された年次よりも上の年次であれば履修できますが、指定年次より下の年次では履修できません。

例えば、「1～」の表示であれば、1年次から履修可能です。対象年次の欄に「2～」、「3～」等と記されている場合は、1年次学生は履修できません。

見方

⑦「備考」

この欄には、「必修」「選択必修」等、履修に関する指示が記載されています。

ここに「必修」と記されている科目は、必ず単位を修得しなければならない「必修科目」です。

「選択必修」と記されている科目は、指定された科目の中から選択して、決められた単位数以上を必ず修得しなければならない科目です。「2単位以上選択必修」と記されていれば、指定された範囲の授業科目から最低2単位は必ず修得してください。

6 授業情報の調べ方

授業科目に関する情報は、本冊子掲載（第6章以降に掲載）の「**授業科目表**」や、別に公開する『**開講科目一覧**』、**電子化シラバス**によって確認することができます。

「**授業科目表**」、『**開講科目一覧**』、**電子化シラバス**は、それぞれ別の角度から情報を提供していますので、3種類すべてを目的に応じて活用し、必要な情報を入手してください。

なお、授業に関する情報（集中講義の日程、教室の変更、休講、補講など）は、授業によっては後述するポータルサイトや2号館入り口掲示板の用紙の掲示で提供されるものもありますので、毎日必ず確認してください。

(1) 『履修のしおり』（本冊子）掲載の「授業科目表」

専攻・コース・履修型ごとに定められた「教育課程表」の授業区分別に、開設されているすべての授業科目を表の形で掲載しています。

「授業概要」のほか、「必修科目」「選択必修科目」等の指定や、「対象年次」ほか、履修に関する重要な指示事項が記されており、履修計画を立てるには、また卒業に必要な単位を確認するには、これを見る必要があります。

『履修のしおり』の「授業科目表」に記載された授業情報は、入学時から卒業時まで有効なものです。入学時に手渡された『履修のしおり』は大切に保管し、**在学中の全期間を通じて活用**してください。

(2) 『開講科目一覧』

その年度に開講されている授業科目についての情報が掲載されています。また、履修手続きに関する注意や授業のクラス指定、教育実習の事前・事後指導の日程など、重要な事項も記されています。

その年度の履修科目を決定し、自分の時間割を作成するにあたっては、これをよく読んで、クラス指定等の履修上の指示に従ってください。

『開講科目一覧』は、毎年、年度当初に新しいものが公開されます。授業時間割等は年度によって異なりますので、『開講科目一覧』は**常にその年度のものを活用**してください。

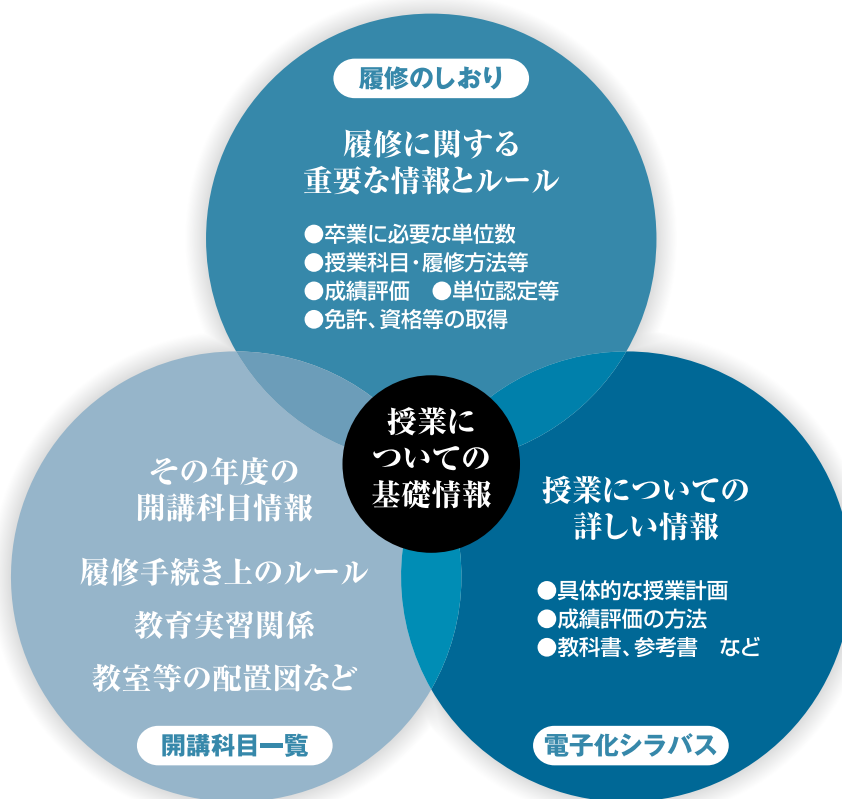
(3) 電子化シラバス

本学ホームページ (<https://www.miyakyo-u.ac.jp/>) からアクセスできる電子化シラバスには、その年度に開講されている授業科目についての具体的な情報（授業内容や授業計画、授業の到達目標、成績評価の方法、教科書・参考書、履修上の注意など）が掲載されています。

電子化シラバスを見ないと、各授業の具体的な内容や履修上の注意点、使用する教科書等はわかりませんので、**第1回目の授業に出席する前に必ず確認**してください。

電子化シラバスは、学内、学外問わずインターネットを通じて閲覧できます。

在学中の全期間を通じて活用する基本的な情報



その年度に開講されている授業に関する詳しい情報

(4) ポータルサイト

授業や履修等の教務関係情報は、ポータルサイト (<https://mueportal.miyakyo-u.ac.jp/campusweb/top.do>) でも確認することができます。このポータルサイトは、パソコンだけでなくスマートフォンから見ることもできます。みなさんに関係のある情報が記載された場合に、ポータルサイトからパソコンやスマートフォンへ電子メールを転送させることもできます。転送の際は、任意の電子メールアドレスを追加してください。

最初にログインした時には、必ず自分の大学メールアドレスを登録してください。

▼ポータルサイト



ポータルサイトの使い方

◆アクセス方法

<https://mueportal.miyakyo-u.ac.jp/campusweb/top.do> にアクセスする

◆ログイン方法

ユーザ ID には、自分の学籍番号を入れ、パスワードを入ると、ログインすることができます。

◆メッセージ：受信一覧

自分宛に送られたお知らせ、連絡、休講・補講・呼び出し情報を見ることができます。

◆履修・成績

履修登録や成績の確認を行うことができます。

◆My 時間割

履修登録した自分の授業が、いつどこで行われるか確認することができます。

◆休講情報一覧、補講情報一覧、時間割変更情報一覧

自分が履修している授業で、休講・補講・授業時間変更の予定のあるものを確認することができます。

◆講義連絡一覧

自分が履修している授業で、連絡事項があるものを確認することができます。

◆メッセージ転送設定

ポータルサイトの情報を、電子メール配信させる設定を行うことができます。

- ①電子メールで受け取りたい情報を選択します。
- ②転送したいメールアドレスを入力します。
- ③転送する内容を、各情報のタイトルにするか、各情報の合計件数だけにするか決めます。
- ④転送する時刻を最大3回設定します。
- ⑤転送設定できるメールアドレスは、最大3つです。必要に応じて複数の転送設定をしてください。

※電子メールへの転送は、指定された時間に行われます。新たに情報が追加されるたびに電子メールが転送されるわけではないので、注意してください。

◆「Campus-Xs」スマホアプリ

ポータルサイトの情報をスマホアプリを通して確認することができます。

スマホアプリのダウンロード方法は、ポータルサイトにログイン後、「外部リンク」からマニュアルを確認してください。

7 充実した学修のための諸制度

(1) 留学（海外派遣留学制度）

本学では、次の9大学と国際交流協定を締結し、毎年数名の学生を派遣しています。語学力を伸ばすとともに国際的な視野を育む良い機会として、この派遣制度を積極的に活用してください。留学に関する詳しい情報については、宮城教育大学留学希望者への情報のページに説明があります。

（本学ホームページ→「国際交流・留学生」→「留学希望者への情報」）

留学先の大学で修得した単位は、本学に該当する科目がある場合、帰国後に本学の単位として認められます。また、留学期間は本学の在学期間に算入されますので、卒業に必要な単位を満たすことができれば、在学中に留学をしても4年間で卒業することができます。ただし、教育実習の履修の関係で、4年間では卒業できない場合もあります。

留学希望者は、ガイダンスに必ず出席してください。留学制度や、留学者の募集・選考の手順等について詳しく説明します。ガイダンスの開催日時は、掲示・ポータルサイトにてお知らせします。

国 名	大 学 名
イ タ リ ア	ペルージャ外国人大学
ス ウ ェ ー デ ン	ダーラナ大学
オーストラリア	セントラル・クイーンズランド大学（CQU）
韓 国	大邱教育大学校
中 国	東北師範大学
台 湾	中華大学
	國立高雄大学
アメリカ合衆国	ハワイ大学マノア校、デラウェア州立大学

（協定校や協定の内容は変わることがあります。）

（2）学都仙台単位互換ネットワーク（単位互換制度）

本学は、在仙の大学（短大・高専も含む）と単位互換協定を結んでいます。教務課で必要な手続きをして許可を受ければ、単位互換ネットワーク参加校の授業科目（指定された科目）を無料で履修することができます。修得した単位は、本学の単位として認められます。その単位が卒業の要件となる単位に認定されるかどうかは、科目によって異なりますが、いずれにしても本学にはない講義を受講できる機会といってよいでしょう。

毎年3月に下記の「学都仙台単位互換ネットワーク」参加校から、開講される授業科目とその内容、応募条件等が送られてきます。詳しくは、教務課にお問い合わせください。

※ただし、放送大学へ出願する際は、授業料の支払いが必要です。

学都仙台単位互換ネットワーク参加校（令和5年3月現在）

石巻専修大学、尚絅学院大学、仙台白百合女子大学、仙台大学、東北学院大学、東北芸術工科大学、東北工業大学、東北生活文化大学、東北大学、東北福祉大学、東北文化学園大学、東北医科薬科大学、宮城学院女子大学、宮城教育大学、宮城大学、聖和学園短期大学、東北生活文化大学短期大学部、宮城誠真短期大学、仙台赤門短期大学、仙台高等専門学校、仙台青葉学院短期大学、放送大学

8 学生による授業評価アンケート

授業期間が終了する時期（前期開講科目は前期末、後期開講科目・通年科目は後期末）に、授業評価アンケートを実施します。質問項目は、授業内容の評価を問う項目と、受講者自身の授業への取り組みについて問う項目から成り立っています。このアンケートは、今後の授業改善に役立てるために行っていますので、ご協力をお願いします。

なお、アンケートの結果については、学内から本学ホームページで閲覧することができます。

III

第3章 履修方法等

- 1 履修計画の立て方**
 - (1) 卒業要件を満たすために
 - (2) 副免許状の取得
 - (3) 資格取得を希望する場合
 - (4) 留学を希望する場合
- 2 コース配属について**

コース配属(初等教育専攻・特別支援教育専攻)

 - (1) コースの配属
 - (2) コースの変更
- 3 履修型登録について**

履修型登録(芸術体育・生活系教育専攻)

 - (1) 履修型の登録
 - (2) 履修型の変更

履修型登録(特別支援教育専攻)

 - (1) 履修型の登録
 - (2) 履修型の変更
- 4 授業科目の履修登録**
 - (1) 「履修届」の提出
 - (2) ポータルサイトによる履修登録
 - (3) 履修登録の変更・取消し
- 5 履修にあたっての留意事項**
 - (1) 履修登録単位数の上限(CAP制)
 - (2) 履修条件と履修制限
 - (3) 授業のクラス分けとクラス指定
 - (4) 「重ね履修」
 - (5) 再履修
 - (6) 履修登録前の授業
 - (7) 履修登録以外に手続きが必要な科目
- 6 履修関係の相談、学修支援**

第3章 履修方法等



1 履修計画の立て方

履修計画は、各学年のはじめに、その年度の履修登録を行うにあたって立てるとともに、入学時に、卒業までの期間を見通して立てる必要があります。教育実習、卒業研究および教職実践演習には履修資格が定められており、必要な単位が修得できていないと参加することができません。その結果、4年間では卒業できなくなりますので、しっかりと履修計画を立てて、必要な科目を指定された学年で履修するようにしてください。

履修計画を立てるにあたって留意すべき事項や、確認する必要のある本冊子のページについて、以下に示します。

(1) 卒業要件を満たすために

卒業するために単位を修得する必要のある授業科目の種類と単位数、その履修方法は、専攻・コース・履修型によって異なります。卒業要件を満たすように履修計画を立てるにあたっては、自分の所属する専攻・コース・履修型の「教育課程表（卒業に要する単位数）」をまず確認し、そのうえで授業区分ごとに授業科目を具体的に示した「授業科目表」を確かめて、その指示をよく読んでください。また、「教育実習」「卒業研究」「教職実践演習」に関しては、いつまでにどの科目の単位を修得しておけば履修資格が得られるのか、その指示も確認してください。本冊子の該当箇所は、それぞれ以下のとおりです。

- 初等教育専攻、中等教育専攻、芸術体育・生活系教育専攻、特別支援教育専攻の「教育課程表」は、第5章。
- 専門基盤科目の「授業科目表」は、第6章。
- 初等教育専攻専門教育科目の「授業科目表」は、第7章。
- 中等教育専攻専門教育科目の「授業科目表」は、第8章。
- 芸術体育・生活系教育専攻の「授業科目表」は、第9章。
- 特別支援教育専攻専門教育科目の「授業科目表」は、第10章。
- キャリアステップアップ科目、教育実習、介護等体験の説明は、第11章～第13章。
- 卒業研究の説明は、第14章。
- 専門拡充科目の説明は、第15章。

※参考

- 副免許状、その他資格の取得については第16章、第17章で詳しく説明しています。

(2) 副免許状の取得

卒業要件を満たすことによって取得資格が得られる教員免許状以外に、いわゆる「副免許状」の取得を希望する場合は、第15章「専門拡充科目」および第16章「副免許状の取得」をよく読んで必要な授業科目・単位数等を確認し、履修計画を立ててください。

同じ時間に二つ以上の授業科目を履修することはできませんので、4年間で「副免許状」を何種類も取得することは実際には不可能です。「副免許状」の取得を希望する場合には、どの免許を取得するとよいのかよく考えて、無理のない履修計画を立ててください。

(3) 資格取得を希望する場合

「学校図書館司書教諭」の資格取得を希望する場合は、本冊子の第17章を参照して履修計画を立ててください。

資格取得関連科目は、隔年開講（毎年ではなく、1年おきに開講される）科目が多いので、入学時から計画を立てて履修しないと4年間では必要な単位を修得することが困難な場合があります。

(4) 留学を希望する場合

「留学（海外派遣留学制度）」については、第2章「**7** 充実した学修のための諸制度」（15ページ～）で述べたとおりですが、この制度を活用するためには、「教育実習」など学年指定のある科目の履修と留学時期が重ならないように考えて履修計画を立てる必要があります。

留学を計画する際の注意事項については、留学に関するガイダンスでお話しますが、必要があれば研究・国際交流支援室にお問い合わせください。

2 コース配属について

コース配属（初等教育専攻・特別支援教育専攻）

(1) コースの配属

初等教育専攻と特別支援教育専攻の学生は、2年次からコースに配属されます。各専攻におかれているコースと、そのコースにおいて卒業要件を満たすと取得資格が得られる教員免許状の概要については、本冊子の第1章で確認してください。

コース配属希望の申請時期と手続きに関しては、1年次の7月と12月頃に意向調査を行い、1月～2月に最終意向調査と3月にコース配属決定を行います。コース配属結果はポータルサイト、掲示等にてお知らせします。

(2) コースの変更

登録したコースの変更は認められません。

3 履修型登録について

履修型登録（芸術体育・生活系教育専攻）

(1) 履修型の登録

芸術体育・生活系教育専攻の学生は、卒業要件を満たすことで中学校教諭一種と高等学校教諭一種（※1）の免許状と、小学校教諭一種または中学校教諭一種（※2）の免許状の所要資格が得られます。

芸術体育・生活系教育専攻の学生は、小学校教諭一種免許状の所要資格を取得するか中学校教諭一種免許状の所要資格を取得するかを選択して、「履修型」の登録を行わなければなりません。

卒業要件として小学校教諭一種免許状の所要資格を取得する場合は「小中履修型」を、中学校教諭一種の免許状（※2）の所要資格を取得する場合は「中等連携履修型」を登録する必要があります。

履修型希望の申請時期と手続きの詳細は、1年次の10月頃にポータルサイト、掲示にてお知らせします。

※1 各コースに応じた教科。ただし、技術は中学校教諭一種免許のみ。

※2 国語、英語、数学のいずれか1教科選択

(2) 履修型の変更

登録した「履修型」と「中等連携履修型の教科」の変更は、特別な事情が生じた場合を除いて認められません。特別な事情が生じた場合は、「履修型変更願」あるいは「中等連携履修型の教科変更願」に理由等必要事項を記し、クラス担任の意見書を添えて、教務課を通じて学務担当副学長に願い出てください。

履修型登録（特別支援教育専攻）

(1) 履修型の登録

特別支援教育専攻の学生は、卒業要件を満たすことによって特別支援学校教諭一種（取得単位によって2領域から5領域）の免許状と、小学校教諭一種または中学校教諭一種（1教科選択）の免許状の所要資格が得ら

れますが、小学校教諭一種免許状の所要資格を取得するか中学校教諭一種免許状の所要資格を取得するかを選択して、「履修型」の登録を行わなければなりません。

卒業要件として小学校教諭一種免許状の所要資格を取得する場合は「小履修型」を、中学校教諭一種の免許状の所要資格を取得する場合は「中履修型」(教科を必ず一つ選択すること)を登録する必要があります。

履修型希望の申請時期と手続きの詳細は、1年次の10月頃にポータルサイト、掲示にてお知らせします。

(2) 履修型の変更

登録した「履修型」と「中履修型の教科」の変更は、特別な事情が生じた場合を除いて認められません。特別な事情が生じた場合は、「履修型変更願」あるいは「中履修型の教科変更願」に理由等必要事項を記し、クラス担任の意見書を添えて、教務課を通じて学務担当副学長に願い出てください。

4 授業科目の履修登録

授業科目を履修するためには、年度ごとに履修登録をする必要があります。履修登録をしなかった授業科目は、たとえ授業に出席していても、単位の認定を受けることができません。

次の手続きをして、履修登録を行ってください(手続きの流れは、下の図参照)。

(1) 「履修届」の提出

授業科目を履修する際には、開講日から2週間以内に「履修届」を授業担当教員に直接提出してください。

(2) ポータルサイトによる履修登録

履修する授業科目はすべて、年度はじめ(4月)の所定の期日に、本学ホームページからアクセスできるポータルサイトを通じて登録する必要があります。後期開始時(10月)にも追加登録期間がありますが、後期の登録期間は年度途中に特別な理由が生じた場合に備えて設けられたものですので、原則として年度当初に、その年度に履修する科目をすべて登録してください。

指定の期間以外には、履修登録をすることができませんので、注意してください。履修登録の期日については、掲示、ポータルサイトにより周知します。

ポータルサイトによる履修登録の方法は、「履修登録の手引き」に記載されています。「履修登録の手引き」を熟読して、操作方法等を十分に理解し、ミスのないように入力してください。そして、入力後は、登録内容に誤りがないかどうか繰り返し見直しをしてください。登録のミスによって生じる不利益は、各自の責任となります。

(3) 履修登録の変更・取消し

履修登録の変更・取消しの時期等についてはポータルサイト・掲示により周知しますので、その指示に従ってください。

履修登録を行った科目は、取消しをしない限り、成績評価の対象となります。たとえ一度も出席していなくても、不合格と評価されることになりますので、履修する意思のなくなった授業科目に関しては、決められた期間内に履修取消しの手続きをするようにしてください。なお、集中講義の取消手続きは開講の前日まで可能です。



5 履修にあたっての留意事項

(1) 履修登録単位数の上限（CAP 制）

履修科目として登録できる単位数には、上限が定められています（以下 **CAP 制** という）。以下に示す単位数の範囲内で履修登録をしてください。

履修登録単位数の上限：通年52単位。ただし、本学入学後の授業の履修における成績優秀者に対しては、履修登録単位数の上限を通年60単位まで緩和する制度があります。その詳細については、掲示等によってお知らせします。

なお、以下の科目は **CAP 制の適用から除きます**。

キャリアステップアップ科目

集中講義

卒業研究

「学都仙台単位互換ネットワーク」の制度により他大学で履修する授業科目

(2) 履修条件と履修制限

授業科目には、履修にあたって条件を設けているものや、授業方法や内容の都合で履修人数制限を行っているものもあります。履修登録の前には、必ず『履修のしおり』や『開講科目一覧』、電子化シラバスで授業情報を確認し、掲示にも注意してください。また、第一回目の授業で履修条件が提示される場合もありますので、授業に出席して教員の指示を確認してください。

なお、同一曜日の同一時限に複数の科目を履修登録することはできません。

(3) 授業のクラス分けとクラス指定

『開講科目一覧』および電子化シラバスに記載されている授業科目名に、a、b、c 等のアルファベットの小文字が付されている場合、これらはクラス分けを表しています。a、b、c 等の記号が異なっても同一授業ですので、これらの科目を複数履修することはできません（授業科目名に付された記号の意味に関しては、11ページの授業科目名に関する説明参照）。

さらに留意しなければならないのは、クラス分けを行っている授業科目の中には、受講できるクラスを指定している授業科目が少なからずあるということです。クラス指定のある授業科目は、指定されたクラスしか履修できません。履修登録の前に、必ず『開講科目一覧』でクラス指定の有無を確認し、指定のある場合はそれに従ってください。

(4) 「重ね履修」

既に単位を修得した授業科目は、再び履修することができません。ただし、「授業科目表」の「授業科目名」欄に※印が付されている授業科目は、既に単位を修得していても、重ねて履修して単位を修得することができます。これを本学では「重ね履修」と呼んでいます。

(5) 再履修

履修したが単位を修得できなかったという科目については、履修登録の手続きを再度行えば、再び履修することができます。

ただし、**クラス指定のある授業科目の場合、前期に履修して単位を修得できなかった科目を後期に再履修する（指定外のクラスを履修する）ことは、4年次学生以外はできません**。4年次以外の学年の学生は、次年度にクラスを一つ選び、再履修してください。年度が替われば、キャリアステップアップ科目を除き、所属する専攻・コースの指定クラス以外のクラスも選ぶことができます。

(6) 履修登録前の授業

授業開始日から履修登録の期限まで約2週間ありますが、その間の授業に出席していない場合は欠席扱いとなります。履修登録前であっても、授業には第一回目から出席するようにしてください。

(7) 履修登録以外に手続きが必要な科目

履修にあたって、履修登録以外にも手続きが必要な授業科目があります。「教育実習」(第12章)、「卒業研究」(第14章)などです。教育実習など、履修の前年度に履修届等の提出が必要な科目もありますから、本冊子の説明と大学からの情報をよく確認し、忘れずに手続きをしてください。

その他、必要な手続きをポータルサイト、掲示にてお知らせする場合があります。見落とさないように注意してください。

6 履修関係の相談、学修支援

履修計画の立て方や、授業の履修、大学での学修等に関して、質問や相談があれば、遠慮なくクラス担任（クラス担任の名前、研究室の位置に関しては、『開講科目一覧』参照）を訪ねてください。また、履修関係の配付書類、連絡事項、履修登録の手続き等に関して疑問や不明の点があれば、教務課にお問い合わせください。教務課窓口の担当内容については、本冊子の表紙裏に記載があります。

IV

第4章 成績評価・単位認定等

- 1 成績評価
- 2 追試験・再試験
 - (1) 追試験
 - (2) 再試験
- 3 成績評価の評語・評点と単位認定
- 4 GPA
 - (1) GPAとは
 - (2) GPAの算出方法
- 5 成績の確認
- 6 入学前に修得した単位の認定
- 7 留学や単位互換制度によって修得した単位の認定
- 8 単位認定に関する留意事項
 - (1) 単位の取消し
 - (2) 不合格となった科目の単位修得

第4章

成績評価・単位認定等



1 成績評価

成績評価は、電子化シラバスの「成績評価の方法」欄に提示してある方法によって、授業期間終了後に授業担当教員が行います。「成績評価の方法」は、授業によって異なります。履修に際しては、電子化シラバスを確認のうえ、授業中の指示も聞き漏らさないようにしてください。試験の実施日時等に関しては、掲示・ポータルサイトを通して通知する場合があります。

2 追試験・再試験

(1) 追試験

成績評価のために試験を行う科目があります。この試験を、病気・災害・事故その他のやむをえない理由によって受けることができなかった場合、追試験が認められることがあります。原則として、その科目の試験日から7日以内に、受験できなかった理由を証明する資料（医師による診断書や、災害証明の写し、事故証明の写し等）を添えて、追試験願を教務課に提出してください。

(2) 再試験

不合格となった授業科目の再試験は、原則として行いません。

3 成績評価の評語・評点と単位認定

成績評価の評語、評点（GP；グレード・ポイント）と、合格・不合格の判定は次のとおりです。成績評価の判定が合格の場合、その授業科目の単位は認定されます。

可否の判定	評 価	評 語	評点 (GP)
合 格	S	きわめて優秀な水準に達している	4.0
	A	優れた水準に達している	3.0
	B	ねらい通りの水準に達している	2.0
	C	合格に足る水準に達している	1.0
不 合 格	D	合格に足る水準に達していない	0.0

4 GPA

(1) GPA とは

GPA（グレード・ポイント・アベレージ）とは、各科目の成績から特定の方式によって算出された成績評価値のこと、あるいはその成績評価方式のことをいいます。本学では、この GPA を導入することにより、①皆さんが自ら学業成績の現状を的確に判断し適切な履修計画を立てることにより主体的な学修を進めること、②履修行動と学修態度の改善を促して卒業認定の質的保証をすること、③成績評価を厳密に行うことで教育効果を高め、皆さんの学修意欲を触発し学修目標を明確化すること、④成績優秀者に対して、CAP 制による履修登録単位数上限を緩和する際の基準とすること、そして⑤科目間の成績評価基準のばらつきを標準化することを目的としています。本学の GPA の算出方法は次のようになっています。

(2) GPA の算出方法

- ①対象となるのは、本学在籍中に履修登録したすべての科目です。
- ②「S」「A」「B」「C」の評価に対する評点（GP）に、修得した科目の単位数を掛けて足しあわせます。
- ③履修登録したすべての授業の単位数を足しあわせます（履修登録期間内に履修登録を抹消した科目は含みません。ただし、不合格の授業は含みます）。
- ④ GPA は以下の算出方法で計算します（GPA = ②の数値 ÷ ③の数値）。

$$\frac{(S \text{ 評点単位数} \times 4.0) + (A \text{ 評点単位数} \times 3.0) + (B \text{ 評点単位数} \times 2.0) + (C \text{ 評点単位数} \times 1.0)}{\text{総履修登録単位数}}$$

総履修登録単位数

⑤ GPA の成績例

履修科目	単位数	成績評価	評点 (GP)
物理学講義 I	4	B	2.0
日本国憲法	2	A	3.0
歴史学入門	2	C	1.0
英米文学	2	A	3.0
化学実験 I	2	D	0.0
教職入門 a	2	B	2.0
比較教育事情	2	S	4.0

$$\text{GPA} = \frac{(2 \times 4.0) + (4 \times 3.0) + (6 \times 2.0) + (2 \times 1.0)}{(4 + 2 + 2 + 2 + 2 + 2 + 2)} = \frac{34}{16} \div 2.1$$

5 成績の確認

成績は、本学ホームページからアクセスできるポータルサイトを通して、各自確認してください。確認方法の詳細は、ポータルサイト、掲示でお知らせします。ポータルサイトにアクセスすることで、履修したすべての授業科目の成績評価を見ることができます。

成績証明書が必要な場合は、教務課窓口に申し出てください。ただし、使用目的が就職関係のものは、キャリアサポートセンターに申し込んでください。証明書の交付は、申込日の**2日後の午後（土・日・祝日を除く、英文の場合は10日後）**になります。

6 入学前に修得した単位の認定

本学に入学する前に、大学または短期大学、高等専門学校等において修得した単位（科目等履修生として修得した単位を含む）は、本学に該当する授業科目がある場合、所定の基準により本学で修得した単位として認定されます。この認定を希望する者は、所定の期日までに申請書類を教務課に提出してください。詳細は教務課にお問い合わせください。

なお、入学前の既修得単位として単位認定された授業科目については、成績評価は「認定」と表示され、GPA の算出には含まれません。

7 留学や単位互換制度によって修得した単位の認定

第2章「**7** 充実した学修のための諸制度」で述べたように、留学によって修得した単位や、「学都仙台単位互換ネットワーク」の制度を活用して修得した単位は、所定の基準により、本学で修得した単位として認定されます。

単位が認定された場合、成績評価は「認定」または「合格」と表示され、GPA の算出には含まれません。

8 単位認定に関する留意事項

(1) 単位の取消し

修得した単位は、取消すことはできません。したがって、単位が認定された授業科目は、その評価を取消したり、再履修したりすることはできません。

(2) 不合格となった科目の単位修得

不合格となった授業科目の単位を修得するためには、次年度以降に改めて履修登録手続きをして、その科目を再履修し、合格する必要があります。履修登録の仕方や、受講の仕方は、最初の履修時と同じです。再履修の場合も、成績評価に関わる試験の受験だけではなく、授業にも出席する必要があります。



第5章

各専攻の教育課程と教育課程表

■ 1 初等教育専攻の教育課程

- (1) 教育目的と教育課程
- (2) コース配属と卒業するために必要な単位数
- (3) 教育職員免許状取得の資格およびその他の資格

■ 2 初等教育専攻・教育課程表(卒業に要する単位数)

■ 3 初等教育専攻の授業科目と履修方法

- (1) 専門基盤科目
- (2) 専門教育科目
- (3) 専門拡充科目

■ 4 中等教育専攻の教育課程

- (1) 教育目的と教育課程
- (2) 卒業するために必要な単位数
- (3) 教育職員免許状取得の資格およびその他の資格

■ 5 中等教育専攻・教育課程表(卒業に要する単位数)

■ 6 中等教育専攻の授業科目と履修方法

- (1) 専門基盤科目
- (2) 専門教育科目
- (3) 専門拡充科目

■ 7 芸術体育・生活系教育専攻の教育課程

- (1) 教育目的と教育課程
- (2) 履修型登録と卒業するために必要な単位数
- (3) 教育職員免許状取得の資格およびその他の資格

■ 8 芸術体育・生活系教育専攻・教育課程表(卒業に要する単位数)

■ 9 芸術体育・生活系教育専攻の授業科目と履修方法

- (1) 専門基盤科目
- (2) 専門教育科目
- (3) 専門拡充科目

■ 10 特別支援教育専攻の教育課程

- (1) 教育目的と教育課程
- (2) コース配属・履修型の登録と卒業するために必要な単位数
- (3) 教育職員免許状取得の資格およびその他の資格

■ 11 特別支援教育専攻・教育課程表(卒業に要する単位数)

■ 12 特別支援教育専攻の授業科目と履修方法

- (1) 専門基盤科目
- (2) 専門教育科目
- (3) 専門拡充科目



この章では、初等教育専攻、中等教育専攻、芸術体育・生活系教育専攻、特別支援教育専攻の教育課程（カリキュラム）と授業科目の履修方法について説明します。本冊子の第1章から第4章までを理解したうえで、自分が所属する専攻についての説明をよく読んでください。

なお、授業科目の詳細は本冊子の第6章以降に掲載されていますので、履修計画を立てる際に参照してください。

1 初等教育専攻の教育課程

(1) 教育目的と教育課程

初等教育専攻の教育課程（カリキュラム）は、下記のような資質・能力と、教育者としての人間性・使命感とをあわせもつ教員の育成を目指して編成されています。

- 全教科にわたり専門性を授業づくりに発揮できる学力
- 教科横断的な学習指導にも対応できる創造的な資質
- 子どもの発達段階に対する深い理解力と、発達段階に応じて適切に支援する能力
- 子どもを取り巻く社会の多様な課題を捉え得る広い視野と、それに柔軟に対応できる能力
- 所属するコースに応じた得意分野の専門性

(2) コース配属と卒業するために必要な単位数

初等教育専攻に所属する学生は、2年次進級時に各コースに配属されます。コース配属については、第3章「**2** コース配属・**3** 履修型登録について」を参照してください。

初等教育専攻に所属する学生が卒業するためには、指定された授業科目を、定められた履修方法に従って、**合計133単位**修得しなければなりません。授業区分ごとに必要な単位数については、「**初等教育専攻・教育課程表（卒業に要する単位数）**」を確認してください。

なお、必要な授業科目・単位数は、コースによって異なりますので、注意してください。

(3) 教育職員免許状取得の資格およびその他の資格

初等教育専攻においては、「教育課程表」に従って卒業に必要な単位をそろえ、さらに大学の授業以外に「介護等体験」（第13章参照）を行うことで、幼年期教育創生コースでは**幼稚園教諭一種**と**小学校教諭一種**、その他のコースでは**小学校教諭一種**の免許状取得の資格を得ることができます。

また、卒業するために必要な単位に加えて、さらに所定の単位を修得すれば、第1章「**6** 学位と取得資格」に示したとおり、他の校種の教育職員免許状取得の資格も得ることができます。

その他、必要な単位を修得すれば、「学校図書館司書教諭」の任用資格を取得することもできます。資格の取得を希望する場合は、第17章の説明をよく読んでください。

2 初等教育専攻・教育課程表（卒業に要する単位数）

次の表は、初等教育専攻の「教育課程表」です。

この表には、コース別に、初等教育専攻を卒業するために必要な単位数が記されています。授業科目の詳細と履修の決まりについては、備考欄に示された「授業科目表」を確認してください。

科目区分		授業科目群名等	幼年期教育 創生コース		未来づく り教育創 生コース	人文・社会 系教育創生 コース	理数・自然 系教育創生 コース	備 考
			幼1種	小1種	小1種	小1種	小1種	
専門 基盤 科目	基礎科目	日本国憲法	2		2	2	2	授業科目表1 (38ページ～参照)
		情報活用の基礎	2		2	2	2	
		健康・運動系科目	2		2	2	2	
		外国語科目	4		4	4	4	
		外国語コミュニケーション	2		2	2	2	
		防災教育	2		2	2	2	
	教養科目	知る科目	2	6	2	10	2	授業科目表2 (39ページ～参照)
		磨く科目	2		2		2	
		育む科目	2		2		2	
専門 教育 科目	教育の基礎的理解 に関する科目	教育の原理	2		2	2	2	授業科目表4－1 ～4－11 (49ページ～参照)
		教職入門	2		2	2	2	
		教育の制度・経営	2		2	2	2	
		教育と地域社会						
		発達と学習の心理	2		2	2	2	
		特別支援教育理解	2		2	2	2	
		幼稚園教育課程論	2		－	－	－	
	道徳・総合的な学習の時間 等の指導法及び生徒指導、 教育相談等に関する科目	道徳の理論及び指導	2		2	2	2	
		総合的な学習の時間の指導法 (特別活動を含む。)	2		2	2	2	
		教育課程と教育方法	1		1	1	1	
		情報活用能力育成実践論	1		1	1	1	
		児童・生徒理解	2		2	2	2	
		幼児理解	2		－	－	－	
		教育相談(カウンセリングを含む。)	2		2	2	2	
	キャリア ステップ アップ科目	教育体験初年次演習Ⅰ	2		2	2	2	
		教育体験初年次演習Ⅱ	2		2	2	2	
		教育実践探究演習	4		4	4	4	
		教育実習(事前・事後指導を含む。)	7		7	7	7	
		教職実践演習	2		2	2	2	
	教科及び 教科の指導法に関する科目	保育内容指導法	10	－	－	－	－	
		各教科の教育法(初等)	－	20	20	20	20	
		各教科の教育法(中等)	－		－	－	－	
		幼稚園の領域科目	10	－	－	－	－	
		小学校の専門科目	－	10	20	20	20	
		中学校の専門科目	－		－	－	－	
		コース専門科目	12		12	12	12	
		特別支援専門科目	－		－	－	－	
卒業研究		4		4	4	4	第14章 (197ページ～参照)	
専門拡充科目		6		20	16	16	第15章 (199ページ～参照)	
合計		133		133	133	133		

3 初等教育専攻の授業科目と履修方法

「教育課程表」に示されているとおり、初等教育専攻の授業科目は、「専門基盤科目」「専門教育科目」「専門拡充科目」の三つに区分されています。授業の詳細と履修方法の確認の仕方を次に説明します。

(1) 専門基盤科目

専門基盤科目は全専攻共通の科目です。この科目群の詳細と履修方法は、**第6章**で説明しますので、そちらを確認してください。

(2) 専門教育科目

専門教育科目の詳細と履修方法は、**第7章**で説明しますので、そちらを確認してください。

(3) 専門拡充科目

専門拡充科目については、**第15章**で説明しますので、そちらを確認してください。

4 中等教育専攻の教育課程

(1) 教育目的と教育課程

中等教育専攻の教育課程（カリキュラム）は、下記のような資質・能力と、教育者としての人間性・使命感とをあわせもつ教員の育成を目指して編成されています。

- 特定の教科に関する深い専門性を授業づくりに発揮できる学力
- 教科横断的な学習指導にも対応できる創造的な資質
- 子どもから大人へと変容し始める時期の生徒に対する深い理解力
- 中等教育の諸問題に対処し、適切に生徒の成長を支援する能力
- 現代社会の多様な課題を捉え得る地球的視野と、それに柔軟に対応できる能力

(2) 卒業するために必要な単位数

中等教育専攻に所属する学生は、卒業するために、指定された授業科目を、定められた履修方法に従って、**合計133単位**修得しなければなりません。授業区分ごとに必要な単位数については、「**中等教育専攻・教育課程表（卒業に要する単位数）**」を確認してください。

(3) 教育職員免許状取得の資格およびその他の資格

中等教育専攻においては、「教育課程表」に従って卒業に必要な単位をそろえ、さらに大学の授業以外に「介護等体験」(第13章参照)を行うことで、各コースに対応した教科の中から1教科の**中学校教諭一種**と**高等学校教諭一種**の免許状（社会科は**中学校教諭一種**のみ）取得の資格を得ることができます。

また、卒業するために必要な単位に加えて、さらに所定の単位を修得すれば、第1章「**6 学位と取得資格**」に示したとおり、他の教科、または他の校種の教育職員免許状取得の資格も得ることができます。その他、必要な単位を修得すれば、「学校図書館司書教諭」の任用資格を取得することもできます。資格の取得を希望する場合は、第17章の説明をよく読んでください。

5 中等教育専攻・教育課程表（卒業に要する単位数）

次の表は、中等教育専攻の「教育課程表」です。

この表には、中等教育専攻を卒業するために必要な単位数が記されています。授業科目の詳細と履修の決まり

については、備考欄に示された「授業科目表」を確認してください。

科目区分		授業科目群名等	言語・社会系教育コース 理数系教育コース	備 考	
			中1種		
専門 基盤 科目	基礎科目	日本国憲法	2	授業科目表1 (38ページ～参照)	
		情報活用の基礎	2		
		健康・運動系科目	2		
		外国語科目	4		
		外国語コミュニケーション	2		
		防災教育	2		
	教養科目	知る科目	2	10	授業科目表2 (39ページ～参照)
		磨く科目	2		
		育む科目	2		
専門 教育 科目	教育の基礎的理解に関する科目	教育の原理	2	授業科目表5-1～5-11 (65ページ～参照)	
		教職入門	2		
		教育の制度・経営	2		
		教育と地域社会			
		発達と学習の心理	2		
		特別支援教育理解	2		
		幼稚園教育課程論	－		
	道徳・総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目	道徳の理論及び指導	2		
		総合的な学習の時間の指導法（特別活動を含む。）	2		
		教育課程と教育方法	1		
		情報活用能力育成実践論	1		
		児童・生徒理解	2		
		幼児理解	－		
		教育相談（カウンセリングを含む。）	2		
	キャリアステップアップ科目	教育体験初年次演習Ⅰ	2		
		教育体験初年次演習Ⅱ	2		
		教育実践探究演習（中等実践指導法科目）	4		
		教育実習（事前・事後指導を含む。）	7		
		教職実践演習	2		
	教科及び教科の指導法に関する科目	保育内容指導法	－		
		各教科の教育法（初等）	－		
		各教科の教育法（中等）	4		
		幼稚園の領域科目	－		
		小学校の専門科目	－		
		中学校の専門科目	32		
		コース専門科目	8		
		特別支援専門科目	－		
卒業研究		4	第14章 (197ページ～参照)		
専門拡充科目		24	第15章 (199ページ～参照)		
合計		133			

6 中等教育専攻の授業科目と履修方法

「教育課程表」に示されているとおり、中等教育専攻の授業科目は、「専門基盤科目」「専門教育科目」「専門拡充科目」の三つに区分されています。授業の詳細と履修方法の確認の仕方を次に説明します。

(1) 専門基盤科目

専門基盤科目は全専攻共通の科目です。この科目群の詳細と履修方法は、**第6章**で説明しますので、そちらを確認してください。

(2) 専門教育科目

専門教育科目の詳細と履修方法は、**第8章**で説明しますので、そちらを確認してください。

(3) 専門拡充科目

専門拡充科目については、**第15章**で説明しますので、そちらを確認してください。

7 芸術体育・生活系教育専攻の教育課程

(1) 教育目的と教育課程

芸術体育・生活系教育専攻の教育課程（カリキュラム）は、下記のような資質・能力と、教育者としての人間性・使命感とをあわせもつ教員の育成を目指して編成されています。

- 芸術体育・生活系の教科に関する深い専門性を授業づくりに発揮できる学力
- 芸術体育・生活系の教科に関する知識・技能を基盤として、異校種または複数教科にわたる学習指導にも対応できる創造的な資質
- 子どもの発達段階に対する深い理解力と、発達段階に応じて適切に支援する能力
- 子どもを取り巻く社会の多様な課題を捉え得る広い視野と、それに柔軟に対応できる能力
- 現代社会の多様な課題を捉え得る地球的視野と、それに柔軟に対応できる能力

(2) 履修型登録と卒業するために必要な単位数

芸術体育・生活系教育専攻に所属する学生は、1年次の10月に、履修型を選択して登録する必要があります。履修型の登録については、第3章「**2** コース配属について」・「**3** 履修型登録について」を参照してください。

卒業に必要な授業科目は履修型によって異なりますが、いずれの場合も、卒業するためには、指定された授業科目を、定められた履修方法に従って、**合計133単位**修得しなければなりません。それぞれの履修型において、授業区分ごとに必要な単位数については、「**芸術体育・生活系教育専攻・教育課程表（卒業に要する単位数）**」を確認してください。

(3) 教育職員免許状取得の資格およびその他の資格

芸術体育・生活系教育専攻においては、「教育課程表」に従って卒業に必要な単位をそろえ、さらに大学の授業以外に「介護等体験」(第13章参照)を行うことで、各コースに対応した芸術体育・生活系教科の中から1教科の**中学校教諭一種と高等学校教諭一種**の免許状(※)取得の資格を得ることができます。

加えて、履修型が「小中連携型」の場合は、**小学校教諭一種**免許状取得の所要資格を、履修型が「中等連携履修型」の場合は、国語・英語・数学のいずれか1教科の**中学校教諭一種**免許状取得の所要資格を得られます。

また、卒業するために必要な単位に加えて、さらに所定の単位を修得すれば、第1章「**6** 学位と取得資格」に示したとおり、他の教科、または他の校種の教育職員免許状取得の資格も得ることができます。その他、必要な単位を修得すれば、「学校図書館司書教諭」の任用資格を取得することもできます。資格の取得を希望す

る場合は、第17章の説明をよく読んでください。

※技術は中学校教諭一種免許状のみ取得の資格を得ることができます。

美術・家庭科の小中履修型の場合は、高等学校教諭一種免許状取得の資格を得るために、卒業要件のほか、所定の単位を取得する必要があります。詳しくは第16章をご確認ください。

8 芸術体育・生活系教育専攻・教育課程表(卒業に要する単位数)

次の表は、芸術体育・生活系教育専攻の「教育課程表」です。

この表には、履修型別に、芸術体育・生活系教育専攻を卒業するために必要な単位数が記されています。授業科目の詳細と履修の決まりについては、備考欄に示された「授業科目表」を確認してください。

科目区分		授業科目群名等	小中履修型		中等連携履修型		備 考
			小1種	中1種	中1種	中1種	
専門 基礎 科目	基礎科目	日本国憲法	2		2		授業科目表1 (38ページ～参照)
		情報活用の基礎	2		2		
		健康・運動系科目	2		2		
		外国語科目	4		4		
		外国語コミュニケーション	2		2		
		防災教育	2		2		
	教養科目	知る科目	2	10	2	10	授業科目表2 (39ページ～参照)
		磨く科目	2		2		
		育む科目	2		2		
専門 教育 科目	教育の基礎的理解に関する科目	教育の原理	2		2		授業科目表6-1～6-4 (97ページ～参照)
		教職入門	2		2		
		教育の制度・経営	2		2		
		教育と地域社会					
		発達と学習の心理	2		2		
		特別支援教育理解	2		2		
		幼稚園教育課程論	—		—		
	道徳・総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目	道徳の理論及び指導	2		2		
		総合的な学習の時間の指導法（特別活動を含む。）	2		2		
		教育課程と教育方法	1		1		
		情報活用能力育成実践論	1		1		
		児童・生徒理解	2		2		
		幼児理解	—		—		
		教育相談(カウンセリングを含む。)	2		2		
	キャリアステップアップ科目	教育体験初年次演習Ⅰ	2		2		
		教育体験初年次演習Ⅱ	2		2		
		教育実践探究演習（各教科の中等実践指導法科目）	—	4	4	4	
		教育実習(事前・事後指導を含む。)	7		7		
		教職実践演習	2		2		

科目区分		授業科目群名等	小中履修型		中等連携履修型		備 考
			小1種	中1種	中1種	中1種	
専門教育科目	教科及び教科の指導法に関する科目	保育内容指導法	－		－		授業科目表6－5～6－18 (104ページ～参照)
		各教科の教育法（初等）	20	－	－		
		各教科の教育法（中等）	－	4	4	4	
		幼稚園の領域科目	－		－		
		小学校の専門科目	18	－	－		
		中学校の専門科目	－	20	30	20	
		コース専門科目	6		6		
		特別支援専門科目	－		－		
		卒業研究	4		4		第14章 (197ページ～参照)
専門拡充科目		－		－		第15章 (199ページ～参照)	
合 計		133		133			

9 芸術体育・生活系教育専攻の授業科目と履修方法

「教育課程表」に示されているとおり、芸術体育・生活系教育専攻の授業科目は、「専門基盤科目」「専門教育科目」「専門拡充科目」の三つに区分されています。授業の詳細と履修方法の確認の仕方を次に説明します。

(1) 専門基盤科目

専門基盤科目は全専攻共通の科目です。この科目群の詳細と履修方法は、**第6章**で説明しますので、そちらを確認してください。

(2) 専門教育科目

専門教育科目の詳細と履修方法は、**第9章**で説明しますので、そちらを確認してください。

(3) 専門拡充科目

専門拡充科目については、**第15章**で説明しますので、そちらを確認してください。

10 特別支援教育専攻の教育課程

(1) 教育目的と教育課程

特別支援教育専攻の教育課程（カリキュラム）は、下記のような資質・能力と、教育者としての人間性・使命感とをあわせもつ教員の育成を目指して編成されています。

- ひとりひとりの異なる願いや要求に的確に応えることのできる力
- 特別支援教育に関わる専門的な学力
- 障害のある子どもの可能性を引き出す力
- 教科の専門性を授業づくりに発揮する学力

(2) コース配属・履修型の登録と卒業するために必要な単位数

特別支援教育専攻に所属する学生は、2年次進級時に各コースに配属されます。また、1年次の10月に、履修型を選択して登録する必要があります。コースおよび履修型の登録については、第3章「**2** コース配属について」・

「3 履修型登録について」を参照してください。

卒業に必要な授業科目は履修型によって異なりますが、いずれの場合も、卒業するためには、指定された授業科目を、定められた履修方法に従って、**合計136単位**修得しなければなりません。それぞれの履修型において、授業区分ごとに必要な単位数については、「特別支援教育専攻・教育課程表（卒業に要する単位数）」を確認してください。

（3）教育職員免許状取得の資格およびその他の資格

特別支援教育専攻においては、「教育課程表」に従って卒業に必要な単位をそろえれば、**特別支援学校教諭一種**（取得単位によって2領域から5領域）と、**小学校教諭一種**（「小履修型」の場合）または**中学校教諭一種**（「中履修型」の場合、1教科選択）の免許状取得の資格を得ることができます。

また、卒業するために必要な単位に加えて、さらに所定の単位を修得すれば、第1章「6 学位と取得資格」に示したとおり、他の教科、または他の校種の教育職員免許状取得の資格も得ることができます。その他、必要な単位を修得すれば、「学校図書館司書教諭」の任用資格を取得することもできます。資格の取得を希望する場合は、第17章の説明をよく読んでください。

II 特別支援教育専攻・教育課程表（卒業に要する単位数）

次の表は、特別支援教育専攻の「教育課程表」です。

この表には、履修型別に、特別支援教育専攻を卒業するために必要な単位数が記されています。授業科目の詳細と履修の決まりについては、備考欄に示された「授業科目表」を確認してください。

科目区分		授業科目群名等	小履修型		中履修型		備 考
			小1種	特支1種	中1種	特支1種	
専門 基盤 科目	基礎科目	日本国憲法	2		2		授業科目表1 (38ページ～参照)
		情報活用の基礎	2		2		
		健康・運動系科目	2		2		
		外国語科目	4		4		
		外国語コミュニケーション	2		2		
		防災教育	2		2		
	教養科目	知る科目	2		2		授業科目表2 (39ページ～参照)
		磨く科目	2	6	2	6	
		育む科目	2		2		
専門 教育 科目	教育の基礎的理解に関する科目	教育の原理	2		2		授業科目表7-1 (131ページ～参照)
		教職入門	2		2		
		教育の制度・経営	2		2		
		教育と地域社会	2		2		
		発達と学習の心理	2		2		
		特別支援教育理解	2		2		
		幼稚園教育課程論	—		—		

科目区分		授業科目群名等	小履修型		中履修型		備考
			小1種	特支1種	中1種	特支1種	
専門教育科目	道徳・総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目	道徳の理論及び指導	2		2		授業科目表7-2～7-21 (132ページ～参照)
		総合的な学習の時間の指導法（特別活動を含む。）	2		2		
		教育課程と教育方法	1		1		
		情報活用能力育成実践論	1		1		
		児童・生徒理解	2		2		
		幼児理解	—		—		
		教育相談（カウンセリングを含む。）	2		2		
	キャリアステップアップ科目	教育体験初年次演習Ⅰ	2		2		
		教育体験初年次演習Ⅱ	2		2		
		教育実践探究演習（中履修型は各教科の中等実践指導法科目）	4		4		
		教育実習（事前・事後指導を含む。）	7		7		
		教職実践演習	2		2		
	教科及び教科の指導法に関する科目	保育内容指導法	—		—		
		各教科の教育法（初等）	20		—		
		各教科の教育法（中等）	—		4		
		幼稚園の領域科目	—		—		
		小学校の専門科目	20		—		
		中学校の専門科目	—		32		
		コース専門科目	—		—		
		特別支援専門科目	31		31		
	卒業研究		4		4		第14章 (197ページ～参照)
	専門拡充科目		4		8		第15章 (199ページ～参照)
	合計		136		136		

12 特別支援教育専攻の授業科目と履修方法

「教育課程表」に示されているとおり、特別支援教育専攻の授業科目は、「専門基盤科目」「専門教育科目」「専門拡充科目」の三つに区分されています。授業の詳細と履修方法の確認の仕方を次に説明します。

(1) 専門基盤科目

専門基盤科目は全専攻共通の科目です。この科目群の詳細と履修方法は、**第6章**で説明しますので、そちらを確認してください。

(2) 専門教育科目

専門教育科目の詳細と履修方法は、**第10章**で説明しますので、そちらを確認してください。

(3) 専門拡充科目

専門拡充科目については、**第15章**で説明しますので、そちらを確認してください。

VI

第6章 専門基盤科目 (全専攻共通)

■ 1 基礎科目

■ 2 教養科目

■ 3 授業科目表

授業科目表1(基礎科目)

授業科目表2(教養科目)

第6章

専門基盤科目（全専攻共通）



専門基盤科目は、学校教育教員養成課程の全専攻に共通して設けられている科目です。教員となるために必須の基礎的な知識や技能を習得するとともに、生涯学び続ける知的基盤を形成するための教養を身につけ、豊かな人間性と広い視野、確かな社会観と世界観等を培うことを目的として、「基礎科目」と「教養科目」で構成されています。この章では、これらの科目について、「授業科目表」を掲載し、授業科目の詳細と履修方法を説明します。表の見方については第2章「**5 授業科目表の見方**」(11ページ～)を参照してください。

1 基礎科目

基礎科目は、教員となるための基礎となる力を身につけるための科目であり、教育職員免許法で履修が義務づけられている「日本国憲法」「情報活用の基礎」「健康・運動系科目」「外国語コミュニケーション」の4科目と、教員養成大学として学校現場で必須と捉えている「防災教育」、そして「外国語科目」の全6科目、合計14単位を必修科目として設定しています。授業科目の詳細と履修方法については、次ページ以降の「**授業科目表1**」を確認してください。

なお、必修科目の多くは履修できるクラスが定められていますので、『**開講科目一覧**』でクラス指定の指示も確認してください。

2 教養科目

教養科目は、本学における専門分野の学修の基礎となる素養を培うために、また生涯学び続ける姿勢と教員としての知的基盤を形成するために設けられた科目です。

教養科目では、人間・社会・自然に関する知識を得て視野の拡大をはかるための「知る科目」、課題解決力・思考力・応用力・人間性等を磨くための「磨く科目」、教職への志向性・使命感・教育の基盤となる力を育むための「育む科目」の3つのカテゴリーから、それぞれ所定の単位数を履修することにより、学校教員の基盤となる教養や資質・能力を醸成します。これらの3分野からそれぞれ2単位以上履修し、合計6単位以上または合計10単位以上修得する必要があります（専攻・コースによって、卒業に必要な合計単位数は異なります）。授業科目の詳細と履修方法については、「**授業科目表2**」(39ページ～)を、開講予定については『**開講科目一覧**』を確認して、計画的に履修してください。

なお、「教養科目」の中には「学校図書館司書教諭」の任用資格の取得に関連する授業科目も含まれています。資格取得を目指す場合は、専門基盤科目を履修する際に、該当する授業科目を履修すると良いでしょう。資格の取得に関する授業科目の詳細と履修方法については、第17章を確認してください。

3 授業科目表

授業科目表1（基礎科目）

次の表に示された授業科目（すべて必修科目）、合計14単位を修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
日本国憲法	日本国憲法の基本原理、及び日本国憲法が規定する人権や統治機構の内容を理解することを目標とする。 憲法とは、国の組織と作用に関する基本的な規律を意味する。昭和21年に公布された日本国憲法の各規定に何が定められているのか、またそれらが各国家機関によってどのように実践されているのか、そしてそれらがいかなる考え方によって基礎づけられているのかについて、事例の検討等を通じて学習する。	2	(2)	講義	1～	必修
情報活用の基礎	この授業では、本学での4年間を通して必要となる基本的な情報活用能力や、学校教員になる上で必要となる基礎的なICT活用指導力を身に付けることを目標とします。具体的な内容としては、各自が持参しているコンピュータや本学の情報システム、また情報セキュリティ等の安全な活用方法を扱います。その上で、小・中学校等で行われている情報教育を踏まえた実践的な題材でコンピュータやクラウドサービスの活用方法や教員になったときに役立つ内容を学びます。 講義と演習が組み合わせられているので、ひとつひとつの授業内容、課題を確認しながら学習を進めてください。 a、b、c、dからなる4つのクラスのうち、指定されたクラスを選択して履修する。指定されたクラス以外での履修は認めません。	2	(2)	講義	1～	必修
体育実習	基本的な運動を通して、自ら運動する習慣を身につけ、そのうえで実際に体力・運動能力の向上を目指す（2回の体力測定と、実技を積み重ねる中で、自分の体力・運動能力の向上及び健康管理についての理解を深めることができるようになること）。 基本的運動の実践を通して心身の円満な発達を図るとともに、体力および運動能力の向上を目指す。男女別の5グループをつくり陸上運動、山野歩走、トレーニング、ボール運動・からだづくり運動および器械運動を、数回ずつ11月初旬まで受講していく。	1	2	実習	1～	必修
健康・運動論	子どもにおいて特徴的な健康問題について、その背景や現状などを理解することを目標にする。また、子どもへのアプローチを個と集団の観点からみることについて、考察する。 自分自身の健康確保のための能力を身につけるとともに、教職教養の立場から子どもたちの心身の把握や、健康管理・健康教育のできる能力を培うことをねらいとする。内容としては、健康を守る能力と仕事、健康の自己コントロール力等について具体的に扱う。 本講義は主に教職に就いたときの子どもの健康の素養を培うことを意図している。学校における「保健教育」に関連する内容となっている。	1	(1)	講義	1～	必修
英語 A	外国語での円滑なコミュニケーションをとることのできる、十分な英語の4技能（読む、書く、話す、聞く）を養うことを目指す。授業は一定規模の人数にもとづくクラス編成により行われ、各クラスの担当教員が指定の教科書、あるいは配布資料に基づいて毎回の授業を行う。	1	(2)	演習	1～	必修
英語 B		1	(2)	演習	1～	必修
英語 C		1	(2)	演習	1～	必修
英語 D		1	(2)	演習	1～	必修
英語コミュニケーション A	様々な場面を想定した日常会話や様々なトピックについてのスピーチ、ディスカッションを通して、複数の領域を統合した言語活動を遂行する能力の育成を図る。	1	(2)	演習	2～	必修
英語コミュニケーション B		1	(2)	演習	2～	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
学校防災教育基礎	気候変動に伴う環境の変化や災害リスクの想定に関する基礎的知識をもとに、想定外の事態に対応できる能力を多様なアプローチで育成する。自然環境の本質や災害発生メカニズム、危機的状況に対応できる力などを含め、東日本大震災等の災害の教訓を踏まえて、学校における防災教育・防災管理・組織活動について最低限身に付けておくべき事柄を学ぶ。具体的には（１）災害への意識を高め、対応力を持つ、（２）東日本大震災を起点に置き、水害も含めて身近な災害に向き合い、（３）自分のいのちを守り、隣り合う人たちとともに生き抜く力を持つ子どもの育成に資する対応力の基盤として、（４）避難と避難所運営の教訓、防災教育の実際などを理解することを目標とする。	2	(2)	講義	1～	必修

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表2（教養科目）

次の表の区分（「知る科目」「磨く科目」「育む科目」）から各2単位以上を含めて、以下の通り履修してください。

○合計6単位以上修得

→初等教育専攻の幼年期教育創生コースと未来づくり教育創生コース、及び特別支援教育専攻の各コース

○合計10単位以上修得

→初等教育専攻の人文・社会系教育創生コースと理数・自然系教育創生コース、及び中等教育専攻、芸術体育・生活系教育専攻の各コース

<知る科目>

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
人権教育	人権教育は単なる法制度的知識にとどまらず、現実社会や日常生活における自他のありかた・かわりかた問題としてとらえる必要がある。学校においても、児童生徒の生活の実践知として人権をとらえる必要がある。このような観点から、「国連人権教育の10年」や「子どもの権利条約」に関する国内外の行動に触れつつ、人権とは何か、学校の社会的役割、教師の役割について学ぶ。	2	(2)	講義	1～	2単位以上 選択必修
日本の言語と文化	私たちは、日々の言語生活のなかで日本語の大切さに気付きながらも、それが日本人の生活や文化とどのような関係性をもつのか考える機会は少ない。本講義では、身近な日本語を出発点として日本語の種々相に触れるとともに、文学作品を通して言語・文化と能動的なかわりをもちながら、日本人のものの見方や考え方についても理解を深めていく。	2	(2)	講義	1～	
人間と思想	私たちが生きていくなかで出会う主要な哲学的諸問題について、現代の日本社会が抱えるさまざまな問題を考慮に入れつつ、多面的に考察する。さまざまな哲学者や思想家たちの文献を参照しながら、それらをヒントにしつつ、自分自身の考えを掘り下げて考察を深める。私たちが生きていくなかで出会う主要な哲学的諸問題について、基本的な知識や考え方を身につけ、自分なりに考えを深められるようになってもらうことを目指していく。 講義形式で進めるが、授業中に所定のテーマについて小論文という形で自分なりの考えをまとめてもらう機会を設ける。	2	(2)	講義	1～	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
人間と音楽	日本の音楽の歴史を古代から現代まで辿ることで、日本の文化における「日本らしさ」がいかに形成され、新しい文化を受け入れながら、伝統文化をいかに継承してきたのかを考える。まず「日本の音楽」の範囲について考え、その上で古代の音楽、大陸の芸能の影響（雅楽）、その後の日本独自の芸能の誕生（平家琵琶、能）、庶民芸能の展開（歌舞伎）、明治維新が音楽に与えた影響、明治期の西洋音楽受容、明治期の伝統音楽の発展、音楽取調掛の果たした役割、戦中期の音楽、戦後の学校における音楽教育の変遷、日本人の西洋芸術音楽作品、流行歌の変遷、グローバル化時代の音楽、伝統音楽の創作と保存と継承、について取り扱う。	2	(2)	講義	1～	2単位以上 選択必修
美術による表現	この授業では、美術全般についての役割や表現形態について学ぶ。体系的な作品の歴史や、現代までの変遷したアートの意義などを踏まえ、映像表現を交えながら、日本の伝統芸術としての工芸に着目し、作品制作や、作品鑑賞を通して、教育現場で実践力を養う。さらに教育における新しい授業作りのあり方を模索することに重点を置く。	2	(2)	演習	1～	
言語学	ことばの学問とはどのようなものなのか、母語として日本語を知っていたり、外国語として英語を学んできたとしても、言語がどのようなものとして考えられ、研究されてきたのかについて俯瞰できるようにすることを目標とし、「ことば」を研究する言語学について概観する。具体的には、言語学の流れ、統語論、音声学、音韻論、形態論、意味論、語用論、日英言語文化論について取り上げ、概説する。	2	(2)	講義	1～	
歴史学入門	小中高の歴史学習の場で使用される教科書の内容は国家の歴史を中心に記述されているが、それぞれの時代には、時の権力者や著名な文化人だけではなく、数多の名もなき人びとが実際に生活していた筈である。彼ら「普通の人びと」の日常的な生活世界へ目を向け、ある時代に生きた人びとの心性といったものにまで目配りすることによって、国家に着目しただけでは見えてこない社会の実像や人びとの繋がりについて深く理解することができる。本講義では、歴史を多面的・多角的に見る眼を養うため、歴史学における社会史的な考え方について押さえた上で、日本近世社会における「家」と村落、出産と子ども、村の教育と寺子屋、婚姻と相続、情報と人びとの文化的な交流、老いと死など、人の一生や生活文化全般について学んでいく。	2	(2)	講義	1～	
現代生活の科学	わたしたちの現代生活や身体の成り立ち、そしてそれらを支えるさまざまな材料、道具、環境、情報などについて、科学・技術的な視点から解説する。ただし、これら全般の概説ではなく、この中に含まれる専門分野からひとつのテーマをとりあげて、深く掘り下げながら考察を進めるものである。	2	(2)	講義	1～	
持続可能な社会	2014年5月に『中央公論』で発表された「消滅可能性都市896のリスト」（日本創世会議：増田寛也座長）は、2040年の姿を推計したものであるとして日本の各地に大きな衝撃を与えた。中でも、東北地方はこのまま手立てを講じなければ8割近くの自治体が消滅すると試算されている。2040年は、現在の君たちが40代を迎える年にあたり、社会の中心を担う世代に成長していると考えられる。しかし、急速に人口が減少していく社会が抱える課題や問題点を想像することは容易ではない。20年後に君たちは、どのような社会になっていることが望ましいと考えるだろうか。本講義は、「持続可能な社会」を構想するための基礎的な考え方を学び、自ら課題を設定して持続可能な社会を形成するためにどのようなことが必要なのかを自ら考え、調べ、まとめ、表現することをねらいとする。	2	(2)	講義	1～	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
伝統と近代化	日本と同様にヨーロッパ化による大国化を希求したロシアを主な素材として、近世以降の世界各地における「伝統と近代化」の関係性について考察する授業である。この両者が必ずしも明確な二項対立ではなく、それぞれに多様な要素を内包していた点に着目し、近現代世界においてとりわけ「伝統」が持つ生命力について再検討する。また、小中学校における「授業づくり」への提言を目的に、特定の対象への多面的な理解を深める手段として、映像・画像・音声も活用する。なお最終的には、講義内容を参考にしつつ、受講者自身が選定した地域に関し、独自に調査・考察に努めてもらうことを予定している。	2	(2)	講義	1～	2単位以上 選択必修
環境と開発	人類の生存にはさまざまな開発行為が必要である。しかし開発が自然環境の荒廃をもたらし、人類の生存に対して危機的状況を生み出していることも少なくない。本授業では、日本国内や世界の事例を通して、環境と開発を両立させるために現在どのような考え方や行動が求められているのかを探っていく。具体事例の分析を通して、環境問題について考えるための視点・思考力を養う。	2	(2)	講義	2～	
国際政治	本講義は国際政治のこれまでの議論を紹介し、「なぜ戦争はなくなるのか」「平和を実現するにはどうすれば良いか」という重要な問題を考える視点を提供するものである。具体的には、国境と領土問題、ナショナリズム、戦争と正義、国際連合、貧困問題、武装解除と平和構築、日本の国際貢献などに関するこれまでの議論を紹介し、受講生自身が戦争と平和について歴史的かつ複眼的視点から考察する知的枠組みを提示する。	2	(2)	講義	2～	
人間と健康	身体の構造と機能や疾病のメカニズムを学ぶことを通じて、健康を守り、疾病を予防・治療するための医学について理解を深める。	2	(2)	講義	1～	
教育とコンピューター・データサイエンス入門	これからの時代の教員には、最低限のデータ・サイエンス、コンピュータ・サイエンスに関する資質・能力が求められている。この授業では、学校での指導に役立つ内容に特化し、理系・文系関係なく入門的な内容から実践的な内容まで、多くの演習とともに扱う。	2	(2)	講義	1～	
数理の潮流	現実世界の具体的な問題は、抽象化や簡易化による数理的処理によって解決される場合があり、その過程で多くの数理的概念が獲得されてきた。また、そうして獲得された概念自体が具体的実態となり、そこから更に抽象化や理想化が行われ、一般化や新理論への展開に繋がることもある。このように数理の概念形成にはレベルがあり、具体物とそこから抽出される概念との関係は個々に獲得してきた数理的要素を土台としてまさに潮流の如く発展し続けている。この講義では現実世界の具体物との交渉を通して、数理的抽象概念が形成される過程と獲得された概念によって数理の世界で解くこととのかかわりを講義する。	2	(2)	講義	1～	
物理基盤講義	理科教科内容の基盤となる知識・解法等に関する講義である。特に、高校理科での物理未履修者を対象とする。 内容は、数学の基本から、物理（特に力学）の基礎的概念を中心に展開する。 本講義はアクティブ・ラーニングとして、出題した問題をグループで考えて、自分たちで深い理解・広い理解および数式化を実践してもらう。また、演習を通して、理解の定着を図る。 特に、試験は個人個人で受け成績評価に利用するが、講義では「受講者全員で単位を取りにいく」べく、協働（例えば、分かる人が分からない人を教える）を重視する。	2	(2)	講義	1～	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
化学基盤講義	大学で履修する化学分野の基盤となる知識・解法等に関する講義で、高校理科での未履修科目の補習的内容を含む。化学分野の高校での学修内容を復習・補習をするともに、大学での専門科目を履修する上で必要な基礎的知識・解法などを習得することを目的とする。	2	(2)	講義	1～	2単位以上 選択必修
生物基盤講義	本講義は、主に高校生物の未履修者を対象としており、生物学のより高度な専門領域の知識を学ぶ準備を整えるために計画されている。高等学校で学ぶ生物学の包括的内容を習得することを目標としている。具体的には、細胞、代謝、遺伝、体内環境、生殖、発生、環境応答、進化、分類などの一般的事項について学ぶ。	2	(2)	講義	1～	
地学基盤講義	理教科内容のうち、地学分野の基盤となる基本的な知識や観点を学ぶ。特に、高校地学の未履修者を対象とするものであり、高校「地学基礎」(および一部「地学」)の学習内容を基にして、地球の構成、地球史、海洋・気象、惑星・天体などの項目について網羅的に解説する。	2	(2)	講義	1～	
学校経営と 学校図書館	司書教諭科目全体の総論として、教育活動の視点から学校図書館の理念と教育的意義を押さえ、その機能と役割について基本的な理解をはかる。そのために、教育行政とのかかわりにおける学校図書館の歴史、学校図書館法、司書教諭の役割と学校図書館活動など、学校図書館全般について理解を深め、司書教諭としてのあるべき姿を考える。	2	(2)	講義	1～	
性・文化・ ジェンダー	本授業では、自分の性とジェンダー意識を問い直すこと、性についての感性と知識を身につけること、性とジェンダー教育のできる教師としての基礎的素養を育むこと、を目指す。これらは、学校教員を目指す者にとって非常に意義のあることである。授業は複数の教員がそれぞれの専門的な知見をもとに、講義を担当する。性およびジェンダーというテーマは、心身の両面において私たち自身の在りようと深く結びついているとともに、私たちが生きている社会や文化の本質的な部分と切り離せない関係にある。また、性・ジェンダーは時として、私たちに対して大きな問題として迫ってくるものでもあり、たとえば性的マイノリティの人たちだけでなく、成長過程にある子ども・若者たちの中にも、性・ジェンダーに関連する問題について深刻な悩みを抱えている人が数多くいる。本授業ではこうした点について概説する。	2	(2)	講義	1～	

注) 毎週授業時数欄の()は、前期または後期のみの時数を示す。

<磨く科目>

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
情報活用能力とプログラミングの活用	情報活用能力の中でも、情報活用の実践力として学校現場の実務で必須の知識・技能と、画像や音など色々なメディアをプログラミングの中で扱い、プログラミングの指導や、自分でプログラムを作って教材を作成できるようになることを目指す。	2	(2)	講義	1～	2単位以上 選択必修
コミュニケーション論	「人間の悩みのほとんどは、人間関係の悩みである」と心理学者が指摘するほど、コミュニケーション問題は社会に溢れている。本講義では、①社会学理論としてコミュニケーションを知る②社会を生き抜く技術として、コミュニケーションにまつわるリテラシーを身につけることを目的とする。価値観の多様化とソーシャル・メディアの進化に伴い、現代社会のコミュニケーションの在り様はおおきく変化している。高度に複雑化し、多くの問題も生まれている。従来の人間関係の議論とともに新しいコミュニケーション時代の到来も含め、毎回テーマを設定し、コミュニケーションにまつわる具体的事例をあげながら解説する。	2	(2)	講義	1～	
日本の芸能	日本には、民衆が古くから楽しみ、伝えてきた踊り・うた・太鼓などの民俗芸能がある。明治以来の学校教育ではそれを教育することにはあまり積極的ではなかったが、これらの中には郷土の伝統的身体文化として受け継ぐべきすぐれたものが数多くある。この授業では、それらを取り上げて実技を中心に学習する。まず日本の芸能を概観し、特に日本の踊りに共通する身体技法について学ぶ。その後「寺崎はねこ踊り（宮城県石巻市桃生町）」「大森みかぐら（岩手県奥州市衣川）」の習得を通して理解を深める。また、和太鼓についての基礎を学び、簡単なお囃子の演奏をできるようにすることを目指す。	4	2	演習	1～	
フランスの言語と文化	ヨーロッパ言語の基礎としてのフランス語を学び、ヨーロッパに由来する学問芸術の理解の基盤、英語をはじめとする欧米諸語の基礎を身につけることを主眼に本授業を設定している。実際の授業では、毎回、会話実践を行い、十分な反復練習によって、フランス語の構造、響き、流れ、イントネーションを体にしみこませていく。会話習得に必要な語彙、基本的な文法、発音等について、その都度説明を加えていく。また、フランスでの今日性のあるテーマを取り上げ、解説する。フランスの文化について知り、フランスという国に親しむことができる。本講義の到達点として、フランス語での簡単な自己紹介ができ、身の回りのことについて短い文章で話せるようになる。	2	(2)	講義	1～	
ドイツの言語と文化	ヨーロッパ言語の基礎としてのドイツ語を学び、ヨーロッパに由来する学問芸術の理解の基盤、英語をはじめとする欧米諸語の基礎を身につけることを主眼に本授業を設定している。具体的には、初級ドイツ語の前半の内容（発音、動詞の現在形、名詞・前置詞の用法など）を学びながら、あわせてドイツ語圏の歴史・文化の一端に触れる。本講義の到達点として、英語との異同を意識しながらドイツ語の基本的な性質を学び、簡単な現在形の単文を理解できるようになる。	2	(2)	講義	1～	
中国の言語と文化	アジア言語の基礎としての中国語を学び、中国に由来する学問芸術の理解の基盤、漢字と漢文の基礎を身につけることを主眼に本授業を設定している。中国語の漢字、発音、数の数え方、時間の言い方、曜日の言い方、存在所有動詞、一般動詞、疑問詞、形容詞について学ぶ。話す・聞くといった実践的能力をつけるのみならず、文学、歴史などの研究に必要な文献読解力の獲得も目的としている。学校現場における中国人児童生徒および保護者への対応や国際理解にも役立てることができる。	2	(2)	講義	1～	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
韓国の言語と文化	韓国語を初めて学ぶ人のための授業で、挨拶や自己紹介、文字の読み書きから始め、基礎的な会話や文法を学習し、初級の語学力を養成することを目標とする。また、韓国の社会や文化などの話題を通して、韓国に対する理解も深める。	2	(2)	講義	1～	2単位以上 選択必修
海外総合演習 A	全学全専攻に開かれている海外研修の授業であり、夏休み、春休みを利用して、海外に2週間前後滞在しながら、語学の研修をするほか、教育実習、フィールドワーク、ホームステイなどを体験する。研修先としては、イギリス、オーストラリア、台湾、韓国、タイなどを予定している。	2	(2)	演習	1～	
海外総合演習 B		2	(2)	演習	1～	
海外総合演習 C		2	(2)	演習	1～	
数学概論	数学Ⅱの復習から始めて、微積分の基礎について解説する。微分の定義と基本的な性質、多項式関数の微分、導関数、三角関数、指数関数の微分、逆関数の微分、定積分と原始関数、多項式の積分、三角関数、対数関数の積分、いろいろな定積分に関する基礎事項など、1変数関数の微分と積分に関する基本的概念を理解すると共に基本的な計算方法を身につけることを学習到達目標とする。	2	(2)	講義	1～	
自然科学と現代的課題	現代の自然科学の発展は、私達の自然に対する認識を大きく変化させてきている。その自然科学の先端で現在進行しつつある発見や技術開発を、平易な言葉で解説することで、人類が現在、そして未来に直面する課題に対して、どのように対処するべきかを考える素養を育むことが大切である。本講義では、物理学の分野における先端科学の内容について理解し、学校現場において生徒達に自然科学と現代的な課題について興味を引き出すための素養を身につけることを目標とする。	2	(2)	講義	2～	
多文化教育入門	グローバル化が進み、日本国内でも外国籍の人々が増え、多文化化が進んでいる。学校現場もこの例外ではない。この講義では、異なる文化を背景とする人々とのコミュニケーションの方法について考え、異文化を理解するとはどういうことなのかを体験的に捉えていく。また、外国人児童生徒等の学校での受け入れや支援のあり方についても考える。	2	(2)	講義	1～	
日本語教育概論	学校現場において外国にルーツをもつ児童生徒の支援が急務の課題となっている。本授業は、その導入科目として日本語教育の方法と内容を学ぶ。具体的には①海外と国内の日本語教育事情、日本語教員とは、②文法や語彙の指導、③日本語教授法、④四技能の教え方、⑤対象別教授法についての内容である。本授業を通して、外国人児童生徒への対応や、地域における多文化共生社会の形成のための知識や技能を身につけることができる。授業はタスク学習やプロジェクトワークの活動を通して、体験的・経験的理解するほか、外国人留学生も授業に加わり、一緒に活動する。	2	(2)	講義	1～	
国際理解教育概論	国際理解教育について、多文化共生教育、開発教育、SDGsなども含めて、その理論と方法論について体系的に学ぶ。次に①国際学級・日本語教室担当教員、②国際理解教育担当教員、④国際バカロレア校教員、⑤海外日本人学校教員、⑥インターナショナルスクール教員、⑦海外修学旅行担当教員、⑧ JICA 協力隊員といった国際教育の各分野で活躍する教員の職業の実践について理解し、大学生の将来のキャリア形成に役立てることを目標にしている。	2	(2)	講義	1～	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
情報社会と学校教育	情報社会における学校の役割、学びのありかたについて考察する。技術革新と社会の変化を展望し、これからの学力観、授業および学習のデザイン、学校の役割について検討する。テキストでは米国における事例を取り上げているが、授業ではテキストをもとに国内の動向と対比させるための課題提示を行う。関連する情報の収集、資料作成を行った上で、ディスカッションの機会を設ける。講義はeラーニング(LMS)により、講義情報の提供、課題、ふりかえり、レポート提出などを行う。	2	(2)	講義	2～	2単位以上 選択必修
環境教育	2030年までに人類が達成すべき目標としてSDGs（持続可能な開発目標）があり、SDGsの達成に貢献する教育としてESD（持続発展教育）が位置づけられている。すべての学校でESDの理念を生かした教育の展開が期待されていることを踏まえ、ESDおよびSDGsを環境教育の視座から掘り下げつつ、地域循環共生社会の構築に必要な環境リテラシーを養成する。	2	(2)	講義	1～	
学校図書館メディアの構成	学校図書館メディアの種類・特性と教育的意義を理解し、児童・生徒、教員に適切な情報を提供できるよう図書館資料の選択・収集と構成、図書資料を中心とした組織化について学び、実務能力の育成を図る。	2	(2)	講義	1～	
情報メディアの活用	学校図書館を中心に、教育現場における多様な情報メディアの特性と活用の方法を学ぶ。コンピュータや教育用ソフトウェアの活用のほか、視聴覚メディアの活用、データベースと情報検索、インターネットによる情報検索と発信について理解を深め、実務能力の育成も図る。	2	(2)	講義	1～	
読書と豊かな人間性	児童・生徒の発達段階に応じた読書教育の理念と方法を探る。読書の意義と目的に対する理解を深めるとともに、児童・生徒向け図書館メディアの種類や活用法、読書指導・支援の方法等を学び、さらに読書を通じた家庭・地域との連携についても考える。	2	(2)	講義	1～	

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

<育む科目>

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
発達と学びをつなぐ教育実践論	就学前教育・保育（保育所、幼稚園、認定こども園）と小学校教育との連携に関する理論的・実践的理解を図ると共に、保育者・初等教育教員としての基礎的な職能を身につける。接続期のカリキュラム（アプローチ・カリキュラム、スタート・カリキュラム）についての様々な実践事例を学びながら、活動計画の作成・評価の視点とスキルを習得する。	2	(2)	講義	2～	2単位以上選択必修 ・初等教育専攻（幼年期教育創生コース）、芸術体育・生活系教育専攻（ <u>美術・技術・家庭科の各教科</u> ）の小中履修型、全教科の中等連携履修型においては（※）の科目から2単位以上選択必修 ・芸術体育・生活系教育専攻（ <u>音楽・保健体育の各教科</u> ）の小中履修型においては（※）の科目から4単位以上選択必修
学校論（※）	先人のたちの創った優れた実践事例をもとに、すべての子どもの可能性を引き出す学校のあり方を追求する。学校集団で学ぶ意味、子どもの力を伸ばす授業、深い学びを生み出す教師について、理解を深める。	2	(2)	講義	1～	
適応支援論（※）	子どもが学校や社会に適応するための支援のあり方について学ぶ。特に、いじめ問題について重点的に取り上げ、講義やp4cによるディスカッション、グループワーク（いじめ重大事案に関する第三者調査委員会報告書の講読）等を通して、いじめという現象について理解を深める。また、これらの理解に基づき、いじめ予防のための教育実践について考察し、それらを具現化する授業指導案を自ら作成することができるようになることを学習到達目標とする。	2	(2)	講義	2～	
子ども学（※）	子どもの生命の誕生と成長、また生命の危機と保護について学ぶ。子どもの生命の誕生と成長は、私たち大人の常識を超えた神秘を宿している。子どもの神秘的な生命と世界を理解するために、私たちの常識を一時停止させる思考方法（現象学）を学び、子どもの表情や行動や表現から、子どもの生命と世界を新鮮に見ることを学ぶ。また、子どもの生命の弱さと強さを知り、子どもを守り育む方法について理解をすすめる。	2	(2)	講義	2～	
生涯学習論（※）	生涯学習に関わる国内外の議論や事業・政策の動向について、その社会的・教育的背景を理解した上で、学校教育・社会教育・家庭教育の各領域における生涯学習の意義を検討する。各領域における学習活動とその支援の基本的な考え方と仕組みを学び、領域間の役割分担・協働のあり方を考える。	2	(2)	講義	2～	
比較教育事情	国際的な教育改革論の視点から、自己の日本における教育経験を相対化しつつ、日本の教育制度とその運営の在り方について新たな視点をもつことを目指す。インターナショナルバカロレアなど、超国家的な教育ネットワークにより展開されている教育、イギリスのアカデミーに代表される合理主義的な教育改革、アメリカの1950年代以降の教育改革に通底している、人種問題に関わる課題の解決、学校の効果に関する一連の研究等から、多面的な視点の手がかりを得る。	2	(2)	講義	2～	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
教育現場と法	今学校では、新しい教育課程の推進、不登校やいじめ等の問題行動、児童生徒の安心安全確保、学校の危機管理や情報公開、教員の非遵行為や資質向上等多くの課題をもっている。このような状況をふまえ、これらの解決にむけての日々の教育活動と法との関連を判例や具体的な事例を通して考察する。特に、いじめ防止対策推進法、学校保健安全法などについては詳解を図る。	2	(2)	講義	3～	2単位以上選択必修
学校の安全管理と防災教育	「学校防災教育基礎」での学習を踏まえ、学校防災に関連する様々な学問領域（教育学、心理学、地理学など）の理論知や過去の災害の教訓・経験に基づく実践知の習得を目指す。これらを通して、教師として児童・生徒の命を守るとともに、児童・生徒が自らを守るために必要な思考力・判断力・表現力を身につけられることができるよう、学校防災教育の実践的指導力の基礎を身につける。	2	(2)	講義	2～	初等教育専攻（幼年期教育創生コース）、芸術体育・生活系教育専攻（ <u>美術・技術・家庭科</u> の各教科）の小中履修型、全教科の中等連携履修型においては（※）の科目から2単位以上選択必修 ・芸術体育・生活系教育専攻（ <u>音楽・保健体育</u> の各教科）の小中履修型においては（※）の科目から4単位以上選択必修
学校防災応用実践演習	「学校防災教育基礎」「学校の安全管理と防災教育」での学習とともに、実習や対話・討論や被災地でのフィールドワークなど、すでに習得した知識の活用や探究を含めた高度な学習を行う。ハザードの理解、避難、他者理解、共感力、豊かな人間性や社会性、コミュニケーション力、同僚とチームで対応する力、地域や社会の多様な組織等と連携・協働できる力など、学校の防災管理・防災教育に必要とされる高度な応用力・実践力を身につける。	2	(2)	演習	2～	
特別支援保育論	人間の一生の中で心身の発達が最も著しいのは乳幼児期であり、障害のある乳幼児は様々な領域で発達の制限や支障が生ずる。さらに療育者である親の精神的な動揺も大きく影響する。このようなことを踏まえ、知的障害や発達障害等の障害のある子どもの特性を理解するとともに、特性に応じた適切な支援の方法について学ぶ。	2	(2)	講義	2～	
学習指導と学校図書館	学習指導において、学校図書館の果たす役割は大きい。その認識・理解を深めるとともに、学校図書館メディアの活用をめぐって、児童・生徒の発達段階や、各教科の特性に応じた指導方法を学び、司書教諭として児童・生徒・教員にどのような支援ができるのかを考える。	2	(2)	講義	1～	

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

注）授業科目名の（※）は、教育職員免許法施行規則上の「大学が独自に設定する科目」を示す。

VII

第 7 章

初等教育専攻 専門教育科目

1 専門教育科目 その1

教育の基礎的理解に関する科目 授業科目表4-1

2 専門教育科目 その2

道徳・総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、
教育相談等に関する科目 授業科目表4-2

3 専門教育科目 その3

キャリアステップアップ科目 授業科目表4-3

4 専門教育科目 その4

教科及び教科の指導法に関する科目

①保育内容の指導法 授業科目表4-4

②各教科の教育法(初等) 授業科目表4-5

③幼稚園の領域科目 授業科目表4-6

④小学校の専門科目 授業科目表4-7

⑤コース専門科目 授業科目表4-8(幼年期教育創生コース)

授業科目表4-9(未来づくり教育創生コース)

授業科目表4-10(人文・社会系教育創生コース)

授業科目表4-11(理数・自然系教育創生コース)

5 専門教育科目 その5 卒業研究

第7章

初等教育専攻専門教育科目



この章では、初等教育専攻の教育課程表（卒業に要する単位数）の中の「専門教育科目」について、「授業科目表」を掲載し、授業科目の詳細と履修方法を説明します。表の見方については、第2章「**5** 授業科目表の見方」を参照してください。

1 専門教育科目 その1 教育の基礎的理解に関する科目 (コースによって、卒業に要する単位数は異なります)

教育の基礎的理解に関する科目は、幼年期教育創生コースとその他のコースとでは、卒業に必要な授業科目と単位数が異なります。修得が必要な単位数は、幼年期教育創生コースは12単位、その他のコースは10単位です。

教育の基礎的理解に関する科目に属する各授業科目の詳細と履修方法については、次の「**授業科目表4-1**」で確認してください。「必修」「選択必修」等の履修指定（コースによって履修する授業科目が定められている場合や、必要とする単位数が異なる場合もあります）は、「備考欄」にその指示が記してあります。

なお、所属するコースによって履修できるクラスが定められている科目もありますので、『開講科目一覧』でクラス指定の指示も確認してください。

教育の基礎的理解に関する科目 授業科目表4-1

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
教育の原理	教育学の基礎的知識を身につけ、教育について原理的に考え、対話できるようになることを目標とする。また、西洋教育思想史と日本の教育実践思想史のポイントを理解することを目指す。 教育の理念・歴史・思想を含む、教育の基礎理論を学ぶ。表面的には多様な諸教育実践を根底で支え成り立たせている教育の原理は、網羅的で概説的な手法ではとらえることができない。そこで、この講義では、表面的には隠されている教育の原理に迫る。	2	(2)	講義	2～	必修
教職入門	教職の意義や職務内容を理解し、適切な進路選択ができるように、自己の教師像を明確にし、そのために何が必要かを理解し、実際に準備を始める。また、教職の意義や職務内容を理解し教科指導と学級経営における教職の基礎・基本について学ぶ。	2	(2)	講義	1～	必修
教育の制度・経営	教育制度の原理や構成について理解し、学校・教員を取り巻く課題について理解し、解決の在り方について考察できるようになることを目標とする。教育制度の原理や構成について学び、それらを取り巻く状況や課題を分析し、原理の具現化として学級や学校経営の仕組みを捉える。	2	(2)	講義	1～	2単位以上 選択必修
教育と地域社会	現代社会における教育の意義や教育に関わる制度について基礎的知識を身につけ、教育現場における課題の解決に向けて考察することができるようになることを目標とする。学校の内外における教育のさまざまな取り組みについて現状を把握し、理論に基づく解決の方策を検討する。	2	(2)	講義	1～	
発達と学習の心理	発達と学習についての理論および実際について理解し、心理学的な知能の捉え方や、障害をもった児童・生徒の処遇などについて理解できるようになることを目標とする。内容については、発達と学習についての理論および実際について概説する。また、心理学的な知能の捉え方や、障害をもった児童・生徒の処遇などについても解説する。	2	(2)	講義	1～	必修

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講 義 ・ 演 習 ・ 実 験 等	対 象 年 次	備 考
特 別 支 援 教 育 理 解	特別な支援を必要とする子供たちへの対応は、特別支援学校に限らず全ての学びの場で行われること、小中学校等における障害のある子供たちへの教育・支援に関する基礎的知識を修得し、合理的配慮の必要性について理解することを目指す。内容については、多様な障害のある子供たちの実態、多様な学びの場におけるそうした子供たちとの関わり方について概説する。	2	(2)	講義	1～	必修
幼 稚 園 教 育 課 程 論	幼児教育における教育課程の意味とその基礎理論を理解すると共に、実践場面を想定し、具体的な指導計画を立案するスキルを身につけることを目標とする。 幼稚園教育課程の基礎理論を学ぶ。これまで実践されてきた教育課程を検証し、教育課程、指導計画の実際と課題と検討する。また、長期・中期・短期計画を理解して、自ら指導案を作成するための知見を身につける。	2	(2)	講義	3～	必修 (幼年期教育 創生コース のみ)

注) 毎週授業時数欄の () は、前期または後期のみの時数を示す。

2 専門教育科目 その2 道德・総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目

道德・総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目は、幼年期教育創生コースとその他のコースとでは、卒業に必要な授業科目と単位数が異なります。修得が必要な単位数は、幼年期教育創生コースは12単位、その他のコースは10単位です。

道德・総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目に属する各授業科目の詳細と履修方法については、次の「**授業科目表4-2**」で確認してください。「必修」「選択必修」等の履修指定（コースによって履修する授業科目が定められている場合や、必要とする単位数が異なる場合もあります）は、「備考欄」にその指示が記してあります。

なお、所属するコースによって履修できるクラスが定められている科目もありますので、『**開講科目一覧**』でクラス指定の指示も確認してください。

道德・総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目 授業科目表4-2

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講 義 ・ 演 習 ・ 実 験 等	対 象 年 次	備 考
道德の理論及び指導	道德教育・道德発達に関する基礎的事項を理解し、説明できるようになるとともに、学習指導案の作成、指導の展開、評価ができるようになることを目標とする。 現在のわが国の道德教育の問題点や課題について検討するとともに、道德発達及び道德教育に関する様々な理論と実践との関連について考察する。また、学習指導案の作成、指導の展開、評価、さらには現場における実践のあり方について考える。	2	(2)	講義	3～	必修
総合的な学習の時間の指導法（特別活動を含む。）	総合的な学習の時間を指導するために必要な、原理と方法を知る。特に、総合的な学習の時間における「探究」のあり方と、単元構成と学習展開の具体的方法について理解を深める。また、総合的な学習の時間と関連性の深い、特別活動を指導するための原理と方法を知る。教育課程（カリキュラム）全体の中における、総合的な学習の時間と特別活動の意義と位置づけを知る。	2	(2)	講義	3～	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
教育課程と教育方法	教育活動を計画的・系統的・意図的に行うためには、教育課程（カリキュラム）を編成し、実施し、評価することが欠かせない。本講義では、 (1) 教育課程とは、学習指導要領を一つの基準としながら、授業実践における内容（what）と方法（how）とを一体のものとして、子どもの発達段階や社会的要請を踏まえながら編成されるものであることを学ぶ。その際、カリキュラム・マネジメントの視点を身につける。 (2) 教育内容がどのような考え方のもとに編成され、教え・学ぶことが可能なかたちに組み立てられるかについて学ぶ。 (3) 教育の方法および技術について考えるための基本的視座を提供し、それをもとに学習指導のあり方を検討する。ICT（情報機器及びオンライン教材）の活用についても学ぶ。	1	(1)	講義	2～	必修
情報活用能力育成実践論	この授業では、学校教員として求められる実践的な ICT 活用指導力を身に付けることを目標とします。具体的な内容としては、主に仙台市内の教員、附属小学校、中学校の教員から講義を受け、現場で実施されている ICT を活用した指導方法について学びます。学校現場で実際に実施されている内容を扱うため、具体的で実践的な知識や技術を学ぶことができます。	1	(1)	講義	2～	必修
児童・生徒理解	生徒指導・進路指導・キャリア教育の理論および実践について学び、児童・生徒の自己指導能力を育成するために必要な知識・技法や素養を身に付けることを目標とする。 生徒指導・進路指導・キャリア教育の意義や理論、および実践のための技法や課題等について講義する。正課の授業や課外活動、個別指導や全体指導、学級経営や校内・校外連携等のあらゆる機会や手段を通じて児童・生徒の個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高め、かつ児童・生徒の自己指導能力を育成するための教育実践とその課題について考察する。	2	(2)	講義	3～	必修
幼児理解	生活や遊びに即した一人一人の子どもの発達や学びを理解することの意義・重要性について学ぶ。また、子どもの経験や学びの過程を理解するとともに、幼児理解に基づいた発達の援助方法と技術について、事例を通して具体的に学ぶ。	2	(2)	講義	3～	必修（幼年期教育創生コースのみ）
教育相談（カウンセリングを含む。）	学校における教育相談の意義と課題を理解し、教育相談を進める際に必要な基礎的知識（カウンセリングに関する基礎的事柄を含む）を理解し、具体的な進め方やポイント、組織的な取り組みや連携の必要性を理解することを目標とする。 教育相談は幼児児童生徒が自己理解を深め、好ましい人間関係を築きながら、集団の中で適応的に生活する能力を育み、個性の伸長や人格の成長を支援する教育活動である。幼児児童生徒の発達段階に即して、個々の心理的特質や教育的課題を適切に捉え、支援に必要な基礎的知識とカウンセリングの意義、理論、技法を身につける。	2	(2)	講義	3～	必修

3 専門教育科目 その3 キャリアステップアップ科目

キャリアステップアップ科目の修得が必要な単位数は、初等教育専攻の各コース共通して17単位です。

キャリアステップアップ科目に属する各授業科目の詳細と履修方法については、次の「授業科目表4-3」で確認してください。「必修」の履修指定（コースによって履修する授業科目が定められている場合があります）は、「備考欄」にその指示が記してあります。

なお、所属するコースによって履修できるクラスが定められている科目もありますので、『開講科目一覧』でクラス指定の指示も確認してください。

「キャリアステップアップ科目」に関しては、第11章と第12章の説明をよく読んで履修してください。第12章に説明がありますが、教育実習には履修資格が設けられています。

キャリアステップアップ科目 授業科目表4-3

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
教育体験初年次演習Ⅰ	教育や子どもをめぐる問題についてクラスで議論したり、学校現場に出向いて教育活動や児童の様子を観察したりすることで、教員養成のキャリアステップアップの基礎づくりを行う。また、クラスで設定した課題の探究活動等を通して、大学での学修のための基礎技法を学ぶ。	2	(2)	演習	1～	必修
教育体験初年次演習Ⅱ	文献講読やクラス討議、学校現場での観察・体験を通して、児童・生徒の行動や心理を理解し、実態と課題を把握するとともに、児童・生徒との接し方、教職の魅力等を学ぶ。また、現代的教育課題等の探究を行いながら、キャリアステップアップの展望を得るとともに、専門分野の学修に必要な読解力、論理的思考力、表現力等を磨く。	2	(2)	演習	1～	必修
初等教育実践探究演習A	3年次以降の教育実習に向けて、授業研究法を修得するとともに、教材研究の仕方、学習活動の組織の仕方、授業設計の仕方、指導計画・学習指導案の作成方法等の基礎を学ぶ。また、3年次学生と共同で学習指導案の作成や模擬授業、その省察等を行う。	2	(2)	演習	2～	必修
初等教育実践探究演習B	初等教育実践探究演習Aの学修成果を踏まえるとともに、教科にかかわる専門教育科目の学修をいかして教材研究と学習指導案の作成、模擬授業等を行い、教育実習にのぞむ。また、実習後には2年次学生と共同でその省察を行い、より良い授業づくりについて考察、授業実践力の向上を図る。	2	(2)	演習	3～	必修
幼稚園3年次実習（事前・事後指導1単位を含む。）	授業では、実際に幼稚園の生活を体験する中で、幼児教育について実践を通して学び保育の良さに気付くこと、幼児理解の実際を学び、個に応じた援助や環境構成に努めること、社会を構成する一員としての自覚をもち、心構えを身に付けることを目標とする。また、大学で学んだことを実際の保育現場で実践することで、幼児と関わる楽しさ、素晴らしさを体験する。内容として、幼児の遊びの様子や教師の援助等を観察するとともに、保育や幼児の遊びに参加する。さらに、登園から降園までの1日の保育にあたる「一日保育」や、1日の一部分の保育にあたる「部分保育」を実践することで、幼児の発達に応じた関わり方を学ぶ。	3		実習（事前・事後指導は講義）	3～	必修（幼年期教育創生コースのみ）
小学校3年次実習（事前・事後指導1単位を含む。）	授業では、実際の教育活動に即して小学校の概要を理解すること、具体的な授業実践や体験、観察、指導とのふれあいを通して、教師として必要な資質・能力を伸張することを目標とする。担当教師の授業を観察し、授業構成や学習の流れ、子どもの反応がどのようになっているのかを捉え、授業の組み立て方を知ることや講話により児童理解の在り方、基本的な指導案作成の仕方等を学ぶ。さらに、自ら教材を研究し指導案を作成して授業を行う「実践授業」を経験させ、実施後は担当教師、他の実習生も交えて研究討議を行い、教材解釈や発問、板書、授業者の態度等について深めさせる。	3		実習（事前・事後指導は講義）	3～	必修（幼年期教育創生コース以外のその他3コース）

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講 義 ・ 演 習 ・ 実 験 等	対 象 年 次	備 考
小学校4年次実習（事前・事後指導1単位を含む。）	教科の学習指導、特別活動、行事活動、学級経営、生徒指導等学校教育のすべての分野と、それを担当する教師の仕事の重要性について実際に学習、観察、体験させ研究させる。学習指導案を作成しての教壇実習は7時間以上経験させ、実習開始直後の導入的プログラムが終了した後は、1日1時間を目安に、特別活動や学級指導（朝の会、帰りの会、清掃指導、給食指導等）の教職に関する指導を実践させ、研究授業を設定する。 協力小学校における実習では、小学校における教科、特別活動の指導について、大学での講義と関連付けて理解を深めるとともに、配当学級のみならず実習校全体の学校目標や地域との関わりについても把握し、学校運営における教師の役割や任務等についてさらに学ばせる。	4		実習（事前・事後指導は講義）	4	必修
教職実践演習（幼・小）	直接授業を担当する教員に加え、授業計画の立案や授業の具体的な展開の補佐及び教科の専門的知識の確認等に関して、教科専門教員及び学校現場経験者、本学附属学校教員との連携体制を構築する。幼稚園・小学校教諭に相応しい資質や能力の確認を行い、各教科に即したこれまでの履修の在り方をまとめあげるとともに、実際の授業力に結びつける形で内容の総まとめを行う。	2	(2)	演習	4	必修

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

4 専門教育科目 その4 教科及び教科の指導法に関する科目

教科及び教科の指導法に関する科目の修得が必要な単位数は、コース毎に異なります。

教科及び教科の指導法に関する科目に属する各授業科目の詳細と履修方法については、本ページ以降の「授業科目表4-4～11」で確認してください。コースによって履修する授業科目が定められている場合や、必要とする単位数が異なる場合は、「備考欄」にその指示が記してあります。

なお、所属するコースによって履修できるクラスが定められている科目もありますので、『開講科目一覧』でクラス指定の指示も確認してください。

①保育内容の指導法 授業科目表4-4

幼年期教育創生コースの学生は、次の表の科目を全て履修してください。

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講 義 ・ 演 習 ・ 実 験 等	対 象 年 次	備 考
保育内容(健康)指導法	概要としては、幼稚園教育要領が示す領域「健康」の内容について理解する。また、子どもの心身の発達や基本的生活習慣、多様な動きの習得、安全管理等について事例を基に解説し、保育内容を探求する。さらに指導案の作成や模擬保育を通して、保育の構想力と実践力を習得する。	2	(2)	講義	2～	必修（幼年期教育創生コースのみ）
保育内容（人間関係）指導法	子どもの人とかかわりの発達の意義を発達段階に応じて学ぶ。また、領域「人間関係」は人とかかわりだけでなく、自己の発達も含まれていることから、子どもの自己効力感や自己実現を育む保育のあり方と保育者の援助について理解を深める。さらに、人とかかわりを育てる物的環境やルール遊び、児童文化材等の教材の活用に加え ICT 機器の活用を実践的に学んでいく。	2	(2)	講義	2～	必修（幼年期教育創生コースのみ）

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講義・ 演習・ 実験等	対 象 年 次	備 考
保育内容(環境) 指導法	幼稚園教育要領の領域「環境」について、幼児期の環境とのかかわりの実際とそれに伴う発達の諸側面の特徴をふまえ、保育における環境との豊かなかかわりを育むための内容について理解する。様々な自然体験活動を経験し、グループで体験の分かち合いや保育内容・実践指導のためのディスカッションや教材開発を進める。	2	(2)	講義	2～	必修（幼 年期教育 創生コー スのみ）
保育内容(言葉) 指導法	乳幼児の言葉に対する感性と話す・聞く・伝える・考える力を育成する意義について解説する。また、幼稚園教育要領等に示された領域「言葉」のねらいおよび内容についてその背景となる発達の理解を基に、発達に応じた指導方法と援助のあり方およびカリキュラムマネジメントについて実践的に学ぶ。	2	(2)	講義	2～	必修（幼 年期教育 創生コー スのみ）
保育内容(表現) 指導法	幼稚園教育要領が示す領域「表現」の内容について理解する。また、子どもの心表現に関する認知・知覚の発達等について事例を基に解説し、保育内容を探求する。さらに指導案の作成や模擬保育を通して、保育の構想力と実践力を習得する。	2	(2)	講義	2～	必修（幼 年期教育 創生コー スのみ）

注) 毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

②各教科の教育法（初等） 授業科目表4-5

初等教育専攻各コースの学生は、次の表の科目を全て履修してください。

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講義・ 演習・ 実験等	対 象 年 次	備 考
初等国語科教育 法	言語の教育としての国語科の授業づくりにおける教材研究とその方法について、学習指導要領をふまえつつ、授業づくりの基礎的な能力を習得することを目標とする。学習指導要領に示された目標及び育成すべき資質・能力をもとに、国語科の教科構造を理解しつつ、代表的な教材やその指導法について理解する。	2	(2)	講義	2～	必修
初等社会科教育 法	小学校の社会科教育に関する目標・内容・方法・評価等について理解することを目標とする。小学校の社会科に関する各内容等の学習指導について、具体的な教材・授業を通して学ぶ。	2	(2)	講義	3～	必修
初等算数科教育 法	教える側の視点から「算数教育」を捉えなおし、小学校算数科を担当するため、算数科の目標・内容・方法について最低限の理解を図る。概要としては、小学校で算数を教えるために最低限知っておきたい基礎を学ぶ。	2	(2)	講義	2～	必修
初等理科教育法	小中学校の理科は学習指要領の中で、エネルギー・粒子・生命・地球の4領域で構成されており、各領域は系統的に構成され、領域ごとの特徴に応じた教材と指導法がある。この講義では、各領域の系統性を理解し、教材と指導法の具体的な事例をもとに、授業の進め方や教材の取り扱いについて解説する。	2	(2)	講義	3～	必修
初等生活科教育 法	小学校の生活科教育に関する目標・内容・方法・評価について理解することを目標とする。小学校の生活科に関する各領域等の学習指導について具体的な教材・授業を通して学ぶ。	2	(2)	講義	3～	必修
初等音楽科教育 法	児童の心理的・音楽的な発達と音楽科教育の目的を踏まえた上で、小学校音楽科の授業を実践する上で必要な理念及び知識と、基礎的な音楽の技能及び指導法を身につける。教材研究に取り組み、新たな教材開発も念頭に受講生で協働して模擬授業を実践する。授業では各領域の教材研究のほか、歌唱や器楽、特にリコーダーの基礎的な技法について学び、音楽科の授業を実践する力を身につける。	2	(2)	講義	2～	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
初等図画工作科教育法	「創造的な教科としての図工・美術」としての造形演習や国内外の事例研究、授業の立て方についても学び構想力を高め、義務教育内での図工美術教育指導は職人や美術家養成ではない、「美術の教育」ではなく「美術で教育」であることや表現の多様性を理解することを目標とする。小学校図画工作での「造形あそび」の造形演習などこれからの図画工作の授業を検討する。また国内外の多様な造形表現を知り、ICT活用など今後の図画工作教育のあり方を学ぶ。小学校図画工作科学習指導要領を内容と方法の視点から分析する。さらに「創造的な教科としての図工・美術」としての造形演習や事例研究、授業の立て方についても学び構想力を高める。	2	(2)	講義	2～	必修
初等家庭科教育法	実際の家庭科の授業を念頭において授業の目標、教材、教授行為などについて考察し、受講者が自ら授業を構想できることを目指す。実際の授業を迫試するプロセスを経て、家庭科の授業づくりの能力を培う。教科書教材を用いる場合と自ら考え出す教材の場合とがあるが、それぞれの留意点を明らかにする。	2	(2)	講義	3～	必修
初等体育科教育法	学習指導要領の変遷から体育科の目的を考え、これまでの実践研究の成果や課題について学ぶとともに、教材づくりの目標・内容・方法、ICTの活用に関する知識や技能を習得する。また、全ての子どもが意欲的に学習に取り組めるような体育・保健の学習指導案の作成について理解する。	2	(2)	講義	2～	必修
初等外国語活動・外国語教育法	小学校における外国語活動(中学年)・外国語(高学年)の学習・指導・評価に関する基本的な知識・指導技術を身に付けることを目標とする。小学校外国語教育についての基本的な知識・理解、子供の第二言語習得についての知識とその活用、指導技術、授業作りに関する内容を扱う。	2	(2)	講義	2～	必修

注) 毎週授業時数欄の()は、前期または後期のみの時数を示す。

③幼稚園の領域科目 授業科目表4-6

幼年期教育創生コースの学生は、次の表の科目を全て履修してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
保育内容(健康)	領域「健康」の全体像を把握した上で、幼児期の生活や教育を対象とした保健衛生、健康教育、身体活動や運動遊びを計画・実践・評価するための知見や実践力を身に付ける。領域「健康」の意義や、子どもの心身の発育・発達の概要、子どもの遊びと生活、身近な問題点などを、具体的資料や事例、実技等を通して学習する。	2	(2)	講義	2～	必修(幼年期教育創生コースのみ)
保育内容(人間関係)	本授業では、領域「人間関係」を理解する上での基盤となる社会性・道徳性の発達に関する心理学等の基礎的事項について、保育現場における実践事例等にふれつつ考える。	2	(2)	講義	2～	必修(幼年期教育創生コースのみ)
保育内容(環境)	幼稚園教育要領の領域「環境」について、幼児期の環境とのかかわりの実際とそれに伴う発達の諸側面の特徴をふまえ、保育における環境との豊かなかかわりを育むための内容について理解する。様々な自然体験活動を経験し、グループで体験の分かち合いや保育内容・実践指導のためのディスカッションや教材開発を進める。	2	(2)	講義	2～	必修(幼年期教育創生コースのみ)

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講義・ 演習・ 実験等	対 象 年 次	備 考
保育内容(言葉)	『幼稚園教育要領』の領域「言葉」のねらいと内容について理解するとともに、言葉を育む環境設定や児童文化財／児童文化活動の特徴と活用に関する知識を習得する。人間にとっての言葉の意義と機能、および子どもの言語発達に関する知見をふまえたうえで、『幼稚園教育要領』の領域「言葉」をめぐって、その歴史・位置づけ・ねらい・内容について講義する。また、言葉を育む物的・人的環境設定や児童文化財／児童文化活動の特徴と活用など、「言葉」の指導に必要な事項について、具体的な事例も視野に入れながら検討する。	2	(2)	講義	2～	必修（幼 年期教育 創生コー スのみ）
保育内容(表現)	保育現場における表現活動についての基礎的知識・技能を身につけ、子どもの発達に即した表現を援助する力を高める。様々な子どもの歌や音楽表現の方法を身につけ、指導できるようにする。また、造形表現の基礎を学ぶ中で、幼児が積極的に楽しんで制作することができるような表現方法と教材、プログラムを検討し、「表現」の重要性と子どもの活動をより良く援助する保育内容について考える。	2	(2)	講義	2～	必修（幼 年期教育 創生コー スのみ）

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

④小学校の専門科目 授業科目表4-7

次の表の科目のうち、**幼年期教育創生コース**は「初等国語科内容概論」「初等算数科内容概論」「初等生活科内容概論」の3科目（6単位）は必修です。加えて、「初等音楽科内容概論」「初等図画工作科内容概論」「初等体育科内容概論」の3科目から2科目（4単位）以上選択して履修し、**合計10単位以上修得してください。**

その他のコースは、次の表の全科目（全20単位）修得してください。

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講義・ 演習・ 実験等	対 象 年 次	備 考
初等国語科内容概論	小学校学習指導要領に示されている国語科教育の「目標」「各学年の目標及び内容」「指導計画の作成と内容の取扱い」を学ぶ。とりわけ「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」「言語」「書写」「読書」の概要を理解する。あわせて自らの言語活動を通して、指導法の基礎を身に付ける。	2	(2)	講義	1～	必修
初等社会科内容概論	小学校社会科に関する基本的な考え方や目標・内容について、地理的分野・歴史的分野・公民的分野のそれぞれの観点から解説を行い、小学校社会科の見方・考え方について理解を深めるとともに、社会科に関する教材や資料等を取り扱う上での基礎的な技能についても講義していく。	2	(2)	講義	2～	必修 (幼年期 教育創 生コー スを 除く)
初等算数科内容概論	小学校算数科の背景となる数学の基礎を身につけることを目標とする。学習指導要領の主旨にのっとり、小学校算数科の背景となる数学各分野の基本的な理解及び教材研究を行う上で、その基礎となる素養を身につけるための講義を行う。	2	(2)	講義	1～	必修
初等理科内容概論	小学校理科の基本的な内容に関して、学習指導要領や教科書で扱われている内容構成の基礎を学び、授業実践の能力を身につける。「エネルギー」「粒子」「生命」「地球」を柱とした小学校理科の学習内容を理解するとともに、学術的な専門知識を背景に教材として科学的に調べ、実践的に構成する能力や、自然の事物や現象について理解を深める見方や考え方を獲得する。	2	(4)	実験・実 習	2～	必修 (幼年期 教育創 生コー スを 除く)
初等生活科内容概論	生活科の理念や原理を学び、その目標や内容、方法を理解し、生活科を担当する上で求められる知識や技術を習得する。生活科の教育理念や原理、学習指導要領の目標・内容・方法等の構成を理解し、生活科の授業を担当する上で求められる知識や技術を学ぶ。	2	(2)	講義	2～	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
初等音楽科内容概論	小学校音楽科で授業を実践するために必要な音楽の基礎的な知識・理論について理解し、取り組む楽曲以外にも応用して児童に指導できるようにする。またピアノ弾き歌いの基本的な技能を身につけ、様々な教材の指導を実践できるようにする。	2	(2)	講義	1～	必修 (幼年期教育創生コースは選択必修)
初等図画工作科内容概論	図画工作における表現活動を通して、作り出す喜びを体験するとともに造形的な基礎能力を学ぶ。また、作品から豊かな情操教育について考察し学習する。	2	(2)	講義	1～	必修 (幼年期教育創生コースは選択必修)
初等体育科内容概論	各運動領域の基礎的な運動技術の習得、およびそれらの指導法の基礎を身につけることを到達目標とする。小学校の体育の運動内容領域の基礎的な技術、ルール、知識について学習するとともに、練習の仕方や指導法についても学習する。また、ICTの活用について深める。	2	2	演習	2～	必修 (幼年期教育創生コースは選択必修)
初等家庭科内容概論	小学校家庭科の専門的内容を理解し、授業づくりに反映するための基礎を習得する。食物領域では栄養や食品成分の役割について、被服領域では被服に求められる機能について、住居領域では住居の成り立ちや役割について扱う。	2	(2)	講義	2～	必修 (幼年期教育創生コースを除く)
初等外国語活動・外国語内容概論	小・中学校の接続も踏まえながら、小学校における外国語活動・外国語科の授業を担当するために必要な背景的な知識を身に付ける。初等外国語活動・外国語において扱う内容について、第二言語習得、英語学、児童文学、英語コミュニケーション、異文化理解の視点から考えたり、検討したりする。	2	(2)	講義	1～	必修 (幼年期教育創生コースを除く)

注) 毎週授業時数欄の()は、前期または後期のみの時数を示す。

⑤コース専門科目

コース専門科目は、所属するコースに応じて得意分野の専門性を身につけるために設けられている科目で、必修・選択必修の科目を含めて12単位の履修が必要です。初等教育専攻のコース専門科目は、「専攻共通科目」、「コース共通科目」、「コースピーク科目」、「演習系科目」の4種類の科目群で構成されています。

「専攻共通科目」および「コース共通科目」については、初等教育専攻としての共通的な資質・能力を身につけるための授業科目です。また、「コースピーク科目」については、それぞれのコースの特徴に関連する教育内容をさらに深めて学んでいくための授業科目であり、「演習系科目」については、履修してきた各種の授業科目と卒業研究（卒業研究演習も含む）とを橋渡しすることをめざした授業科目です。

履修方法については以下のとおりとなります。

- 「専攻共通科目」は4単位以上を履修してください。
- 「コース共通科目」は自分が所属を希望するコースの科目は必修になりますので留意してください。なお、必修以外のコース共通科目も授業担当教員の許可があれば履修可能です。
- 「コースピーク科目」は、コース毎の授業科目表を参照してください（授業科目表4-8～授業科目表4-11）。

授業科目表4-8 (幼年期教育創生コース)

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
幼年期の育ちと学び (※)	就学前から小学校低学年にかけての子どもについて、教育学の観点からその育ちと学びについて考察する。教育・保育・発達に関する原理・原則を理解することで人間形成を広い視野から捉える教養を身に付け、今後の修学の基盤を築いていく。実践を支える理論的な基礎を構築するために、子ども観や教育理念の歴史的・社会的変遷、遊びと学びの理論、保育・教育制度、教育内容論や方法論などについて、その概要を解説する。	2	(2)	講義	1～	必修
地域教育課題と未来づくり教育	地域社会と学校の関係のなかでいま、どのような教育課題が生じているのか。変動する社会の中で、未来をつくる子どもの資質能力はどのようにして育むことができるのか。発達・認知、学力、国際、自然との共生の観点から、子どもの学習要求・課題を踏まえ、教科横断的な教材開発・授業づくりを行う知見と方法論の基礎について学ぶ。	2	(2)	講義	1～	専攻共通科目 2単位以上選択必修
教科の学習と言語活動	児童の主体的な学習活動を通して資質・能力を育む視点から、国語科・英語科・社会科に関する言語活動を位置付けた学習のあり方について理解を深める。なかでも、言語活動を位置付けた教材開発のあり方や言語活動を位置付けた学習のあり方などを各教科に応じて具体的に取り上げることで、教科の学習における言語活動の諸相について専門的な知見を得る。	2	(2)	講義	1～	
子どもの問いと理数・自然系教育の創生	理数・自然系教育に関して、各分野における子どもの問いと、その問いに対応する教科内容や教材について講述する。	2	(2)	講義	1～	
幼年期の心理学	幼児を理解し、支援・指導したり、幼児期の育ちを引き継いで支援・指導する上で必要となる幼児期の発達について基本的知識を修得することを目指す。具体的には、人間の胎児期からの生涯発達のプロセスから発達の連続性について理解を深める。加えて、運動・言語・認知・社会性などの領域ごとの発達プロセスから、質的な変化とともに、連関する発達メカニズムについての知識を修得する。さらに、これらの学びを踏まえ、児童期へと続く発達と学びの連続性を保障する保育のあり方を考察していく。	2	(2)	講義	2～	コース共通科目 必修
子どもの健康と安全	小児保健領域では、保育施設、学校など小児と関わる現場において教師に必要な知識として、感染症や事故への対応と予防および健康上の配慮が必要な子どもへの対応等について理解を深める。 小児栄養領域では、栄養について基本的な知識を習得するとともに、乳児から幼児児童期の栄養に関する特性や、消化吸収機能・代謝機能が未熟であることからの栄養と食生活における留意点を理解する。 これらの理解を踏まえ、子どもの健康と安全を保障する教師の役割について考察していく。	2	(2)	講義	2～	コースピーク科目 4単位以上選択必修
子ども家庭福祉	子ども家庭福祉の意義と歴史の変遷を理解しながら、子どもの人権擁護について学ぶ。現代社会における子どもの育つ環境を踏まえ、子ども家庭福祉の制度や課題について理解を深め、制度や法体系とともに、子ども家庭福祉の社会資源（サービス）について学んでいく。	2	(2)	講義	2～	
子どもの学びと文化	児童文化財の特徴や児童文化活動の目的と意義を把握するとともに、遊びを通して幼年期の子どもの発達を支援する方法、および学習の中に児童文化活動を取り入れる方法に関して理解を深めることを目的とする。具体的には、児童文化・子ども文化の概念や歴史、その内実について、また子どもの発達と遊びとのかかわりや学校教育と児童文化の関係について、文献を読み合いながら学ぶ。そのうえで、これからの児童文化活動はどうあるべきか、教育関係諸施設での観察や実践体験等も行いながら検討する。	2	(2)	演習	3～	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
幼年期教育の歴史と理論	幼年期・児童期の教育をめぐる理論・実践の歴史的展開(西洋と日本)について解説する。子どもをめぐる意味づけ・価値づけ(子ども観)、教育思想、実践方法や制度について系統的に取りあげていく。幼年期教育の歴史的展開を把握するとともに、今日の理論と実践に寄与した思想家や実践家についての理解を深め、学生が自らの子ども観・教育観を深めていくための教養を磨いていく。	2	(2)	講義	3～	コース ピーク 科目
幼年期教育創生研究	幼年期や児童期における“遊びを通しての学び”について、教材開発・保育・教育実践開発・プログラム開発のための理論的知見を身に付ける。実践を集録したビデオや画像、文献を利用して、幼児・児童理解を深めるとともに、環境構成や教師の援助、遊びと学びを繋ぐポイント、児童文化財、児童文化活動等について理解を深めていく。幼稚園実習や小学校実習に向けての実践技術の基礎基本を再確認する。	2	(2)	演習	3～	4単位 以上 選択必修
研究演習(初等教育専攻)	初等教育専攻における4つのコースのそれぞれのコースの教育理念に即しながら、学生各自の研究テーマについて卒業研究につなげていくことをめざした科目である。すなわち、これまで修得してきた大学での授業科目(専門基盤科目および専門教育科目)および大学内外での実践的な体験活動などについて、それらと卒業研究(卒業研究演習も含む)とを橋渡しする性格を持たせることによって、卒業研究(卒業研究演習も含む)の学修においても、教員養成大学としての学修成果にも配慮していくことをめざした科目である。履修については、卒業論文の指導教員(主査および副査)が4年次の学生を対象にして開講することを基本とする。	2	2	演習	4	演習系 科目 必修

注) 毎週授業時数欄の()は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目名の(※)は、教育職員免許法施行規則上の「大学が独自に設定する科目」であり、幼年期教育創生コースでは必修科目である。

授業科目表4-9(未来づくり教育創生コース)

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
幼年期の育ちと学び	就学前から小学校低学年にかけての子どもについて、教育学的観点からその育ちと学びについて考察する。教育・保育・発達に関する原理・原則を理解することで人間形成を広い視野から捉える教養を身に付け、今後の修学の基盤を築いていく。実践を支える理論的な基礎を構築するために、子ども観や教育理念の歴史的・社会的変遷、遊びと学びの理論、保育・教育制度、教育内容論や方法論などについて、その概要を解説する。	2	(2)	講義	1～	専攻共通 科目 4単位 以上 選択必修
地域教育課題と未来づくり教育	地域社会と学校の関係のなかでいま、どのような教育課題が生じているのか。変動する社会の中で、未来をつくる子どもの資質能力はどのようにして育むことができるのか。発達・認知、学力、国際、自然との共生の観点から、子どもの学習要求・課題を踏まえ、教科横断的な教材開発・授業づくりを行う知見と方法論の基礎について学ぶ。	2	(2)	講義	1～	
教科の学習と言語活動	児童の主体的な学習活動を通して資質・能力を育む視点から、国語科・英語科・社会科に関する言語活動を位置付けた学習のあり方について理解を深める。なかでも、言語活動を位置付けた教材開発のあり方や言語活動を位置付けた学習のあり方などを各教科に応じて具体的に取り上げることで、教科の学習における言語活動の諸相について専門的な知見を得る。	2	(2)	講義	1～	
子どもの問いと理数・自然系教育の創生	理数・自然系教育に関して、各分野における子どもの問いと、その問いに対応する教科内容や教材について講述する。	2	(2)	講義	1～	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
文理融合型研究法	地域教育課題と未来を展望した教育を構想して教員に必要な教育研究の基礎的な方法論を身につける。教材の開発のために必要なフィールドワークや調査の仮説設定と計画、収集したデータの整理・分析について、文理融合的なアプローチを通じて学ぶ。	2	(2)	講義	2～	コース 共通 科目 必修
子ども発達と認知の心理学的理解	発達心理学の研究法の基礎を理解することで、子どもの発達を理解する方法を獲得する。また、認知に関する研究法の基礎理解を通じて、子どもにとって個別最適な学習支援・指導やユニバーサルな授業づくりの力につなげる。心理学的な調査や実験の計画・実施を通じて、子どもの発達と認知を科学的に検証・把握するための力量も身につける。	2	(2)	講義	2～	コース ピーク 科目 4単位 以上 選択必修
学力とグローバル・コンピテンシー	今日の日本の学習指導要領等に示されている資質・能力観は、国際的な教育の潮流を踏まえて考案されている。そこで、本講義では国際的なコンピテンシーについての議論を見通しながら、①コンピテンシーと学力の関係、②学力と非認知能力の関係、③学校現場における学力の伸長をどうとらえどう伸ばしていくか、について学ぶ。次に OECD のグローバル・コンピテンシーについて学び、①文化の異なる多様な人々と協働すること、②社会的公正性の概念とその実現の方法について、小中高等学校の学校現場の実践と結び付けながら学習する。本講義を通して、国際的な比較教育、学力と非認知能力およびその制度的保障、多文化教育、生涯教育・社会教育について特に理解を深め、3年次以降の各自の専門の深化につなげることができる。	2	(2)	講義	2～	
環境と共生のリテラシー	自然環境は人類にとっての生存基盤であり、私たちはそこから多くの恵みを享受している。これからは健康で文化的な生活を営んでいくためには、地球に生きるすべての人々が環境リテラシーを身につけ、自然と人間が共生する社会を構築する必要がある。この講義では、青葉山の自然環境や身近な生物を活用したフィールドワークをとおして、持続可能な地球をつくる資質能力の育成に向けて求められる自然科学的なものの見方・考え方を身につけ、探究的な学びの手法を学ぶ。	2	(2)	講義	2～	
授業への教育臨床的接近	宮城教育大学で積み重ねられた教育臨床研究を踏まえ、子どもの未来を切り開く授業をつくる原理と方法を探る。日本の教師による授業創造の歴史、社会構造と授業の関係、授業における学びの世界など、マクロ・ミクロ両面から授業に接近する。	2	(2)	講義	2～	
研究演習（初等教育専攻）	初等教育専攻における4つのコースのそれぞれのコースの教育理念に即しながら、学生各自の研究テーマについて卒業研究につなげていくことをめざした科目である。すなわち、これまで修得してきた大学での授業科目（専門基盤科目および専門教育科目）および大学内外での実践的な体験活動などについて、それらと卒業研究（卒業研究演習も含む）とを橋渡しする性格を持たせることによって、卒業研究（卒業研究演習も含む）の学修においても、教員養成大学としての学修成果にも配慮していくことをめざした科目である。履修については、卒業論文の指導教員（主査および副査）が4年次の学生を対象にして開講することを基本とする。	2	2	演習	4	演習系 科目 必修

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表4-10 (人文・社会系教育創生コース)

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
幼年期の育ちと学び	就学前から小学校低学年にかけての子どもについて、教育学的観点からその育ちと学びについて考察する。教育・保育・発達に関する原理・原則を理解することで人間形成を広い視野から捉える教養を身に付け、今後の修学の基盤を築いていく。実践を支える理論的な基礎を構築するために、子ども観や教育理念の歴史的・社会的変遷、遊びと学びの理論、保育・教育制度、教育内容論や方法論などについて、その概要を解説する。	2	(2)	講義	1～	専攻共通科目 4単位以上選択必修
地域教育課題と未来づくり教育	地域社会と学校の関係のなかでいま、どのような教育課題が生じているのか。変動する社会の中で、未来をつくる子どもの資質能力はどのようにして育むことができるのか。発達・認知、学力、国際、自然との共生の観点から、子どもの学習要求・課題を踏まえ、教科横断的な教材開発・授業づくりを行う知見と方法論の基礎について学ぶ。	2	(2)	講義	1～	
教科の学習と言語活動	児童の主体的な学習活動を通して資質・能力を育む視点から、国語科・英語科・社会科に関する言語活動を位置付けた学習のあり方について理解を深める。なかでも、言語活動を位置付けた教材開発のあり方や言語活動を位置付けた学習のあり方などを各教科に応じて具体的に引き上げることで、教科の学習における言語活動の諸相について専門的な知見を得る。	2	(2)	講義	1～	
子どもの問いと理数・自然系教育の創生	理数・自然系教育に関して、各分野における子どもの問いと、その問いに対応する教科内容や教材について講述する。	2	(2)	講義	1～	
共生とコミュニケーション	現在、私たちを取り巻く社会のあらゆる面が急速な変化の流れの中にあり、新しい未知の課題に試行錯誤しつつ対応していくことが求められる社会になっている。そして、こうした社会を生き抜く資質として、思考力・判断力・表現力を高めることが強く求められている。将来小学校教員となる者は、子どもたちにこれらの資質を身につけてもらうために、まずは自分自身がこれらの資質を身につけている必要がある。そこで本授業では、人文・社会系教育創生コースに所属する教員が、国語・英語・社会の3教科に関連する分野の研究成果を踏まえつつ、オムニバス形式で講義を担当し、グローバル化の進展する世界で、あるいは地域の中で、他者たちと共に生きることに必要なコミュニケーションのための知識とスキルについて概説する。	2	(2)	講義	2～	コース共通科目 必修
国語科内容概論(国語学)	日本語の全体像について平易に概説する。音声・音韻、文字・表記、語彙、文法、文章・文体など、網羅的に見ていくことで、日本語への理解を深める。また、他言語との対照とそこから見出せる日本語の特徴や、歴史的なことばの変化、現代日本語のバリエーション(共通語と方言、位相語など)といった日本語の種々相を取り上げる。	2	(2)	講義	2～	コースピーク科目 4単位以上選択必修
国語科内容概論(国文学A)	国文学の概念と時代区分を確認し、各時代の文学と社会とのかかわりを押さえたうえで、近代・現代日本の文学の流れをたどり、主要作品を読み解く。その過程で、国文学とは何か、何だったのかを考えるとともに、国文学の研究方法を検討する。授業のねらいは次の3点である。①国文学の概念と歴史、対象と研究方法についての基礎的な知識を得ること。②近代・現代の主要な作家と作品についての理解を深めること。③作品の特徴を捉える力、および作品を鑑賞する力を身につけること。	2	(2)	講義	2～	
英語科内容演習(英語学A)	英語学意味論を学習する。テキストを講読しながら、演習を行う。	2	(2)	演習	2～	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
英語科内容演習（英語文学A）	英語文学の作品を精読し、様々な英語表現を学び、正確に英語を読み取る能力を身につけるとともに、英米の歴史や文化に対する理解を深める。授業では、英語文学の短編を題材に語学的、文学的側面から作品を読む。各授業回において、英文和訳、重要な語法、文法などの確認を随時行ない、コメント、ディスカッションをはさみながら作品を読み進めていく。毎回指定の担当者が担当箇所の発表、コメントを行う。	2	(2)	演習	2～	コース ピーク 科目 4単位 以上 選択必修
社会科資料調査法（地理歴史）	本講義は、指導案や授業づくり、レポート作成、卒業論文執筆に必要となる、資料の入手方法や活用方法を習得することを目指す。教育現場における社会科の授業づくりにおいて資料の取扱いは必須事項である。地理歴史分野では、新聞や書籍、地図や古文書、統計や写真、そして一次資料をどのように取り扱ったらよいのかについて解説する。さらに、実際に授業づくりを念頭に置いて各自でテーマの設定、報告資料の作成、発表とディスカッションを実施し、資料調査の意義や課題を学習することとする。	2	(2)	講義	2～	
社会科資料調査法（公民）	本授業では、レポートや卒業論文、指導案を書く際に必要となる、広義の情報リテラシーを習得する。「正しい情報・資料」へのアクセスと読み解き方、また調べること・考えること・書くことの相関性を理解した上で、テキストを「批判的に読む」作業もおこなう。また、公民分野の資料調査法では、資料批判も含めつつ、質的調査（聞き書きや参与観察）／量的調査（データ収集）の方法についても解説する。研究報告やディスカッション等において、自分の考えを相手に説明する際に、主張の根拠となるものを明示し、その上で議論において何が重要なで何が不足しているかを客観的に判断できるようになること。	2	(2)	講義	2～	
研究演習（初等教育専攻）	初等教育専攻における4つのコースのそれぞれのコースの教育理念に即しながら、学生各自の研究テーマについて卒業研究につなげていくことをめざした科目である。すなわち、これまで修得してきた大学での授業科目（専門基盤科目および専門教育科目）および大学内外での実践的な体験活動などについて、それらと卒業研究（卒業研究演習も含む）とを橋渡りする性格を持たせることによって、卒業研究（卒業研究演習も含む）の学修においても、教員養成大学としての学修成果にも配慮していくことをめざした科目である。履修については、卒業論文の指導教員（主査および副査）が4年次の学生を対象にして開講することを基本とする。	2	2	演習	4	演習系 科目 必修

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表4-11（理数・自然系教育創生コース）

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
幼年期の育ちと学び	就学前から小学校低学年にかけての子どもについて、教育学的観点からその育ちと学びについて考察する。教育・保育・発達に関する原理・原則を理解することで人間形成を広い視野から捉える教養を身に付け、今後の学修の基盤を築いていく。実践を支える理論的な基礎を構築するために、子ども観や教育理念の歴史的・社会的変遷、遊びと学びの理論、保育・教育制度、教育内容論や方法論などについて、その概要を解説する。	2	(2)	講義	1～	専攻共通 科目 4単位 以上 選択必修
地域教育課題と未来づくり教育	地域社会と学校の関係のなかでいま、どのような教育課題が生じているのか。変動する社会の中で、未来をつくる子どもの資質能力はどのようにして育むことができるのか。発達・認知、学力、国際、自然との共生の観点から、子どもの学習要求・課題を踏まえ、教科横断的な教材開発・授業づくりを行う知見と方法論の基礎について学ぶ。	2	(2)	講義	1～	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
教科の学習と言語活動	児童の主体的な学習活動を通して資質・能力を育む視点から、国語科・英語科・社会科に関する言語活動を位置付けた学習のあり方について理解を深める。なかでも、言語活動を位置付けた教材開発のあり方や言語活動を位置付けた学習のあり方などを各教科に応じて具体的に取り上げることで、教科の学習における言語活動の諸相について専門的な知見を得る。	2	(2)	講義	1～	専攻共通科目 4単位以上選択必修
子どもの問いと理数・自然系教育の創生	理数・自然系教育に関して、各分野における子どもの問いと、その問いに対応する教科内容や教材について講述する。	2	(2)	講義	1～	
数理・自然科学へのいざない	数理・自然科学の各専門分野の入門的内容について講述し、数理・自然科学に対する興味を喚起すると共に、その意義や楽しさについて伝えていく。	2	(2)	講義	2～	コース共通科目 必修
数学科内容講義（解析学A）	1変数関数の微分と積分の一般論について、高校で学習した内容をより厳密な観点から学び直す。特に、積分の概念の本来の意味付けや、指数関数、三角関数を厳密に定義する方法について理解することを目標とする。 数学科内容基礎講義（解析学）の授業内容を前提として、1変数関数の微分と積分に関する一般論、及び、指数関数、三角関数の（1つの）厳密な定義についてを詳細に講義し、レポート課題等によって授業内容のより深い理解を促す。	2	(2)	講義	1～	コース ピーク 科目 4単位以上 選択必修
数学科内容講義（幾何学A）	平面幾何の基本となる公理と、直線、線分、角、三角形等の図形や三角形の合同定理をテーマとし、それらと関連する定理を証明と共に理解し図形の性質を調べられることを目標とする。平面幾何学の基本的な概念や図形の性質について、幾何学の公理系に触れながら講義する。直線、角、三角形等の基本的な図形の性質と三角形の合同定理や関連する定理を扱う。	2	(2)	講義	2～	
数学科内容講義（代数学B）	中学校・高等学校数学科の教科内容の数学的背景として、複素数と一次分数変換の基本事項、および、2次、3次、4次の代数方程式の解の公式とそこから生じる代数的概念を身につけることを目標とする。複素数と一次分数変換、および、対称式と代数方程式の解の公式についての基礎理論を体系的に講義する	2	(2)	講義	2～	
理科内容基礎講義（物理学A）	物理学の基本である力学について、運動方程式を用いて物体の運動の解を導くことができるようになること、および、物体の運動において成り立つ法則の内容と、その法則を使って運動状態を導くことができるようになることを目標とする。物理学の最も基本的な原理である力学は、エネルギー保存則や運動量保存則など、我々の自然観の根幹をなすものであり、あらゆる科学の基礎となる。	2	(2)	講義	1～	
理科内容基礎講義（物理学B）	物理学の基礎となる振動・波動現象を学ぶ。数式の導出方法を理解し、様々な現象の共通点を理解する。また様々な授業形式を経験する。アクティブラーニング形式を取り入れ、振動・波動現象を理解し、必要な数式を導出する。	2	(2)	講義	2～	
理科内容基礎講義（化学A）	化学は物質の性質とその変化、反応を扱う科学である。これを理解するために必要となる法則や原理などの理論的側面と種々の物質の反応等について、主にイオンと分子の観点から述べる。	2	(2)	講義	1～	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
理科内容基礎講義（化学B）	化学は物質の性質とその変化、反応を扱う科学である。これを理解するために必要となる法則や原理などの理論的側面と種々の物質の反応等について、主に電子とエネルギーの観点から述べる。	2	(2)	講義	2～	コース ピーク 科目 4単位 以上 選択必修
理科内容基礎講義（生物学A）	中学校や高等学校の学習指導要領・教科書で扱われている生命現象のうち、個体レベルや生態系レベルなど、マクロなレベルでの事項について取り上げる。具体的には、生物の起源・進化・環境応答・行動・生殖・生態系・保全などに関する基礎的事項について学ぶ。	2	(2)	講義	1～	
理科内容基礎講義（生物学B）	中学校や高等学校の学習指導要領・教科書で扱われている生命現象のうち、分子レベルや細胞レベルなど、ミクロなレベルでの事項について取り上げる。具体的には、遺伝子発現・細胞周期・受精・酵素反応・免疫反応などに関する基礎的事項について学ぶ。	2	(2)	講義	2～	
理科内容基礎講義（地学A）	地球や惑星を構成する物質を理解し、天体の運動を定量的に考え、さらに、地球を含む惑星や衛星の内部構造・表層環境を理解し、太陽系の進化、銀河系、宇宙のしくみを・なりたちを理解することを目標とする。地球・惑星・天文分野の内容について深い知識と原理を理解する。	2	(2)	講義	1～	
理科内容基礎講義（地学B）	大気科学の基本的な事項、主に大気の成分、構造、運動などについて理解することを目標とする。大気科学の基本的事項について解説し、大気のさまざまな現象や地球環境に関する物理的な基本法則を理解する。	2	(2)	講義	2～	
研究演習（初等教育専攻）	初等教育専攻における4つのコースのそれぞれのコースの教育理念に即しながら、学生各自の研究テーマについて卒業研究につなげていくことをめざした科目である。すなわち、これまで修得してきた大学での授業科目（専門基盤科目および専門教育科目）および大学内外での実践的な体験活動などについて、それらと卒業研究（卒業研究演習も含む）とを橋渡しする性格を持たせることによって、卒業研究（卒業研究演習も含む）の学修においても、教員養成大学としての学修成果にも配慮していくことをめざした科目である。履修については、卒業論文の指導教員（主査および副査）が4年次の学生を対象にして開講することを基本とする。	2	2	演習	4	演習系 科目 必修

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

5 専門教育科目 その5 卒業研究（4単位）

卒業研究は、全専攻に共通して設定されている科目です。その内容、方法、履修の手順等は、所属する専攻・コースごとに定められています。また、卒業研究には参加資格があり、これに関しても専攻・コースによって必要単位数が異なります。

卒業研究の履修に関しては、**第14章**の説明を確認してください。

VIII

第8章 中等教育専攻 専門教育科目

1 専門教育科目 その1

教育の基礎的理解に関する科目 授業科目表5-1

2 専門教育科目 その2

道徳・総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、
教育相談等に関する科目 授業科目表5-2

3 専門教育科目 その3

キャリアステップアップ科目 授業科目表5-3

4 専門教育科目 その4

教科及び教科の指導法に関する科目

①各教科の教育法(中等) 授業科目表5-4

②中学校の専門科目 授業科目表5-5(国語)
授業科目表5-6(社会科)
授業科目表5-7(英語)
授業科目表5-8(数学)
授業科目表5-9(理科)

③コース専門科目 授業科目表5-10(言語・社会系教育コース)
授業科目表5-11(理数系教育コース)

5 専門教育科目 その5 卒業研究

第8章

中等教育専攻専門教育科目



この章では、中等教育専攻の教育課程表（卒業に要する単位数）の中の「専門教育科目」について、「授業科目表」を掲載し、授業科目の詳細と履修方法を説明します。表の見方については、第2章「**5 授業科目表の見方**」を参照してください。

1 専門教育科目 その1 教育の基礎的理解に関する科目

教育の基礎的理解に関する科目の修得が必要な単位数は、各コース共通して10単位です。

教育の基礎的理解に関する科目に属する各授業科目の詳細と履修方法については、次の「**授業科目表5-1**」で確認してください。

なお、所属するコースによって履修できるクラスが定められている科目もありますので、『**開講科目一覧**』でクラス指定の指示も確認してください。

教育の基礎的理解に関する科目 授業科目表5-1

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
教育の原理	教育学の基礎的知識を身につけ、教育について原理的に考え、対話できるようになることを目標とする。また、西洋教育思想史と日本の教育実践思想史のポイントを理解することを目指す。 教育の理念・歴史・思想を含む、教育の基礎理論を学ぶ。表面的には多様な諸教育実践を根拠で支え成り立たせている教育の原理は、網羅的で概説的な手法ではとらえることができない。そこで、この講義では、表面的には隠されている教育の原理に迫る。	2	(2)	講義	2～	必修
教職入門	教職の意義や職務内容を理解し、適切な進路選択ができるように、自己の教師像を明確にし、そのために何が必要かを理解し、実際に準備を始める。また、教職の意義や職務内容を理解し教科指導と学級経営における教職の基礎・基本について学ぶ。	2	(2)	講義	1～	必修
教育の制度・経営	教育制度の原理や構成について理解し、学校・教員を取り巻く課題について理解し、解決の在り方について考察できるようになることを目標とする。教育制度の原理や構成について学び、それらを取り巻く状況や課題を分析し、原理の具現化として学級や学校経営の仕組みを捉える。	2	(2)	講義	1～	2単位以上 選択必修
教育と地域社会	現代社会における教育の意義や教育に関わる制度について基礎的知識を身につけ、教育現場における課題の解決に向けて考察することができるようになることを目標とする。学校の内外における教育のさまざまな取り組みについて現状を把握し、理論に基づく解決の方策を検討する。	2	(2)	講義	1～	
発達と学習の心理	発達と学習についての理論および実際について理解し、心理学的な知能の捉え方や、障害をもった児童・生徒の処遇などについて理解できるようになることを目標とする。内容については、発達と学習についての理論および実際について概説する。また、心理学的な知能の捉え方や、障害をもった児童・生徒の処遇などについても解説する。	2	(2)	講義	1～	必修
特別支援教育理解	特別な支援を必要とする子供たちへの対応は、特別支援学校に限らず全ての学びの場で行われること、小中学校等における障害のある子供たちへの教育・支援に関する基礎的知識を修得し、合理的配慮の必要性について理解することを目指す。内容については、多様な障害のある子供たちの実態、多様な学びの場におけるそうした子供たちとの関わり方について概説する。	2	(2)	講義	1～	必修

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

2 専門教育科目 その2 道徳・総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目

道徳・総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目の修得が必要な単位数は、各コースともに10単位です。道徳・総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目に属する各授業科目の詳細と履修方法については、次の「授業科目表5-2」で確認してください。

なお、所属するコースによって履修できるクラスが定められている科目もありますので、『開講科目一覧』でクラス指定の指示も確認してください。

道徳・総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目 授業科目表5-2

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時間	講義・演習・実験等	対象年次	備考
道徳の理論及び指導	道徳教育・道徳発達に関する基礎的事項を理解し、説明できるようになるとともに、学習指導案の作成、指導の展開、評価ができるようになることを目標とする。 現在のわが国の道徳教育の問題点や課題について検討するとともに、道徳発達及び道徳教育に関する様々な理論と実践との関連について考察する。また、学習指導案の作成、指導の展開、評価、さらには現場における実践のあり方について考える。	2	(2)	講義	3～	必修
総合的な学習の時間の指導法（特別活動を含む。）	総合的な学習の時間を指導するために必要な、原理と方法を知る。特に、総合的な学習の時間における「探究」のあり方と、単元構成と学習展開の具体的方法について理解を深める。また、総合的な学習の時間と関連性の深い、特別活動を指導するための原理と方法を知る。教育課程（カリキュラム）全体の中における、総合的な学習の時間と特別活動の意義と位置づけを知る。	2	(2)	講義	3～	必修
教育課程と教育方法	教育活動を計画的・系統的・意図的に行うためには、教育課程（カリキュラム）を編成し、実施し、評価することが欠かせない。本講義では、 (1) 教育課程とは、学習指導要領を一つの基準としながら、授業実践における内容（what）と方法（how）とを一体のものとして、子どもの発達段階や社会的要請を踏まえながら編成されるものであることを学ぶ。その際、カリキュラム・マネジメントの視点を身につける。 (2) 教育内容がどのような考え方のもとに編成され、教え・学ぶことが可能なかたちに組み立てられるかについて学ぶ。 (3) 教育の方法および技術について考えるための基本的視座を提供し、それをもとに学習指導のあり方を検討する。ICT（情報機器及びオンライン教材）の活用についても学ぶ。	1	(1)	講義	2～	必修
情報活用能力育成実践論	この授業では、学校教員として求められる実践的な ICT 活用指導力を身に付けることを目標とします。具体的な内容としては、主に仙台市内の教員、附属小学校、中学校の教員から講義を受け、現場で実施されている ICT を活用した指導方法について学びます。学校現場で実際に実施されている内容を扱うため、具体的で実践的な知識や技術を学ぶことができます。	1	(1)	講義	2～	必修
児童・生徒理解	生徒指導・進路指導・キャリア教育の理論および実践について学び、児童・生徒の自己指導能力を育成するために必要な知識・技法や素養を身に付けることを目標とする。 生徒指導・進路指導・キャリア教育の意義や理論、および実践のための技法や課題等について講義する。正課の授業や課外活動、個別指導や全体指導、学級経営や校内・校外連携等のあらゆる機会や手段を通じて児童・生徒の個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高め、かつ児童・生徒の自己指導能力を育成するための教育実践とその課題について考察する。	2	(2)	講義	3～	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
教育相談（カウンセリングを含む。）	学校における教育相談の意義と課題を理解し、教育相談を進める際に必要な基礎的知識（カウンセリングに関する基礎的事柄を含む）を理解し、具体的な進め方やポイント、組織的な取り組みや連携の必要性を理解することを目標とする。 教育相談は幼児児童生徒が自己理解を深め、好ましい人間関係を築きながら、集団の中で適応的に生活する能力を育み、個性の伸長や人格の成長を支援する教育活動である。幼児児童生徒の発達段階に即して、個々の心理的特質や教育的課題を適切に捉え、支援に必要な基礎的知識とカウンセリングの意義、理論、技法を身につける。	2	(2)	講義	3～	必修

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

3 専門教育科目 その3 キャリアステップアップ科目

キャリアステップアップ科目の修得が必要な単位数は、各コース共通して17単位です。

キャリアステップアップ科目に属する各授業科目の詳細と履修方法については、次の「授業科目表5-3」で確認してください。「実践指導法」科目は所属するコース・教科によって履修する授業科目が定められています。「備考欄」にその指示が記してありますので、自分が所属する教科の授業科目を履修してください。

なお、所属するコース・教科によって履修できるクラスが定められている科目もありますので、『開講科目一覧』でクラス指定の指示も確認してください。

「キャリアステップアップ科目」に関しては、第11章と第12章の説明をよく読んで履修してください。第12章に説明がありますが教育実習には履修資格が設けられています。

キャリアステップアップ科目 授業科目表5-3

教育実践探究演習科目は、取得しようとする中高免許状の各教科の実践指導法 A、B となりますのでご注意ください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
教育体験初年次演習Ⅰ	教育や子どもをめぐる問題についてクラスで討議したり、学校現場に出向いて教育活動や児童・生徒の様子を観察したりすることで、教員養成のキャリアステップアップの基礎づくりを行う。また、クラスで設定した課題の探究活動を通して、大学での学修のための基礎技法を学ぶ。	2	(2)	演習	1～	必修
教育体験初年次演習Ⅱ	文献講読やクラス討議、学校現場での観察・体験を通して、児童・生徒の行動や心理を理解し、実態と課題を把握するとともに、児童・生徒との接し方、教職の魅力等を学ぶ。また、現代的教育課題等の探究を行いながら、キャリアステップアップの展望を得るとともに、専門分野の学修に必要な読解力、論理的思考力、表現力等を磨く。	2	(2)	演習	1～	必修
中等国語科実践指導法（教育実践探究演習）A	学習指導要領の目標や内容と国語科の指導理論の理解に基づいた、中学校国語科の授業づくりの基本的な方法を修得する。教材研究、学習指導案、模擬授業作りに共同して取り組む。	2	(2)	演習	2～	必修 （国語のみ）
中等国語科実践指導法（教育実践探究演習）B	学習指導要領の目標や内容と国語科の指導理論の理解に基づいた、高等学校国語科の授業づくりの基本的な方法を修得する。教材研究、学習指導案、模擬授業作りに共同して取り組む。	2	(2)	演習	3～	必修 （国語のみ）
中等社会科実践指導法（教育実践探究演習）A	中学校社会科地理的分野・歴史的分野の授業についての基礎的な技能を身に付けることを目標とする。中学校社会科地理的分野・歴史的分野の授業に対する関心を高めるとともに、基礎的な技能を習得する。	2	(2)	演習	2～	必修 （社会のみ）
中等社会科実践指導法（教育実践探究演習）B	中学校社会科の公民的分野の授業の技能について習得する。	2	(2)	演習	3～	必修 （社会のみ）
中等英語科実践指導法（教育実践探究演習）A	中学校及び高等学校の英語科における5領域及び領域統合多々の指導技術と評価方法を身につける。具体的には、4技能5領域の指導、領域統合型の言語活動の指導、学習指導案の作成、言語能力の測定と評価等について学ぶ。	2	(2)	演習	2～	必修 （英語のみ）
中等英語科実践指導法（教育実践探究演習）B	中学校及び高等学校の英語科と第二言語習得に関する知識を身につける。具体的には、目標設定・指導計画、学習到達目標に基づく授業の組み立て、学習指導案の作成、観点別学習状況評価・評価基準の設定・評定への総括、小・中・高等学校連携、第二言語習得等の内容を扱う。	2	(2)	演習	3～	必修 （英語のみ）

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
中等数学科実践指導法（教育実践探究演習）A	大学における履修済みの「教科及び教科の指導法に関する科目」の学習経験を生かして、生徒たちの多様な考えを生かして新たな学びを実現する場としての授業観を身につけるとともに、授業を改善する方法としての「授業研究」を体験を通して理解する。 授業の計画・改善の方法として国際的にも注目を集める「授業研究」を模擬的に実施することで、授業の構想から改善に至るまでの考え方やスキルを実践的・反省的に学ぶ。	2	(2)	演習	2～	必修 (数学のみ)
中等数学科実践指導法（教育実践探究演習）B	大学における履修済みの「教科及び教科の指導法に関する科目」及び教育実習での学習経験を生かして、生徒たちの多様な考えを生かして新たな学びを実現する場としての授業観を充実させるとともに、授業を改善する方法としての「授業研究」を積極的に実施できるようになる。 授業の計画・改善の方法として国際的にも注目を集める「授業研究」を模擬的に実施することで、授業の構想から改善に至るまでの考え方やスキルを実践的・反省的に学ぶ。	2	(2)	演習	3～	必修 (数学のみ)
中等理科実践指導法（教育実践探究演習）A	中等教育における理科教育の方法とその実践事例を上級生との協働で理解する。これまでの自然科学についての学習で得られた知識と、模擬授業を伴った教育方法の学習で得られた知識および経験をもとにして、分かりやすくかつ丁寧な授業を考案することができるようになることを目標とする。中学校、高等学校を主とした理科教育に関わる授業の進め方や教材・教具の取り扱いについての模擬授業の実践を伴った講義である。	2	(2)	演習	2～	必修 (理科のみ)
中等理科実践指導法（教育実践探究演習）B	中等教育における理科教育の指導方法とその教授方法について学年をまたいだ学生間との協働で理解する。これまでの自然科学についての学習で得られた知識と、模擬授業を伴った教育方法の学習で得られた知識および経験をもとにして、分かりやすくかつ丁寧な授業を考案し、発展的なことを取入れたりアドバイスすることができるようになることを目標とする。中学校、高等学校を主とした理科教育に関わる授業の進め方や教材・教具の取り扱いについての模擬授業の実践を伴った講義である。	2	(2)	演習	3～	必修 (理科のみ)
中学校3年次実習（事前・事後指導1単位を含む。）	授業では、指導教諭の授業の学習の構成や流れ、発問の仕方、生徒の反応の生かし方などがどのように行われているのか観察させ、また、授業のねらい、教材の特徴、生徒の実態の視点を重視した実践授業に取り組ませる。さらに、題材や指導計画、本時の指導に際しての留意点を記した指導案を作成させ研究授業に取り組ませる。研究授業終了後には指導教諭と参観者による討議の場を設け、学ぶべき点や今後の課題、その解決のための方向性などを確認させる。そのほか、授業づくりのベースとなる生徒一人ひとりとの人間関係構築について、始業前や休み時間、放課後の諸活動、下校指導等も活用し実践させる。	3		実習 (事前・事後指導は講義)	3～	必修
中学校4年次実習（事前・事後指導1単位を含む。）	教科の学習指導、特別活動、行事活動、学級経営、生徒指導等学校教育のすべての分野と、それを担当する教師の仕事の重要性について実際に学習、観察、体験させ研究させる。学習指導案を作成しての教壇実習は7時間以上経験させ、実習開始直後の導入的プログラムが終了した後には、1日1時間を目安に、特別活動や学級指導（朝の会、帰りの会、清掃指導、給食指導等）の教職に関する指導を実践させ、研究授業を設定する。 協力中学校における実習では、教師が学習者の視点をもつとともに、生徒が主体的・対話的に深く学ぶことができるような効果的な指導の在り方を探らせる。これら学習活動のほか、校務分掌等の学校・学級経営に関する事項についても学ばせる。	4		実習 (事前・事後指導は講義)	4	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
教職実践演習 (中・高)	直接授業を担当する教員に加え、授業計画の立案や授業の具体的な展開の補佐及び教科の専門的知識の確認等に関して、教科専門教員及び学校現場経験者、本学附属学校教員との連携体制を構築する。中学校・高等学校教諭に相応しい資質や能力の確認を行い、各教科に即したこれまでの履修の在り方をまとめあげるとともに、実際の授業力に結びつける形で内容の総まとめを行う。	2	(2)	演習	4	必修

注) 毎週授業時数欄の () は、前期または後期のみの時数を示す。

4 専門教育科目 その4 教科及び教科の指導法に関する科目

教科及び教科の指導法に関する科目の修得が必要な単位数は、各コース共通して44単位です。

教科及び教科の指導法に関する科目に属する各授業科目の詳細と履修方法については、次の「授業科目表5-4～11」で確認してください。コース・教科・取得を希望する免許の種類によって履修する授業科目が定められている場合や、必要とする単位数が異なる場合は、「備考欄」にその指示が記してあります。

なお、所属するコースによって履修できるクラスが定められている科目もありますので、『開講科目一覧』でクラス指定の指示も確認してください。

①各教科の教育法（中等） 授業科目表5-4

中等教育専攻各コースの学生は次の表の科目の中から、所属する教科（取得する免許状の教科）の教育法科目を4単位履修してください。なお、高等学校教諭1種免許状（地理歴史、公民）の免許取得を希望する場合は、その免許状に対応する教育法の科目も履修してください。「備考欄」にその指示が記してありますので、よく確認して履修してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
中等国語科教育法 A	学習指導要領に示された国語科の目標や内容を理解することを目指す。概要としては、中学、高校における国語科教育論および指導論を理解し、具体的な授業場面を想定した授業づくりを行う基礎を身につける。	2	(2)	講義	2～	必修 (国語のみ)
中等国語科教育法 B	言語の教育としての国語科の授業づくりにおける教材研究とその方法について、学習指導要領をふまえて、授業づくりの基礎的な能力を習得することを目指す。学習指導要領に示された目標及び育成すべき資質・能力をもとに、国語科の教科構造を理解しつつ、代表的な教材やその指導法について理解する。	2	(2)	講義	3～	必修 (国語のみ)
中等社会科教育法 A	中学校社会科に関する目標・内容・方法・評価などについて理解することを目指す。中学校社会科に関する理論や方法論などについて学習指導要領解説を用いて学ぶ。	2	(2)	講義	2～	必修 (社会のみ)
中等社会科教育法 B	中学校社会科公民的分野に関する目標・内容・方法・評価等について理解することを目指す。中学校社会科公民的分野の各内容等の学習指導について具体的な教材・授業を通して学ぶ。	2	(2)	講義	2～	必修 (社会のみ)
中等社会・地理歴史科教育法	授業の到達目標及びテーマ 中学校社会科を踏まえて高等学校地理歴史科に関する目標・内容・方法・評価などについて理解することを目指す。中学校社会科を踏まえて高等学校地理歴史科に関する理論や方法論などについて学習指導要領解説などを用いて学ぶ。	2	(2)	講義	2～	選択 (高1種地理歴史免許取得希望者は必修) (社会のみ)
中等社会・公民科教育法	中学校社会科および高等学校公民科に関する目標・内容・方法・評価等について理解することを目指す。中学校社会科および高等学校公民科に関する各内容等の学習指導について学ぶ。	2	(2)	講義	2～	選択 (高1種公民免許取得希望者は必修) (社会のみ)
中等英語科教育法 A	中学校及び高等学校における英語科教育の基礎を身につけることを目標とする。学習指導要領、教科用図書、音声指導、語彙・表現指導、文法指導、文字指導、英語でのやり取り、生徒の特性や習熟度に応じた指導、評価等に関する内容を扱う。	2	(2)	講義	2～	必修 (英語のみ)
中等英語科教育法 B	中学校及び高等学校における英語科の指導技術の基礎を身につけることを目標とする。学習指導要領、教科用図書、音声指導、語彙・表現指導、文法指導、文字指導、英語でのやり取り、生徒の特性や習熟度に応じた指導、評価等に関する内容を扱う。	2	(2)	講義	3～	必修 (英語のみ)

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講義・ 演習・ 実験等	対 象 年 次	備 考
中等数学科教育 法 A	数学科では、生徒が数学的活動を通して、情報機器を適宜活用して教科内容を学習することが求められている。この学習方法を理解して授業で実現するためには、教師自身が探究的な学習方法によって数学を学習した経験を有することが不可欠である。 本授業では、この学習方法及びその指導と評価の要点を理解し、教材研究及び授業構想の視点を得るために、受講者自身がこの学習方法によって数学を学習すること、その過程を学習者と教師の二つの立場から俯瞰することを行う。	2	(2)	講義	2～	必修 (数学のみ)
中等数学科教育 法 B	数学的な見方・考え方を働かせた数学的活動を通して数学的に考える資質・能力の育成が求められている。このような授業を実現するためには、教師自身がそのような数学的経験をしていることが不可欠である。本授業では、問題解決とその振り返りから数学的に考えることの具体に接近し、それを踏まえて数学の授業づくりについて考えていく。	2	(2)	講義	3～	必修 (数学のみ)
中等理科教育法 A	中等教育における理科教育の指導方法とその教授方法を検討し理解する。中等理科教育における教科書、教材・授業がどのような変遷を辿って、現在に教育方法に変遷してきたのかを学ぶ。 これまでの自然科学についての学習で得られた知識と、経験をもとにして現代のアクティブラーニングの手法と ICT を活用しながら、より効果的な教育方法を探求する。中学校、高等学校を主とした理科教育に関わる授業の進め方や教材・教具の取り扱いについての現代的課題を協働で考え理解を深める講義である。	2	(2)	講義	2～	必修 (理科のみ)
中等理科教育法 B	中等教育における理科教育の方法とその実践事例を理解し、これまでの自然科学についての学習で得られた知識と、教育実習を含む教育方法の学習で得られた知識および経験をもち、安全かつ効果的な授業を考案することができるようになることを目標とする。中学校、高等学校を主とした理科教育に関わる授業の進め方や教材・教具の取り扱いについての講義である。	2	(2)	講義	3～	必修 (理科のみ)

注) 毎週授業時数欄の () は、前期または後期のみの時数を示す。

②中学校の専門科目

中等教育専攻各コースの学生は中学校の専門科目について、自分が所属するコース・教科の授業科目を履修してください。他教科の中学校の教科科目を履修して単位修得しても、卒業に必要な単位にはなりません。各教科の授業科目は、次に示す授業科目表5-5～授業科目表5-9を確認してください。

授業科目表5-5 (国語)

言語・社会系教育コース 教科国語の学生は次の授業科目表から必修・選択必修の科目を含めて32単位以上履修してください。

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講義・ 演習・ 実験等	対 象 年 次	備 考
中等国語科内容 構成基礎論	国語教科書の教材に関する理解を深めるため、教材を読むための手続きを学ぶ。また、古文や近代小説、評論などを読むための基礎的な知識や手続きを身につける。具体的な教材、作品に触れながら、教材研究の方法や、辞書・索引等の使用法、文献の検索の仕方などを知る。	2	(2)	講義	1～	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
国語科内容概論 (国語学)	日本語の全体像について平易に概説する。音声・音韻、文字・表記、語彙、文法、文章・文体など、網羅的に見ていくことで、日本語への理解を深める。また、他言語との対照とそこから見出せる日本語の特徴や、歴史的なことばの変化、現代日本語のバリエーション（共通語と方言、位相語など）といった日本語の種々相を取り上げる。	2	(2)	講義	2～	必修
※国語科内容講義 (国語学 A)	国語学概論で学んだ基礎的知見と関連づけながら、韻音・アクセント、文法、日本語史など特定領域について理解を深め、自力でレポートの作成ができるようになることを目標とする。古代から現代に至る国語の変遷について、文献国語史的方法と言語地理学的方法の両面から相補的にアプローチする。講義を主とするが、文献資料の読解や語史を調べてまとめるなど演習の要素もまじえ、全国的な視野から日本語の歴史を理論的に考察する力を身につける。	2	(2)	講義	2～	2単位以上 選択必修
※国語科内容講義 (国語学 B)	日本語の変遷について理解を深め、ことばの変化について文献資料や言語分布の両面から再構成し、自分のことばでまとめられるようになることを目標とする。上代（奈良時代以前）から現代に至る日本語の変遷について、文献国語史的方法と言語地理学的方法の両面から相補的にアプローチする。講義を主とするが、文献資料の読解や語史を調べてまとめるなど演習の要素もまじえて行なう。語源や意味・用法の変遷について疑問をもった際に、自力で解決する手立てを学んでいく。	2	(2)	講義	2～	
※国語科内容基礎演習 (国語学 A)	現代日本語にかかわる事象を取り上げ、言語的な調査・考察を加え、その内容を報告する。受講者各人が研究報告をおこない、その内容に沿って全員で討議をおこなう。語学的な見方・考え方はもとより、調査・分析の方法、また問題設定、解決能力を身に付ける。 取り上げる事象は、共時的な現代日本語を基本とし、共通語、方言、書きことば、話しことば等を扱う。	2	(2)	演習	2～	2単位以上 選択必修
※国語科内容基礎演習 (国語学 B)	近代作家の文章について、文体的な観点から演習発表をおこなう。古典・近代文学作品の文章を語句や表現にこだわりの読みながら読む。ことばの意味や用法、表記法、表現法などの分析を通して文体的な特徴を明らかにする。	2	(2)	演習	2～	
国語科内容概論 (国文学 A)	国文学の概念と時代区分を確認し、各時代の文学と社会とのかかわりを押さえたうえで、近代・現代日本の文学の流れをたどり、主要作品を読み解く。その過程で、国文学とは何か、何だったのかを考えるとともに、国文学の研究方法を検討する。授業のねらいは次の3点である。①国文学の概念と歴史、対象と研究方法についての基礎的な知識を得ること。②近代・現代の主要な作家と作品についての理解を深めること。③作品の特徴を捉える力、および作品を鑑賞する力を身につけること。	2	(2)	講義	2～	必修
国語科内容概論 (国文学 B)	国文学の基礎についての知識をふまえたうえで、特に上代から近世の作品を取り上げて国文学とは何か、何だったのかを考える。国文学の概念と歴史、対象と研究方法についての基礎的な知識を得ることを目標とする。国文学の概念と時代区分を確認し、各時代の文学と社会とのかかわりを押さえたうえで、上代から近世の日本の文学の流れをたどり、主要作品を読み解く。その過程で、国文学の研究方法を検討する。	2	(2)	講義	2～	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
※国語科内容講義（国文学A）	国文学（近代・現代）をめぐる諸問題を、作品やその研究を読み解きながら検討する。国文学研究の基盤となる専門知識を得ることを目標とする。日本の近代・現代文学（児童文学を含む）をめぐる、テキストの問題、作者と作品の問題、ジャンルの特性の問題をはじめ、研究の基盤となる諸問題を検討する。その際、外国文学とその研究からの影響や他の学問領域とのかかわり等にも目配りをする。	2	(2)	講義	2～	2単位以上 選択必修
※国語科内容講義（国文学B）	国文学（古典文学）をめぐる諸問題を、作品やその研究を読み解きながら検討する。国文学研究の基盤となる専門知識を得ることを目標とする。日本の古典文学をめぐる、テキストの問題、注釈・解釈とその歴史の問題、ジャンルの特性の問題をはじめ、研究の基盤となる諸問題を検討する。その際、近代文学研究との違いや、他の学問領域とのかかわり等にも目配りをする。	2	(2)	講義	2～	
※国語科内容基礎演習（国文学A）	明治・大正期の文学（児童文学を含む）を分析し、その特質を探るとともに、文学研究のテーマ設定の仕方と研究方法、口頭発表の仕方、論文の書き方等について実践的に学ぶ。日本近代文学およびその研究方法への理解を深め、自ら研究する力とそれを教科「国語」の指導に生かす力を身につけることを目標とする。明治・大正期の文学（児童文学を含む）の中から主要な作品を取り上げ、その作品に適した方法を選んで読み解いていく。授業は、作品ごとに担当者を決めて研究成果を発表してもらい、それをめぐって受講者全員で討議する形で進める。	2	(2)	演習	2～	2単位以上 選択必修
※国語科内容基礎演習（国文学B）	昭和期以降の文学（児童文学を含む）を分析し、その特質を探るとともに、文学研究のテーマ設定の仕方と研究方法、口頭発表の仕方、論文の書き方等について実践的に学ぶ。日本近代文学およびその研究方法への理解を深め、自ら研究する力とそれを教科「国語」の指導に生かす力を身につけることを目標とする。昭和期以降の文学（児童文学を含む）の中から主要な作品を取り上げ、その作品に適した方法を選んで読み解いていく。授業は、作品ごとに担当者を決めて研究成果を発表してもらい、それをめぐって受講者全員で討議する形で進める。	2	(2)	演習	2～	
※国語科内容基礎演習（国文学C）	日本の古典文学を読み解くための基礎知識と技術を実践的に学ぶ。古典文学を読み味わう力とそれを教科「国語」の指導に生かす力を身につけることを目標とする。くずし字・変体仮名の解読や辞書・索引・注釈書等の使用法について学んだ上で、日本古典文学の著名な作品を読み解き、古語や古文、古典文学に関する知識と理解を深める。授業は、実践形式で進めていく。	2	(2)	演習	2～	2単位以上 選択必修
※国語科内容基礎演習（国文学D）	古典文学を研究するための基礎的な力を実践的に養う。古典文学の本文・校異や古注釈に関する理解を深め、辞書・索引・先行研究等を適切に活用し、先行する作品や時代背景にも目配りして、古典文学を研究する力とそれを教科「国語」の指導に生かす力を身につけることを目標とする。授業は、受講者各人が研究成果を発表し、それをめぐって討議する形式で進める。	2	(2)	演習	2～	
国語科内容概論（漢文学）	漢詩を読むための基礎知識を身につけ、漢詩をじっくり味わうために必要な読解の方法と態度を獲得する。また、中高の教科書に頻出する代表的な漢詩・漢文を読み、味わう訓練を通じて、基礎的読解力を身につける。 漢文・漢詩を読み味わうためにはどのような知識や方法が必要か。その基礎的な力を養うために、具体的な作品に即してわかりやすく解説し、鑑賞や分析の方法を学ぶ。	2	(2)	講義	2～	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
※国語科内容講義（漢文学）	漢詩鑑賞の基本的な姿勢や方法を身につけ、杜甫の詩を読んでその人間観・自然観・政治観を学ぶ。また、毎回の小テストを通じて漢文読解の基礎的能力を身につける。 「杜甫詩鑑賞（その1）」 盛唐の詩人杜甫の詩と生涯について、代表的な詩をじっくり読み味わいながら考えていく。詩の読解と鑑賞を通じて、杜甫の人間観や自然観、社会観や政治観を探り、現代に生きる私たちへのメッセージを読み取る。あわせて漢詩・漢文読解の基礎的方法を学ぶ。	2	(2)	講義	2～	
※国語科内容基礎演習（漢文学A）	漢文読解の基礎的な方法を学び読解能力を養うとともに、文学作品を読み味わう方法を身につける。中国古代の文学の基礎的な文献を読み、漢文資料を読む方法を学ぶ。テキストを一字一句、詳しく調べ深く理解していくために必要な、辞書や索引などの工具類の使用法や、典拠の調べ方などを、その初歩から徹底して指導する。あわせて文学研究の基本的な方法や態度について身につけられるようにする。	2	(2)	演習	2～	2単位以上 選択必修
※国語科内容基礎演習（漢文学B）	漢文読解の基礎的な方法を学び読解能力を養うとともに、文学作品を読み味わう方法を身につける。中学・高校の教科書でも扱われる春秋戦国期から唐・宋代までの文学作品について考察する。テキストの一字一句について詳しく調べ、深く理解していくために必要な辞書や索引などの使用法や、典拠の調べ方などを徹底して指導する。あわせて文学研究の基本的な方法や態度について身につけられるようにする。	2	(2)	演習	2～	
国語科内容実技（書道）	漢字の楷書や行書、仮名の基本を理解するとともに、漢字と仮名の調和した書き方を理解し、伝統文化である書を日常生活に生かして、豊かな言語生活の担い手としての素地を養う。小中学校で書写の指導を行うにあたり、改めて漢字の楷書や行書、仮名の基礎・基本を理論と実践の両面から整理し、書の日常化を図り、書の実践を通して豊かな言語生活を営む工夫を学ぶ。	2	(2)	演習	1～	必修
※国語科内容基礎演習（国語科教育A）	教材や授業実践・理論を理解し、自分なりの課題を設け、それを解決するための研究方法・技能を身につけることを目標とする。中学、高校における主たる教材、授業実践・理論を取り上げ、教材研究や授業作りの内実を検討する。	2	(2)	演習	3～	
※国語科内容基礎演習（国語科教育B）	国語科における教科内容学および、教科の指導法に関連的・総合的に学ぶことを通して、国語科の学習指導に関する知見を深める。日本語学、日本文学、国語科教育それぞれの領域から、具体的な教材例や指導例などをもとに国語科の教材開発や学習指導のあり方を学ぶ。	2	(2)	演習	3～	

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表5-6 (社会科)

言語・社会系教育コース 教科社会科の学生は次の授業科目表から必修・選択必修の科目を含めて32単位以上履修してください。

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講義・ 演習・ 実験等	対 象 年 次	備 考
社会系教科内容 構成基礎論 (社 会・地理歴史 科)	中学校社会科地理的分野・歴史的分野および高等学校地理歴史の授業に対する関心を高めるとともに、基礎的な内容を理解し技能を習得する。	2	(2)	講義	1～	必修
社会系教科内容 構成基礎論 (社 会・公民科)	中学校社会科公民的分野および高等学校公民の授業に対する関心を高めるとともに、基礎的な内容を理解し技能を習得する。	2	(2)	講義	1～	必修
社会系教科内容 概論 (日本史)	小中高の歴史学習の場で使用される教科書の内容は国家の歴史を中心に記述されているが、歴史を多面的・多角的に見る眼を養い、今後の歴史教育を担っていくためには、国家の歴史のみならず地域の歴史についても熟知する必要がある。そこで、本講義では、古代～現代にわたる日本の通史を確認しつつ、ある地域（現宮城県・仙台市域）において展開した歴史の諸側面についても講義していく。	2	(2)	講義	1～	必修
社会系教科内容 講義 (日本史 A)	小中高の歴史学習の場で使用される教科書の内容は国家の歴史を中心に記述されているが、歴史を多面的・多角的に見る眼を養い、今後の歴史教育を担っていくためには、国家の歴史のみならず地域の歴史についても熟知する必要がある。そこで、本講義では、日本の近世・近代史に関する基礎的な事項を確認した上で、ある地域（東北地方）において展開した歴史についても取り上げ講義していく。なお、報告とディスカッションも行う予定である。	2	(2)	講義	2～	
社会系教科内容 講義 (日本史 B)	授業のテーマは、「日本中世の社会と政治」である。到達目標は、①日本中世に関する基礎的な知識を獲得し、適切にアウトプットすることができること、②当時の社会状況や学会の議論を踏まえながら、複眼的にこの時代を捉えることができること、③日本中世について、受講者それぞれが抱いた時代像を説明することができること、の3点を設定する。 中世は武士が政治の主役を担った時代であると同時に、「地方の時代」とも評価される時代である。この講義では、日本中世の基本概念に触れながら、中央の政治動向を特に地方社会との関係性の中で捉え、なぜ武士が政治の主役を担うに至ったのか、なぜ中世は地方の時代と評価されるのか、その答えを探していく。	2	(2)	講義	3～	
社会系教科内容 概論 (外国史)	欧米世界を中心に近現代の世界史概説を主たるテーマとし、それぞれの時期における主要な事項の歴史的意義を理解するとともに、中学校社会科の歴史的分野や高等学校地理歴史科の授業づくりに応用することができることを目標とする。グローバル化が本格化し、諸地域相互の関係性が強まる16世紀から21世紀の世界について、それぞれの時期の特徴を理解する上で重要と思われる事項を取り上げ、近年の研究動向に基づきつつ、その性格や歴史的意義を解説する。	2	(2)	講義	1～	必修
社会系教科内容 講義 (外国史 A)	19世紀近代との連続性の観点で捉えられがちであった17～18世紀ヨーロッパ国家・社会について、近年の研究動向に基づきつつ、その固有の特徴を解説する。フランス、イギリスといった西欧のみならず、スウェーデン、ポーランド、ロシア、プロイセン、ハプスブルク君主国など北欧・東欧諸国も広く対象とすることにより、近世ヨーロッパ国家の共通性ととともに、歴史的背景・条件に基づく地域的独自性の抽出を図る。さらに従来の見解や高校教科書の記述などとの比較を通じ、歴史的過去に関する理解・認識が固定的ではなく、常に更新される可能性を持つ構図を示す。	2	(2)	講義	2～	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
社会系教科内容講義（外国史B）	7～17世紀の中国に成立した各王朝の特質と、各時代における対外政策と日中関係の推移を主たるテーマとし、それらに対する理解を中学校社会科の歴史的分野・高等学校地理歴史科の授業づくりに応用する力を涵養する。各王朝がどのような発展・拡大の途をたどり、それが周辺地域といかなる関係を構築してきたのかを講義するとともに、過去の重要な学説や近年の研究動向にも論及し、教科書の叙述の背景にある我が国における中国史認識の変遷についても解説していく。	2	(2)	講義	3～	
社会系教科内容概論（人文地理学）	人文地理学は、地球上で展開される人間の諸活動が自然環境や社会環境を反映してどのような地域の特徴を作り出すのかを明らかにする、いわば「輪切りにされた歴史」を把握する学問分野である。本講義は、人文地理学の枠組みから地理的見方や地域の変化を捉える基礎的視点を学習する前半部分と、地域の変化をもたらす産業の在り方や現代的課題を地理学的に考察する後半部分からなる。	2	(2)	講義	1～	必修
社会系教科内容講義（人文地理学）	戦後の日本社会がどのような変化を辿ってきたのか、その地理的特徴について説明する。現在、日本が直面している多くの問題は歴史的なつながりで生み出されていること、および地域間関係の中で形成されてきたことを理解することがねらいとなる。	2	(2)	講義	2～	
社会系教科内容実習（人文地理学）	本授業は、特定地域を調査し、地域社会が直面する課題を発見し、解決への方向性を見出すために、地域調査の方法や統計分析の手法を学び、地域のダイナミズムを捉えることがねらいとなる。	2	(2)	実験・実習	3～	
社会系教科内容概論（自然地理学）	中学校社会科の地域学習に関する授業づくりに必要な自然地理学的視点を養うとともに、基礎的知識・概念・技法を習得することを目標とする。中学校社会科の地域学習にとって基礎となる土地の自然環境特性把握のための視点と方法について、地形を主な切り口としながら学ぶ。地形そのものだけでなく、地形を通した環境や人間活動のとらえ方に目を向け、地域性解明のプロセスと小学校の授業への適用法を学ぶ。	2	(2)	講義	1～	必修
社会系教科内容講義（自然地理学）	小学校社会科の地域学習における国土の特徴や自然災害に関する学習に焦点を当て、地形の特徴のとらえ方とその応用法を学ぶ。とくに土地利用と地形との関係のとらえ方、地形特性をふまえた災害理解を中心に授業を進める。	2	(2)	講義	2～	
社会系教科内容実習（自然地理学）	中学校社会科の地域学習に求められる自然地理学的技能の習得および習熟を目標とする。中学校社会科の地域学習で扱われる土地の自然環境に関する諸資料（地図、画像データ、気候データ、統計資料など）の読み取り方、資料の入手・作成・解析方法、さらにその土台となるフィールドワークも含めた自然地理学の基礎的調査手法を学ぶ。	2	(2)	実験・実習	3～	
社会系教科内容講義（地誌）	中学校社会科の地域学習に関する授業づくりに参考となる、地域を総合的に捉える地誌学的視点を習得することを目標とする。中学校社会科の地域学習では、地域性理解のために土地の自然と人の暮らしを総合的に捉える視点が重要である。そのような地誌学的な視点について、具体的事例の紹介を通して学ぶ。	2	(2)	講義	2～	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
社会系教科内容概論（法律学）	法・法律学の基本的な考えかたを習得し、立法趣旨の種となる規範的議論を立てることができることを目標とする。本授業では、教育基本法1条の構成から出発し、法律学を体系的に理解することを目指す。特に注意を払うのは、社会の一員としての役割とそこからはみ出してしまうそれぞれの個性との緊張関係である。これらを考える素材として、学校や教育に関する事案や映像資料を用いる。	2	(2)	講義	3～	2単位以上 選択必修
社会系教科内容概論（政治学）	政治に関する基礎的知識を習得し、現代政治について「自分自身で考える」能力を身につけ、政治的事柄を基礎的知識に基づいて他者と議論し、説得力ある意見を提示できるようになることを目標とする。政治についての基礎的内容を習得し、「誰がどのように重要な事柄を決めているのか」を理論的に考える態度を養う。	2	(2)	講義	2～	
社会系教科内容講義（政治学）	本講義は「公共性」をテーマとし、「公的なもの」と「私的なもの」がどのような関係にあるか、その内実を検証し考察を行う。社会インフラ・公共交通機関・公教育・公衆衛生など、われわれの生活が「公共性」と深く結びついている点を確認し、「公的なもの」と「私的なもの」とのあるべき関係を問い直す。	2	(2)	講義	2～	
社会系教科内容概論（経済学）	歴史上ある時点において確立した「資本主義」と呼ばれる経済体制の来歴、そして経済学がそれをどのように捉えてきたのかを概観した上で、「市場」の基本構造を考察する。	2	(2)	講義	3～	2単位以上 選択必修
社会系教科内容概論（社会学）	現代社会で起きている多様な事象について、社会学理論を通じて問題を分析する方法を学び、社会学理論の基礎を習得することを目指す。毎回、現代社会の課題についてテーマ設定を行い、当該の社会学理論の概要を講義する。	2	(2)	講義	2～	
社会系教科内容講義（社会学）	本講義では、社会学概論で学んだ社会学理論等を基盤として、現代社会における具体的な社会事象／社会問題について、調査、報告、討議を行う。参加学生は、それぞれ自身の問題関心に照らしてテーマ設定し、授業で報告を行う。なお、報告テーマは、人種や民族、障害者等の差別・排外問題、格差・貧困問題、気候変動・災害など多岐にわたる。現代社会の仕組みと課題について、自分事として考えてもらいたい。	2	(2)	講義	2～	
社会系教科内容概論（倫理学）	倫理問題を検討する上で前提となる基本的な知識と考え方を身につけ、倫理的な問題設定を自分で行い、異なる立場の者と理論的な議論・応答ができるようになることを目標とする。 私たちは日常生活の様々な場面で倫理問題に直面する。この授業では、そのような問題を理論的に分析し、自らの立場を説得的に表現する上で必要となる倫理的な考え方を紹介する。「善」「自由」「規範」「幸福」といった基本概念と、それに関連する西洋の倫理思想史的背景を中心に解説する。	2	(2)	講義	3～	2単位以上 選択必修
社会系教科内容概論（哲学）	西洋哲学史において取り上げられてきた主要なテーマについて学ぶことによって、現代に生きる私たちが哲学的な問題についての考えを深めるうえで必要な知識を身につけ、自分なりの考えや意見を持つことができるようになることを目標とする。西洋哲学史において取り上げられてきた主要なテーマを取り上げ、当該のテーマについて考えるために必要な哲学史的な知識について概説する。西洋哲学史上、重要な哲学者や思想を紹介する形をとるが、単なる歴史上の人物や思想としてではなく、現代において思考を深めるために必要なツールとして習得してもらうことを目指す。	2	(2)	講義	2～	

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講義・ 演習・ 実験等	対 象 年 次	備 考
社会系教科内容 講義（哲学）	日常生活において私たちが突き当たるさまざまな哲学・倫理学的問題に対して、論理的かつ批判的に考えることができるようになることを目標とする。 哲学・倫理学にかかわる具体的な諸問題について、毎回テーマを設定し、ディスカッションを行いながら、テーマについての理解を深める。 必要に応じて、それらの問題を哲学的に論じるために必要な、哲学・倫理学のさまざまな知見を概説する。具体的には、哲学史的な知識のほかに、現代正義論、生命倫理学・環境倫理学等の現代的諸問題に関する基本的な概念と考え方について、必要に応じて概説する。	2	(2)	講義	2～	
社会系教科内容 基礎演習（日本 史 A）	小中高の歴史学習の場で使用される教科書の内容を正確に理解するためには、教科書記述の背景にある学術的な専門知識を身につけることが肝要である。また、児童生徒に史資料を活用した読み取り作業を行わせるためには、教員の側が史資料に関する基礎的な知識と技能を持つ必要がある。そこで、本演習では、教科書記述の背景にある諸学説や先行研究の整理方法、学術論文の教育への活用法、そして、史資料の取り扱いなどに関する基礎的な知識と技能について学び、報告と討論を通して教科書記述と日本史学に関する基礎的な知識を身につける。	2	(2)	演習	3～	4単位以上 選択必修
社会系教科内容 基礎演習（日本 史 B）	小中高の歴史学習の場で使用される教科書の内容を正確に理解するためには、教科書記述の背景にある学術的な専門知識を身につけることが肝要である。また、児童生徒に史資料をもとに意見交換や討論を行わせるためには、教員の側が史資料に関する専門的な知識と技能を身につけている必要がある。そこで、本演習では、教科書記述の背景にある諸学説や先行研究の整理方法、学術論文の教育への活用法、そして、史資料の取り扱いなどに関するより高度な知識と技能を習得し、報告と討論を通して歴史を多角的・多面的に見る眼を養うことを目指す。	2	(2)	演習	3～	
社会系教科内容 基礎演習（外国 史 A）	西洋史を中心に、歴史研究における専門的な思考法や分析手段の基礎を理解するとともに、中学校社会科の歴史的分野や高等学校地理歴史科の授業づくりに応用することができることを目標とする。歴史教育や歴史教科書の背景知識として、歴史研究における専門的な思考法や分析手段の基礎を学ぶために、歴史研究に関する入門書を講読し、相互間での討論をもとに理解を深めつつ、受講者当人もまた、それらの内容に関連する文献を独自に調査する。	2	(2)	演習	3～	
社会系教科内容 基礎演習（外国 史 B）	西洋史を中心に、歴史研究における専門的な思考法や分析手段の理解に基づき、自身で文献や史料を実践的に読解・分析するとともに、中学校社会科の歴史的分野や高等学校地理歴史科の授業づくりに応用することができることを目標とする。歴史教育や歴史教科書の背景知識として、歴史研究における専門的な思考法や分析手段の理解を深めるために、近年の研究動向に関する解説書を講読するとともに、受講者当人が自身の課題を独自に調査するうえで必要な、具体的な学術文献及び史料の読解を実体験する。	2	(2)	演習	3～	
社会系教科内容 基礎演習（人文 地理学 A）	本授業は、人文地理学に関する基本的な考え方や分析方法について、人口、自然と歴史、産業、交通、文化といったトピックスに注目し、それらに関する基礎的な文献や学術雑誌を取り上げる。加えて、現代の地域問題に関するテーマについて、統計データや資料に基づいてプレゼンテーションを実施し、社会科地理的分野の授業の教材づくりを目指す。	2	(2)	演習	3～	

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講 義 ・ 演 習 ・ 実 験 等	対 象 年 次	備 考
社会系教科内容 基礎演習（人文 地理学 B）	本授業は、人文地理学に関する基本的な考え方や分析方法について、人口、自然と歴史、産業、交通、文化といったトピックスに注目し、それらに関する基礎的な文献や学術雑誌を取り上げる。加えて、現代の地域問題に関するテーマについて、統計データや資料に基づいてプレゼンテーションを実施し、社会科地理的分野の授業の教材づくりを目指す。	2	(2)	演習	3～	
社会系教科内容 基礎演習（自然 地理学 A）	中学校社会科の地域学習に求められる自然地理学の基礎的知識・概念の習得を目標とする。自然地理学の専門書講読を通じて、中学校社会科の地域学習で扱われる地形・気候・植生などの土地の自然環境に関わる基礎的知識・概念を習得する。	2	(2)	演習	3～	
社会系教科内容 基礎演習（自然 地理学 B）	中学校社会科の地域学習に求められる自然地理学的知識・概念への習熟を目標とする。自然地理学関係の学会誌に掲載された論文の講読を通じて、中学校社会科の地域学習で扱われる地形・気候・植生などに関わる最新の知見を学び、自然地理学的知識・概念にさらに習熟する。	2	(2)	演習	3～	
社会系教科内容 基礎演習（政治 学 A）	政治学の基本文献の講読とディスカッションを通じて、政治学における基礎的概念と教養の習得を行う。	2	(2)	演習	3～	
社会系教科内容 基礎演習（政治 学 B）	政治学の基本文献の講読とディスカッションを通じて、現代政治の諸問題を批判的に考察する能力を習得する。またテキストの批判的読解を踏まえた上で、自己の考えをまとめ表現する能力を身につける。	2	(2)	演習	3～	
社会系教科内容 基礎演習（社会 学 A）	現代社会における具体的な事象についての①問題発見、②先行研究等による事象分析、③課題解決の糸口を探るという一連のプロセスについて、思考、分析力を身につけることを目標とする。現代社会学理論の文献講読とセッション、研究報告を行う。	2	(2)	演習	3～	
社会系教科内容 基礎演習（社会 学 B）	現代社会における具体的な事象についての①問題発見、②先行研究等による事象分析、③課題解決の糸口を探るという一連のプロセスについて、思考、分析力を身につけることを目標とする。現代社会学理論の文献講読とセッション、研究報告を行う。	2	(2)	演習	3～	
社会系教科内容 基礎演習（哲学 A）	哲学・倫理学にかかわる具体的な諸問題について、毎回テーマを設定し、ディスカッションを行いながら、テーマについての理解を深める。 必要に応じて、それらの問題を哲学的に論じるために必要な、哲学・倫理学のさまざまな知見を概説する。具体的には、哲学史的な知識のほかに、現代正義論、生命倫理学・環境倫理学等の現代的諸問題に関する基本的な概念と考え方について、必要に応じて概説する。 受講者が、日常生活において私たちが突き当たるさまざまな哲学・倫理学的問題に対して、論理的かつ批判的に考えることができるようになることを目指す。	2	(2)	演習	3～	
社会系教科内容 基礎演習（哲学 B）	哲学及び倫理学に関する基本的な考え方や概念を踏まえて、各回で設定されたテーマに関する現代的な諸課題を見出し、その解決に向けて自分なりにアプローチできるようになること及び、そのために哲学的・論理的な思考を身につけること、また自分のアイデアや意見をしっかり表現できるようになることを目標とする。 毎回、哲学及び倫理学における主要なテーマを設定し、そのテーマに関連する参考文献など既存の研究をサーベイしてその報告をしてもらう。また、その報告を踏まえてディスカッションを行い、自分なりの考え方を明確にしていく。研究テーマの設定およびディスカッションにおいて、哲学対話の手法を用いる。	2	(2)	演習	3～	

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講義・ 演習・ 実験等	対 象 年 次	備 考
社会系教科内容 基 礎 演 習 (社 会・地理歴史科 教育 A)	小学校社会科・中学校社会科の地理・歴史的分野と高等学校地理歴史科の授業づくりに関する基礎的な内容を理解し技能を身につけることを目標とする。小学校社会科・中学校社会科の地理・歴史的分野と高等学校地理歴史科の授業づくりに対する関心を高めるとともに、基礎的な内容を理解し技能を習得する。	2	(2)	演習	3～	
社会系教科内容 基 礎 演 習 (社 会・地理歴史科 教育 B)	小学校社会科・中学校社会科の地理・歴史的分野と高等学校地理歴史科の実践事例の分析に関する基礎的な内容を理解し技能を身につけることを目標とする。小学校社会科・中学校社会科の地理・歴史的分野と高等学校地理歴史科の実践事例の分析に関する基礎的な内容を理解し技能を習得する。	2	(2)	演習	3～	
社会系教科内容 基 礎 演 習 (社 会・公民科教育 A)	小学校社会科・中学校社会科の公民的分野および高等学校公民科の授業づくりに関する基礎的な内容を理解し技能を身につけることを目標とする。小学校社会科・中学校社会科の公民的分野および高等学校公民科の授業づくりに対する関心を高めるとともに、基礎的な内容を理解し技能を習得する。	2	(2)	演習	3～	
社会系教科内容 基 礎 演 習 (社 会・公民科教育 B)	小学校社会科・中学校社会科の公民的分野および高等学校公民科の実践事例の分析に関する基礎的な内容を理解し技能を身につけることを目標とする。小学校社会科・中学校社会科の公民的分野および高等学校公民科の実践事例の分析に関する基礎的な内容を理解し技能を習得する。	2	(2)	演習	3～	

注) 毎週授業時数欄の () は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表5-7 (英語)

言語・社会系教育コース 教科英語の学生は次の授業科目表から必修・選択必修の科目を含めて32単位以上履修してください。

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講義・ 演習・ 実験等	対 象 年 次	備 考
中等英語科内容 構成基礎論	中等英語科の指導において扱う内容について、英語学、英語文学、英語コミュニケーション、異文化理解の観点から、構成することができることを目標とする。中等英語科の指導において扱う内容について、英語学、英語文学、英語コミュニケーション、異文化理解の観点から考えたり、検討したりする。	2	(2)	講義	1～	必修
英語科内容概論 (英語学)	学校英文法の基礎となっている英語学の基本的知識を学習する。テキストを使いながらも、パワポを利用した講義を行う。	2	(2)	講義	1～	必修
英語科内容講義 (英語学)	音声学について学ぶことをとおして、英語音声について理解を深めるとともに、自らが英語を運用したり生徒に指導を行ったりするために必要な音声学に関する基礎的な知識と技能を身につけることができる。英語に関する基礎的な知識および技能のうち、英語の音声を構成する要素とその特徴、日本語音声との違いについて学ぶ。	2	(2)	講義	2～	必修
英語科内容演習 (英語学 A)	英語学意味論を学習する。テキストを講読しながら、演習を行う。	2	(2)	演習	2～	必修
英語科内容演習 (英語学 B)	英語学語用論を学習する。テキストを講読しながら、演習を行う。	2	(2)	演習	2～	必修

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講義・ 演習・ 実験等	対 象 年 次	備 考
英語科内容概論 (英語文学)	英語文学を代表する作品の文学史的な位置を知り、実際に作品を読んで英語表現を理解する力を養い、作者の生涯や作品の文化的背景について学び、広い文化的視野から作品理解を深める力を養う。イギリス文学（およびアイルランド文学）の作品を中心に引き上げ、各作品の重要な箇所は原文を読む。作品の背景に言及しながら、できるだけ多方面から作品を分析する。対象作品は英語文学を代表し、かつ日本においても良く知られる作品を取り上げる。	2	(2)	講義	1～	必修
英語科内容講義 (英語文学)	英語文学作品に共通する特定のテーマについて学び、作品を分析的に理解する力を養う。テキストをもとに英語文学を代表するさまざまな作家の文章を特定のテーマから分析し、作品の技法（表現、物語構成など）や作品の文化的背景について考察する。	2	(2)	講義	2～	必修
英語科内容演習 (英語文学 A)	英語文学の作品を精読し、様々な英語表現を学び、正確に英語を読み取る能力を身につけるとともに、英米の歴史や文化に対する理解を深める。授業では、英語文学の短編を題材に語学的、文学的側面から作品を読む。各授業回において、英文和訳、重要な語法、文法などの確認を随時行ない、コメント、ディスカッションをはさみながら作品を読み進めていく。毎回指定の担当者が担当箇所の発表、コメントを行う。	2	(2)	演習	2～	必修
英語科内容演習 (英語文学 B)	英語文学の作品を精読し、様々な英語表現を学び、正確に英語を読み取る能力を身につけるとともに、英米の歴史や文化に対する理解を深める。英語文学の短編を題材に、語学的、文学的側面から作品を読む。英文和訳、重要な語法、文法などの確認を随時行ない、コメント、ディスカッションをはさみながら作品を読み進めていく。毎回指定の担当者が担当箇所の発表、コメントを行う。	2	(2)	演習	2～	必修
英語科内容概論 (異文化理解)	英語圏の文化を扱った文献を講読し、英語圏の文化についての基本的な理解を深めつつ、多様な文化に触れ、異文化コミュニケーションに積極的に取り組む姿勢を身につけることを目標とする。イギリスの社会を概説したテキストをもとに毎回個別のテーマを設定して考察を進め、広く英語圏の文化への基本的な理解を深める。	2	(2)	講義	1～	必修
英語科内容演習 (異文化理解)	言語から文化まで日本語と英語を中心に違いを理解することを目指す。テキストを講読しながら、演習を行う。	2	(2)	演習	2～	必修
英語科内容基礎 演習(英会話 A)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと【やり取り】ができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話す。	1	(2)	演習	1～	1単位以上 選択必修
英語科内容基礎 演習(英会話 B)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと【やり取り】ができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話す。	1	(2)	演習	1～	
英語科内容基礎 演習(英会話 C)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと【やり取り】ができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話す。	1	(2)	演習	1～	
英語科内容基礎 演習(英会話 D)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと【やり取り】ができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話す。	1	(2)	演習	1～	

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講義・ 演習・ 実験等	対 象 年 次	備 考
英語科内容演習 (英会話A)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと〔やり取り〕ができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話す。	1	(2)	演習	2～	必修
英語科内容演習 (英会話B)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと〔やり取り〕ができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話す。	1	(2)	演習	2～	1単位以上 選択必修
英語科内容演習 (英会話C)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと〔やり取り〕ができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話す。	1	(2)	演習	2～	
英語科内容演習 (英会話D)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと〔やり取り〕ができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話す。	1	(2)	演習	2～	
英語科内容基礎 演習(英作文 A)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語を読んで、英語で書くことができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語を読んで、英語で書く。	2	(2)	演習	1～	必修
英語科内容基礎 演習(英作文 B)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語を読んで、英語で書くことができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語を読んで、英語で書く。	2	(2)	演習	1～	
英語科内容演習 (英作文A)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語を読んで、英語で書くことができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語を読んで、英語で書く。	2	(2)	演習	2～	必修
英語科内容演習 (英作文B)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語を読んで、英語で書くことができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語を読んで、英語で書く。	2	(2)	演習	2～	
英語科内容演習 (プレゼンテー ション)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと〔発表〕ができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて発表をする。	2	(2)	演習	3～	必修

注) 毎週授業時数欄の()は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表5-8 (数学)

理数系教育コース 教科数学の学生は次の授業科目表から必修・選択必修の科目を含めて32単位以上履修してください。

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講義・ 演習・ 実験等	対 象 年 次	備 考
中等数学科内容 構成基礎論	中等数学科内容構成とその背景にある数学を理解し、中等数学科内容の教授方法や教材研究・開発を行うための共通の基礎となる数学の基本事項に関する入門的講義である。	2	(2)	講義	1～	必修
数学科内容基礎 講義(代数学)	中学校・高等学校数学科の教科内容の基礎となる数学的背景として、行列と行列式の計算とその基本性質、および、連立方程式の一般的解法を身につけることを目標とする。数学の重要な柱の一つである線形代数学の基礎である行列と行列式の基本的事項、および、応用上重要な連立方程式の一般的解法について講義する。	2	(2)	講義	1～	必修

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講 義 ・ 演 習 ・ 実 験 等	対 象 年 次	備 考
数学科内容講義 (代数学A)	中学校・高等学校数学科の教科内容の数学的背景として、線形空間と線形写像の基本事項、および、行列の対角化を身につけることを目標とする。数学の重要な柱の一つである線形代数学の中心的概念であるベクトル空間と線形写像の基本的事項、および、応用上重要な行列の対角化について講義する。	2	(2)	講義	1～	2単位以上 選択必修
数学科内容講義 (代数学B)	中学校・高等学校数学科の教科内容の数学的背景として、複素数と一次分数変換の基本事項、および、2次、3次、4次の代数方程式の解の公式とそこから生じる代数的概念を身につけることを目標とする。複素数と一次分数変換、および、対称式と代数方程式の解の公式についての基礎理論を体系的に講義する。	2	(2)	講義	2～	
数学科内容演習 (代数学系A)	中学校・高等学校数学科の教科内容の数学的背景として、整数や多項式を扱う際の基礎概念として可換環論の基礎、とくに、割り算原理から単項イデアル整域における素元分解の一意性に関する基本事項を身につけることを目標とする。整数や多項式を扱う数学的体系としての可換環論の基礎、とくに、割り算原理から単項イデアル整域における素元分解の一意性について講義および演習をする。	2	(2)	演習	2～	
※数学科内容演習 (代数学系B)	中学校・高等学校数学科の教科内容の数学的背景として、演算とその役割から生じる代数的構造としての群の基本事項を理解し、その具体的な取り扱いを身につけることを目標とする。演算とその役割から生じる代数的構造としての群、群の関係を調べる準同型写像、および、群の構造の分類、群の作用について講義および演習をする。	2	(2)	演習	3～	
数学科内容基礎 講義（幾何学）	ユークリッド空間における図形（点集合）を扱う上で基本となる距離と位相に関する基本事項（開集合、閉集合、コンパクト性、連結性、および連続写像の性質）をテーマとして、それらを理解することを目標とする。ユークリッド空間における距離と位相に関する基本事項について具体例と共に紹介する。	2	(2)	講義	1～	必修
数学科内容講義 (幾何学A)	平面幾何の基本となる公理と、直線、線分、角、三角形等の図形や三角形の合同定理をテーマとし、それらと関連する定理を証明と共に理解し図形の性質を調べられることを目標とする。平面幾何学の基本的な概念や図形の性質について、幾何学の公理系に触れながら講義する。直線、角、三角形等の基本的な図形の性質と三角形の合同定理や関連する定理を扱う。	2	(2)	講義	2～	2単位以上 選択必修
数学科内容講義 (幾何学B)	平面幾何の基本となる公理と、三角形、四辺形、円等の図形や三角形の相似定理をテーマとし、それらと関連する定理を証明と共に理解し図形の性質を調べられることを目標とする。平面幾何の基本的な概念や図形の性質について、幾何学の公理系に触れながら講義する。三角形、四辺形、円等の基本的な図形の性質と三角形の相似定理と関連する定理を扱う。	2	(2)	講義	2～	
数学科内容演習 (幾何学系A)	平面曲線、空間曲線、空間内の曲面等の図形をテーマとし、それらの表示方法と具体例、および曲率等の基本概念を理解し、具体的な曲線・曲面の曲率等を計算できることを目標とする。平面曲線、空間曲線、空間内の曲面等の図形の表示方法と曲率等の基本概念を理解するための解説・演習を行う。	2	(2)	演習	2～	
※数学科内容演習 (幾何学系B)	ユークリッド幾何とは異なるいろいろな幾何学をテーマとし、特徴的な定理を通じてユークリッド幾何との違いを理解することを目指す。非ユークリッド幾何学（双曲幾何）と射影幾何学の考え方と主要な定理、およびそれらとユークリッド幾何との違いを理解するための解説・演習を行う。	2	(2)	演習	3～	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
数学科内容基礎講義（解析学）	数学を学ぶ上で基本となる実数の性質について、数列の収束性や（1変数）関数の極限、連続性を通して学ぶ。特に、数学的事実を論理的に導いていく過程を体感し、それを少しずつ実践できるようになることを目標とする。 実数に関するいくつかの公理を前提として、それを基にして実数や数列、連続関数に関する様々な性質が論理的に導かれることを詳細に講義し、レポート課題等によって授業内容のより深い理解を促す。	2	(2)	講義	1～	必修
数学科内容講義（解析学 A）	1変数関数の微分と積分の一般論について、高校で学習した内容をより厳密な観点から学び直す。特に、積分の概念の本来の意味付けや、指数関数、三角関数を厳密に定義する方法について理解することを目標とする。 数学科内容基礎講義（解析学）の授業内容を前提として、1変数関数の微分と積分に関する一般論、及び、指数関数、三角関数の（1つの）厳密な定義についてを詳細に講義し、レポート課題等によって授業内容のより深い理解を促す。	2	(2)	講義	1～	必修
数学科内容講義（解析学 B）	1変数の関数列、関数項級数及び多変数関数の微分に関する一般論について学ぶ。講義においては、数学科内容講義（解析学 A）で学んだ1変数関数の微分、積分の一般論を用いて、関数列、関数項級数及びテイラー級数の収束性について述べる。更に、数学科内容講義（代数学 A）までで学んだ線形代数学の知識と数学科内容基礎講義（幾何学）で学んだ写像、関数の極限、連続性の概念を用いて、多変数関数の偏微分に関する一般論について論理的かつ厳密に述べていく。特に、陰関数、逆写像の微分や極値問題について理解することを目標とする。また、レポート課題等により、授業内容の理解を深めていく。	2	(2)	講義	2～	2単位以上選択必修
数学科内容演習（解析学系 A）	多次元ユークリッド空間におけるジョルダン測度及び多変数関数の重積分に関する一般論について学ぶ。講義においては、数学科内容基礎講義（幾何学）で学んだ集合の内部、閉包の概念を用いて、ジョルダン測度の一般論について述べ、この概念と数学科内容講義（解析学 B）で学んだ多変数関数の微分に関する一般論を用いて、多変数関数の重積分に関する一般論について論理的かつ厳密に述べていく。特に、集合のジョルダン可測性や重積分と累次積分の違い等を理解し、累次積分の公式、変数変換の公式等を用いて重積分の計算ができるようになることを目標とする。また、演習等により、授業内容の理解を深めていく。	2	(2)	演習	2～	
※数学科内容演習（解析学系 B）	複素関数論の一般論とその応用について学ぶ。講義においては、数学科内容講義（解析学 A）で学んだ1変数関数の微分、積分に関する一般論と数学科内容講義（解析学 B）で学んだ1変数の関数列、関数項級数及び多変数関数の微分に関する一般論を用いて、複素関数論の一般論について論理的かつ厳密に述べていく。特に、複素微分と実2変数関数の微分との違いやコーシーの積分定理、積分公式について理解し、そこから派生する複素関数論の理論の美しさを体感することを目標とする。また、演習等により、授業内容の理解を深めていく。	2	(2)	演習	2～	
数学科内容講義（確率論・統計学 A）	確率論の基礎的事項について、数学的視点から測度論、積分論を通して学ぶ。特に、確率論における事象、確率測度、確率分布、確率変数、平均、分散等の概念を、測度論、積分論を通して数学的に理解することを目標とする。 中等数学科内容構成基礎論、数学科内容基礎講義（解析学）、数学科内容講義（解析学 A）の授業内容を前提として、測度論、積分論を通して確率論の基礎事項を講義し、レポート課題等によって授業内容のより深い理解を促す。	2	(2)	講義	3～	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
数学科内容講義（確率論・統計学B）	確率論におけるやや発展的な事項について、数学的視点からこれを概観し、統計学との関係について学ぶ。講義においては、測度論、積分論を用いて数学科内容講義（確率論・統計学A）で学んだ確率空間、確率変数、確率分布等の概念を基に、確率分布の平均、分散の計算方法や関連する事項について述べる。更に、確率変数の独立性と直積確率空間との関係について概観し、大数の法則、中心極限定理を通して確率論と統計学との関係について述べていく。また、レポート課題等により、授業内容の理解を深めていく。	2	(2)	講義	3～	
数学科内容講義（コンピュータ）	中学校・高等学校数学科の教科内容の背景となるコンピュータと数学の関わりについて、具体的なプログラミング実践を通して、プログラム言語の基本事項を理解し、具体的なプログラムの作成とその実行を身につけることを目標とする。コンピュータと数学の関わりについて、具体的なプログラミング実践を通して、プログラム言語の基本事項、および、具体的なプログラムの作成とその実行について講義する。	2	(2)	講義	2～	必修

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表5-9（理科）

理数系教育コース 教科理科の学生は次の授業科目表から必修・選択必修の科目を含めて32単位以上履修してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
中等理科内容構成基礎論	理科の内容構成の背景となる学問に関する学術的な専門知識と、教材として実際的かつ具体的に構成していく活動との関連性について理論的に考察する力を獲得する。	2	(2)	講義	1～	必修
理科内容基礎講義（物理学A）	物理学の基本である力学について、運動方程式を用いて物体の運動の解を導くことができるようになること、および、物体の運動において成り立つ法則の内容と、その法則を使って運動状態を導くことができるようになることを目標とする。物理学の最も基本的な原理である力学は、エネルギー保存則や運動量保存則など、我々の自然観の根幹をなすものであり、あらゆる科学の基礎となる。	2	(2)	講義	1～	必修
理科内容基礎講義（物理学B）	物理学の基礎となる振動・波動現象を学ぶ。数式の導出方法を理解し、様々な現象の共通点を理解する。また様々な授業形式を経験する。アクティブラーニング形式を取り入れ、振動・波動現象を理解し、必要な数式を導出する。	2	(2)	講義	2～	必修
理科内容基礎講義（化学A）	化学は物質の性質とその変化、反応を扱う科学である。これを理解するために必要となる法則や原理などの理論的側面と種々の物質の反応等について、主にイオンと分子の観点から述べる。	2	(2)	講義	1～	必修
理科内容基礎講義（化学B）	化学は物質の性質とその変化、反応を扱う科学である。これを理解するために必要となる法則や原理などの理論的側面と種々の物質の反応等について、主に電子とエネルギーの観点から述べる。	2	(2)	講義	2～	必修
理科内容基礎講義（生物学A）	中学校や高等学校の学習指導要領・教科書で扱われている生命現象のうち、個体レベルや生態系レベルなど、マクロなレベルでの事項について取り上げる。具体的には、生物の起源・進化・環境応答・行動・生殖・生態系・保全などに関する基礎的事項について学ぶ。	2	(2)	講義	1～	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
理科内容基礎講義（生物学B）	中学校や高等学校の学習指導要領・教科書で扱われている生命現象のうち、分子レベルや細胞レベルなど、ミクロなレベルでの事項について取り上げる。具体的には、遺伝子発現・細胞周期・受精・酵素反応・免疫反応などに関する基礎的事項について学ぶ。	2	(2)	講義	2～	必修
理科内容基礎講義（地学A）	地球や惑星を構成する物質を理解し、天体の運動を定量的に考え、さらに、地球を含む惑星や衛星の内部構造・表層環境を理解し、太陽系の進化、銀河系、宇宙のしくみを・なりたちを理解することを目標とする。地球・惑星・天文分野の内容について深い知識と原理を理解する。	2	(2)	講義	1～	必修
理科内容基礎講義（地学B）	大気科学の基本的な事項、主に大気の成分、構造、運動などについて理解することを目標とする。大気科学の基本的事項について解説し、大気さまざまな現象や地球環境に関する物理的な基本法則を理解する。	2	(2)	講義	2～	必修
理科内容応用講義（物理学）	電磁気学分野は目に見えないから不得意とよく云われる。しかし、身の回りは電化製品・ICTで溢れ、電磁気学の帰結として発見された電磁波（光）は自然界に限らず我々の身の回りの様々な機器で利用されており、教員としては理解しないでは要られない分野になっている。本講義では、力学との対比を基に電磁気学で重要な「場」の概念を理解し、静電場・静磁場から電磁波の基礎を講義する。受講者にグループを作ってもらい、演習を中心に行いたいと考えている。	2	(2)	講義	3～	4単位以上 選択必修
理科内容応用講義（化学）	理科内容基礎講義（化学A）（化学B）での学修の上に立ち、化学反応や分析化学に関わる事項、元素・化合物・同位体の性質とそれらの利用についてより深く学ぶ。さらに、環境中で様々な物質がどのように分布・挙動し、影響しているかを学ぶ。	2	(2)	講義	3～	
理科内容応用講義（生物学）	本講義では、理科の教科内容のうち、生物学分野での学習と認識されながらも、他分野との関連性が比較的強い事項について、理科内容学習の応用として学ぶ。具体的には、中学校や高等学校の学習指導要領・教科書で扱われている生命現象のうち、理科の他分野（物理学・化学・地学）や数学、地理学など、分野横断的で社会的に関心の高い事項について取り上げ、最新の知見を含めて詳しく解説する。	2	(2)	講義	3～	
理科内容応用講義（地学）	宇宙の構造・進化、地球表層の大気と海洋の基本的な事項、地層・堆積物・岩石・化石などに記録される自然環境の変遷過程について学び、宇宙と地球について基礎的なことを理解する。天文分野では、宇宙の時間・空間スケール、元素の起源、星の進化、惑星の形成、天体の運動、物理状態を扱う。気象分野では、地球大気の科学と地球環境について解説する。地質・固体地球分野では、地球の生命と環境がどのような過程を経て成立したのかを体系的に学び、地球環境をとりまく諸問題を地球科学的な立場からの確に捉える視点を養成する。	2	(2)	講義	3～	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
理科内容基礎演習（物理学）	初等の量子力学や相対論、あるいは熱力学を学ぶ。初等量子力学では、原子や電子といったミクロの現象について学ぶ。この分野で重要な自然現象と、それを予想あるいは説明するための理論を比較しながら、近代物理学の基礎である量子論の概念を学ぶ。特に、シュレディンガー方程式を使った簡単なエネルギー固有値問題が解けるようになることを目標とする。熱力学では、エネルギー保存則やエントロピー増大則を学ぶ。特に、気体や液体の性質と原子分子の運動との結びつきを理解すること、熱力学第1法則と第2法則、そしてエントロピーの意味を理解すること、を目標とする。	2	(2)	演習	3～	2単位以上 選択必修
理科内容基礎演習（化学）	炭素を中心とする有機化合物は、現在までに知られている全化合物中の9割以上を占めると言われている。これらの膨大な有機化合物の構造・性質・反応などに関する発展的内容を講述し、演習を通して体系的に理解できることを目標とする。	2	(2)	演習	3～	
理科内容基礎演習（生物学）	本演習では、生物学分野の講義や実験で学修した基礎的事項について、文献等を活用しながら演習形式の授業を行う。具体的には、動植物の形態、行動、生殖、進化、生態、環境教育などをテーマに、関連する本や論文、学習指導要領の内容等と照らし合わせながら受講者間で議論を進め、理解を深める。また、データの解析方法といった基礎的研究の実践方法についても理解する。	2	(2)	演習	3～	
理科内容基礎演習（地学）	地学分野の講義・実験での習得内容を基にして、各領域の内容をさらに深く理解することができる。教員として必要となる地学事象の教材化を検討できる。4年次の卒業研究に入るための基礎的な知識・技術を身につけられる。地学分野の講義・実験での習得内容を基にして、各領域の内容をさらに深く理解するとともに、理科教員として必要となる地学事象の教材化も含めた実践的な演習。4年次の卒業研究に入るためのトレーニングも含む。	2	(2)	演習	3～	
理科内容基礎実験（物理学）	基礎的な熱、光現象、電気実験、単振子による重力加速度定数の測定などを通し、さまざまな物理量を測定する実験方法についての理解を深める。また、コンピュータを活用して現象の解析や物理的概念を習得する。これらの観察や実験を通して柔軟な思考力や自分で現象を解析し、理由を考察する態度を養う。	2	(4)	実験・実習	2～	必修
理科内容基礎実験（化学）	物理化学、無機・分析化学、有機化学の基本的な実験手法やデータの解析法を修得するとともに、物質の基本的な性質やその変化である化学反応を自ら実験することにより学び、化学の理解を深める。	2	(4)	実験・実習	2～	必修
理科内容基礎実験（生物学）	野外での動植物の採集や分類、肉眼や顕微鏡による動植物の生体・組織・細胞の形態の観察、動植物や微生物を用いた簡単な生理・行動・生殖・遺伝に関する実験等を行う。その過程では、スケッチの描写法やレポートの作成法、パソコンを用いたデータ処理法なども学習する。	2	(4)	実験・実習	2～	必修
理科内容基礎実験（地学）	自然の中での地学的な現象や事物を理解するには、空間的にも時間的にもスケールの多様な観点から把握し認識することが必要と言える。この実験では、地学の各分野の基礎的な事項について理解を深めるとともに、観察・分析・解析などの作業を通してその方法を習得する。	2	(4)	実験・実習	2～	必修

注) 毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

③コース専門科目

コース専門科目は、所属するコースに応じて得意分野の専門性を身につけるために設けられている科目で、必修・選択必修の科目を含めて8単位の履修が必要です。中等教育専攻のコース専門科目は、「コース共通科目」、「コースピーク科目」、「演習系科目」の3種類の科目群で構成されています。「コース共通科目」については、中等教育専攻における2つのコースごとに、隣接した分野・領域にも目を向けながら、中等教育でのカリキュラムに対する総合的な資質・能力を身につけるための授業科目です。また、「コースピーク科目」については、それぞれのコースにおける教科の特徴に関連する教育内容をさらに深めて学んでいくための授業科目であり、「演習系科目」については、履修してきた各種の授業科目と卒業研究（卒業研究演習も含む）とを橋渡しすることをめざした授業科目です。

履修方法については以下の通りとなります。

- ・「コース共通科目」は、自分の所属するコースの科目2単位が必修になりますので留意してください。なお、必修以外のコース共通科目も授業担当教員の許可があれば履修可能です。
- ・「コースピーク科目」は、コース毎の授業科目表を参照して4単位以上履修してください（授業科目表5-10～授業科目表5-11）。

授業科目表5-10（言語・社会系教育コース）

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
言語・社会系教育における資質・能力	本講義では、まず、国語科、社会科、英語科で育成すべきそれぞれの資質・能力を明確化、具現化し、次いで、各教科等の内容について、相互の関連付けや横断を図ることを目的としている。具体的には、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力といった学習の基盤となる資質・能力や、主権者として求められる力、新たな価値を生み出す豊かな創造性、多様な他者と協働しながら目標に向かって挑戦する力、地域や社会における産業の役割を理解し地域創生等に生かす力等の現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力について扱う。	2	(2)	講義	1～	コース共通科目 必修
※国語科内容講義（国語学A）	国語学概論で学んだ基礎的知見と関連づけながら、韻音・アクセント、文法、日本語史など特定領域について理解を深め、自力でレポートの作成ができるようになることを目標とする。古代から現代に至る国語の変遷について、文献国語史的方法と言語地理学的方法の両面から相補的にアプローチする。講義を主とするが、文献資料の読解や語史を調べてまとめるなど演習的要素もまじえ、全国的な視野から日本語の歴史を理論的に考察する力を身につける。	2	(2)	講義	2～	コースピーク科目 4単位以上選択必修
※国語科内容講義（国語学B）	日本語の変遷について理解を深め、ことばの変化について文献資料や言語分布の両面から再構成し、自分のことばでまとめられるようになることを目標とする。上代（奈良時代以前）から現代に至る日本語の変遷について、文献国語史的方法と言語地理学的方法の両面から相補的にアプローチする。講義を主とするが、文献資料の読解や語史を調べてまとめるなど演習的要素もまじえて行なう。語源や意味・用法の変遷について疑問をもった際に、自力で解決する手立てを学んでいく。	2	(2)	講義	2～	
※国語科内容講義（国文学A）	国文学（近代・現代）をめぐる諸問題を、作品やその研究を読み解きながら検討する。国文学研究の基盤となる専門知識を得ることを目標とする。日本の近代・現代文学（児童文学を含む）をめぐる、テキストの問題、作者と作品の問題、ジャンルの特性の問題をはじめ、研究の基盤となる諸問題を検討する。その際、外国文学とその研究からの影響や他の学問領域とのかかわり等にも目配りをする。	2	(2)	講義	2～	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
※国語科内容講義（国文学B）	国文学（古典文学）をめぐる諸問題を、作品やその研究を読み解きながら検討する。国文学研究の基盤となる専門知識を得ることを目標とする。日本の古典文学をめぐる、テキストの問題、注釈・解釈とその歴史の問題、ジャンルの特性の問題をはじめ、研究の基盤となる諸問題を検討する。その際、近代文学研究との違いや、他の学問領域とのかかわり等にも目配りをする。	2	(2)	講義	2～	コース ピーク科目 4単位以上 選択必修
※国語科内容講義（漢文学）	漢詩鑑賞の基本的な姿勢や方法を身につけ、杜甫の詩を読んでその人間観・自然観・政治観を学ぶ。また、毎回の小テストを通じて漢文読解の基礎的能力を身につける。 「杜甫詩鑑賞（その1）」 盛唐の詩人杜甫の詩と生涯について、代表的な詩をじっくり読み味わいながら考えていく。詩の読解と鑑賞を通じて、杜甫の人間観や自然観、社会観や政治観を探り、現代に生きる私たちへのメッセージを読み取る。あわせて漢詩・漢文読解の基礎的方法を学ぶ。	2	(2)	講義	2～	
英語科内容基礎演習（英会話A）	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと【やり取り】ができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話す。	1	(2)	演習	1～	
英語科内容基礎演習（英会話B）	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと【やり取り】ができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話す。	1	(2)	演習	1～	
英語科内容基礎演習（英会話C）	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと【やり取り】ができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話す。	1	(2)	演習	1～	
英語科内容基礎演習（英会話D）	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと【やり取り】ができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話す。	1	(2)	演習	1～	
英語科内容演習（英会話A）	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと【やり取り】ができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話す。	1	(2)	演習	2～	
英語科内容演習（英会話B）	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと【やり取り】ができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話す。	1	(2)	演習	2～	
英語科内容演習（英会話C）	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと【やり取り】ができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話す。	1	(2)	演習	2～	
英語科内容演習（英会話D）	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと【やり取り】ができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話す。	1	(2)	演習	2～	
英語科内容基礎演習（英作文A）	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語を読んで、英語で書くことができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語を読んで、英語で書く。	2	(2)	演習	1～	
英語科内容基礎演習（英作文B）	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語を読んで、英語で書くことができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語を読んで、英語で書く。	2	(2)	演習	1～	
英語科内容演習（英作文A）	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語を読んで、英語で書くことができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語を読んで、英語で書く。	2	(2)	演習	2～	

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講 義 ・ 演 習 ・ 実 験 等	対 象 年 次	備 考
英語科内容演習 (英作文B)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語を読んで、英語で書くことができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語を読んで、英語で書く。	2	(2)	演習	2～	コース ピーク科目 4単位以上 選択必修
社会系教科内容 講義(日本史A)	小中高の歴史学習の場で使用される教科書の内容は国家の歴史を中心に記述されているが、歴史を多面的・多角的に見る眼を養い、今後の歴史教育を担っていくためには、国家の歴史のみならず地域の歴史についても熟知する必要がある。そこで、本講義では、日本の近世・近代史に関する基礎的な事項を確認した上で、ある地域(東北地方)において展開した歴史についても取り上げ講義していく。なお、報告とディスカッションも行う予定である。	2	(2)	講義	2～	
社会系教科内容 講義(外国史A)	19世紀近代との連続性の観点で捉えられがちであった17～18世紀ヨーロッパ国家・社会について、近年の研究動向に基づきつつ、その固有の特徴を解説する。フランス、イギリスといった西欧のみならず、スウェーデン、ポーランド、ロシア、プロイセン、ハプスブルク君主国など北欧・東欧諸国も広く対象とすることにより、近世ヨーロッパ国家の共通性ととともに、歴史的背景・条件に基づく地域的独自性の抽出を図る。さらに従来への見解や高校教科書の記述などとの比較を通じ、歴史的過去に関する理解・認識が固定的ではなく、常に更新される可能性を持つ構図を示す。	2	(2)	講義	2～	
社会系教科内容 講義(人文地理学)	戦後の日本社会がどのような変化を辿ってきたのか、その地理的特徴について説明する。現在、日本が直面している多くの問題は歴史的なつながりで生み出されていること、および地域間関係の中で形成されてきたことを理解することがねらいとなる。	2	(2)	講義	2～	
社会系教科内容 講義(自然地理学)	小学校社会科の地域学習における国土の特徴や自然災害に関する学習に焦点を当て、地形の特徴のとらえ方とその応用法を学ぶ。とくに土地利用と地形との関係のとらえ方、地形特性をふまえた災害理解を中心に授業を進める。	2	(2)	講義	2～	
社会系教科内容 講義(政治学)	本講義は「公共性」をテーマとし、「公的なもの」と「私的なもの」がどのような関係にあるか、その内実を検証し考察を行う。社会インフラ・公共交通機関・公教育・公衆衛生など、われわれの生活が「公共性」と深く結びついている点を確認し、「公的なもの」と「私的なもの」とのあるべき関係を問い直す。	2	(2)	講義	2～	
社会系教科内容 講義(社会学)	本講義では、社会学概論で学んだ社会理論等を基盤として、現代社会における具体的な社会事象／社会問題について、調査、報告、討議を行う。参加学生は、それぞれ自身の問題関心に照らしてテーマ設定し、授業で報告を行う。なお、報告テーマは、人種や民族、障害者等の差別・排外問題、格差・貧困問題、気候変動・災害など多岐にわたる。現代社会の仕組みと課題について、自分事として考えてもらいたい。	2	(2)	講義	2～	
社会系教科内容 講義(哲学)	日常生活において私たちが突き当たるさまざまな哲学・倫理学的問題に対して、論理的かつ批判的に考えることができるようになることを目標とする。 哲学・倫理学にかかわる具体的な諸問題について、毎回テーマを設定し、ディスカッションを行いながら、テーマについての理解を深める。 必要に応じて、それらの問題を哲学的に論じるために必要な、哲学・倫理学のさまざまな知見を概説する。具体的には、哲学史的な知識のほかに、現代正義論、生命倫理学・環境倫理学等の現代的諸問題に関する基本的な概念と考え方について、必要に応じて概説する。	2	(2)	講義	2～	

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講義・ 演習・ 実験等	対 象 年 次	備 考
応用演習（中等教育専攻）	中等教育専攻における言語・社会系教育コースのそれぞれの教科の教育理念に即しながら、学生各自の研究テーマについて卒業研究につなげていくことをめざした科目である。すなわち、これまで修得してきた大学での授業科目（専門基盤科目および専門教育科目）および大学内外での実践的な体験活動などについて、それらと卒業研究（卒業研究演習も含む）とを橋渡しする性格を持たせることによって、卒業研究（卒業研究演習も含む）の学修においても、教員養成大学としての学修成果にも配慮していくことをめざした科目である。履修については、卒業論文の指導教員（主査および副査）が4年次の学生を対象にして開講することを基本とする。	2	2	演習	4	演習系科目 必修

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表5-11（理数系教育コース）

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講義・ 演習・ 実験等	対 象 年 次	備 考
数理・自然科学概論	数理・自然科学の各専門分野について入門的な内容を論述し、数理的な関わりを通して理数系教育に共通する素養を育む。	2	(2)	講義	1～	コース共通科目 必修
数学科内容基礎概論	中学校・高等学校数学科の背景にある数学の基本的内容の幾つかについて、具体的な対象や題材を通じて理解すると共に、教材研究を行う上でその基礎となる素養を身につけるための講義を行う。例えば、自然数から有理数（ペアノの公理、演算法則、記数法、除法の原理、ユークリッドの互除法、1次不定方程式、素数と素因数分解、合同式など）、実数の小数表示（実数の性質、数列の極限、無限級数）、平面図形・立体図形とそれらの面積・体積などから、関連する各専門分野における抽象的概念を具体的な対象や題材を通じて理解することを目標とする。	2	(2)	講義	1～	コース ピーク科目 4単位以上 選択必修
数学科内容講義（代数学A）	中学校・高等学校数学科の教科内容の数学的背景として、線形空間と線形写像の基本事項、および、行列の対角化を身につけることを目標とする。数学の重要な柱の一つである線形代数学の中心的概念であるベクトル空間と線形写像の基本事項、および、応用上重要な行列の対角化について講義する。	2	(2)	講義	1～	
数学科内容講義（代数学B）	中学校・高等学校数学科の教科内容の数学的背景として、複素数と一次分数変換の基本事項、および、2次、3次、4次の代数方程式の解の公式とそこから生じる代数的概念を身につけることを目標とする。複素数と一次分数変換、および、対称式と代数方程式の解の公式についての基礎理論を体系的に講義する。	2	(2)	講義	2～	
数学科内容演習（代数学系A）	中学校・高等学校数学科の教科内容の数学的背景として、整数や多項式を扱う際の基礎概念として可換環論の基礎、とくに、割り算原理から単項イデアル整域における素元分解の一意性に関する基本事項を身につけることを目標とする。整数や多項式を扱う数学的体系としての可換環論の基礎、とくに、割り算原理から単項イデアル整域における素元分解の一意性について講義および演習をする。	2	(2)	演習	2～	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
※数学科内容演習(代数学系B)	中学校・高等学校数学科の教科内容の数学的背景として、演算とその役割から生じる代数的構造としての群の基本事項を理解し、その具体的な取り扱いを身につけることを目標とする。演算とその役割から生じる代数的構造としての群、群の関係を調べる準同型写像、および、群の構造の分類、群の作用について講義および演習をする。	2	(2)	演習	3～	コース ピーク科目 4単位以上 選択必修
数学科内容講義(幾何学A)	平面幾何の基本となる公理と、直線、線分、角、三角形等の図形や三角形の合同定理をテーマとし、それらに関連する定理を証明と共に理解し図形の性質を調べられることを目標とする。平面幾何学の基本的な概念や図形の性質について、幾何学の公理系に触れながら講義する。直線、角、三角形等の基本的な図形の性質と三角形の合同定理や関連する定理を扱う。	2	(2)	講義	2～	
数学科内容講義(幾何学B)	平面幾何の基本となる公理と、三角形、四辺形、円等の図形や三角形の相似定理をテーマとし、それらに関連する定理を証明と共に理解し図形の性質を調べられることを目標とする。平面幾何の基本的な概念や図形の性質について、幾何学の公理系に触れながら講義する。三角形、四辺形、円等の基本的な図形の性質と三角形の相似定理と関連する定理を扱う。	2	(2)	講義	2～	
数学科内容演習(幾何学系A)	平面曲線、空間曲線、空間内の曲面等の図形をテーマとし、それらの表示方法と具体例、および曲率等の基本概念を理解し、具体的な曲線・曲面の曲率等を計算できることを目標とする。平面曲線、空間曲線、空間内の曲面等の図形の表示方法と曲率等の基本概念を理解するための解説・演習を行う。	2	(2)	演習	2～	
※数学科内容演習(幾何学系B)	ユークリッド幾何とは異なるいろいろな幾何学をテーマとし、特徴的な定理を通じてユークリッド幾何との違いを理解することを目指す。非ユークリッド幾何学(双曲幾何)と射影幾何学の考え方と主要な定理、およびそれらとユークリッド幾何との違いを理解するための解説・演習を行う。	2	(2)	演習	3～	
数学科内容講義(解析学B)	1変数の関数列、関数項級数及び多変数関数の微分に関する一般論について学ぶ。講義においては、数学科内容講義(解析学A)で学んだ1変数関数の微分、積分の一般論を用いて、関数列、関数項級数及びテイラー級数の収束性について述べる。更に、数学科内容講義(代数学A)までで学んだ線形代数学の知識と数学科内容基礎講義(幾何学)で学んだ写像、関数の極限、連続性の概念を用いて、多変数関数の偏微分に関する一般論について論理的かつ厳密に述べていく。特に、陰関数、逆写像の微分や極値問題について理解することを目指す。また、レポート課題等により、授業内容の理解を深めていく。	2	(2)	講義	2～	
数学科内容演習(解析学系A)	多次元ユークリッド空間におけるジョルダン測度及び多変数関数の重積分に関する一般論について学ぶ。講義においては、数学科内容基礎講義(幾何学)で学んだ集合の内部、閉包の概念を用いて、ジョルダン測度の一般論について述べ、この概念と数学科内容講義(解析学B)で学んだ多変数関数の微分に関する一般論を用いて、多変数関数の重積分に関する一般論について論理的かつ厳密に述べていく。特に、集合のジョルダン可測性や重積分と累次積分の違い等を理解し、累次積分の公式、変数変換の公式等を用いて重積分の計算ができるようになることを目標とする。また、演習等により、授業内容の理解を深めていく。	2	(2)	演習	2～	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
※数学科内容演習(解析学系B)	複素関数論の一般論とその応用について学ぶ。講義においては、数学科内容講義(解析学A)で学んだ1変関数の微分、積分に関する一般論と数学科内容講義(解析学B)で学んだ1変数の関数列、関数項級数及び多変数関数の微分に関する一般論を用いて、複素関数論の一般論について論理的かつ厳密に述べていく。特に、複素微分と実2変数関数の微分との違いやコーシーの積分定理、積分公式について理解し、そこから派生する複素関数論の理論の美しさを体感することを目標とする。また、演習等により、授業内容の理解を深めていく。	2	(2)	演習	2～	コース ピーク科目 4単位以上 選択必修
数学科内容講義(確率論・統計学B)	確率論におけるやや発展的な事項について、数学的視点からこれを概観し、統計学との関係について学ぶ。講義においては、測度論、積分論を用いて数学科内容講義(確率論・統計学A)で学んだ確率空間、確率変数、確率分布等の概念を基に、確率分布の平均、分散の計算方法や関連する事項について述べる。更に、確率変数の独立性と直積確率空間との関係について概観し、大数の法則、中心極限定理を通して確率論と統計学との関係について述べていく。また、レポート課題等により、授業内容の理解を深めていく。	2	(2)	講義	3～	
理科内容応用講義(物理学)	電磁気学分野は目に見えないから不得意とよく云われる。しかし、身の回りは電化製品・ICTで溢れ、電磁気学の帰結として発見された電磁波(光)は自然界に限らず我々の身の回りの様々な機器で利用されており、教員としては理解しないでは要られない分野になっている。本講義では、力学との対比を基に電磁気学で重要な「場」の概念を理解し、静電場・静磁場から電磁波の基礎を講義する。受講者にグループを作ってもらい、演習を中心に行いたいと考えている。	2	(2)	講義	3～	
理科内容応用講義(化学)	理科内容基礎講義(化学A)(化学B)での学修の上に立ち、化学反応や分析化学に関わる事項、元素・化合物・同位体の性質とそれらの利用についてより深く学ぶ。さらに、環境中で様々な物質がどのように分布・挙動し、影響しているかを学ぶ。	2	(2)	講義	3～	
理科内容応用講義(生物学)	本講義では、理科の教科内容のうち、生物学分野での学習と認識されながらも、他分野との関連性が比較的強い事項について、理科内容学習の応用として学ぶ。具体的には、中学校や高等学校の学習指導要領・教科書で扱われている生命現象のうち、理科の他分野(物理学・化学・地学)や数学、地理学など、分野横断的で社会的に関心の高い事項について取り上げ、最新の知見を含めて詳しく解説する。	2	(2)	講義	3～	
理科内容応用講義(地学)	宇宙の構造・進化、地球表層の大気と海洋の基本的な事項、地層・堆積物・岩石・化石などに記録される自然環境の変遷過程について学び、宇宙と地球について基礎的なことを理解する。天文分野では、宇宙の時間・空間スケール、元素の起源、星の進化、惑星の形成、天体の運動、物理状態を扱う。気象分野では、地球大気の科学と地球環境について解説する。地質・固体地球分野では、地球の生命と環境がどのような過程を経て成立したのかを体系的に学び、地球環境をとりまく諸問題を地球科学的な立場からの確に捉える視点を養成する。	2	(2)	講義	3～	
理科内容基礎演習(物理学)	初等の量子力学や相対論、あるいは熱力学を学ぶ。初等量子力学では、原子や電子といったミクロの現象について学ぶ。この分野で重要な自然現象と、それを予想あるいは説明するための理論を比較しながら、近代物理学の基礎である量子論の概念を学ぶ。特に、シュレディンガー方程式を使った簡単なエネルギー固有値問題が解けるようになることを目標とする。熱力学では、エネルギー保存則やエントロピー増大則を学ぶ。特に、気体や液体の性質と原子分子の運動との結びつきを理解すること、熱力学第1法則と第2法則、そしてエントロピーの意味を理解すること、を目標とする。	2	(2)	演習	3～	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
理科内容基礎演習（化学）	炭素を中心とする有機化合物は、現在までに知られている全化合物中の9割以上を占めると言われている。これらの膨大な有機化合物の構造・性質・反応などに関する発展的内容を講述し、演習を通して体系的に理解できることを目標とする。	2	(2)	演習	3～	コース ピーク科目 4単位以上 選択必修
理科内容基礎演習（生物学）	本演習では、生物学分野の講義や実験で学修した基礎的事項について、文献等を活用しながら演習形式の授業を行う。具体的には、動植物の形態、行動、生殖、進化、生態、環境教育などをテーマに、関連する本や論文、学習指導要領の内容等と照らし合わせながら受講者間で議論を進め、理解を深める。また、データの解析方法といった基礎的研究の実践方法についても理解する。	2	(2)	演習	3～	
理科内容基礎演習（地学）	地学分野の講義・実験での習得内容を基にして、各領域の内容をさらに深く理解することができる。教員として必要となる地学事象の教材化を検討できる。4年次の卒業研究に入るための基礎的な知識・技術を身につけられる。地学分野の講義・実験での習得内容を基にして、各領域の内容をさらに深く理解するとともに、理科教員として必要となる地学事象の教材化も含めた実践的な演習。4年次の卒業研究に入るためのトレーニングも含む。	2	(2)	演習	3～	
理科応用実験	中等理科教員として必要な教育法や教科内容に関して、実験を通してさらに深く理解することを目標とする。4年次の卒業研究に入るためのトレーニングも含む。	1	(2)	実験・実習	3～	
応用演習（中等教育専攻）	中等教育専攻における理数系教育コースのそれぞれの教科の教育理念に即しながら、学生各自の研究テーマについて卒業研究につなげていくことをめざした科目である。すなわち、これまで修得してきた大学での授業科目（専門基盤科目および専門教育科目）および大学内外での実践的な体験活動などについて、それらと卒業研究（卒業研究演習も含む）とを橋渡しする性格を持たせることによって、卒業研究（卒業研究演習も含む）の学修においても、教員養成大学としての学修成果にも配慮していくことをめざした科目である。履修については、卒業論文の指導教員（主査および副査）が4年次の学生を対象にして開講することを基本とする。	2	2	演習	4	演習系科目 必修

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

5 専門教育科目 その5 卒業研究 (4単位)

卒業研究は、全専攻に共通して設定されている科目です。その内容、方法、履修の手順等は、所属する専攻・コースごとに定められています。また、卒業研究には参加資格があり、これに関しても専攻・コースによって必要単位数が異なります。

卒業研究の履修に関しては、**第14章**の説明を確認してください。

IX

第9章

芸術体育・生活系教育専攻 専門教育科目

1 専門教育科目 その1

教育の基礎的理解に関する科目 授業科目表6-1

2 専門教育科目 その2

道徳・総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、
教育相談等に関する科目 授業科目表6-2

3 専門教育科目 その3

キャリアステップアップ科目 授業科目表6-3

キャリアステップアップ科目 授業科目表6-4(中等連携履修型のみ)

4 専門教育科目 その4

教科及び教科の指導法に関する科目

①各教科の教育法(初等) 授業科目表6-5(小中履修型のみ)

②各教科の教育法(中等) 授業科目表6-6(小中履修型および中等連携履修型)

③各教科の教育法(中等) 授業科目表6-7(中等連携履修型のみ)

④小学校の専門科目 授業科目表6-8(小中履修型のみ)

⑤中学校の専門科目 授業科目表6-9(音楽)

授業科目表6-10(美術)

授業科目表6-11(保健体育)

授業科目表6-12(技術)

授業科目表6-13(家庭科)

授業科目表6-14(国語)(中等連携履修型のみ)

授業科目表6-15(英語)(中等連携履修型のみ)

授業科目表6-16(数学)(中等連携履修型のみ)

⑥コース専門科目 授業科目表6-17(芸術・体育系教育コース)

授業科目表6-18(生活系教育コース)

5 専門教育科目 その5 卒業研究

第9章

芸術体育・生活系教育専攻専門教育科目

この章では、芸術体育・生活系教育専攻の教育課程表（卒業に要する単位数）の中の「専門教育科目」について、「授業科目表」を掲載し、授業科目の詳細と履修方法を説明します。表の見方については、第2章「**5** 授業科目表の見方」を参照してください。

1 専門教育科目 その1 教育の基礎的理解に関する科目

教育の基礎的理解に関する科目の修得が必要な単位数は、各コース共通して10単位です。

教育の基礎的理解に関する科目に属する各授業科目の詳細と履修方法については、次の「**授業科目表6-1**」で確認してください。

なお、所属するコースによって履修できるクラスが定められている科目もありますので、『**開講科目一覧**』でクラス指定の指示も確認してください。

教育の基礎的理解に関する科目 授業科目表6-1

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
教育の原理	教育学の基礎的知識を身につけ、教育について原理的に考え、対話できるようになることを目標とする。また、西洋教育思想史と日本の教育実践思想史のポイントを理解することを目指す。 教育の理念・歴史・思想を含む、教育の基礎理論を学ぶ。表面的には多様な諸教育実践を根拠で支え成り立たせている教育の原理は、網羅的で概説的な手法ではとらえることができない。そこで、この講義では、表面的には隠されている教育の原理に迫る。	2	(2)	講義	2～	必修
教職入門	教職の意義や職務内容を理解し、適切な進路選択ができるように、自己の教師像を明確にし、そのために何が必要かを理解し、実際に準備を始める。また、教職の意義や職務内容を理解し教科指導と学級経営における教職の基礎・基本について学ぶ。	2	(2)	講義	1～	必修
教育の制度・経営	教育制度の原理や構成について理解し、学校・教員を取り巻く課題について理解し、解決の在り方について考察できるようになることを目標とする。教育制度の原理や構成について学び、それらを取り巻く状況や課題を分析し、原理の具現化として学級や学校経営の仕組みを捉える。	2	(2)	講義	1～	2単位以上 選択必修
教育と地域社会	現代社会における教育の意義や教育に関わる制度について基礎的知識を身につけ、教育現場における課題の解決に向けて考察することができるようになることを目標とする。学校の内外における教育のさまざまな取り組みについて現状を把握し、理論に基づく解決の方策を検討する。	2	(2)	講義	1～	
発達と学習の心理	発達と学習についての理論および実際について理解し、心理学的な知能の捉え方や、障害をもった児童・生徒の処遇などについて理解できるようになることを目標とする。内容については、発達と学習についての理論および実際について概説する。また、心理学的な知能の捉え方や、障害をもった児童・生徒の処遇などについても解説する。	2	(2)	講義	1～	必修
特別支援教育理解	特別な支援を必要とする子供たちへの対応は、特別支援学校に限らず全ての学びの場で行われること、小中学校等における障害のある子供たちへの教育・支援に関する基礎的知識を修得し、合理的配慮の必要性について理解することを目指す。内容については、多様な障害のある子供たちの実態、多様な学びの場におけるそうした子供たちとの関わり方について概説する。	2	(2)	講義	1～	必修

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

2 専門教育科目 その2 道徳・総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目

道徳・総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目の修得が必要な単位数は、各コース共通して10単位です。道徳・総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目に属する各授業科目の詳細と履修方法については、次の「授業科目表6-2」で確認してください。

なお、所属するコースによって履修できるクラスが定められている科目もありますので、『開講科目一覧』でクラス指定の指示も確認してください。

道徳・総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目 授業科目表6-2

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時間	講義・演習・実験等	対象年次	備考
道徳の理論及び指導	道徳教育・道徳発達に関する基礎的事項を理解し、説明できるようになるとともに、学習指導案の作成、指導の展開、評価ができるようになることを目標とする。 現在のわが国の道徳教育の問題点や課題について検討するとともに、道徳発達及び道徳教育に関する様々な理論と実践との関連について考察する。また、学習指導案の作成、指導の展開、評価、さらには現場における実践のあり方について考える。	2	(2)	講義	3～	必修
総合的な学習の時間の指導法（特別活動を含む。）	総合的な学習の時間を指導するために必要な、原理と方法を知る。特に、総合的な学習の時間における「探究」のあり方と、単元構成と学習展開の具体的方法について理解を深める。また、総合的な学習の時間と関連性の深い、特別活動を指導するための原理と方法を知る。教育課程（カリキュラム）全体の中における、総合的な学習の時間と特別活動の意義と位置づけを知る。	2	(2)	講義	3～	必修
教育課程と教育方法	教育活動を計画的・系統的・意図的に行うためには、教育課程（カリキュラム）を編成し、実施し、評価することが欠かせない。本講義では、 (1) 教育課程とは、学習指導要領を一つの基準としながら、授業実践における内容（what）と方法（how）とを一体のものとして、子どもの発達段階や社会的要請を踏まえながら編成されるものであることを学ぶ。その際、カリキュラム・マネジメントの視点を身につける。 (2) 教育内容がどのような考え方のもとに編成され、教え・学ぶことが可能なかたちに組み立てられるかについて学ぶ。 (3) 教育の方法および技術について考えるための基本的視座を提供し、それをもとに学習指導のあり方を検討する。ICT（情報機器及びオンライン教材）の活用についても学ぶ。	1	(1)	講義	2～	必修
情報活用能力育成実践論	この授業では、学校教員として求められる実践的な ICT 活用指導力を身に付けることを目標とします。具体的な内容としては、主に仙台市内の教員、附属小学校、中学校の教員から講義を受け、現場で実施されている ICT を活用した指導方法について学びます。学校現場で実際に実施されている内容を扱うため、具体的で実践的な知識や技術を学ぶことができます。	1	(1)	講義	2～	必修
児童・生徒理解	生徒指導・進路指導・キャリア教育の理論および実践について学び、児童・生徒の自己指導能力を育成するために必要な知識・技法や素養を身に付けることを目標とする。 生徒指導・進路指導・キャリア教育の意義や理論、および実践のための技法や課題等について講義する。正課の授業や課外活動、個別指導や全体指導、学級経営や校内・校外連携等のあらゆる機会や手段を通じて児童・生徒の個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高め、かつ児童・生徒の自己指導能力を育成するための教育実践とその課題について考察する。	2	(2)	講義	3～	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
教育相談（カウンセリングを含む。）	学校における教育相談の意義と課題を理解し、教育相談を進める際に必要な基礎的知識（カウンセリングに関する基礎的事柄を含む）を理解し、具体的な進め方やポイント、組織的な取り組みや連携の必要性を理解することを目標とする。 教育相談は幼児児童生徒が自己理解を深め、好ましい人間関係を築きながら、集団の中で適応的に生活する能力を育み、個性の伸長や人格の成長を支援する教育活動である。幼児児童生徒の発達段階に即して、個々の心理的特質や教育的課題を適切に捉え、支援に必要な基礎的知識とカウンセリングの意義、理論、技法を身につける。	2	(2)	講義	3～	必修

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

3 専門教育科目 その3 キャリアステップアップ科目

キャリアステップアップ科目の修得が必要な単位数は、各コース共通して、小中履修型の学生は17単位、中等連携履修型の学生は21単位です。

キャリアステップアップ科目に属する各授業科目の詳細と履修方法については、次の「**授業科目表6-3**」で確認してください。「実践指導法」科目は所属するコース・教科によって履修する授業科目が定められています。「備考欄」にその指示が記してありますので、自分が所属する教科の授業科目を履修してください。

また、中等連携履修型の学生は、所属する教科の他に、2枚目の中学校一種免許状の教科に関する「実践指導法」科目も、「**授業科目表6-4**」で確認して履修してください。

なお、所属するコースによって履修できるクラスが定められている科目もありますので、『**開講科目一覧**』でクラス指定の指示も確認してください。

「キャリアステップアップ科目」に関しては、**第11章**と**第12章**の説明をよく読んで履修してください。第12章に説明がありますが教育実習には履修資格が設けられています。

キャリアステップアップ科目 授業科目表6-3

教育実践探究演習科目は、取得しようとする中高免許状の各教科の実践指導法 A、B となりますのでご注意ください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
教育体験初年次演習Ⅰ	教育や子どもをめぐる問題についてクラスで討議したり、学校現場に出向いて教育活動や児童・生徒の様子を観察したりすることで、教員養成のキャリアステップアップの基礎づくりを行う。また、クラスで設定した課題の探究活動等を通して、大学での学修のための基礎技法を学ぶ。	2	(2)	演習	1～	必修
教育体験初年次演習Ⅱ	文献講読やクラス討議、学校現場での観察・体験を通して、児童・生徒の行動や心情を理解し、実態と課題を把握するとともに、児童・生徒との接し方、教職の魅力等を学ぶ。また、現代的教育課題等の探究を行いながら、キャリアステップアップの展望を得るとともに、専門分野の学修に必要な読解力、論理的思考力、表現力等を磨く。	2	(2)	演習	1～	必修
中等音楽科実践指導法（教育実践探究演習）A	中学校の音楽科教育において、歌唱、器楽、創作、鑑賞の授業を行う上で必要な基本的な音楽の知識と指導の技能を習得することを目標とする。概要としては、中学校の音楽科教育に必要な教材の理解や教材分析の方法の基礎について学ぶ。教科書分析や授業記録の検討といった文献研究と、附属学校での授業参観や研究授業の検討といった実践研究を、教育実習を実践する3年次学生と協働して進める。	2	(2)	演習	2～	必修 (音楽のみ)
中等音楽科実践指導法（教育実践探究演習）B	中学校の音楽科教育において、歌唱、器楽、創作、鑑賞の授業を実践する上で必要な音楽の知識と技能を、生徒の実態に即した授業開発と実践を通して身につけることを目標とする。中学校の音楽科教育に必要な教材の理解や教材分析の方法について、附属学校での教育実習で得られた経験と研究授業の検討を踏まえつつ、音楽科授業の実践的な指導力を身につける。	2	(2)	演習	3～	必修 (音楽のみ)
中等美術科実践指導法（教育実践探究演習）A	美術科の教育現場におけるカリキュラム構成の分析と検証を踏まえた上で、表現を実践する意義にテーマを当て、美術科教育の在り方に照らし合わせ、教育実践における地域の特性を生かした教育普及など全般的に学習する。さらに、中学校における授業作りに、自ら考え構想を練るなど、創造的な企画力を高め、幅広い授業作りの演習に取り組み、基本的な芸術文化の教育理念を体得し学習する。	2	(2)	演習	2～	必修 (美術のみ)

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
中等美術科実践指導法（教育実践探究演習）B	義務教育内での美術教育指導は職人や美術家養成ではない、実験的な技法を学び表現の楽しさ、生涯学習社会のなかでの今後のアートのあり方や「美術で教育」することを理解することを目標とする。学校美術科の教科書分析をはじめ、授業でも活用できるモダンテクニック等の技法を造形演習として行う。また現代の多様な表現を知り、ICT活用など今後の美術科教育のあり方を学ぶ。	2	(2)	演習	3～	必修 (美術のみ)
中等保健体育科実践指導法（教育実践探究演習）A	保健及び体育科の授業を創るために必要となる基礎的な知識を身につける。また、運動文化や身体に含まれる教材価値について理解・説明できる力を養う。加えて、授業を分析する方法を理解し、生徒の立場から授業の課題と改善点を考え、情報機器を使って表現する力を育む。運動文化や身体に含まれる教材価値と授業分析の方法について理解した上で、模擬授業に生徒役として参加し、授業の課題を見つけられるようにする。	2	(2)	演習	2～	必修 (保健体育のみ)
中等保健体育科実践指導法（教育実践探究演習）B	保健及び体育科の授業を創るために必要となる基礎的な知識を用いて授業プランを作成する力を身につける。また、模擬授業の実践を通じて生徒がわかり・できるようになっていく過程について体験し、教師の立場から授業の課題と改善点を考える力を育む。発問の意図や意義、教具の用い方、及び、効率的な教師行動について理解し、授業プランに反映させることができ、授業プランのプロセスを理解し、他のグループが作成した指導案を修正できるようになることを目標とする。	2	(2)	演習	3～	必修 (保健体育のみ)
中等技術科実践指導法（教育実践探究演習）A	・授業を考える上で基礎となる授業の記録や分析を通して、様々な視点で授業を理解する。 ・教材観を養い、自分がイメージする学習指導案を作成する。	2	(2)	演習	2～	必修 (技術のみ)
中等技術科実践指導法（教育実践探究演習）B	・自分がイメージする授業を行うことを前提として、専門的な教材研究と教材作成を行い、様々な教授スキルを習得しながら模擬授業を行う。 ・授業後には授業検討会を行い、自分自身の授業に対して客観的に分析する。	2	(2)	演習	3～	必修 (技術のみ)
中等家庭科実践指導法（教育実践探究演習）A	家庭科教育の指導案のもと（題材集）を作ることができ、家庭科教育の指導に必要な知識と技能を習得することを目標とする。家庭科の授業の特徴を捉え、教育目的に沿った教材開発について具体的に理解する。併せて、家庭科に必要な技能の習得を図る。	2	(2)	演習	2～	必修 (家庭科のみ)
中等家庭科実践指導法（教育実践探究演習）B	家庭科教育の指導に必要な知識と技能を習得し、授業を創造する力を身につける。中学校家庭科の指導で必要とされる技能面の習得を目指す、また、実習を取り入れ、実習題材の教材研究を深めると同時に模擬授業を実施する。	2	(2)	演習	3～	必修 (家庭科のみ)
中学校3年次実習（事前・事後指導1単位を含む。）	授業では、指導教諭の授業の学習の構成や流れ、発問の仕方、生徒の反応の生かし方などがどのように行われているのか観察させ、また、授業のねらい、教材の特徴、生徒の実態の視点を重視した実践授業に取り組ませる。さらに、題材や指導計画、本時の指導に際しての留意点を記した指導案を作成させ研究授業に取り組ませる。研究授業終了後には指導教諭と参観者による討議の場を設け、学ぶべき点や今後の課題、その解決のための方向性などを確認させる。そのほか、授業づくりのベースとなる生徒一人ひとりとの人間関係構築について、始業前や休み時間、放課後の諸活動、下校指導等も活用し実践させる。	3		実習 (事前・事後指導は講義)	3～	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
小学校4年次実習（事前・事後指導1単位を含む。）	教科の学習指導、特別活動、行事活動、学級経営、生徒指導等学校教育のすべての分野と、それを担当する教師の仕事の重要性について実際に学習、観察、体験させ研究させる。学習指導案を作成しての教壇実習は7時間以上経験させ、実習開始直後の導入的プログラムが終了した後は、1日1時間を目安に、特別活動や学級指導（朝の会、帰りの会、清掃指導、給食指導等）の教職に関する指導を実践させ、研究授業を設定する。 協力小学校における実習では、小学校における教科、特別活動の指導について、大学での講義と関連付けて理解を深めるとともに、配当学級のみならず実習校全体の学校目標や地域との関わりについても把握し、学校運営における教師の役割や任務等についてさらに学ばせる。	4		実習（事前・事後指導は講義）	4	必修（小中履修型のみ）
中学校4年次実習（事前・事後指導1単位を含む。）	教科の学習指導、特別活動、行事活動、学級経営、生徒指導等学校教育のすべての分野と、それを担当する教師の仕事の重要性について実際に学習、観察、体験させ研究させる。学習指導案を作成しての教壇実習は7時間以上経験させ、実習開始直後の導入的プログラムが終了した後は、1日1時間を目安に、特別活動や学級指導（朝の会、帰りの会、清掃指導、給食指導等）の教職に関する指導を実践させ、研究授業を設定する。 協力中学校における実習では、教師が学習者の視点をもつとともに、生徒が主体的・対話的に深く学ぶことができるような効果的な指導の在り方を探らせる。これら学習活動のほか、校務分掌等の学校・学級経営に関する事項についても学ばせる。	4		実習（事前・事後指導は講義）	4	必修（中等連携履修型のみ）
教職実践演習（中・高）	直接授業を担当する教員に加え、授業計画の立案や授業の具体的な展開の補佐及び教科の専門的知識の確認等に関して、教科専門教員及び学校現場経験者、本学附属学校教員との連携体制を構築する。中学校・高等学校教諭に相応しい資質や能力の確認を行い、各教科に即したこれまでの履修の在り方をまとめあげるとともに、実際の授業力に結びつける形で内容の総まとめを行う。	2	(2)	演習	4	必修

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

キャリアステップアップ科目 授業科目表6-4（中等連携履修型のみ）

教育実践探究演習科目は、取得しようとする中高免許状の各教科の実践指導法 A、B となりますのでご留意ください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
中等国語科実践指導法（教育実践探究演習）A	学習指導要領の目標や内容と国語科の指導理論の理解に基づいた、中学校国語科の授業づくりの基本的な方法を修得する。教材研究、学習指導案、模擬授業作りに共同して取り組む。	2	(2)	演習	2～	必修（国語のみ）
中等国語科実践指導法（教育実践探究演習）B	学習指導要領の目標や内容と国語科の指導理論の理解に基づいた、高等学校国語科の授業づくりの基本的な方法を修得する。教材研究、学習指導案、模擬授業作りに共同して取り組む。	2	(2)	演習	3～	必修（国語のみ）
中等英語科実践指導法（教育実践探究演習）A	中学校及び高等学校の英語科における5領域及び領域統合多々の指導技術と評価方法を身につける。具体的には、4技能5領域の指導、領域統合型の言語活動の指導、学習指導案の作成、言語能力の測定と評価等について学ぶ。	2	(2)	演習	2～	必修（英語のみ）

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
中等英語科実践指導法（教育実践探究演習）B	中学校及び高等学校の英語科と第二言語習得に関する知識を身につける。具体的には、目標設定・指導計画、学習到達目標に基づく授業の組み立て、学習指導案の作成、観点別学習状況評価・評価規準の設定・評定への総括、小・中・高等学校連携、第二言語習得等の内容を扱う。	2	(2)	演習	3～	必修 (英語のみ)
中等数学科実践指導法（教育実践探究演習）A	大学における履修済みの「教科及び教科の指導法に関する科目」の学習経験を生かして、生徒たちの多様な考えを生かして新たな学びを実現する場としての授業観を身につけるとともに、授業を改善する方法としての「授業研究」を体験を通して理解する。 授業の計画・改善の方法として国際的にも注目を集める「授業研究」を模擬的に実施することで、授業の構想から改善に至るまでの考え方やスキルを実践的・反省的に学ぶ。	2	(2)	演習	2～	必修 (数学のみ)
中等数学科実践指導法（教育実践探究演習）B	大学における履修済みの「教科及び教科の指導法に関する科目」の学習経験を生かして、生徒たちの多様な考えを生かして新たな学びを実現する場としての授業観を身につけるとともに、授業を改善する方法としての「授業研究」を体験を通して理解する。 授業の計画・改善の方法として国際的にも注目を集める「授業研究」を模擬的に実施することで、授業の構想から改善に至るまでの考え方やスキルを実践的・反省的に学ぶ。	2	(2)	演習	3～	必修 (数学のみ)

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

4 専門教育科目 その4 教科及び教科の指導法に関する科目

教科及び教科の指導法に関する科目の修得が必要な単位数は、各コース共通して、小履修型の学生は68単位、中等連携履修型の学生は64単位です。第5章の芸術体育・生活系教育専攻の教育課程表をよく確認し、履修型毎に履修が必要な授業科目を確認してください。

教科及び教科の指導法に関する科目に属する各授業科目の詳細と履修方法については、次の「**授業科目表6-5～18**」で確認してください。コース・教科・取得を希望する免許の種類によって履修する授業科目が定められている場合や、必要とする単位数が異なる場合は、「備考欄」にその指示が記してあります。

なお、所属するコースによって履修できるクラスが定められている科目もありますので、『**開講科目一覧**』でクラス指定の指示も確認してください。

①各教科の教育法（初等） 授業科目表6-5（小中履修型のみ）

芸術体育・生活系教育専攻各コースの小中履修型の学生は、次の表の科目を全て履修し、全20単位修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
初等国語科教育法	言語の教育としての国語科の授業づくりにおける教材研究とその方法について、学習指導要領をふまえて、授業づくりの基礎的な能力を習得することを目標とする。学習指導要領に示された目標及び育成すべき資質・能力をもとに、国語科の教科構造を理解しつつ、代表的な教材やその指導法について理解する。	2	(2)	講義	2～	必修
初等社会科教育法	小学校の社会科教育に関する目標・内容・方法・評価等について理解することを目標とする。小学校の社会科に関する各内容等の学習指導について、具体的な教材・授業を通して学ぶ。	2	(2)	講義	3～	必修
初等算数科教育法	教える側の視点から「算数教育」を捉えなおし、小学校算数科を担当するため、算数科の目標・内容・方法について最低限の理解を図る。概要としては、小学校で算数を教えるために最低限知っておきたい基礎を学ぶ。	2	(2)	講義	2～	必修
初等理科教育法	小中学校の理科は学習指要領の中で、エネルギー・粒子・生命・地球の4領域で構成されており、各領域は系統的に構成され、領域ごとの特徴に応じた教材と指導法がある。この講義では、各領域の系統性を理解し、教材と指導法の具体的な事例をもとに、授業の進め方や教材の取り扱いについて解説する。	2	(2)	講義	3～	必修
初等生活科教育法	小学校の生活科教育に関する目標・内容・方法・評価について理解することを目標とする。小学校の生活科に関する各領域等の学習指導について具体的な教材・授業を通して学ぶ。	2	(2)	講義	3～	必修
初等音楽科教育法	児童の心理的・音楽的な発達と音楽科教育の目的を踏まえた上で、小学校音楽科の授業を実践する上で必要な理念及び知識と、基礎的な音楽の技能及び指導法を身につける。教材研究に取り組み、新たな教材開発も念頭に受講生で協働して模擬授業を実践する。授業では各領域の教材研究のほか、歌唱や器楽、特にリコーダーの基礎的な技法について学び、音楽科の授業を実践する力を身につける。	2	(2)	講義	2～	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
初等図画工作科教育法	「創造的な教科としての図工・美術」としての造形演習や国内外の事例研究、授業の立て方についても学び構想力を高め、義務教育内での図工美術教育指導は職人や美術家養成ではない、「美術の教育」ではなく「美術で教育」であることや表現の多様性を理解することを目指す。小学校図画工作での「造形あそび」の造形演習などこれからの図画工作の授業を検討する。また国内外の多様な造形表現を知り、ICT活用など今後の図画工作教育のあり方を学ぶ。小学校図画工作科学習指導要領を内容と方法の視点から分析する。さらに「創造的な教科としての図工・美術」としての造形演習や事例研究、授業の立て方についても学び構想力を高める。	2	(2)	講義	2～	必修
初等家庭科教育法	実際の家庭科の授業を念頭において授業の目標、教材、教授行為などについて考察し、受講者が自ら授業を構想できることを目指す。実際の授業を追試するプロセスを経て、家庭科の授業づくりの能力を培う。教科書教材を用いる場合と自ら考え出す教材の場合とがあるが、それぞれの留意点を明らかにする。	2	(2)	講義	3～	必修
初等体育科教育法	学習指導要領の変遷から体育科の目的を考え、これまでの実践研究の成果や課題について学ぶとともに、教材づくりの目標・内容・方法、ICTの活用に関する知識や技能を習得する。また、全ての子どもが意欲的に学習に取り組めるような体育・保健の学習指導案の作成について理解する。	2	(2)	講義	2～	必修
初等外国語活動・外国語教育法	小学校における外国語活動（中学年）・外国語（高学年）の学習・指導・評価に関する基本的な知識・指導技術を身に付けることを目標とする。小学校外国語教育についての基本的な知識・理解、子供の第二言語習得についての知識とその活用、指導技術、授業作りに関する内容を扱う。	2	(2)	講義	2～	必修

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

②各教科の教育法（中等） 授業科目表6-6（小中履修型および中等連携履修型）

芸術体育・生活系教育専攻の学生は、次の表の科目の中から、所属する教科（取得する免許状の教科）に関する科目を4単位修得してください。「備考欄」にその指示が記してありますので、よく確認して履修してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
中等音楽科教育法A	中学校音楽科及び高等学校芸術科音楽における各領域等の目標や内容、指導上の留意事項、生徒や学校現場の実態について理解し、教材研究や模擬授業に実践的に取り組みつつ音楽の授業について学ぶ。また、情報機器等を活用した教材開発の可能性について検討する。	2	(2)	講義	2～	必修 (音楽のみ)
中等音楽科教育法B	中学校音楽科及び高等学校芸術科音楽で授業を実践する上で必要な知識や技能についての理解を更に深め、生徒や学校現場の実態について学びながら、音楽科教育の様々な方法を用いた教材研究や実践に取り組む。また、音楽科教育の理論と実践について、生徒や学校現場の実態を理解しながら音楽科教育における具体的なテーマについて考え、模擬授業の実践や、情報機器を用いた教材開発を含む研究発表にグループで協働して取り組む。	2	(2)	講義	3～	必修 (音楽のみ)

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
中等美術科教育法A	美術科の教科について、基本的な教科内容の学問に関する知識を、平面、立体表現の原理を通して学び、様々な技法の中で主に基礎的な技法を通して制作を行う。また、ICT活用など新しい美術科教育のあり方について、教材を通して学び身につける。さらに、美術表現全般について、実際のかつ具体的に構成していくことのできる力を身につけることによって、教科指導力に関する造形指導の専門性の向上を図る。	2	(2)	講義	2～	必修 (美術のみ)
中等美術科教育法B	義務教育内での美術教育指導は職人や美術家養成ではない、実験的な技法を学び表現の楽しさ、生涯学習社会のなかでの今後のアートのあり方や「美術で教育」することを理解する。中学校美術科の教科書分析をはじめ、授業でも活用できるモダンテクニック等の技法を造形演習として行う。また現代の多様な表現を知り、ICT活用など今後の美術科教育のあり方を学ぶ。	2	(2)	講義	3～	必修 (美術のみ)
中等保健体育科教育法A	授業を行うために必要となる基本的な用語や現場の先生が抱える問題や課題点を理解し、体育についての理解を深める。学習指導要領及び体育科教育学における研究成果を用いて、授業プランを作成し、情報機器を用いて発表する。また、授業プランの改善点について話し合い、より良い授業プランを採択する方法を学ぶ。	2	(2)	講義	2～	必修 (保健体育のみ)
中等保健体育科教育法B	中等教育段階における保健体育（保健）の授業と、教科外体育の目標・内容・方法・評価について理解する。中等教育段階における保健体育科の保健分野に焦点をあて、基本的な授業の考え方と授業づくり（授業内容の構成、指導過程の原則など）について学習する。また、教科外における保健および体育活動にも触れ、これらの活動をどのように展開するのかを学ぶ。	2	(2)	講義	3～	必修 (保健体育のみ)
中等技術科教育法A	中学校の技術科教育に関する各内容等の学習指導について具体的な教材・授業を通して学ぶことができる授業である。技術科教育の歴史、教育現場の状況等を通して、中学校技術・家庭科における技術科教育の指導理念や教育内容、それらに基づく具体的な指導方法等をアクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び）の視点で深い理解に導く。また、地域（宮城県の学校現場）の現状や課題についても取り扱う。	2	(2)	講義	2～	必修 (技術のみ)
中等技術科教育法B	中学校の技術科教育に関する各内容等の学習指導について具体的な教材・模擬授業を通して学ぶことができる授業である。中学校での技術科教育の授業に焦点を絞り、教育内容、教育方法、教材教具、教科書、授業分析法、施設設備の管理運営（安全教育を含む）指導案の書き方等について、主体的・対話的で深い学び、いわゆるアクティブ・ラーニングの視点で深い理解に導く。また、指導技法や授業練習や教育現場の実態と諸問題、地域（宮城県の学校現場）の現状や課題についても取り扱う。	2	(2)	講義	3～	必修 (技術のみ)
中等家庭科教育法A	中学校・高等学校家庭科の学習意義や目標・内容の概要を理解し、学習指導計画や指導案の作成・評価といった家庭科授業を行うための基礎的・基本的な力を身に付けることを目標とする。家庭科の意義・目標・内容、学習指導計画及び指導案の作成方法、授業づくりの工夫、家庭科における評価等、家庭科授業を行う上で必要な内容について講義する。また、学習指導計画及び指導案の作成といった演習活動を通して、実践的な力を身につける。	2	(2)	講義	2～	必修 (家庭科のみ)
中等家庭科教育法B	学習指導要領における技術・家庭科の特質、目標及び内容を理解して学習指導の計画を立てる能力を身につける。模擬授業の構想・実践を通して、目標の設定、教材の選定、授業を具体的に進めるための指示や発問について検討する。受講者が模擬授業を構想するなかで家庭科の授業の特徴を把握できるようにする。授業の目標をどう立てるか、教材をどうつくるか、授業を具体的に進めるために指示や発問をどうするか等を実践的に明らかにする。	2	(2)	講義	3～	必修 (家庭科のみ)

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

③各教科の教育法（中等） 授業科目表6-7（中等連携履修型のみ）

芸術体育・生活系教育専攻各コースの中等連携履修型の学生は、次の表の科目の中から、取得する2枚目の免許状の教科に関する科目を「備考欄」の指示に従って履修し、4単位修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
中等国語科教育法A	学習指導要領に示された国語科の目標や内容を理解することを目指す。概要としては、中学、高校における国語科教育論および指導論を理解し、具体的な授業場面を想定した授業づくりを行う基礎を身につける。	2	(2)	講義	2～	必修 (国語取得者のみ)
中等国語科教育法B	言語の教育としての国語科の授業づくりにおける教材研究とその方法について、学習指導要領をふまえて、授業づくりの基礎的な能力を習得することを目指す。学習指導要領に示された目標及び育成すべき資質・能力をもとに、国語科の教科構造を理解しつつ、代表的な教材やその指導法について理解する。	2	(2)	講義	3～	必修 (国語取得者のみ)
中等英語科教育法A	中学校及び高等学校における英語科教育の基礎を身につけることを目標とする。学習指導要領、教科用図書、音声指導、語彙・表現指導、文法指導、文字指導、英語でのやり取り、生徒の特性や習熟度に応じた指導、評価等に関する内容を扱う。	2	(2)	講義	2～	必修 (英語取得者のみ)
中等英語科教育法B	中学校及び高等学校における英語科の指導技術の基礎を身につけることを目標とする。学習指導要領、教科用図書、音声指導、語彙・表現指導、文法指導、文字指導、英語でのやり取り、生徒の特性や習熟度に応じた指導、評価等に関する内容を扱う。	2	(2)	講義	3～	必修 (英語取得者のみ)
中等数学科教育法A	数学科では、生徒が数学的活動を通して、情報機器を適宜活用して教科内容を学習することが求められている。この学習方法を理解して授業で実現するためには、教師自身が探究的な学習方法によって数学を学習した経験を有することが不可欠である。 本授業では、この学習方法及びその指導と評価の要点を理解し、教材研究及び授業構想の視点を獲得するために、受講者自身がこの学習方法によって数学を学習すること、その過程を学習者と教師の二つの立場から俯瞰することを行う。	2	(2)	講義	2～	必修 (数学取得者のみ)
中等数学科教育法B	数学的な見方・考え方を働かせた数学的活動を通して数学的に考える資質・能力の育成が求められている。このような授業を実現するためには、教師自身がそのような数学的経験をしていることが不可欠である。本授業では、問題解決とその振り返りから数学的に考えることの具体に接近し、それを踏まえて数学の授業づくりについて考えていく。	2	(2)	講義	3～	必修 (数学取得者のみ)

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

④ 小学校の専門科目 授業科目表6-8 (小中履修型のみ)

各コースの小中履修型の学生は、次の表の科目のうち、自分の所属する教科（1枚目の中学校免許の教科）に関する科目を除いた9科目が必修となります。必修科目を含めて18単位以上修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
初等国語科内容概論	小学校学習指導要領に示されている国語科教育の「目標」「各学年の目標及び内容」「指導計画の作成と内容の取扱い」を学ぶ。とりわけ「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」「言語」「書写」「読書」の概要を理解する。あわせて自らの言語活動を通して、指導法の基礎を身に付ける。	2	(2)	講義	1～	自分の所属する教科の科目を除いた9科目必修
初等社会科内容概論	小学校社会科に関する基本的な考え方や目標・内容について、地理的分野・歴史的分野・公民的分野のそれぞれの観点から解説を行い、小学校社会科の見方・考え方について理解を深めるとともに、社会科に関する教材や資料等を取り扱う上での基礎的な技能についても講義していく。	2	(2)	講義	2～	
初等算数科内容概論	小学校算数科の背景となる数学の基礎を身に付けることを目標とする。学習指導要領の主旨にのっとり、小学校算数科の背景となる数学各分野の基本的な理解及び教材研究を行う上で、その基礎となる素養を身に付けるための講義を行う。	2	(2)	講義	1～	
初等理科内容概論	小学校理科の基本的な内容に関して、学習指導要領や教科書で扱われている内容構成の基礎を学び、授業実践の能力を身に付ける。「エネルギー」「粒子」「生命」「地球」を柱とした小学校理科の学習内容を理解するとともに、学術的な専門知識を背景に教材として科学的に調べ、実践的に構成する能力や、自然の事物や現象について理解を深める見方や考え方を獲得する。	2	(4)	実験・実習	2～	
初等生活科内容概論	生活科の理念や原理を学び、その目標や内容、方法を理解し、生活科を担当する上で求められる知識や技術を習得する。生活科の教育理念や原理、学習指導要領の目標・内容・方法等の構成を理解し、生活科の授業を担当する上で求められる知識や技術を学ぶ。	2	(2)	講義	2～	
初等音楽科内容概論	小学校音楽科で授業を実践するために必要な音楽の基礎的な知識・理論について理解し、取り組む楽曲以外にも応用して児童に指導できるようにする。またピアノ弾き歌いの基本的な技能を身につけ、様々な教材の指導を実践できるようにする。	2	(2)	講義	1～	
初等図画工作科内容概論	図画工作における表現活動を通して、作り出す喜びを体験するとともに造形的な基礎能力を学ぶ。また、作品から豊かな情操教育について考察し学習する。	2	(2)	講義	1～	
初等体育科内容概論	各運動領域の基礎的な運動技術の習得、およびそれらの指導法の基礎を身に付けることを到達目標とする。小学校の体育の運動内容領域の基礎的な技術、ルール、知識について学習するとともに、練習の仕方や指導法についても学習する。また、ICTの活用について深める。	2	2	演習	2～	
初等家庭科内容概論	小学校家庭科の専門的内容を理解し、授業づくりに反映するための基礎を習得する。食物領域では栄養や食品成分の役割について、被服領域では被服に求められる機能について、住居領域では住居の成り立ちや役割について扱う。	2	(2)	講義	2～	
初等外国語活動・外国語内容概論	小・中学校の接続も踏まえながら、小学校における外国語活動・外国語科の授業を担当するために必要な背景的な知識を身に付ける。初等外国語活動・外国語において扱う内容について、第二言語習得、英語学、児童文学、英語コミュニケーション、異文化理解の視点から考えたり、検討したりする。	2	(2)	講義	1～	

注) 毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

⑤中学校の専門科目（小中履修型および中等連携履修型）

芸術体育・生活系教育専攻の全学生は、中学校の専門科目について、自分が所属するコース・教科の授業科目を履修してください。

併せて、中等連携履修型の学生は、取得する2枚目の免許状の教科に関する科目も履修してください。

各教科の授業科目の詳細と履修方法については、次に示す授業科目表6-9～授業科目表6-16を確認してください。

授業科目表6-9（音楽）

芸術・体育系教育コース 教科音楽の学生のうち、**小中履修型の学生は20単位以上、中等連携履修型の学生は30単位以上**、次の授業科目表から**必修・選択必修の科目を含めて**履修してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
中等音楽科内容構成基礎論	中学校音楽科及び高等学校芸術科音楽の内容を構成する各領域について、基礎的な知識を修得しつつその音楽的な特性を理解し、また技能面についても様々な課題に取り組みつつ学ぶ。	2	(2)	講義	1～	必修
※音楽科内容演習（ソルフェージュ）	実践的、理論的な音楽言語の基礎能力を習得することを目標とする。聴音、視唱を通し音楽的な聴感覚やリズム感覚、また読譜力を養う。	2	(2)	演習	1～	必修
音楽科内容演習（声楽）	主として中学校や高等学校で用いられる歌唱教材を通して、発声法や発音法、歌唱法の基礎について理解し、基礎的な演奏技能を身に付ける。西洋音楽的な発声と日本の音楽の発声の両方について学び、実践できるようにする。	2	2	演習	1～	必修
※音楽科内容実技（声楽 A）	中学校及び高等学校で歌唱の授業を実践するために必要な知識及び技能を身につけることを目標とする。「音楽科内容演習（声楽）」で学修した声楽に関する知識と技能を用いて、様々な声楽作品の発声法や発音法、歌唱法について理解し、演奏技能を発展的に身につける。	1	(2)	実技	2～	
※音楽科内容実技（声楽 B）	中学校や高等学校で歌唱の授業を実践するために必要な知識及び技能を身につけることを目標とする。「音楽科内容演習（声楽）」で学修した声楽に関する知識と技能を用いて、様々な声楽作品の発声法や発音法、歌唱法について理解し、演奏技能を発展的に身につける。	1	(2)	実技	2～	
※音楽科内容演習（合唱）	合唱作品の様式や作品の背景について理解しつつ、演奏法及び指導法について学修する。様々な時代様式や背景を持つ合唱作品に取り組みながら、合唱に関する知識・理解を深め、演奏法及び指導法について実践的に学ぶ。依頼に応じた外部演奏など、地域との音楽交流活動にも参加する。	2	2	演習	1～	必修
音楽科内容演習（ピアノ）	鍵盤楽器の奏法を理解し、正しく実践でき、西洋音楽の仕組みやスタイルを理解し、表現できることを目標とする。バロックから近現代にいたる様々な様式のピアノ音楽を学習し、また、それぞれの能力に応じた練習曲や連弾曲等も学習し、ピアノ奏法の研究を深める。	2	2	演習	1～	必修
※音楽科内容実技（ピアノ）	鍵盤楽器の奏法を深く理解し、高い技術を持って正しく実践でき、時代ごとに異なる西洋音楽の仕組みやスタイルを深く理解し、表現できることを目標とする。バロックから近現代にいたる様々な様式のピアノ音楽を深く学習し、また、それぞれの能力に応じた練習曲や連弾曲等も学習し、難易度の高い楽曲の演奏研究も行う。	2	2	実技	2～	
※音楽科内容演習（合奏）	弦楽器と吹奏楽の合奏である。担当楽器を割り当て、演奏法の研究を行い、アンサンブル演奏法や指導法を総合的に習得する。	2	2	演習	1～	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
※音楽科内容演習（和楽器）	箏の演奏実習を通して、調弦方法、楽譜の読み方、演奏技法を習得するとともに、日本の伝統音楽の旋律やリズムの特徴、楽器の音色や合奏法などを理解する。	2	(2)	演習	1～	必修
音楽科内容演習（指揮法）	指揮の基本技術やリハーサル・テクニックを習得することによって、より優れた指導力を育成する。指揮法を研究することにより、表現力やコミュニケーション力、さらには洞察力などの向上も含め、多方面での応用力を養成する。	2	2	演習	2～	必修
※音楽科内容実技（指揮法）	音楽科内容演習（指揮法）で習得したことを基礎にして、スコアリーディングなどのさらなる高度な音楽技術を学ぶことで、教育現場で実践活用できる技能の習得し、演奏会やリハーサルを見学し、専門家の現場を体験し見聞を広める。	2	(2)	実技	3～	
音楽科内容演習（音楽理論 A）	基本的な和声法の理論を習得することにより調性音楽の原理を理解し、音楽作品の分析ができるようになることを目標とする。四声体バス、ソプラノ課題の演習を通して機能と和声の理論を学ぶ。また実際の作品の分析や編曲を通じ、理解を深める。	2	2	演習	1～	必修
音楽科内容演習（音楽理論 B）	分析や創作の技法をより発展的に学び、応用力を身に付けることを目標とする。和声と対位法を中核に、作編曲や楽曲分析に必要な理論を習得し、実習する。	2	(2)	演習	2～	
※音楽科内容演習（作曲法）	西洋音楽における基本的な形式とその原理を理解することを目標とする。音楽の諸形式を学び、考察する。また実作品の分析や、創作にも取り組む。	2	(2)	演習	2～	
音楽科内容講義（音楽学）	音楽学の基本的な考え方を理解するための授業である。多様な音楽にふれ、それらの音楽を作り出した人たちのもつ音楽観を理解した上で、音楽学の多様な研究方法を学ぶ。音楽学の基本的な考え方、音楽学研究の方法と範囲について概観する。また、多様な音楽文化の存在を前提とした上で、音楽とは何かについて検討する。	2	(2)	講義	1～	必修
※音楽科内容演習（音楽学 A）	西洋音楽史の大きな流れを理解するとともに、各時代の音楽様式を理解し、代表的な作曲家や作品についての知識を獲得し、その様式を音楽作品から聞き取ることができるようになることを目標とする。西洋音楽史の流れを概観し、時代による音楽様式の変遷や、音楽家と社会の関係について、音楽例を聴きながら学ぶ。	2	(2)	演習	2～	中等連携履修型の場合、4単位以上選択必修
※音楽科内容演習（音楽学 B）	日本の音楽の歴史の大きな流れを理解し、主要な音楽ジャンルについて、成立時代や音楽的特徴などを学び、多くの音楽例を聞きながら、日本の伝統音楽について親しむ。日本における音楽の歴史を概観し、日本音楽のさまざまなジャンルの特徴について、音楽例を聴きながら学ぶ。	2	(2)	演習	2～	
※音楽科内容演習（音楽学 C）	民族音楽学の基本的な考え方を理解するとともに、日本でもよく紹介される世界各地の代表的な楽器や音楽ジャンルやについて、その特徴を理解し、日本の文化、西洋の音楽文化と、諸民族の音楽との関係を視野に入れて音楽を考えることができるようになることを目標とする。世界のさまざまな地域の音楽文化を、視聴覚資料を使用しながら概観し、音楽と社会や文化の関係について考察する。	2	(2)	演習	2～	

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表6-10 (美術)

芸術・体育系教育コース 教科美術の学生のうち、小中履修型の学生は20単位以上、中等連携履修型の学生は30単位以上、次の授業科目表から**必修・選択必修の科目を含めて**履修してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
中等美術科内容構成基礎論	美術科の教科について、基本的な教科内容の学問に関する知識を教材として実際のかつ具体的に構成していくことのできる力を身につけることによって、教科指導力に関する専門性の向上を図る。	2	(2)	講義	1～	必修
美術科内容基礎演習(絵画)	あらゆる造形の基礎となるデッサンを学ぶ。観察力、描写力、構成力等の能力を養い、さまざまな表現の可能性の礎を築く目的とした内容となる。	2	2	演習	1～	必修
美術科内容実技(絵画Ⅰ)	油彩の制作を通し、絵画の美術形式、方法論などを実践を通して学習する。更に古典から現代絵画の多様な表現方法についても学ぶ。	2	2	演習	2～	必修
※美術科内容実技(絵画ⅡA)	美術教育の現場で多く実践されている「版画」の基本的な原理を様々な版種を通して学び、その表現効果を理論的かつ実践的に理解し、美術教育のための基本的能力を深めながら、版画の教育現場への応用、発展へとつなげる。	2	2	演習	2～	必修 (中等連携履修型のみ)
※美術科内容実技(絵画ⅡB)	油彩の制作を通し、絵画の美術形式、方法論などを実践を通して学習する。更に古典から現代絵画の多様な表現方法についても学ぶ。	2	2	演習	2～	必修 (中等連携履修型のみ)
美術科内容基礎演習(彫塑)	美術科の教育現場における基本的な立体表現の実践にテーマを当て、美術科教育の在り方に照らし合わせ、教育実践における立体造形の表現を学習する。さらに、彫塑の基本的な技法を理解し、塑造(モデリング)の技法を通して演習に取り組み、基本的な立体感覚を体現し学習する。	2	2	演習	1～	必修
美術科内容実技(彫塑Ⅰ)	美術科の教育現場における基本的な立体表現の実践にテーマを当て、美術科教育の在り方に照らし合わせ、教育実践における立体造形の表現を学習する。さらに、彫塑の基本的な技法を理解し、実材制作としての彫刻(カービング)の技法を通して実技の作品制作に取り組み、基本的な道具の使用法と技法等を身につけることによって、立体感覚を体現し学習する。	2	2	演習	2～	必修
※美術科内容実技(彫塑Ⅱ)	美術科の教育現場における基本をベースにした、応用的な立体表現の実践にテーマを当て、美術科教育の在り方に照らし合わせ、教育実践における立体造形の表現を学習する。さらに、彫塑の基本的な技法を理解し、彫塑Ⅰで実践した実材制作としての彫刻(カービング)の技法を、さらに応用した立体表現に取り組み、応用的な道具の使用法と技法等を身につけることによって、質の高い立体感覚を体現し学習する。	2	2	演習	3～	必修 (中等連携履修型のみ)
美術科内容基礎講義(デザイン)	デザインのさまざまな表現方法を学び基本的な原理や考え方を理解し、グラフィックデザイン、映像表現などの視覚伝達表現、コンピュータを用いた芸術表現などの様々な事例を考察しながら、実践的な方法論に対する理解を深める。	2	(2)	講義	1～	必修
※美術科内容演習(デザイン)	デザインのさまざまな専門的知識や表現方法を学んだ上で、グラフィックデザイン、映像表現などの視覚伝達表現、コンピュータを用いた芸術表現などをより深く学習し、実践的な方法論に対する理解を深めるとともに、演習を行いながら応用、発展へとつなげる。	2	2	演習	2～	必修
美術科内容基礎講義(工芸)	美術科の教育現場における基本的な工芸について、生活との接点にテーマを当て、美術科教育の在り方に照らし合わせ、教育実践における工芸的な様々な造形表現を学習する。さらに、伝統工芸の特徴的な用途や技法を理解し、地域の中で生まれた工芸など「用の美」としての工芸品などの特性について、その地域の風土を含め考察し、基本的な生活様式の中での工芸の造形性を体現し学習する。	2	(2)	講義	1～	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
※美術科内容演習（工芸）	美術科の教育現場における基本的な工芸について、生活との接点にテーマを当て、美術科教育の在り方に照らし合わせ、教育実践における工芸的な様々な造形表現を演習を通して学習する。また地域の中で生まれた伝統工芸の特徴的な用途や技法を理解した上で、「用の美」としての工芸品などの特性について研究する。さらに、基本的な生活様式の中での工芸の造形性を理解し、演習として実際に作品制作を通して学習する。	2	2	演習	2～	必修 (中等連携履修型のみ)
美術科内容基礎講義（美術理論・美術史）	美術科の教科について、美術理論・美術史の基本的な教科内容の学問に関する知識を教材として実際的かつ具体的に構成していくことのできる力を身につけることによって、教科指導力に関する専門性の向上を図る。	2	(2)	講義	1～	必修
※美術科内容演習（美術理論・美術史）	美術科の教育現場における基本的な美術表現の概念及び、鑑賞教育を理解し、そのことを前提とした美術史の体系を学習する。さらに、美術科教育の在り方に照らし合わせ、教育実践における美術表現の概念と基本的な原理を理解し、現代の美術表現における国内外の動向について調査し、演習に取り組む中で、基本的な美術科教育の成り立ちをについて、専門的な理解力を高める。	2	2	演習	2～	必修 (中等連携履修型のみ)
美術科内容演習（鑑賞）	人間の造形活動の意味を問いかける「鑑賞」のあり方について実践を通して学ぶ。実作品に接して作品を読み解くことを促す学習ツールとしてワークシートを制作する。また、模擬授業形式にて異なる主題で1人2回程度ワークシートの発表を行う。なお、一部創作体験を行う場合がある。	2	2	演習	2～	必修

注) 毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表6-11（保健体育）

芸術・体育系教育コース 教科保健体育の学生のうち、**小中履修型の学生は23単位以上、中等連携履修型の学生は30単位以上**、次の授業科目表から**必修・選択必修の科目を含めて履修**してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
中等保健体育科内容構成基礎論	ヒトの身体・機能およびスポーツ運動からみた体育という観点から、「スポーツとは何か」「体育とは何を教える・育てる教科か」を考察する。あわせて体育学・運動学・教育学・予防医学などの課題を探る。	2	(2)	講義	1～	必修
保健体育科内容講義（体育原理・体育史）	体育の歴史や原理（哲学）に関する知識を獲得するとともに、体育の在り方について検討できる能力を身につけることを到達目標とする。体育の歴史や原理を通じて、現代日本の体育が抱える諸問題を考える。	2	(2)	講義	1～	小中履修型は2単位以上選択必修 中等連携履修型は4単位以上選択必修
保健体育科内容講義（体育社会学・体育経営管理学）	産業形態やライフスタイルの変化、高齢化など様々な変容する現代社会において身体活動の意義は見直されつつある。生涯スポーツという語はますます耳慣れた言葉となっている。私たちはどのように身体とつきあおうとしているのだろうか。この授業では身体に着目しつつ学校教育や現代社会について講義する。 地域社会や学校教育における体育・スポーツについて経営管理学の立場から学習する。体育施設の整備やプログラム、クラブ、組織体などについて、その経営管理を具体的に検討し、学校体育のみならず社会体育や地域スポーツにまで範囲を広げ、それぞれの立場から経営管理の実情と方法について学ぶ。	2	(2)	講義	2～	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
保健体育科内容講義（体育心理学）	体育・スポーツ心理学に関する理論についての基本事項を理解し、同時に、体育科教育での運動指導やその他の教育活動に実際に活用する方法について理解する。身体運動における心理的特性、運動制御、運動学習理論および動機づけ等の内容を中心に、実際の教育活動に活用可能なスポーツ・体育心理学の基本的な内容を説明する。	2	(2)	講義	1～	
保健体育科内容講義（運動学A）	実際にハイスピードカメラやパソコンを使用し、スポーツ・運動の動作を画像分析できること、そのうえで身体各部位の動きやその作用する力のメカニズムなどのバイオメカニクスの観点から理解することを目標とする。 スポーツ・運動の動作を身体各部位の動きやその作用する力のメカニズムなどのバイオメカニクスの観点から分析し、身体運動の特性について理解を深めることが本講義のねらいである。内容としては、運動学の基礎、動作の画像解析法と動作分析法の原理および分析結果の活用の仕方等について講義を行う。	2	(2)	講義	2～	小中履修型は2単位以上選択必修 中等連携履修型は2科目とも必修
保健体育科内容講義（運動学B）	スポーツ運動学の理論を知識として理解するだけでなく、体育・スポーツにおける運動指導の実践に役立てることのできる能力の養成を目標とする。 マイネルの「スポーツ運動学」、金子の「発生運動学」の理論を基礎として、体育・スポーツにおける運動学習・指導に関する実践的問題を検討する。実践における指導者や学習者の視点から見た、スポーツ運動の発生、構造、伝承に関する理論を学習する。	2	(2)	講義	2～	
保健体育科内容講義（人体生理学）	身体の恒常性を知ることこの授業のテーマとする。この授業は身体の恒常性を生理学的に説明ができるようになること、また運動と健康に結びつけることを目標とする。この授業は細胞機能、神経機能、筋系、循環器系、内分泌系の仕組みをわかりやすく解説し、さらに運動時やストレス下、環境変化（寒冷や暑熱）への対応の仕組みについても解説する。	2	(2)	講義	1～	必修
保健体育科内容実験（生理学、衛生学・公衆衛生学、学校保健）	人体生理学で学んだ生命現象の機構を動物や自分達の身体で確認し、体育・スポーツ・健康科学の問題解決に用いられる生理学的な手法を修得する。また、衛生学・公衆衛生学分野及び学校保健で学んだ健康の保持・増進のための生活習慣や環境評価に必要な知識・技術の修得も課題とする。さらに疫学分野で用いられる統計処理法、データサイエンスに関する基本事項についても学習する。	2	2	実験・実習	2～	必修（中等連携履修型のみ）
保健体育科内容講義（衛生学・公衆衛生学）	ライフステージに対応した健康管理に関する基礎的知識および基本的態度・習慣の習得を目指す。また、人間集団の健康・疾病状況を疫学的な観点から理解するための基礎的知識および能力を身につけることを目標とする。さらには、中学校および高等学校にて行われる保健の授業を展開するための基礎的知識の習得を目標とする。	2	(2)	講義	2～	必修
保健体育科内容講義（学校保健）	教員が学齢期にある子どもたちのからだや健康を守り、そして、育てられるための基本的な知識や技術を習得することを目標とする。救急処置の知識と技能、健康診断の内容とあり方、子どもの身体発達やかかりやすい病気の知識、健康なライフスタイルや学校環境、及びそれらの指導を取りあげる。	2	(2)	講義	2～	必修
※保健体育科内容基礎実技（体育実技）	体づくり運動、水泳およびダンス（日本の民謡）を中心に構成され、保健体育科の指導に必要な基本的知識・技術について学習し、技能の習熟を図る。またそれぞれの練習の方法、指導法を包括的に学ぶ。	2	2	実技	1～	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
※保健体育科内容実技（体育実技・球技 A）	サッカー及びバスケットボールの特性を理解するとともに、サッカー及びバスケットボールをプレイするための基本的技術、戦術（特に個人技術、個人戦術）の習得を主題にする。そして最終的にはチームプレイの最小単位である2対2におけるコンビネーションプレイからの攻防を理解して実践できるようになることがこの授業のねらいである。	2	2	実技	1～	小中履修型は2単位以上選択必修
※保健体育科内容実技（体育実技・球技 B）	・硬式テニスの特性やルールを理解するとともに、基本的技術の習得と技術練習、応用練習を通して、ゲームの進め方を学習する。また、ベースボール型球技の特性やルールを理解するとともに、基本的技術の習得を通してベースボールの進め方を学習する。 ・バレーボールのルールと競技特性を理解し、個人的及び集団的技術を習得するとともに、それらを基にした戦術を展開して、ゲームの展開方法を学習する。	2	2	実技	1～	中等連携履修型は2科目とも必修
※保健体育科内容実技（体育実技・武道）	剣道：剣道の基本動作と一本打ちの技の修得に重点をおいて行う。「技」の修得は、代表的な技のみに留めて、互格稽古及び簡易試合ができるまで展開する。 柔道：柔道の特性を理解し、投げ技、固め技の基本的な指導法を学び、中学校保健体育での柔道の授業を安全に効果的に実施できるようにする。	2	2	実技	1～	必修
※保健体育科内容実技（体育実技・器械運動）	各種目の基本技や組合せ、演技をある程度の技術的レベルで実施できるようになるとともに、器械運動の指導に必要な基礎的知識や理論を理解できることを目標とする。 マット運動、鉄棒運動、跳び箱運動、平均台運動の基本技や発展技、技の組合せ、演技の構成や実施の段階的習得と習熟を図る。また器械運動の特性、技の技術的要素や系統性、練習の方法・段階、安全確保・補助の仕方を学ぶとともに、技の出来映えを観察する能力の向上を図る。	1	(2)	実技	1～	小中履修型は1単位以上選択必修 中等連携履修型は2科目とも必修
※保健体育科内容実技（体育実技・陸上競技）	陸上競技の走・投・跳各種目の競技特性や基本的技能を、実技を通して学習する。	1	(2)	実技	1～	
※保健体育科内容実技（体育実技・ダンス）	ダンスの基本を学びながら「踊り表現するからだ」への気づきを深めること、創作ダンスの指導法を理解すること、ダンス作品を創作し発表する過程で培われる発想力やコミュニケーション能力を高めることを到達目標とする。	1	2	実技	1～	必修
※保健体育科内容実技（体育実技・野外活動 A）	本授業においては、学校教育における児童・生徒の野外における活動の指導はもとより、家庭や地域において行われる自然体験学習の指導に必要な知識、技術の基本を習得し、計画的なプログラムに沿って、自然の中での活動能力を高めることを目指す。 また、生涯スポーツとしてのスキー運動の特性を理論と実践を通して理解すると同時に、実際に冬山を体験することにより、冬季の自然を理解することをねらいとする。	1	2	実技	1～	1単位以上選択必修（中等連携履修型のみ）
※保健体育科内容実技（体育実技・野外活動 B）	遠泳における泳力の向上を図りながら、合宿経験を通して臨海学校などの海浜行事の運営や指導について体験的に学ぶ。 生涯スポーツとしてのスキー運動の特性を理論と実践を通して理解すると同時に、実際に冬山を体験することにより、冬季の自然を理解することをねらいとする。	1	2	実技	1～	

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表6-12 (技術)

生活系教育コース 教科技術の学生のうち、**小中履修型の学生は20単位以上、中等連携履修型の学生は30単位以上**、次の授業科目表から**必修の科目を含めて履修**してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
中等技術科内容構成基礎論	中学校の技術科の指導内容について、学術的な背景と教育との関連を講義と演習を通して学ぶ。	2	(2)	講義	1～	必修
技術科内容講義(木材加工)	製図、木材の性質、切削の仕組み等について学習し、簡単な木製品の設計、製図および製作を通して、木工道具および木工機械の基本的な使用法を身に付けます。木材の性質や構造の学習では実験を通して深め、設計・製作では、中学校技術科の学習指導要領に示された学習過程に基づいて活動を行います。	2	(2)	講義	1～	必修
技術科内容実験実習(木材加工)	自分の考えた製作物の製図が描け、木工道具や木工機械を使用し、板材を加工することにより製作物を製作することができるようになることを目標とする。各種木工道具の構造および特徴を学び、道具の使用法および道具の調整(仕立て)方法を修得する。また、基本的な木工機械の構造および操作法を修得する。目的とする作品の設計・製図・材料取り、部品加工、組立・調整および完成までの合理的な作業手順や道具だてに関する方法を身に付ける。	2	(4)	実験・実習	2～	必修 (中等連携履修型のみ)
技術科内容講義(金属加工)	金属加工の基礎知識を、手仕上げ、塑性加工、切削加工など、幅広く学ぶ。また、製図に関する基本事項を学ぶとともに実習を含んだ授業を行う。	2	(2)	講義	1～	必修
技術科内容実験実習(金属加工)	金属の曲げ、切削及び接合などの加工技術を工具・道具や工作機械の使用を通して身に付け、習熟させる。	2	(4)	実験・実習	2～	必修 (中等連携履修型のみ)
技術科内容講義(材料と加工)	木材、プラスチック、木質材料及び金属が有する特性および機械的性質を学ぶとともに、その特長を活かした作品製作の実践を通してものづくりの技能を習得する。各種機械加工法にも触れ、ものづくりの技術・技能を活かした教材・教具づくりを実践し、様々な教材開発に応用できる力を身につける。3Dプリンタやレーザー加工機などを活用したデジタルファブリケーションについて、一部で実習を取り入れる。	2	(2)	講義	3～	
技術科内容基礎講義(機械)	機械工学の基礎となる力学の知識を獲得し、身近な機械のメカニズム及び身近な機械の各種構成要素を理解し説明できることを目標とする。機械工学の基本的な事項について、機械力学、材料力学、流体力学、熱力学、および機械要素や機構学などのメカニズムに関する設計的な内容を扱う。	2	(2)	講義	2～	必修
技術科内容応用講義(機械)	中学校技術科の「エネルギー変換」分野における機械に係る部分に焦点をあてて、新しい学習指導要領で重視されるようになった「課題解決」学習に取り組む。	2	(2)	講義	3～	
技術科内容実験実習(機械)	機械設計の基礎的な事項を学び、実際に簡単な機械設計と製作を行う。	2	(4)	実験・実習	2～	必修
技術科内容基礎講義(電気)	電気に関する基礎的な現象を理解し、基礎的なパラメータ計算(電流、電圧、電力など)を計算することができ、電気に関する現象として静電気や磁気に関わる基礎的な現象を理解し、電気回路の受動的要素のコンデンサやコイルを使った交流回路の基礎的な動作を理解することを目標とする。 電気現象を学ぶ上で基礎となる起電力・抵抗からなる電気回路について基本的な要素から学習をする。また、日常生活の中で電気と関わる現象や電気の安全な使い方についても扱うことで、電気に関する興味関心を高める。	2	(2)	講義	1～	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
技術科内容応用講義（電気）	ダイオード・トランジスタなどの半導体素子、および基礎的な各種の電子部品（コンデンサ・コイル・太陽電池・プザー・リレーなど）の動作原理・特性を学習する。また、それらを使った簡単な電子回路の設計方法についても学習する。	2	(2)	講義	2～	
技術科内容実験実習（電気）	電気回路の基礎的な内容（直流・交流）について実験を通じて学ぶ。回路計（電圧・電流・抵抗測定）などの基本的な計測機器の使用方法を学ぶ。電気技術基礎の内容と連動させることで電気に関する理解を深める。	2	(4)	実験・実習	3～	必修
技術科内容基礎講義（栽培）	教材植物の分類・生理・環境適応性など、栽培学の基礎を学ぶ。また、主要な栽培技術である、施肥、病害虫・雑草防除、開花制御などについて理解を深めるとともに、新しい生産技術である植物工場・植物バイオテクノロジーなどについても解説する。一部、植物栽培と観察体験を取り入れ、学習を深める。さらに、東北地方の農業や食文化を考える教材として地域在来作物を紹介する。	2	(2)	講義	1～	必修
技術科内容応用講義（栽培／生物育成）	「技術科内容基礎講義（栽培）」「技術科内容実験実習（栽培）」では扱えなかった多様な教材作物の生理的特性・栽培技術について、より深く学ぶ。また、新しい生産技術である植物工場・植物バイオテクノロジーなどについて解説するとともに、計測機器やソフトウェアを活用した作物生長評価技術も体験する。さらに、学習指導要領に含まれる家畜・魚類の飼育技術にも触れる。	2	(2)	講義	2～	
技術科内容実験実習（栽培）	食用作物、野菜（果菜類、葉菜類、根菜類）、花卉などの多種類の作物について、播種から定植・管理・収穫までの一連の技術を体験的に学習する。また、栽培試験を行い、作物実験の基礎を学ぶ。なるべく化学農業を使わない栽培を実践する中で、安全な食料を生産するための技術について考える。	2	(4)	実験・実習	2～	必修 (中等連携履修型のみ)
技術科内容基礎講義（情報とコンピュータ）	中学校の技術分野における単元「情報の技術」についての基礎的な知識と技術について学ぶ。コンピュータの仕組み・情報のデジタル化による処理技術について学ぶ。Webにおいて用いられている技術を学ぶと共に、情報セキュリティ・モラルなどの基礎知識について学ぶ。	2	(2)	講義	1～	必修
技術科内容応用講義（情報とコンピュータ）	中学校の技術分野における単元「情報の技術」についての応用的な知識と技術について学ぶ。問題解決のための双方向性のあるコンテンツや計測・制御技術を活用するプログラミングについて学ぶ。情報通信技術の基礎と活用について学ぶ。	2	(2)	講義	2～	
技術科内容実験実習（情報とコンピュータ）	中学校の技術分野における単元「情報の技術」でのプログラミングの内容と関連する学習を行う。コンピュータによる基礎的な画像処理技術、プログラミング言語・アルゴリズムについて学び、簡単な画像コンテンツの作成およびプログラムの制作実習をする。マイコンボードを使ったプログラミング制御について学び、簡単なロボットカーの制御などを実習する。	2	(4)	実験・実習	1～	必修 (中等連携履修型のみ)

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表6-13 (家庭科)

生活系教育コース 教科家庭科の学生のうち、小中履修型の学生は20単位以上、中等連携履修型の学生は30単位以上、次の授業科目表から**必修・選択必修の科目を含めて**履修してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
中等家庭科内容構成基礎論	本科目では、中学校技術・家庭の家庭分野を総括的に理解し、中学校における家庭科の役割を認識することを主要な学習到達目標とする。 授業では、家庭生活について、「食生活、衣生活、住生活の見直しと改善」、「子どもと家族、幼児の遊び、地域の人々とのふれあい、環境や資源を考えた暮らし」等を取り上げ、各々の内容に関する授業の組み立てについて講義する。	2	(2)	講義	1～	必修
家庭科内容講義(情報処理)	児童生徒に学ばせたいコンピュータ・サイエンスとデータ・サイエンスについて理解し、指導や活用のイメージを持つことができるようになることを目標とする。 情報の科学的な理解として、コンピュータの動作原理であるコンピュータ・サイエンスについて、情報モラルやセキュリティについて、そして教育データを対象として指導上の参考にするためにデータ・サイエンスを教員としてどのように活用できるのか AI のプログラミングを通して学ぶ。	2	(2)	講義	1～	必修 (中等連携履修型のみ)
家庭科内容講義(家庭機械)	ものづくり技術の原理が理解できることを目標とする。機械の進歩、エネルギーと機械、機械材料、運動機構、機械制御などについて学ぶ。	2	(2)	講義	1～	必修 (中等連携履修型のみ)
家庭科内容講義(家庭電気)	電気・磁気現象に関する基礎知識を身につけることを目標とする。家庭における電気やその関連機器の基礎的性質等について学習する。	2	(2)	講義	1～	必修 (中等連携履修型のみ)
家庭科内容講義(被服学A)	学生が中等家庭科の被服領域を教授するのに必要な専門的知識を自然科学の視点から習得し、衣生活を快適に過ごすための能力も併せて身につけることを目標とする。繊維・糸・布についての種類や構造、性質、製造方法を概説し、豊かな衣生活を過ごすための実践方法について考察する。	2	(2)	講義	3～	必修
家庭科内容講義(被服学B)	学生が家庭科の被服領域を教授するのに必要な専門的知識を自然科学の視点から概説する。衣服の機能性に影響を与える影響について、素材・糸・布についての種類や構造、性質、製造方法を概説し、豊かな衣生活を過ごすための実践方法について考察する。	2	(2)	講義	3～	
家庭科内容講義(食物学A)	私たちが食する食べ物の身体における代謝過程を理解することを目標とする。食品の科学的性質、消化と吸収、栄養素と体内での代謝について解説する。	2	(2)	講義	2～	必修
家庭科内容講義(食物学B)	私たちの食生活の成り立ちを日本の食の歴史、現在の世界の食生活や食環境を通じて知ることで、持続可能で栄養バランスの取れた健康的な食生活とはどのような食生活を考える。また、現在の自分自身の食生活を振り返り、これからの食生活のあり方についても考えていく。	2	(2)	講義	3～	
家庭科内容講義(住居学A)	家庭科の住居学に関する専門的内容を理解し、授業づくりに反映するための基礎を習得する。住居の成り立ちや役割について、生活、社会、環境、技術などさまざまな観点から分析し、理解を深める。また、日常の生活空間における課題から、今後の住居の在り方を検討する。	2	(2)	講義	3～	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
家庭科内容講義 (住居学B)	本科目では、住環境形成のしくみや、健康・快適・省エネルギーな調整の方法について学習する。特に、遮音・音響、採光・照明、換気・通風、断熱・省エネルギー、湿気・結露といった事象を通して、家庭科の住居学に関する専門的内容を理解し、授業づくりに反映するための基礎を習得することを目的とする。基礎原理に基づく対処法の検討を行う技術習得のために、身近な空間の環境計測・評価を行う。	2	(2)	講義	3～	
家庭科内容講義 (保育学A)	本科目では、家庭科教育の「A 家族生活と家族」分野の内、保育領域に焦点を当て、その指導に必要とされる知識を身につける。とくに、生涯発達の見地に立ち、人の発達や生活における諸様相とその特徴を理解し、そこで求められる適切な保育者の援助や環境構成の在り方について検討を行い、専門的知識の修得を目指す。	2	(2)	講義	3～	必修
家庭科内容講義 (保育学B)	少子化、経済活動の悪化など、現代においては家族を取り巻く社会的な状況が急激に、多様に変化している。そのような中で、保育者に子育て家庭に対する支援が求められてきた。本科目では、(1) 子育て家庭を取り巻く社会的状況の在り方や歴史的な変遷を調査し、そこでどのような支援が保育所・幼稚園に求められているのか検討を行う。そして、(2) これから保育者に求められる専門性について理解する。さらに、(3) 保育に携わる者の専門性育成に関する時間的展望を把握することを目指す。	2	(2)	講義	3～	
家庭科内容講義 (家庭経営学)	私たちは多様な家族を形成し、ひとりひとりが一定の役割を担いながら家庭での生活を持続的に経営している。しかし、家庭とは家族だけの閉じられた環境ではなく、社会環境から様々な影響を受け、日々変化していくものである。そのため、私たちには現代社会の抱える困難と向き合いながら、主体的に生活経営する能力が求められている。そこでこの授業では、今日の家庭環境が形成されてきた歴史過程を学ぶとともに、現代の家庭生活に生じている問題を多面的に検討していく。	2	(2)	講義	1～	必修
家庭科内容講義 (家庭科教育)	「家族・家庭生活」、「衣食住の生活（食生活、衣生活、住生活）」、「消費生活・環境」の三つの基本的な知識を身につけ、中学校において各々の分野に関する授業を組み立てる理論について講義を行う。	2	(2)	講義	1～	必修
家庭科内容演習 (家庭科教育)	家庭科教育を支える基礎的な研究論文の抄読と家庭科の授業への展開を考える。各領域の研究に関わる研究論文や専門書を取り上げ、内容紹介や討論を通して理解を深める。	2	2	演習	3～	必修
家庭科内容実験 実習(被服学A)	人体と被服の関係を考慮し、被服構成について学び実習する。被服製作を行い、家庭科教育衣生活領域における被服の知識、技術の基礎、応用を身につける。立体構成としての作品（秋冬ものの裏付きセミタイトスカート、半袖ブラウス）を製作し、作品製作を通し、被服構成について、また縫製についての基礎、応用を学ぶ。	1	(3)	実験・実習	1～	小中履修型 は1単位以上 選択必修
家庭科内容実験 実習(被服学B)	ものづくり技術の原理が理解でき、確かな技能を身につけることを目標とする。「ものづくり」を通して、技能（操作法）の習得とものづくりにある原理・原則について学習する。最終的には繊維・糸・布の基本的な性質および構造について把握する。	1	(3)	実験・実習	1～	中等連携履 修型は 2科目とも 必修
家庭科内容実験 実習(食物学A)	様々な食品の性質に及ぼす成分について理解し、衛生面も含めた基本的な調理を身につけることを目標とする。調理における食品成分の役割について実験を行なうとともに、基本的な調理を行う。	1	(3)	実験・実習	2～	小中履修型 は1単位以上 選択必修
家庭科内容実験 実習(食物学B)	調理に必要な感覚を意識し、加工に関わる実験や応用調理を通して調理技術を養う。官能評価実験、手作り食品と市販品との比較や応用的な調理実習を行う。	1	(3)	実験・実習	2～	中等連携 履修型は 2科目とも 必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
家庭科内容実験実習(住居学A)	住居空間を、図法を踏まえて作図表現でき、また図面から設計意図を読みとることができるようになることを目標とする。住居形態に関する思想的背景や住居空間から生じる生活行為、家具配置、室内環境について取り上げながら、手書きおよびCADによる製図練習および設計を行う。	1	(3)	実験・実習	1～	小中履修型は1単位以上選択必修
家庭科内容実験実習(住居学B)	住居の仕組みや働きに関して、計測機器の特性を考慮しながら実験・調査することができるようになることを目標とする。住居環境、住居構造に関する実験・調査に基づいて、レポート・発表を行う。	1	(3)	実験・実習	3～	中等連携履修型は2科目とも必修
家庭科内容実験実習(保育学A)	本科目では、家庭科教育の「A 家族生活と家族」分野の内、保育領域に焦点を当て、その指導に必要とされる知識を身につける。とくに、生涯発達視点に立ち、人の発達や生活における諸様相とその特徴を理解し、そこで求められる適切な保育者の援助や環境構成の在り方について検討を行い、専門的知識の修得を目指す。	1	(3)	実験・実習	1～	小中履修型は1単位以上選択必修
家庭科内容実験実習(保育学B)	保育所幼稚園、子育て支援センターなどにおける保育・幼児教育の実践場面をもとに、乳幼児の発達や成長、保育者の役割や援助などについて、受講者一人一人が焦点化して、質的・量的な研究技法を用いて分析を行う。そして、その結果と考察をもとに、家庭科学習の保育・家族領域の授業づくりを行う。	1	(3)	実験・実習	3～	中等連携履修型は2科目とも必修

注) 毎週授業時数欄の()は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表6-14 (国語) (中等連携履修型のみ)

芸術体育・生活系教育専攻各コースの中等連携履修型の学生で、国語を選択した学生は、次の表の科目の中から、**必修・選択必修の科目を含めて20単位以上**履修してください。「備考欄」にその指示が記してありますので、よく確認して履修してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
中等国語科内容構成基礎論	国語教科書の教材に関する理解を深めるため、教材を読むための手続きを学ぶ。また、古文や近代小説、評論などを読むための基礎的な知識や手続きを身につける。具体的な教材、作品に触れながら、教材研究の方法や、辞書・索引等の使用法、文献の検索の仕方などを知る。	2	(2)	講義	1～	必修
国語科内容概論(国語学)	日本語の全体像について平易に概説する。音声・音韻、文字・表記、語彙、文法、文章・文体など、網羅的に見ていくことで、日本語への理解を深める。また、他言語との対照とそこから見出せる日本語の特徴や、歴史的なことばの変化、現代日本語のバリエーション(共通語と方言、位相語など)といった日本語の種々相を取り上げる。	2	(2)	講義	2～	必修
※国語科内容講義(国語学A)	国語学概論で学んだ基礎的知見と関連づけながら、韻音・アクセント、文法、日本語史など特定領域について理解を深め、自力でレポートの作成ができるようになることを目標とする。古代から現代に至る国語の変遷について、文献国語史的方法と言語地理学的方法の両面から相補的にアプローチする。講義を主とするが、文献資料の読解や語史を調べてまとめるなど演習的要素もまじえ、全国的な視野から日本語の歴史を理論的に考察する力を身につける。	2	(2)	講義	2～	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
※国語科内容講義（国語学B）	日本語の変遷について理解を深め、ことばの変化について文献資料や言語分布の両面から再構成し、自分のことばでまとめられるようになることを目標とする。上代（奈良時代以前）から現代に至る日本語の変遷について、文献国語史的方法と言語地理学的方法の両面から相補的にアプローチする。講義を主とするが、文献資料の読解や語史を調べてまとめるなど演習の要素もまじえて行なう。語源や意味・用法の変遷について疑問をもった際に、自力で解決する手立てを学んでいく。	2	(2)	講義	2～	
国語科内容概論（国文学A）	国文学の概念と時代区分を確認し、各時代の文学と社会とのかかわりを押さえたうえで、近代・現代日本の文学の流れをたどり、主要作品を読み解く。その過程で、国文学とは何か、何だったのかを考えるとともに、国文学の研究方法を検討する。授業のねらいは次の3点である。①国文学の概念と歴史、対象と研究方法についての基礎的な知識を得ること。②近代・現代の主要な作家と作品についての理解を深めること。③作品の特徴を捉える力、および作品を鑑賞する力を身につけること。	2	(2)	講義	2～	必修
国語科内容概論（国文学B）	国文学の基礎についての知識をふまえたうえで、特に上代から近世の作品を取り上げて国文学とは何か、何だったのかを考える。国文学の概念と歴史、対象と研究方法についての基礎的な知識を得ることを目標とする。国文学の概念と時代区分を確認し、各時代の文学と社会とのかかわりを押さえたうえで、上代から近世の日本の文学の流れをたどり、主要作品を読み解く。その過程で、国文学の研究方法を検討する。	2	(2)	講義	2～	必修
※国語科内容講義（国文学A）	国文学（近代・現代）をめぐる諸問題を、作品やその研究を読み解きながら検討する。国文学研究の基盤となる専門知識を得ることを目標とする。日本の近代・現代文学（児童文学を含む）をめぐる、テキストの問題、作者と作品の問題、ジャンルの特性の問題をはじめ、研究の基盤となる諸問題を検討する。その際、外国文学とその研究からの影響や他の学問領域とのかかわり等にも目配りをする。	2	(2)	講義	2～	
※国語科内容講義（国文学B）	国文学（古典文学）をめぐる諸問題を、作品やその研究を読み解きながら検討する。国文学研究の基盤となる専門知識を得ることを目標とする。日本の古典文学をめぐる、テキストの問題、注釈・解釈とその歴史の問題、ジャンルの特性の問題をはじめ、研究の基盤となる諸問題を検討する。その際、近代文学研究との違いや、他の学問領域とのかかわり等にも目配りをする。	2	(2)	講義	2～	
国語科内容概論（漢文学）	漢詩を読むための基礎知識を身につけ、漢詩をじっくり味わうために必要な読解の方法と態度を獲得する。また、中高の教科書に頻出する代表的な漢詩・漢文を読み、味わう訓練を通じて、基礎的な読解力を身につける。 漢文・漢詩を読み味わうためにはどのような知識や方法が必要か。その基礎的な力を養うために、具体的な作品に即してわかりやすく解説し、鑑賞や分析の方法を学ぶ。	2	(2)	講義	2～	必修
※国語科内容講義（漢文学）	漢詩鑑賞の基本的な姿勢や方法を身につけ、杜甫の詩を読んでその人間観・自然観・政治観を学ぶ。また、毎回の小テストを通じて漢文読解の基礎的な能力を身につける。 「杜甫詩鑑賞（その1）」 盛唐の詩人杜甫の詩と生涯について、代表的な詩をじっくり読み味わいながら考えていく。詩の読解と鑑賞を通じて、杜甫の人間観や自然観、社会観や政治観を探り、現代に生きる私たちへのメッセージを読み取る。あわせて漢詩・漢文読解の基礎的な方法を学ぶ。	2	(2)	講義	2～	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
国語科内容実技（書道）	漢字の楷書や行書、仮名の基本を理解するとともに、漢字と仮名の調和した書き方を理解し、伝統文化である書を日常生活に生かして、豊かな言語生活の担い手としての素地を養う。小中学校で書写の指導を行うにあたり、改めて漢字の楷書や行書、仮名の基礎・基本を理論と実践の両面から整理し、書の日常化を図り、書の実践を通して豊かな言語生活を営む工夫を学ぶ。	2	(2)	演習	1～	必修
※国語科内容基礎演習（国語学A）	現代日本語にかかわる事象を取り上げ、言語的な調査・考察を加え、その内容を報告する。受講者各人が研究報告をおこない、その内容に沿って全員で討議をおこなう。語学的な見方・考え方はもとより、調査・分析の方法、また問題設定、解決能力を身に付ける。 取り上げる事象は、共時的な現代日本語を基本とし、共通語、方言、書きことば、話しことば等を扱う。	2	(2)	演習	2～	
※国語科内容基礎演習（国語学B）	近代作家の文章について、文体的な観点から演習発表をおこなう。古典・近代文学作品の文章を語句や表現にこだわりながら読む。ことばの意味や用法、表記法、表現法などの分析を通して文体的な特徴を明らかにする。	2	(2)	演習	2～	
※国語科内容基礎演習（国文学A）	明治・大正期の文学（児童文学を含む）を分析し、その特質を探るとともに、文学研究のテーマ設定の仕方と研究方法、口頭発表の仕方、論文の書き方等について実践的に学ぶ。日本近代文学およびその研究方法への理解を深め、自ら研究する力とそれを教科「国語」の指導に生かす力を身につけることを目標とする。明治・大正期の文学（児童文学を含む）の中から主要な作品を取り上げ、その作品に適した方法を選んで読み解いていく。授業は、作品ごとに担当者を決めて研究成果を発表してもらい、それをめぐって受講者全員で討議する形で進める。	2	(2)	演習	2～	
※国語科内容基礎演習（国文学B）	昭和期以降の文学（児童文学を含む）を分析し、その特質を探るとともに、文学研究のテーマ設定の仕方と研究方法、口頭発表の仕方、論文の書き方等について実践的に学ぶ。日本近代文学およびその研究方法への理解を深め、自ら研究する力とそれを教科「国語」の指導に生かす力を身につけることを目標とする。昭和期以降の文学（児童文学を含む）の中から主要な作品を取り上げ、その作品に適した方法を選んで読み解いていく。授業は、作品ごとに担当者を決めて研究成果を発表してもらい、それをめぐって受講者全員で討議する形で進める。	2	(2)	演習	2～	
※国語科内容基礎演習（国文学C）	日本の古典文学を読み解くための基礎知識と技術を実践的に学ぶ。古典文学を読み味わう力とそれを教科「国語」の指導に生かす力を身につけることを目標とする。くずし字・変体仮名の解読や辞書・索引・注釈書等の使用法について学んだ上で、日本古典文学の著名な作品を読み解き、古語や古文、古典文学に関する知識と理解を深める。授業は、実践形式で進めていく。	2	(2)	演習	2～	
※国語科内容基礎演習（国文学D）	古典文学を研究するための基礎的な力を実践的に養う。古典文学の本文・校異や古注釈に関する理解を深め、辞書・索引・先行研究等を適切に活用し、先行する作品や時代背景にも目配りして、古典文学を研究する力とそれを教科「国語」の指導に生かす力を身につけることを目標とする。授業は、受講者各人が研究成果を発表し、それをめぐって討議する形式で進める。	2	(2)	演習	2～	
※国語科内容基礎演習（漢文学A）	漢文読解の基礎的な方法を学び読解能力を養うとともに、文学作品を読み味わう方法を身につける。中国古代の文学の基礎的な文献を読み、漢文資料を読む方法を学ぶ。テキストを一字一句、詳しく調べ深く理解していくために必要な、辞書や索引などの工具類の使用法や、典拠の調べ方などを、その初歩から徹底して指導する。あわせて文学研究の基本的な方法や態度について身につけられるようにする。	2	(2)	演習	2～	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
※国語科内容基礎演習（漢文学B）	漢文読解の基礎的な方法を学び読解能力を養うとともに、文学作品を読み味わう方法を身につける。中学・高校の教科書でも扱われる春秋戦国期から唐・宋代までの文学作品について考察する。テキストの一字一句について詳しく調べ、深く理解していくために必要な辞書や索引などの使用法や、典故の調べ方などを徹底して指導する。あわせて文学研究の基本的な方法や態度について身につけられるようにする。	2	(2)	演習	2～	
※国語科内容基礎演習（国語科教育A）	教材や授業実践・理論を理解し、自分なりの課題を設け、それを解決するための研究方法・技能を身につけることを目標とする。中学、高校における主たる教材、授業実践・理論を取り上げ、教材研究や授業作りの内実を検討する。	2	(2)	演習	3～	
※国語科内容基礎演習（国語科教育B）	国語科における教科内容学および、教科の指導法に関連的・総合的に学ぶことを通して、国語科の学習指導に関する知見を深める。日本語学、日本文学、国語科教育それぞれの領域から、具体的な教材例や指導例などをもとに国語科の教材開発や学習指導のあり方を学ぶ。	2	(2)	演習	3～	

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表6-15（英語）（中等連携履修型のみ）

芸術体育・生活系教育専攻各コースの中等連携履修型の学生で、英語を選択した学生は、次の表の科目の中から、**必修・選択必修の科目を含めて20単位以上履修**してください。「備考欄」にその指示が記してありますので、よく確認して履修してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
中等英語科内容構成基礎論	中等英語科の指導において扱う内容について、英語学、英語文学、英語コミュニケーション、異文化理解の観点から、構成することができるようになることを目標とする。中等英語科の指導において扱う内容について、英語学、英語文学、英語コミュニケーション、異文化理解の視点から考えたり、検討したりする。	2	(2)	講義	1～	必修
英語科内容概論（英語学）	学校英文法の基礎となっている英語学の基本的知識を学習する。テキストを使いながらも、パワポを利用した講義を行う。	2	(2)	講義	1～	必修
英語科内容概論（英語文学）	英語文学を代表する作品の文学史的な位置を知り、実際に作品を読んで英語表現を理解する力を養い、作者の生涯や作品の文化的背景について学び、広い文化的視野から作品理解を深める力を養う。イギリス文学（およびアイルランド文学）の作品を中心に引き上げ、各作品の重要な箇所は原文を読む。作品の背景に言及しながら、できるだけ多方面から作品を分析する。対象作品は英語文学を代表し、かつ日本においても良く知られる作品を取り上げる。	2	(2)	講義	1～	必修
英語科内容概論（異文化理解）	英語圏の文化を扱った文献を講読し、英語圏の文化についての基本的な理解を深めつつ、多様な文化に触れ、異文化コミュニケーションに積極的に取り組む姿勢を身につけることを目標とする。イギリスの社会を概説したテキストをもとに毎回個別のテーマを設定して考察を進め、広く英語圏の文化への基本的な理解を深める。	2	(2)	講義	1～	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
英語科内容講義(英語学)	音声学について学ぶことをとおして、英語音声について理解を深めるとともに、自らが英語を運用したり生徒に指導を行ったりするために必要な音声学に関する基礎的な知識と技能を身につけることができる。英語に関する基礎的な知識および技能のうち、英語の音声構成する要素とその特徴、日本語音声との違いについて学ぶ。	2	(2)	講義	2～	2単位以上 選択必修
英語科内容演習(英語学 A)	英語学意味論を学習する。テキストを講読しながら、演習を行う。	2	(2)	演習	2～	
英語科内容演習(英語学 B)	英語学語用論を学習する。テキストを講読しながら、演習を行う。	2	(2)	演習	2～	
英語科内容講義(英語文学)	英語文学作品に共通する特定のテーマについて学び、作品を分析的に理解する力を養う。テキストをもとに英語文学を代表するさまざまな作家の文章を特定のテーマから分析し、作品の技法(表現、物語構成など)や作品の文化的背景について考察する。	2	(2)	講義	2～	
英語科内容演習(英語文学 A)	英語文学の作品を精読し、様々な英語表現を学び、正確に英語を読み取る能力を身につけるとともに、英米の歴史や文化に対する理解を深める。授業では、英語文学の短編を題材に語学的、文学的側面から作品を読む。各授業回において、英文和訳、重要な語法、文法などの確認を随時行ない、コメント、ディスカッションをはさみながら作品を読み進めていく。毎回指定の担当者が担当箇所の発表、コメントを行う。	2	(2)	演習	2～	
英語科内容演習(英語文学 B)	英語文学の作品を精読し、様々な英語表現を学び、正確に英語を読み取る能力を身につけるとともに、英米の歴史や文化に対する理解を深める。英語文学の短編を題材に、語学的、文学的側面から作品を読む。英文和訳、重要な語法、文法などの確認を随時行ない、コメント、ディスカッションをはさみながら作品を読み進めていく。毎回指定の担当者が担当箇所の発表、コメントを行う。	2	(2)	演習	2～	
英語科内容演習(異文化理解)	言語から文化まで日本語と英語を中心に違いを理解することを目指す。テキストを講読しながら、演習を行う。	2	(2)	演習	2～	1単位以上 選択必修
英語科内容基礎演習(英会話 A)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと[やり取り]ができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話す。	1	(2)	演習	1～	
英語科内容基礎演習(英会話 B)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと[やり取り]ができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話す。	1	(2)	演習	1～	
英語科内容基礎演習(英会話 C)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと[やり取り]ができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話す。	1	(2)	演習	1～	
英語科内容基礎演習(英会話 D)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと[やり取り]ができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話す。	1	(2)	演習	1～	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
英語科内容演習 (英会話A)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと〔やり取り〕ができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話す。	1	(2)	演習	2～	必修
英語科内容演習 (英会話B)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと〔やり取り〕ができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話す。	1	(2)	演習	2～	1単位以上選択必修
英語科内容演習 (英会話C)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと〔やり取り〕ができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話す。	1	(2)	演習	2～	
英語科内容演習 (英会話D)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと〔やり取り〕ができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話す。	1	(2)	演習	2～	
英語科内容基礎演習 (英作文A)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語を読んで、英語で書くことができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語を読んで、英語で書く。	2	(2)	演習	1～	必修
英語科内容基礎演習 (英作文B)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語を読んで、英語で書くことができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語を読んで、英語で書く。	2	(2)	演習	1～	
英語科内容演習 (英作文A)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語を読んで、英語で書くことができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語を読んで、英語で書く。	2	(2)	演習	2～	必修
英語科内容演習 (英作文B)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語を読んで、英語で書くことができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語を読んで、英語で書く。	2	(2)	演習	2～	
英語科内容演習 (プレゼンテーション)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと〔発表〕ができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて発表をする。	2	(2)	演習	3～	必修

注) 毎週授業時数欄の () は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表6-16 (数学) (中等連携履修型のみ)

芸術体育・生活系教育専攻各コースの中等連携履修型の学生で、数学を選択した学生は、次の表の科目の中から、**必修・選択必修の科目を含めて20単位以上履修してください。**「備考欄」にその指示が記してありますので、よく確認して履修してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
中等数学科内容構成基礎論	中等数学科内容構成とその背景にある数学を理解し、中等数学科内容の教授方法や教材研究・開発を行うための共通の基礎となる数学の基本事項に関する入門的講義である。	2	(2)	講義	1～	必修
数学科内容基礎講義 (代数学)	中学校・高等学校数学科の教科内容の基礎となる数学的背景として、行列と行列式の計算とその基本性質、および、連立方程式の一般的解法を身につけることを目標とする。数学の重要な柱の一つである線形代数学の基礎である行列と行列式の基本的事項、および、応用上重要な連立方程式の一般的解法について講義する。	2	(2)	講義	1～	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
数学科内容講義(代数学A)	中学校・高等学校数学科の教科内容の数学的背景として、線形空間と線形写像の基本事項、および、行列の対角化を身につけることを目標とする。数学の重要な柱の一つである線形代数学の中心的概念であるベクトル空間と線形写像の基本的事項、および、応用上重要な行列の対角化について講義する。	2	(2)	講義	1～	2単位以上 選択必修
数学科内容講義(代数学B)	中学校・高等学校数学科の教科内容の数学的背景として、複素数と一次分数変換の基本事項、および、2次、3次、4次の代数方程式の解の公式とそこから生じる代数的概念を身につけることを目標とする。複素数と一次分数変換、および、対称式と代数方程式の解の公式についての基礎理論を体系的に講義する。	2	(2)	講義	2～	
数学科内容演習(代数学系A)	中学校・高等学校数学科の教科内容の数学的背景として、整数や多項式を扱う際の基礎概念として可換環論の基礎、とくに、割り算原理から単項イデアル整域における素元分解の一意性に関する基本事項を身につけることを目標とする。整数や多項式を扱う数学的体系としての可換環論の基礎、とくに、割り算原理から単項イデアル整域における素元分解の一意性について講義および演習をする。	2	(2)	演習	2～	
※数学科内容演習(代数学系B)	中学校・高等学校数学科の教科内容の数学的背景として、演算とその役割から生じる代数的構造としての群の基本事項を理解し、その具体的な取り扱いを身につけることを目標とする。演算とその役割から生じる代数的構造としての群、群の関係を調べる準同型写像、および、群の構造の分類、群の作用について講義および演習をする。	2	(2)	演習	3～	
数学科内容基礎講義(幾何学)	ユークリッド空間における図形(点集合)を扱う上で基本となる距離と位相に関する基本事項(開集合、閉集合、コンパクト性、連結性、および連続写像の性質)をテーマとして、それらを理解することを目標とする。ユークリッド空間における距離と位相に関する基本事項について具体例と共に紹介する。	2	(2)	講義	1～	必修
数学科内容講義(幾何学A)	平面幾何の基本となる公理と、直線、線分、角、三角形等の図形や三角形の合同定理をテーマとし、それらと関連する定理を証明と共に理解し図形の性質を調べられることを目標とする。平面幾何学の基本的な概念や図形の性質について、幾何学の公理系に触れながら講義する。直線、角、三角形等の基本的な図形の性質と三角形の合同定理や関連する定理を扱う。	2	(2)	講義	2～	2単位以上 選択必修
数学科内容講義(幾何学B)	平面幾何の基本となる公理と、三角形、四辺形、円等の図形や三角形の相似定理をテーマとし、それらと関連する定理を証明と共に理解し図形の性質を調べられることを目標とする。平面幾何の基本的な概念や図形の性質について、幾何学の公理系に触れながら講義する。三角形、四辺形、円等の基本的な図形の性質と三角形の相似定理と関連する定理を扱う。	2	(2)	講義	2～	
数学科内容演習(幾何学系A)	平面曲線、空間曲線、空間内の曲面等の図形をテーマとし、それらの表示方法と具体例、および曲率等の基本概念を理解し、具体的な曲線・曲面の曲率等を計算できることを目標とする。平面曲線、空間曲線、空間内の曲面等の図形の表示方法と曲率等の基本概念を理解するための解説・演習を行う。	2	(2)	演習	2～	
※数学科内容演習(幾何学系B)	ユークリッド幾何とは異なるいろいろな幾何学をテーマとし、特徴的な定理を通じてユークリッド幾何との違いを理解することを目指す。非ユークリッド幾何学(双曲幾何)と射影幾何学の考え方と主要な定理、およびそれらとユークリッド幾何との違いを理解するための解説・演習を行う。	2	(2)	演習	3～	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
数学科内容基礎講義（解析学）	数学を学ぶ上で基本となる実数の性質について、数列の収束性や（1変数）関数の極限、連続性を通して学ぶ。特に、数学的事実を論理的に導いていく過程を体感し、それを少しずつ実践できるようにすることを目標とする。 実数に関するいくつかの公理を前提として、それを基にして実数や数列、連続関数に関する様々な性質が論理的に導かれることを詳細に講義し、レポート課題等によって授業内容のより深い理解を促す。	2	(2)	講義	1～	必修
数学科内容講義（解析学 A）	1変数関数の微分と積分の一般論について、高校で学習した内容をより厳密な観点から学び直す。特に、積分の概念の本来の意味付けや、指数関数、三角関数を厳密に定義する方法について理解することを目標とする。 数学科内容基礎講義（解析学）の授業内容を前提として、1変数関数の微分と積分に関する一般論、及び、指数関数、三角関数の（1つの）厳密な定義についてを詳細に講義し、レポート課題等によって授業内容のより深い理解を促す。	2	(2)	講義	1～	必修
数学科内容講義（解析学 B）	1変数の関数列、関数項級数及び多変数関数の微分に関する一般論について学ぶ。講義においては、数学科内容講義（解析学 A）で学んだ1変数関数の微分、積分の一般論を用いて、関数列、関数項級数及びテイラー級数の収束性について述べる。更に、数学科内容講義（代数学 A）までで学んだ線形代数学の知識と数学科内容基礎講義（幾何学）で学んだ写像、関数の極限、連続性の概念を用いて、多変数関数の偏微分に関する一般論について論理的かつ厳密に述べていく。特に、陰関数、逆写像の微分や極値問題について理解することを目標とする。また、レポート課題等により、授業内容の理解を深めていく。	2	(2)	講義	2～	2単位以上 選択必修
数学科内容演習（解析学系 A）	多次元ユークリッド空間におけるジョルダン測度及び多変数関数の重積分に関する一般論について学ぶ。講義においては、数学科内容基礎講義（幾何学）で学んだ集合の内部、閉包の概念を用いて、ジョルダン測度の一般論について述べ、この概念と数学科内容講義（解析学 B）で学んだ多変数関数の微分に関する一般論を用いて、多変数関数の重積分に関する一般論について論理的かつ厳密に述べていく。特に、集合のジョルダン可測性や重積分と累次積分の違い等を理解し、累次積分の公式、変数変換の公式等を用いて重積分の計算ができるようになることを目標とする。また、演習等により、授業内容の理解を深めていく。	2	(2)	演習	2～	
※数学科内容演習（解析学系 B）	複素関数論の一般論とその応用について学ぶ。講義においては、数学科内容講義（解析学 A）で学んだ1変数関数の微分、積分に関する一般論と数学科内容講義（解析学 B）で学んだ1変数の関数列、関数項級数及び多変数関数の微分に関する一般論を用いて、複素関数論の一般論について論理的かつ厳密に述べていく。特に、複素微分と実2変数関数の微分との違いやコーシーの積分定理、積分公式について理解し、そこから派生する複素関数論の理論の美しさを体感することを目標とする。また、演習等により、授業内容の理解を深めていく。	2	(2)	演習	2～	
数学科内容講義（確率論・統計学 A）	確率論の基礎的事項について、数学的視点から測度論、積分論を通して学ぶ。特に、確率論における事象、確率測度、確率分布、確率変数、平均、分散等の概念を、測度論、積分論を通して数学的に理解することを目標とする。 中等数学科内容構成基礎論、数学科内容基礎講義（解析学）、数学科内容講義（解析学 A）の授業内容を前提として、測度論、積分論を通して確率論の基礎事項を講義し、レポート課題等によって授業内容のより深い理解を促す。	2	(2)	講義	3～	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
数学科内容講義 (確率論・統計学B)	確率論におけるやや発展的な事項について、数学的視点からこれを概観し、統計学との関係について学ぶ。講義においては、測度論、積分論を用いて数学科内容講義(確率論・統計学A)で学んだ確率空間、確率変数、確率分布等の概念を基に、確率分布の平均、分散の計算方法や関連する事項について述べる。更に、確率変数の独立性と直積確率空間との関係について概観し、大数の法則、中心極限定理を通して確率論と統計学との関係について述べていく。また、レポート課題等により、授業内容の理解を深めていく。	2	(2)	講義	3～	
数学科内容講義 (コンピュータ)	中学校・高等学校数学科の教科内容の背景となるコンピュータと数学の関わりについて、具体的なプログラミング実践を通して、プログラム言語の基本事項を理解し、具体的なプログラムの作成とその実行を身につけることを目標とする。コンピュータと数学の関わりについて、具体的なプログラミング実践を通して、プログラム言語の基本事項、および、具体的なプログラムの作成とその実行について講義する。	2	(2)	講義	2～	必修

注) 毎週授業時数欄の()は、前期または後期のみの時数を示す。

⑥コース専門科目

コース専門科目は、所属するコースに応じて得意分野の専門性を身につけるために設けられている科目で、必修・選択必修の科目を含めて6単位の履修が必要です。芸術体育・生活系教育専攻のコース専門科目は、「コース共通科目」、「コースピーク科目」の2種類の科目群で構成されています。「コース共通科目」については、芸術体育・生活系教育専攻における2つのコースごとに、隣接した分野・領域にも目を向けながら、芸術体育・生活系教育でのカリキュラムに対する総合的な資質・能力を身につけるための授業科目です。また、「コースピーク科目」については、それぞれのコースにおける教科の特徴に関連する教育内容をさらに深めて学んでいくための授業科目です。

履修方法については以下の通りとなります。

- ・「コース共通科目」は自分の所属するコースの科目2単位が必修になりますので留意してください。なお、他コースの共通科目も授業担当教員の許可があれば履修可能です。
- ・「コースピーク科目」は、コース毎の授業科目表を参照して、4単位以上修得してください(授業科目表6-17～授業科目表6-18)。

授業科目表6-17 (芸術・体育系教育コース)

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
人間形成における表現と健康	日々の生活の中で、身体を動かし、さまざまな方法で自己を表現し、他者と運動や表現を介してコミュニケーションを行うことは、私達が生きていく上で必須の重要事項である。学校で音楽や美術、体育などの実技教科を教えるための基礎として、身体運動の楽しさ、スポーツ文化の思想、「からだの動き」「イメージ」「音」「ことば」など五感を通した多様な表現活動を、体験を通して学ぶ。	2	2	演習	1～	コース共通科目 必修
音と表現	音とは何か、どのような素材を用いてどのような動作をすると、どのような音が出せるのか、音や声を使ってどのような表現が可能なのか、また世界にはどのような音による表現があるのかなど様々な事例を研究するとともに、実践を通して音と表現の在りようを体験する。	2	(2)	演習	2～	コース ピーク科目 4単位以上 選択必修
※民族音楽演習	インドネシア・バリ島の音楽と舞踊の実習を通して、多様な音楽や身体表現のあり方を学ぶ。世界の音楽を学ぶ意義について説明した後、インドネシアのガムランの実習を行う。個々の楽器の基本的な奏法を習得しながら、音楽の仕組みを理解し、それぞれ異なる役割をもつ楽器での合奏を体験する。またバリ舞踊の基礎を学び、文化による身体運動の違いを体験するとともに、音楽と舞踊の関係についても学ぶ。	2	(2)	演習	1～	
美術特殊演習A	絵画技法について実技を通じて学ぶ。テンペラ絵具を用いた古典技法や油彩との混合技法、またアクリル絵具をはじめとする様々な画材によるミクストメディアを体験する。絵が苦手な方にも分かりやすく難易度に応じた指導を心掛ける。また専門性を追求する絵画制作時の実践的指導力を養う内容にも配慮する。	2	2	演習	3～	
美術特殊演習B	「本授業においては、平面表現（絵画・版画）と立体表現（彫刻）の二面から実践を通じて学習し、美術教育のための基本的能力を深める。」 「小学校図画工作の特徴や技法等を理解し、様々な表現手法、基本的な概念や技術を身につけ指導出来るようになることを目標とする。」	2	2	演習	3～	
からだと表現	日常生活におけるからだや動きを捉え直し、身体感覚を覚醒させることによって、からだを探り実感しながら動くことを学ぶ。また、他者のからだ、自然、ものなどとかかわる動きの課題に取り組むことを通して、からだを心で解放し、からだによる表現のさまざまな可能性を探索する。 からだによるコミュニケーション力を育むことを目指し、以下の内容を実施する。 からだはぐし、空間・時間・質感の変化、同調・増幅・対比の表現、リーダーとフォロワー、ミラーリング・シャドウイング、群表現と伴奏の工夫、触れることで生じる動き、信頼関係の表現（押し・引き・支える）、感情表現と共感の表現、主役と脇役、共同で造形表現、パフォーマーとオブザーバー	2	2	演習	1～	
野外活動と自然体験A	本授業においては、学校教育における児童・生徒の野外における活動の指導はもとより、家庭や地域において行われる自然体験学習の指導に必要な知識、技術の基本を習得し、計画的なプログラムに沿って、自然の中での活動能力を高めることを目指す。 また、生涯スポーツとしてのスキー運動の特性を理論と実践を通して理解すると同時に、実際に冬山を体験することにより、冬季の自然を理解することをねらいとする。また、グレンデスキーにおける滑降・回転の基礎技術および応用技術を学習すると同時に、基本的なスキーの指導法を学習することも、重要なねらいである。	1	2	実験・実習	1～	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
野外活動と自然体験 B	遠泳における泳力の向上を図りながら、合宿経験を通して臨海学校などの海浜行事の運営や指導について体験的に学ぶ。 また、生涯スポーツとしてのスキー運動の特性を理論と実践を通して理解すると同時に、実際に冬山を体験することにより、冬季の自然を理解することをねらいとする。また、ゲレンデスキーにおける滑降・回転の基礎技術および応用技術を学習すると同時に、基本的なスキーの指導法を学習することも、重要なねらいである。	1	2	実技	1～	

注) 毎週授業時数欄の () は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表6-18 (生活系教育コース)

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
生活系教育概論	本科目では、技術・家庭科の教科内容を含む生活系教育に必要な基礎的知識や技能について学ぶ。(1) 生活空間を構成するさまざまなモノの量や状態を表す概念である「単位」を理解する。単位の定義や成立までの経緯・使用される場面などについて学ぶ。(2) ICT活用能力を高める文書・スライド作成アプリケーションソフトの活用方法などを学び、情報リテラシーを高める。(3) 生活に使われている各種の材料やエネルギー利用の基礎を学ぶ。	2	(2)	講義	1～	コース共通科目 必修
中等技術科内容構成基礎論	中学校の技術科の指導内容について、学術的な背景と教育との関連を講義と演習を通して学ぶ。	2	(2)	講義	1～	コース ピーク科目 4単位以上 選択必修
中等家庭科内容構成基礎論	本科目では、中学校技術・家庭の家庭分野を総括的に理解し、中学校における家庭科の役割を認識することを主要な学習到達目標とする。 授業では、家庭生活について、「食生活、衣生活、住生活の見直しと改善」、「子どもと家族、幼児の遊び、地域の人々とのふれあい、環境や資源を考えた暮らし」等を取り上げ、各々の内容に関する授業の組み立てについて講義する。	2	(2)	講義	1～	
技術科内容講義 (材料と加工)	木材、プラスチック、木質材料及び金属が有する特性および機械的性質を学ぶとともに、その特長を活かした作品製作の実践を通してものづくりの技能を習得する。各種機械加工法にも触れ、ものづくりの技術・技能を活かした教材・教具づくりを実践し、様々な教材開発に応用できる力を身につける。3Dプリンタやレーザー加工機などを活用したデジタルファブリケーションについて、一部で実習を取り入れる。	2	(2)	講義	3～	
技術科内容応用講義 (機械)	中学校技術科の「エネルギー変換」分野における機械に関係する部分に焦点をあてて、新しい学習指導要領で重視されるようになった「課題解決」学習に取り組む。	2	(2)	講義	3～	
技術科内容応用講義 (電気)	ダイオード・トランジスタなどの半導体素子、および基礎的な各種の電子部品(コンデンサ・コイル・太陽電池・プザー・リレーなど)の動作原理・特性を学習する。また、それらを使った簡単な電子回路の設計方法についても学習する。	2	(2)	講義	2～	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
技術科内容応用講義（栽培／生物育成）	「技術科内容基礎講義（栽培）」「技術科内容実験実習（栽培）」では扱えなかった多様な教材作物の生理的特性・栽培技術について、より深く学ぶ。また、新しい生産技術である植物工場・植物バイオテクノロジーなどについて解説するとともに、計測機器やソフトウェアを活用した作物生長評価技術も体験する。さらに、学習指導要領に含まれる家畜・魚類の飼育技術にも触れる。	2	(2)	講義	2～	コース ピーク科目 4単位以上 選択必修
技術科内容応用講義（情報とコンピュータ）	コンピュータの基本アプリケーションの活用から始め、パワーポイントを使ったイラスト・動画作成の学習でコンピュータ活用能力を高める。デジタル回路・センサ回路を使ったコンピュータ制御技術や通信に関する技術の基礎を学ぶ。	2	(2)	講義	2～	
家庭科内容講義（被服学 B）	学生が家庭科の被服領域を教授するのに必要な専門的知識を自然科学の視点から概説する。衣服の機能性に影響を与える影響について、素材・糸・布についての種類や構造、性質、製造方法等を概説し、豊かな衣生活を過ごすための実践方法について考察する。	2	(2)	講義	3～	
家庭科内容講義（食物学 B）	私たちの食生活の成り立ちを日本の食の歴史、現在の世界の食生活や食環境を通じて知ることにより、持続可能で栄養バランスの取れた健康的な食生活とはどのような食生活かを考える。また、現在の自分自身の食生活を振り返り、これからの食生活のあり方についても考えていく。	2	(2)	講義	3～	
家庭科内容講義（住居学 B）	本科目では、住環境形成のしくみや、健康・快適・省エネルギーな調整の方法について学習する。特に、遮音・音響、採光・照明、換気・通風、断熱・省エネルギー、湿気・結露といった事象を通して、家庭科の住居学に関する専門的内容を理解し、授業づくりに反映するための基礎を習得することを目的とする。基礎原理に基づく対処法の検討を行う技術習得のために、身近な空間の環境計測・評価を行う。	2	(2)	講義	3～	
家庭科内容講義（保育学 B）	少子化、経済活動の悪化など、現代においては家族を取り巻く社会的な状況が急激に、多様に変化している。そのような中で、保育者に子育て家庭に対する支援が求められてきた。本科目では、(1) 子育て家庭を取り巻く社会的状況の在り方や歴史的な変遷を調査し、そこでどのような支援が保育所・幼稚園に求められているのか検討を行う。そして、(2) これから保育者に求められる専門性について理解する。さらに、(3) 保育に携わる者の専門性育成に関する時間的展望を把握することを目指す。	2	(2)	講義	3～	

注) 毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

5 専門教育科目 その5 卒業研究（4単位）

卒業研究は、全専攻に共通して設定されている科目です。その内容、方法、履修の手順等は、所属する専攻・コースごとに定められています。また、卒業研究には参加資格があり、これに関しても専攻・コースによって必要単位数が異なります。

卒業研究の履修に関しては、第14章の説明を確認してください。



第 10 章

特別支援教育専攻専門教育科目

1 専門教育科目 その1

教育の基礎的理解に関する科目 授業科目表7-1

2 専門教育科目 その2

道徳・総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、
教育相談等に関する科目 授業科目表7-2

3 専門教育科目 その3

キャリアステップアップ科目 授業科目表7-3(小履修型のみ)

キャリアステップアップ科目 授業科目表7-4(中履修型のみ)

4 専門教育科目 その4

教科及び教科の指導法に関する科目

①各教科の教育法(初等) 授業科目表7-5(小履修型のみ)

②各教科の教育法(中等) 授業科目表7-6(中履修型のみ)

③小学校の専門科目 授業科目表7-7(小履修型のみ)

④中学校の専門科目 授業科目表7-8(国語)(中履修型のみ)

授業科目表7-9(社会科)(中履修型のみ)

授業科目表7-10(英語)(中履修型のみ)

授業科目表7-11(数学)(中履修型のみ)

授業科目表7-12(理科)(中履修型のみ)

授業科目表7-13(音楽)(中履修型のみ)

授業科目表7-14(美術)(中履修型のみ)

授業科目表7-15(保健体育)(中履修型のみ)

授業科目表7-16(技術)(中履修型のみ)

授業科目表7-17(家庭科)(中履修型のみ)

⑤特別支援専門科目 授業科目表7-18(視覚障害教育コース)。

授業科目表7-19(聴覚・言語障害教育コース)

授業科目表7-20(発達障害教育コース)

授業科目表7-21(健康・運動障害教育コース)

※特別支援専門科目履修上の注意(各領域要件科目一覧表)

5 専門教育科目 その5 卒業研究

第10章 特別支援教育専攻専門教育科目



この章では、特別支援教育専攻の教育課程表（卒業に要する単位数）の中の「専門教育科目」について、「授業科目表」を掲載し、授業科目の詳細と履修方法を説明します。表の見方については、第2章「**Ⅱ 授業科目表の見方**」を参照してください。

1 専門教育科目 その1 教育の基礎的理解に関する科目

教育の基礎的理解に関する科目の修得が必要な単位数は各コース共通して10単位です。

教育の基礎的理解に関する科目に属する各授業科目の詳細と履修方法については、次の「**授業科目表7-1**」で確認してください。なお、所属するコースによって履修できるクラスが定められている科目もありますので、『**開講科目一覧**』でクラス指定の指示も確認してください。

教育の基礎的理解に関する科目 授業科目表7-1

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
教育の原理	教育学の基礎的知識を身につけ、教育について原理的に考え、対話できるようになることを目標とする。また、西洋教育思想史と日本の教育実践思想史のポイントを理解することを目指す。 教育の理念・歴史・思想を含む、教育の基礎理論を学ぶ。表面的には多様な諸教育実践を根底で支え成り立たせている教育の原理は、網羅的で概説的な手法ではとらえることができない。そこで、この講義では、表面的には隠されている教育の原理に迫る。	2	(2)	講義	2～	必修
教職入門	教職の意義や職務内容を理解し、適切な進路選択ができるように、自己の教師像を明確にし、そのために何が必要かを理解し、実際に準備を始める。また、教職の意義や職務内容を理解し教科指導と学級経営における教職の基礎・基本について学ぶ。	2	(2)	講義	1～	必修
教育の制度・経営	教育制度の原理や構成について理解し、学校・教員を取り巻く課題について理解し、解決の在り方について考察できるようになることを目標とする。教育制度の原理や構成について学び、それらを取り巻く状況や課題を分析し、原理の具現化として学級や学校経営の仕組みを捉える。	2	(2)	講義	1～	2単位以上 選択必修
教育と地域社会	現代社会における教育の意義や教育に関わる制度について基礎的知識を身につけ、教育現場における課題の解決に向けて考察することができるようになることを目標とする。学校の内外における教育のさまざまな取り組みについて現状を把握し、理論に基づく解決の方策を検討する。	2	(2)	講義	1～	
発達と学習の心理	発達と学習についての理論および実際について理解し、心理学的な知能の捉え方や、障害をもった児童・生徒の処遇などについて理解できるようになることを目標とする。内容については、発達と学習についての理論および実際について概説する。また、心理学的な知能の捉え方や、障害をもった児童・生徒の処遇などについても解説する。	2	(2)	講義	1～	必修
特別支援教育理解	特別な支援を必要とする子供たちへの対応は、特別支援学校に限らず全ての学びの場で行われること、小中学校等における障害のある子供たちへの教育・支援に関する基礎的知識を修得し、合理的配慮の必要性について理解することを目指す。内容については、多様な障害のある子供たちの実態、多様な学びの場におけるそうした子供たちとの関わり方について概説する。	2	(2)	講義	1～	必修

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

2 専門教育科目 その2 道徳・総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目

道徳・総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目の修得が必要な単位数は各コース共通して10単位です。道徳・総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目に属する各授業科目の詳細と履修方法については、次の「授業科目表7-2」で確認してください。

なお、所属するコースによって履修できるクラスが定められている科目もありますので、『開講科目一覧』でクラス指定の指示も確認してください。

道徳・総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目 授業科目表7-2

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時間	講義・演習・実験等	対象年次	備考
道徳の理論及び指導	道徳教育・道徳発達に関する基礎的事項を理解し、説明できるようになるとともに、学習指導案の作成、指導の展開、評価ができるようになることを目標とする。 現在のわが国の道徳教育の問題点や課題について検討するとともに、道徳発達及び道徳教育に関する様々な理論と実践との関連について考察する。また、学習指導案の作成、指導の展開、評価、さらには現場における実践のあり方について考える。	2	(2)	講義	3～	必修
総合的な学習の時間の指導法（特別活動を含む。）	総合的な学習の時間を指導するために必要な原理と方法を知る。特に、総合的な学習の時間における「探究」のあり方と、単元構成と学習展開の具体的方法について理解を深める。また、総合的な学習の時間と関連性の深い特別活動を指導するための原理と方法を知る。教育課程（カリキュラム）全体の中における、総合的な学習の時間と特別活動の意義と位置づけを知る。	2	(2)	講義	3～	必修
教育課程と教育方法	教育活動を計画的・系統的・意図的に行うためには、教育課程（カリキュラム）を編成し、実施し、評価することが欠かせない。本講義では、 (1) 教育課程とは、学習指導要領を一つの基準としながら、授業実践における内容（what）と方法（how）とを一体のものとして、子どもの発達段階や社会的要請を踏まえながら編成されるものであることを学ぶ。その際、カリキュラム・マネジメントの視点を身につける。 (2) 教育内容がどのような考え方のもとに編成され、教え・学ぶことが可能なかたち組み立てられるかについて学ぶ。 (3) 教育の方法および技術について考えるための基本的視座を提供し、それをもとに学習指導のあり方を検討する。ICT（情報機器及びオンライン教材）の活用についても学ぶ。	1	(1)	講義	2～	必修
情報活用能力育成実践論	この授業では、学校教員として求められる実践的な ICT 活用指導力を身に付けることを目標とします。具体的な内容としては、主に仙台市内の教員、附属小学校、中学校の教員から講義を受け、現場で実施されている ICT を活用した指導方法について学びます。学校現場で実際に実施されている内容を扱うため、具体的に実践的な知識や技術を学ぶことができます。	1	(1)	講義	2～	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
児童・生徒理解	生徒指導・進路指導・キャリア教育の理論および実践について学び、児童・生徒の自己指導能力を育成するために必要な知識・技法や素養を身に付けることを目標とする。 生徒指導・進路指導・キャリア教育の意義や理論、および実践のための技法や課題等について講義する。正課の授業や課外活動、個別指導や全体指導、学級経営や校内・校外連携等のあらゆる機会や手段を通じて児童・生徒の個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高め、かつ児童・生徒の自己指導能力を育成するための教育実践とその課題について考察する。	2	(2)	講義	3～	必修
教育相談（カウンセリングを含む。）	学校における教育相談の意義と課題を理解し、教育相談を進める際に必要な基礎的知識（カウンセリングに関する基礎的事柄を含む）を理解し、具体的な進め方やポイント、組織的な取り組みや連携の必要性を理解することを目標とする。 教育相談は幼児児童生徒が自己理解を深め、好ましい人間関係を築きながら、集団の中で適応的に生活する能力を育み、個性の伸長や人格の成長を支援する教育活動である。幼児児童生徒の発達段階に即して、個々の心理的特質や教育的課題を適切に捉え、支援に必要な基礎的知識とカウンセリングの意義、理論、技法を身につける。	2	(2)	講義	3～	必修

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

3 専門教育科目 その3 キャリアステップアップ科目

キャリアステップアップ科目の修得が必要な単位数は各コース共通して17単位です。

キャリアステップアップ科目に属する各授業科目の詳細と履修方法については、次の「授業科目表7-3、7-4」で確認してください。2年次以降に履修する授業科目は、履修型の違い（小履修型か中履修型か）によって異なってきます。中履修型の学生が履修する「実践指導法」科目は、選択する教科によって履修する授業科目が定められています。「備考欄」にその指示が記してありますので、自分が選択した教科の授業科目を履修してください。

なお、履修できるクラスが定められている科目もありますので、『開講科目一覧』でクラス指定の指示も確認してください。

「キャリアステップアップ科目」に関しては、第11章と第12章の説明をよく読んで履修してください。第12章に説明がありますが、教育実習には履修資格が設けられています。

キャリアステップアップ科目 授業科目表7-3 （小履修型のみ）

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
教育体験初年次演習Ⅰ	教育や子どもをめぐる問題についてクラスで討議したり、学校現場に出向いて教育活動や児童・生徒の様子を観察したりすることで、教員養成のキャリアステップアップの基礎づくりを行う。また、クラスで設定した課題の探究活動等を通して、大学での学修のための基礎技法を学ぶ。	2	(2)	演習	1～	必修
教育体験初年次演習Ⅱ	文献講読やクラス討議、学校現場での観察・体験を通して、児童・生徒の行動や心情を理解し、実態と課題を把握するとともに、児童・生徒との接し方、教職の魅力等を学ぶ。また、現代の教育課題等の探究を行いながら、キャリアステップアップの展望を得るとともに、専門分野の学修に必要な読解力、論理的思考力、表現力等を磨く。	2	(2)	演習	1～	必修
初等教育実践探究演習A	3年次以降の教育実習に向けて、授業研究法を修得するとともに、教材研究の仕方、学習活動の組織の仕方、授業設計の仕方、指導計画・学習指導案の作成方法等の基礎を学ぶ。また、3年次学生と共同で学習指導案の作成や模擬授業、その省察等を行う。	2	(2)	演習	2～	必修
初等教育実践探究演習B	初等教育実践探究演習Aの学修成果を踏まえるとともに、教科にかかわる専門教育科目の学修をいかして教材研究と学習指導案の作成、模擬授業等を行い、教育実習にのぞむ。また、実習後には2年次学生と共同でその省察を行い、より良い授業づくりについて考察、授業実践力の向上を図る。	2	(2)	演習	3～	必修
小学校3年次実習（事前・事後指導1単位を含む。）	授業では、実際の教育活動に即して小学校の概要を理解すること、具体的な授業実践や体験、観察、指導とのふれあいを通して、教師として必要な資質・能力を伸張することを目標とする。担当教師の授業を観察し、授業構成や学習の流れ、子どもの反応がどのようにになっているのかを捉え、授業の組み立て方を知ることや講話により児童理解の在り方、基本的な指導案作成の仕方等を学ぶ。さらに、自ら教材を研究し指導案を作成して授業を行う「実践授業」を経験させ、実施後は担当教師、他の実習生も交えて研究討議を行い、教材解釈や発問、板書、授業者の態度等について深めさせる。	3		実習（事前・事後指導は講義）	3～	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
小学校4年次実習（事前・事後指導1単位を含む。）	教科の学習指導、特別活動、行事活動、学級経営、生徒指導等学校教育のすべての分野と、それを担当する教師の仕事の重要性について実際に学習、観察、体験させ研究させる。学習指導案を作成したの教壇実習は7時間以上経験させ、実習開始直後の導入的プログラムが終了した後は、1日1時間を目安に、特別活動や学級指導（朝の会、帰りの会、清掃指導、給食指導等）の教職に関する指導を実践させ、研究授業を設定する。 協力小学校における実習では、小学校における教科、特別活動の指導について、大学での講義と関連付けて理解を深めるとともに、配当学級のみならず実習校全体の学校目標や地域との関わりについても把握し、学校運営における教師の役割や任務等についてさらに学ばせる。	4		実習（事前・事後指導は講義）	4	必修
教職実践演習（幼・小）	直接授業を担当する教員に加え、授業計画の立案や授業の具体的な展開の補佐及び教科の専門的知識の確認等に関して、教科専門教員及び学校現場経験者、本学附属学校教員との連携体制を構築する。幼稚園・小学校教諭に相応しい資質や能力の確認を行い、各教科に即したこれまでの履修の在り方をまとめあげるとともに、実際の授業力に結びつける形で内容の総まとめを行う。	2	(2)	演習	4	必修

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

キャリアステップアップ科目 授業科目表7-4（中履修型のみ）

中履修型の教育実践探究演習科目は、取得しようとする中学校免許状の各教科の実践指導法 A、B となりますので留意してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
教育体験初年次演習Ⅰ	教育や子どもをめぐる問題についてクラスで討議したり、学校現場に出向いて教育活動や児童・生徒の様子を観察したりすることで、教員養成のキャリアステップアップの基礎づくりを行う。また、クラスで設定した課題の探究活動等を通して、大学での学修のための基礎技法を学ぶ。	2	(2)	演習	1～	必修
教育体験初年次演習Ⅱ	文献講読やクラス討議、学校現場での観察・体験を通して、児童・生徒の行動や心情を理解し、実態と課題を把握するとともに、児童・生徒との接し方、教職の魅力等を学ぶ。また、現代的教育課題等の探究を行いながら、キャリアステップアップの展望を得るとともに、専門分野の学修に必要な読解力、論理的思考力、表現力等を磨く。	2	(2)	演習	1～	必修
中等国語科実践指導法（教育実践探究演習）A	学習指導要領の目標や内容と国語科の指導理論の理解に基づいた、中学校国語科の授業づくりの基本的な方法を修得する。教材研究、学習指導案、模擬授業作りに共同して取り組む。	2	(2)	演習	2～	必修 （中履修型 国語のみ）
中等国語科実践指導法（教育実践探究演習）B	学習指導要領の目標や内容と国語科の指導理論の理解に基づいた、高等学校国語科の授業づくりの基本的な方法を修得する。教材研究、学習指導案、模擬授業作りに共同して取り組む。	2	(2)	演習	3～	必修 （中履修型 国語のみ）
中等社会科実践指導法（教育実践探究演習）A	中学校社会科地理的分野・歴史的分野の授業についての基礎的な技能を身に付けることを目標とする。中学校社会科地理的分野・歴史的分野の授業に対する関心を高めるとともに、基礎的な技能を習得する。	2	(2)	演習	2～	必修 （中履修型 社会のみ）

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講義・ 演習・ 実験等	対 象 年 次	備 考
中等社会科実践 指導法（教育実 践探究演習）B	中学校社会科の公民的分野の授業の技能について習得する。	2	(2)	演習	3～	必修 (中履修型 社会のみ)
中等英語科実践 指導法（教育実 践探究演習）A	中学校及び高等学校の英語科における5領域及び領域統合多々の指導技術と評価方法を身につける。具体的には、4技能5領域の指導、領域統合型の言語活動の指導、学習指導案の作成、言語能力の測定と評価等について学ぶ。	2	(2)	演習	2～	必修 (中履修型 英語のみ)
中等英語科実践 指導法（教育実 践探究演習）B	中学校及び高等学校の英語科と第二言語習得に関する知識を身につける。具体的には、目標設定・指導計画、学習到達目標に基づく授業の組み立て、学習指導案の作成、観点別学習状況評価・評価規準の設定・評定への総括、小・中・高等学校連携、第二言語習得等の内容を扱う。	2	(2)	演習	3～	必修 (中履修型 英語のみ)
中等数学科実践 指導法（教育実 践探究演習）A	大学における履修済みの「教科及び教科の指導法に関する科目」の学習経験を生かして、生徒たちの多様な考えを生かして新たな学びを実現する場としての授業観を身につけるとともに、授業を改善する方法としての「授業研究」を体験を通して理解する。 授業の計画・改善の方法として国際的にも注目を集める「授業研究」を模擬的に実施することで、授業の構想から改善に至るまでの考え方やスキルを実践的・反省的に学ぶ。	2	(2)	演習	2～	必修 (中履修型 数学のみ)
中等数学科実践 指導法（教育実 践探究演習）B	大学における履修済みの「教科及び教科の指導法に関する科目」の学習経験を生かして、生徒たちの多様な考えを生かして新たな学びを実現する場としての授業観を身につけるとともに、授業を改善する方法としての「授業研究」を体験を通して理解する。 授業の計画・改善の方法として国際的にも注目を集める「授業研究」を模擬的に実施することで、授業の構想から改善に至るまでの考え方やスキルを実践的・反省的に学ぶ。	2	(2)	演習	3～	必修 (中履修型 数学のみ)
中等理科実践指 導法（教育実践 探究演習）A	中等教育における理科教育の方法とその実践事例を上級生との協働で理解する。これまでの自然科学についての学習で得られた知識と、模擬授業を伴った教育方法の学習で得られた知識および経験をもとにして、分かりやすくかつ丁寧な授業を考案することができるようになることを目標とする。中学校、高等学校を主とした理科教育に関わる授業の進め方や教材・教具の取り扱いについての模擬授業の実践を伴った講義である。	2	(2)	演習	2～	必修 (中履修型 理科のみ)
中等理科実践指 導法（教育実践 探究演習）B	中等教育における理科教育の指導方法とその教授方法について学年をまたいだ学生間との協働で理解する。これまでの自然科学についての学習で得られた知識と、模擬授業を伴った教育方法の学習で得られた知識および経験をもとにして、分かりやすくかつ丁寧な授業を考案し、発展的なことを取入れたりアドバイスすることができるようになることを目標とする。中学校、高等学校を主とした理科教育に関わる授業の進め方や教材・教具の取り扱いについての模擬授業の実践を伴った講義である。	2	(2)	演習	3～	必修 (中履修型 理科のみ)
中等音楽科実践 指導法（教育実 践探究演習）A	中学校の音楽科教育において、歌唱、器楽、創作、鑑賞の授業を行う上で必要な基本的な音楽の知識と指導の技能を習得することを目標とする。概要としては、中学校の音楽科教育に必要な教材の理解や教材分析の方法の基礎について学ぶ。教科書分析や授業記録の検討といった文献研究と、附属学校での授業参観や研究授業の検討といった実践研究を、教育実習を実践する3年次学生と協働して進める。	2	(2)	演習	2～	必修 (中履修型 音楽のみ)

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
中等音楽科実践指導法（教育実践探究演習）B	中学校の音楽科教育において、歌唱、器楽、創作、鑑賞の授業を実践する上で必要な音楽の知識と技能を、生徒の実態に即した授業開発と実践を通して身につけることを目標とする。中学校の音楽科教育に必要な教材の理解や教材分析の方法について、附属学校での教育実習で得られた経験と研究授業の検討を踏まえつつ、音楽科授業の実践的な指導力を身につける。	2	(2)	演習	3～	必修 (中履修型音楽のみ)
中等美術科実践指導法（教育実践探究演習）A	美術科の教育現場におけるカリキュラム構成の分析と検証を踏まえた上で、表現を実践する意義にテーマを当て、美術科教育の在り方に照らし合わせ、教育実践における地域の特性を生かした教育普及など全般的に学習する。さらに、中学校における授業作りに、自ら考え構想を練るなど、創造的な企画力を高め、幅広い授業作りの演習に取り組み、基本的な芸術文化の教育理念を体得し学習する。	2	(2)	演習	2～	必修 (中履修型美術のみ)
中等美術科実践指導法（教育実践探究演習）B	義務教育内での美術教育指導は職人や美術家養成ではない、実験的な技法を学び表現の楽しさ、生涯学習社会のなかでの今後のアートのあり方や「美術で教育」することを理解することを目標とする。学校美術科の教科書分析をはじめ、授業でも活用できるモダンテクニック等の技法を造形演習として行う。また現代の多様な表現を知り、ICT活用など今後の美術科教育のあり方を学ぶ。	2	(2)	演習	3～	必修 (中履修型美術のみ)
中等保健体育科実践指導法（教育実践探究演習）A	保健及び体育科の授業を創るために必要となる基礎的な知識を身につける。また、運動文化や身体に含まれる教材価値について理解・説明できる力を養う。加えて、授業を分析する方法を理解し、生徒の立場から授業の課題と改善点を考え、情報機器を使って表現する力を育む。運動文化や身体に含まれる教材価値と授業分析の方法について理解した上で、模擬授業に生徒役として参加し、授業の課題を見つけられるようにする。	2	(2)	演習	2～	必修 (中履修型保健体育のみ)
中等保健体育科実践指導法（教育実践探究演習）B	保健及び体育科の授業を創るために必要となる基礎的な知識を用いて授業プランを作成する力を身につける。また、模擬授業の実践を通じて生徒がわかり・できるようになっていく過程について体験し、教師の立場から授業の課題と改善点を考える力を育む。発問の意図や意義、教具の用い方、及び、効率的な教師行動について理解し、授業プランに反映させることができ、授業プランのプロセスを理解し、他のグループが作成した指導案を修正できるようになることを目標とする。	2	(2)	演習	3～	必修 (中履修型保健体育のみ)
中等技術科実践指導法（教育実践探究演習）A	・ 授業を考える上で基礎となる授業の記録や分析を通して、様々な視点で授業を理解する。 ・ 教材観を養い、自分がイメージする学習指導案を作成する。	2	(2)	演習	2～	必修 (中履修型技術のみ)
中等技術科実践指導法（教育実践探究演習）B	・ 自分がイメージする授業を行うことを前提として、専門的な教材研究と教材作成を行い、様々な教授スキルを習得しながら模擬授業を行う。 ・ 授業後には授業検討会を行い、自分自身の授業に対して客観的に分析する。	2	(2)	演習	3～	必修 (中履修型技術のみ)
中等家庭科実践指導法（教育実践探究演習）A	家庭科教育の指導案のもと（題材集）を作ることができ、家庭科教育の指導に必要な知識と技能を習得することを目標とする。家庭科の授業の特徴を捉え、教育目的に沿った教材開発について具体的に理解する。併せて、家庭科に必要な技能の習得を図る。	2	(2)	演習	2～	必修 (中履修型家庭科のみ)
中等家庭科実践指導法（教育実践探究演習）B	家庭科教育の指導に必要な知識と技能を習得し、授業を創造する力を身につける。中学校家庭科の指導で必要とされる技能面の習得を目指す。また、実習を取り入れ、実習題材の教材研究を深めると同時に模擬授業を実施する。	2	(2)	演習	3～	必修 (中履修型家庭科のみ)

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講 義 ・ 演 習 ・ 実 験 等	対 象 年 次	備 考
中学校3年次実習（事前・事後指導1単位を含む。）	授業では、指導教諭の授業の学習の構成や流れ、発問の仕方、生徒の反応の生かし方などがどのように行われているのか観察させ、また、授業のねらい、教材の特徴、生徒の実態の視点を重視した実践授業に取り組ませる。さらに、題材や指導計画、本時の指導に際しての留意点を記した指導案を作成させ研究授業に取り組ませる。研究授業終了後には指導教諭と参観者による討議の場を設け、学ぶべき点や今後の課題、その解決のための方向性などを確認させる。そのほか、授業づくりのベースとなる生徒一人ひとりとの人間関係構築について、始業前や休み時間、放課後の諸活動、下校指導等も活用し実践させる。	3		実習 （事前・事後指導は講義）	3～	必修 （中履修型のみ）
中学校4年次実習（事前・事後指導1単位を含む。）	教科の学習指導、特別活動、行事活動、学級経営、生徒指導等学校教育のすべての分野と、それを担当する教師の仕事の重要性について実際に学習、観察、体験させ研究させる。学習指導案を作成しての教壇実習は7時間以上経験させ、実習開始直後の導入的プログラムが終了した後は、1日1時間を目安に、特別活動や学級指導（朝の会、帰りの会、清掃指導、給食指導等）の教職に関する指導を実践させ、研究授業を設定する。 協力中学校における実習では、教師が学習者の視点をもつとともに、生徒が主体的・対話的に深く学ぶことができるような効果的な指導の在り方を探らせる。これら学習活動のほか、校務分掌等の学校・学級経営に関する事項についても学ばせる。	4		実習 （事前・事後指導は講義）	4	必修 （中履修型のみ）
教職実践演習（中・高）	直接授業を担当する教員に加え、授業計画の立案や授業の具体的な展開の補佐及び教科の専門的知識の確認等に関して、教科専門教員及び学校現場経験者、本学附属学校教員との連携体制を構築する。中学校・高等学校教諭に相応しい資質や能力の確認を行い、各教科に即したこれまでの履修の在り方をまとめあげるとともに、実際の授業力に結びつける形で内容の総まとめを行う。	2	(2)	演習	4	必修

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

4 専門教育科目 その4 教科及び教科の指導法に関する科目

教科及び教科の指導法に関する科目の修得が必要な単位数は小履修型で71単位、中履修型で67単位です。第5章の特別支援教育専攻の教育課程表をよく確認し、履修型毎に履修が必要な授業科目を確認してください。教科及び教科の指導法に関する科目に属する各授業科目の詳細と履修方法については、次の「授業科目表7-5～21」(履修型によって関係する授業科目表が異なります)で確認してください。中履修型において、選択した教科あるいは取得を希望する免許の種類によって履修する授業科目が定められている場合や、必要とする単位数が異なる場合は、「備考欄」にその指示が記してあります。

なお、履修できるクラスが定められている科目もありますので、『開講科目一覧』でクラス指定の指示も確認してください。

①各教科の教育法（初等） 授業科目表7-5（小履修型のみ）

特別支援教育専攻各コース小履修型の学生は、次の表の科目を全て履修してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時間	講義・演習・実験等	対象年次	備考
初等国語科教育法	言語の教育としての国語科の授業づくりにおける教材研究とその方法について、学習指導要領をふまえつつ、授業づくりの基礎的な能力を習得することを目標とする。学習指導要領に示された目標及び育成すべき資質・能力をもとに、国語科の教科構造を理解しつつ、代表的な教材やその指導法について理解する。	2	(2)	講義	2～	必修 (小履修型のみ)
初等社会科教育法	小学校の社会科教育に関する目標・内容・方法・評価等について理解することを目標とする。小学校の社会科に関する各内容等の学習指導について、具体的な教材・授業を通して学ぶ。	2	(2)	講義	3～	必修 (小履修型のみ)
初等算数科教育法	教える側の視点から「算数教育」を捉えなおし、小学校算数科を担当するため、算数科の目標・内容・方法について最低限の理解を図る。概要としては、小学校で算数を教えるために最低限知っておきたい基礎を学ぶ。	2	(2)	講義	2～	必修 (小履修型のみ)
初等理科教育法	小中学校の理科は学習指導要領の中で、エネルギー・粒子・生命・地球の4領域で構成されており、各領域は系統的に構成され、領域ごとの特徴に応じた教材と指導法がある。この講義では、各領域の系統性を理解し、教材と指導法の具体的な事例をもとに、授業の進め方や教材の取り扱いについて解説する。	2	(2)	講義	3～	必修 (小履修型のみ)
初等生活科教育法	小学校の生活科教育に関する目標・内容・方法・評価について理解することを目標とする。小学校の生活科に関する各領域等の学習指導について具体的な教材・授業を通して学ぶ。	2	(2)	講義	3～	必修 (小履修型のみ)
初等音楽科教育法	児童の心理的・音楽的な発達と音楽科教育の目的を踏まえた上で、小学校音楽科の授業を実践する上で必要な理念及び知識と、基礎的な音楽の技能及び指導法を身につける。教材研究に取り組み、新たな教材開発も念頭に受講生で協働して模擬授業を実践する。授業では各領域の教材研究のほか、歌唱や器楽、特にリコーダーの基礎的な技法について学び、音楽科の授業を実践する力を身につける。	2	(2)	講義	2～	必修 (小履修型のみ)

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
初等図画工作科教育法	「創造的な教科としての図工・美術」としての造形演習や国内外の事例研究、授業の立て方についても学び構想力を高め、義務教育内での図工美術教育指導は職人や美術家養成ではない、「美術の教育」ではなく「美術で教育」であることや表現の多様性を理解することを目標とする。小学校図画工作での「造形あそび」の造形演習などこれからの図画工作の授業を検討する。また国内外の多様な造形表現を知り、ICT活用など今後の図画工作教育のあり方を学ぶ。小学校図画工作科学習指導要領を内容と方法の視点から分析する。さらに「創造的な教科としての図工・美術」としての造形演習や事例研究、授業の立て方についても学び構想力を高める。	2	(2)	講義	2～	必修 (小履修型のみ)
初等家庭科教育法	実際の家庭科の授業を念頭において授業の目標、教材、教授行為などについて考察し、受講者が自ら授業を構想できることを目指す。実際の授業を追試するプロセスを経て、家庭科の授業づくりの能力を培う。教科書教材を用いる場合と自ら考え出す教材の場合とがあるが、それぞれの留意点を明らかにする。	2	(2)	講義	3～	必修 (小履修型のみ)
初等体育科教育法	学習指導要領の変遷から体育科の目的を考え、これまでの実践研究の成果や課題について学ぶとともに、教材づくりの目標・内容・方法、ICTの活用に関する知識や技能を習得する。また、全ての子どもが意欲的に学習に取り組めるような体育・保健の学習指導案の作成について理解する。	2	(2)	講義	2～	必修 (小履修型のみ)
初等外国語活動・外国語教育法	小学校における外国語活動（中学年）・外国語（高学年）の学習・指導・評価に関する基本的な知識・指導技術を身に付けることを目標とする。小学校外国語教育についての基本的な知識・理解、子供の第二言語習得についての知識とその活用、指導技術、授業作りに関する内容を扱う。	2	(2)	講義	2～	必修 (小履修型のみ)

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

②各教科の教育法（中等） 授業科目表7-6（中履修型のみ）

特別支援教育専攻各コース中履修型の学生は次の表の科目の中から、選択する教科に関する科目を4単位履修してください。「備考欄」にその指示が記してありますので、よく確認して履修してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
中等国語科教育法A	学習指導要領に示された国語科の目標や内容を理解することを目指す。概要としては、中学、高校における国語科教育論および指導論を理解し、具体的な授業場面を想定した授業づくりを行う基礎を身につける。	2	(2)	講義	2～	必修 (中履修型 国語のみ)
中等国語科教育法B	言語の教育としての国語科の授業づくりにおける教材研究とその方法について、学習指導要領をふまえつつ、授業づくりの基礎的な能力を習得することを目指す。学習指導要領に示された目標及び育成すべき資質・能力をもとに、国語科の教科構造を理解しつつ、代表的な教材やその指導法について理解する。	2	(2)	講義	3～	必修 (中履修型 国語のみ)
中等社会科教育法A	中学校社会科に関する目標・内容・方法・評価などについて理解することを目指す。中学校社会科に関する理論や方法論などについて学習指導要領解説を用いて学ぶ。	2	(2)	講義	2～	必修 (中履修型 社会のみ)

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
中等社会科教育法B	中学校社会科公民的分野に関する目標・内容・方法・評価等について理解することを目標とする。中学校社会科公民的分野の各内容等の学習指導について具体的な教材・授業を通して学ぶ。	2	(2)	講義	2～	必修 (中履修型社会のみ)
中等社会・地歴科教育法	授業の到達目標及びテーマ 中学校社会科を踏まえて高等学校地理歴史科に関する目標・内容・方法・評価などについて理解することを目標とする。中学校社会科を踏まえて高等学校地理歴史科に関する理論や方法論などについて学習指導要領解説などを用いて学ぶ。	2	(2)	講義	2～	選択 (高1種地歴免許取得希望者は必修)
中等社会・公民科教育法	中学校社会科および高等学校公民科に関する目標・内容・方法・評価等について理解することを目標とする。中学校社会科および高等学校公民科に関する各内容等の学習指導について学ぶ。	2	(2)	講義	3～	選択 (高1種公民免許取得希望者は必修)
中等英語科教育法A	中学校及び高等学校における英語科教育の基礎を身につけることを目標とする。学習指導要領、教科用図書、音声指導、語彙・表現指導、文法指導、文字指導、英語でのやり取り、生徒の特性や習熟度に応じた指導、評価等に関する内容を扱う。	2	(2)	講義	2～	必修 (中履修型英語のみ)
中等英語科教育法B	中学校及び高等学校における英語科の指導技術の基礎を身につけることを目標とする。学習指導要領、教科用図書、音声指導、語彙・表現指導、文法指導、文字指導、英語でのやり取り、生徒の特性や習熟度に応じた指導、評価等に関する内容を扱う。	2	(2)	講義	3～	必修 (中履修型英語のみ)
中等数学科教育法A	数学科では、生徒が数学的活動を通して、情報機器を適宜活用して教科内容を学習することが求められている。この学習方法を理解して授業で実現するためには、教師自身が探究的な学習方法によって数学を学習した経験を有することが不可欠である。 本授業では、この学習方法及びその指導と評価の要点を理解し、教材研究及び授業構想の視点を獲得するために、受講者自身がこの学習方法によって数学を学習すること、その過程を学習者と教師の二つの立場から俯瞰することを行う。	2	(2)	講義	2～	必修 (中履修型数学のみ)
中等数学科教育法B	数学的な見方・考え方を働かせた数学的活動を通して数学的に考える資質・能力の育成が求められている。このような授業を実現するためには、教師自身がそのような数学的経験をしていることが不可欠である。本授業では、問題解決とその振り返りから数学的に考えることの具体に接近し、それを踏まえて数学の授業づくりについて考えていく。	2	(2)	講義	3～	必修 (中履修型数学のみ)
中等理科教育法A	中等教育における理科教育の指導方法とその教授方法を検討し理解する。中等理科教育における教科書、教材・授業がどのような変遷を辿って、現在に教育方法に変遷してきたのかを学ぶ。 これまでの自然科学についての学習で得られた知識と、経験をもとにして現代のアクティブラーニングの手法とICTを活用しながら、より効果的な教育方法を探求する。中学校、高等学校を主とした理科教育に関わる授業の進め方や教材・教具の取り扱いについての現代的課題を協働で考え理解を深める講義である。	2	(2)	講義	2～	必修 (中履修型理科のみ)
中等理科教育法B	中等教育における理科教育の方法とその実践事例を理解し、これまでの自然科学についての学習で得られた知識と、教育実習を含む教育方法の学習で得られた知識および経験をもとにして、安全かつ効果的な授業を考案することができるようになることを目標とする。中学校、高等学校を主とした理科教育に関わる授業の進め方や教材・教具の取り扱いについての講義である。	2	(2)	講義	3～	必修 (中履修型理科のみ)
中等音楽科教育法A	中学校音楽科及び高等学校芸術科音楽における各領域等の目標や内容、指導上の留意事項、生徒や学校現場の実態について理解し、教材研究や模擬授業に実践的に取り組みつつ音楽の授業について学ぶ。また、情報機器等を活用した教材開発の可能性について検討する。	2	(2)	講義	2～	必修 (中履修型音楽のみ)

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
中等音楽科教育法B	中学校音楽科及び高等学校芸術科音楽で授業を実践する上で必要な知識や技能についての理解を更に深め、生徒や学校現場の実態について学びながら、音楽科教育の様々な方法を用いた教材研究や実践に取り組む。また、音楽科教育の理論と実践について、生徒や学校現場の実態を理解しながら音楽科教育における具体的なテーマについて考え、模擬授業の実践や、情報機器を用いた教材開発を含む研究発表にグループで協働して取り組む。	2	(2)	講義	3～	必修 (中履修型音楽のみ)
中等美術科教育法A	美術科の教科について、基本的な教科内容の学問に関する知識を、平面、立体表現の原理を通して学び、様々な技法の中で主に基礎的な技法を通して制作を行う。また、ICT活用など新しい美術科教育のあり方について、教材を通して学び身につける。さらに、美術表現全般について、実際的かつ具体的に構成していくことのできる力を身につけることによって、教科指導力に関する造形指導の専門性の向上を図る。	2	(2)	講義	2～	必修 (中履修型美術のみ)
中等美術科教育法B	義務教育内での美術教育指導は職人や美術家養成ではない、実験的な技法を学び表現の楽しさ、生涯学習社会のなかでの今後のアートのあり方や「美術で教育」することを理解する。中学校美術科の教科書分析をはじめ、授業でも活用できるモダンテクニック等の技法を造形演習として行う。また現代の多様な表現を知り、ICT活用など今後の美術科教育のあり方を学ぶ。	2	(2)	講義	3～	必修 (中履修型美術のみ)
中等保健体育科教育法A	授業を行うために必要となる基本的な用語や現場の先生が抱える問題や課題点を理解し、体育についての理解を深める。学習指導要領及び体育科教育学における研究成果を用いて、授業プランを作成し、情報機器を用いて発表する。また、授業プランの改善点について話し合い、より良い授業プランを探索する方法を学ぶ。	2	(2)	講義	2～	必修 (中履修型保健体育のみ)
中等保健体育科教育法B	中等教育段階における保健体育（保健）の授業と、教科外体育の目標・内容・方法・評価について理解する。中等教育段階における保健体育科の保健分野に焦点をあて、基本的な授業の考え方と授業づくり（授業内容の構成、指導過程の原則など）について学習する。また、教科外における保健および体育活動にも触れ、これらの活動をどのように展開するのかを学ぶ。	2	(2)	講義	3～	必修 (中履修型保健体育のみ)
中等技術科教育法A	中学校の技術科教育に関する各内容等の学習指導について具体的な教材・授業を通して学ぶことができる授業である。技術科教育の歴史、教育現場の状況等を通して、中学校技術・家庭科における技術科教育の指導理念や教育内容、それらに基づく具体的な指導方法等をアクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び）の視点で深い理解に導く。また、地域（宮城県の学校現場）の現状や課題についても取り扱う。	2	(2)	講義	2～	必修 (中履修型技術のみ)
中等技術科教育法B	中学校の技術科教育に関する各内容等の学習指導について具体的な教材・模擬授業を通して学ぶことができる授業である。中学校での技術科教育の授業に焦点を絞り、教育内容、教育方法、教材教具、教科書、授業分析法、施設設備の管理運営（安全教育を含む）指導案の書き方等について、主体的・対話的で深い学び、いわゆるアクティブ・ラーニングの視点で深い理解に導く。また、指導技法や授業練習や教育現場の実態と諸問題、地域（宮城県の学校現場）の現状や課題についても取り扱う。	2	(2)	講義	3～	必修 (中履修型技術のみ)
中等家庭科教育法A	中学校・高等学校家庭科の学習意義や目標・内容の概要を理解し、学習指導計画や指導案の作成・評価といった家庭科授業を行うための基礎的・基本的な力を身につけることを目標とする。家庭科の意義・目標・内容、学習指導計画及び指導案の作成方法、授業づくりの工夫、家庭科における評価等、家庭科授業を行う上で必要な内容について講義する。また、学習指導計画及び指導案の作成といった演習活動を通して、実践的な力を身につける。	2	(2)	講義	2～	必修 (中履修型家庭科のみ)

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
中等家庭科教育法B	学習指導要領における技術・家庭科の特質、目標及び内容を理解して学習指導の計画を立てる能力を身につける。模擬授業の構想・実践を通して、目標の設定、教材の選定、授業を具体的に進めるための指示や発問について検討する。受講者が模擬授業を構想するなかで家庭科の授業の特徴を把握できるようにする。授業の目標をどう立てるか、教材をどうつくるか、授業を具体的に進めるために指示や発問をどうするか等を実践的に明らかにする。	2	(2)	講義	3～	必修 (中履修型 家庭科のみ)

注) 毎週授業時数欄の () は、前期または後期のみの時数を示す。

③小学校の専門科目 授業科目表7-7 (小履修型のみ)

特別支援教育専攻各コース小履修型の学生は、次の表の全科目 (全20単位) 修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
初等国語科内容概論	小学校学習指導要領に示されている国語科教育の「目標」「各学年の目標及び内容」「指導計画の作成と内容の取扱い」を学ぶ。とりわけ「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」「言語」「書写」「読書」の概要を理解する。あわせて自らの言語活動を通して、指導法の基礎を身に付ける。	2	(2)	講義	1～	必修 (小履修型のみ)
初等社会科内容概論	小学校社会科に関する基本的な考え方や目標・内容について、地理的分野・歴史的分野・公民的分野のそれぞれの観点から解説を行い、小学校社会科の見方・考え方について理解を深めるとともに、社会科に関する教材や資料等を取り扱う上での基礎的な技能についても講義していく。	2	(2)	講義	2～	必修 (小履修型のみ)
初等算数科内容概論	小学校算数科の背景となる数学の基礎を身につけることを目標とする。学習指導要領の主旨にのっとり、小学校算数科の背景となる数学各分野の基本的な理解及び教材研究を行う上で、その基礎となる素養を身につけるための講義を行う。	2	(2)	講義	1～	必修 (小履修型のみ)
初等理科内容概論	小学校理科の基本的な内容に関して、学習指導要領や教科書で扱われている内容構成の基礎を学び、授業実践の能力を身につける。「エネルギー」「粒子」「生命」「地球」を柱とした小学校理科の学習内容を理解するとともに、学術的な専門知識を背景に教材として科学的に調べ、実践的に構成する能力や、自然の事物や現象について理解を深める見方や考え方を獲得する。	2	(4)	実験・実習	2～	必修 (小履修型のみ)
初等生活科内容概論	生活科の理念や原理を学び、その目標や内容、方法を理解し、生活科を担当する上で求められる知識や技術を習得する。生活科の教育理念や原理、学習指導要領の目標・内容・方法等の構成を理解し、生活科の授業を担当する上で求められる知識や技術を学ぶ。	2	(2)	講義	2～	必修 (小履修型のみ)
初等音楽科内容概論	小学校音楽科で授業を実践するために必要な音楽の基礎的な知識・理論について理解し、取り組む楽曲以外にも応用して児童に指導できるようにする。またピアノ弾き歌いの基本的な技能を身につけ、様々な教材の指導を実践できるようにする。	2	(2)	講義	1～	必修 (小履修型のみ)
初等図画工作科内容概論	図画工作における表現活動を通して、作り出す喜びを体験するとともに造形的な基礎能力を学ぶ。また、作品から豊かな情操教育について考察し学習する。	2	(2)	講義	1～	必修 (小履修型のみ)

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講義・ 演習・ 実験等	対 象 年 次	備 考
初等体育科内容 概論	各運動領域の基礎的な運動技術の習得、およびそれらの指導法の基礎を身につけることを到達目標とする。小学校の体育の運動内容領域の基礎的な技術、ルール、知識について学習するとともに、練習の仕方や指導法についても学習する。また、ICTの活用について深める。	2	2	演習	2～	必修 (小履修型 のみ)
初等家庭科内容 概論	小学校家庭科の専門的内容を理解し、授業づくりに反映するための基礎を習得する。食物領域では栄養や食品成分の役割について、被服領域では被服に求められる機能について、住居領域では住居の成り立ちや役割について扱う。	2	(2)	講義	2～	必修 (小履修型 のみ)
初等外国語活 動・外国語内容 概論	小・中学校の接続も踏まえながら、小学校における外国語活動・外国語科の授業を担当するために必要な背景的な知識を身に付ける。初等外国語活動・外国語において扱う内容について、第二言語習得、英語学、児童文学、英語コミュニケーション、異文化理解の視点から考えたり、検討したりする。	2	(2)	講義	1～	必修 (小履修型 のみ)

注) 毎週授業時数欄の()は、前期または後期のみの時数を示す。

④中学校の専門科目

特別支援教育専攻各コース中履修型の学生は、選択した中学校教科の科目を32単位以上修得する必要があります。
各教科の授業科目は、次に示す授業科目表7-8～7-21を確認してください。

授業科目表7-8 (国語) (中履修型のみ)

特別支援教育専攻各コース中履修型の学生で、国語を選択した者は次の表の科目の中から必修・選択必修の科目を含めて32単位以上履修してください。

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講義・ 演習・ 実験等	対 象 年 次	備 考
中等国語科内容 構成基礎論	国語科教科書の教材に関する理解を深めるため、教材を読むための手続きを学ぶ。また、古文や近代小説、評論などを読むための基礎的な知識や手続きを身につける。具体的な教材、作品に触れながら、教材研究の方法や、辞書・索引等の使用法、文献の検索の仕方などを知る。	2	(2)	講義	1～	必修
国語科内容概論 (国語学)	日本語の全体像について平易に概説する。音声・音韻、文字・表記、語彙、文法、文章・文体など、網羅的に見ていくことで、日本語への理解を深める。また、他言語との対照とそこから見出せる日本語の特徴や、歴史的なことばの変化、現代日本語のバリエーション(共通語と方言、位相語など)といった日本語の種々相を取り上げる。	2	(2)	講義	2～	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
※国語科内容講義（国語学 A）	国語学概論で学んだ基礎的知見と関連づけながら、韻音・アクセント、文法、日本語史など特定領域について理解を深め、自力でレポートの作成ができるようになることを目標とする。古代から現代に至る国語の変遷について、文献国語史的方法と言語地理学的方法の両面から相補的にアプローチする。講義を主とするが、文献資料の読解や語史を調べてまとめるなど演習的要素もまじえ、全国的な視野から日本語の歴史を理論的に考察する力を身につける。	2	(2)	講義	2～	2単位以上 選択必修
※国語科内容講義（国語学 B）	日本語の変遷について理解を深め、ことばの変化について文献資料や言語分布の両面から再構成し、自分のことばでまとめられるようになることを目標とする。上代（奈良時代以前）から現代に至る日本語の変遷について、文献国語史的方法と言語地理学的方法の両面から相補的にアプローチする。講義を主とするが、文献資料の読解や語史を調べてまとめるなど演習的要素もまじえて行なう。語源や意味・用法の変遷について疑問をもった際に、自力で解決する手立てを学んでいく。	2	(2)	講義	2～	
国語科内容概論（国文学 A）	国文学の概念と時代区分を確認し、各時代の文学と社会とのかかわりを押さえたうえで、近代・現代日本の文学の流れをたどり、主要作品を読み解く。その過程で、国文学とは何か、何だったのかを考えるとともに、国文学の研究方法を検討する。授業のねらいは次の3点である。①国文学の概念と歴史、対象と研究方法についての基礎的な知識を得ること。②近代・現代の主要な作家と作品についての理解を深めること。③作品の特徴を捉える力、および作品を鑑賞する力を身につけること。	2	(2)	講義	2～	必修
国語科内容概論（国文学 B）	国文学の基礎についての知識をふまえたうえで、特に上代から近世の作品を取り上げて国文学とは何か、何だったのかを考える。国文学の概念と歴史、対象と研究方法についての基礎的な知識を得ることを目標とする。国文学の概念と時代区分を確認し、各時代の文学と社会とのかかわりを押さえたうえで、上代から近世の日本の文学の流れをたどり、主要作品を読み解く。その過程で、国文学の研究方法を検討する。	2	(2)	講義	2～	必修
※国語科内容講義（国文学 A）	国文学（近代・現代）をめぐる諸問題を、作品やその研究を読み解きながら検討する。国文学研究の基盤となる専門知識を得ることを目標とする。日本の近代・現代文学（児童文学を含む）をめぐる、テキストの問題、作者と作品の問題、ジャンルの特性の問題をはじめ、研究の基盤となる諸問題を検討する。その際、外国文学とその研究からの影響や他の学問領域とのかかわり等にも目配りをする。	2	(2)	講義	2～	2単位以上 選択必修
※国語科内容講義（国文学 B）	国文学（古典文学）をめぐる諸問題を、作品やその研究を読み解きながら検討する。国文学研究の基盤となる専門知識を得ることを目標とする。日本の古典文学をめぐる、テキストの問題、注釈・解釈とその歴史の問題、ジャンルの特性の問題をはじめ、研究の基盤となる諸問題を検討する。その際、近代文学研究との違いや、他の学問領域とのかかわり等にも目配りをする。	2	(2)	講義	2～	
国語科内容概論（漢文学）	漢詩を読むための基礎知識を身につけ、漢詩をじっくり味わうために必要な読解の方法と態度を獲得する。また、中高の教科書に頻出する代表的な漢詩・漢文を読み、味わう訓練を通じて、基礎的読解力を身につける。 漢文・漢詩を読み味わうためにはどのような知識や方法が必要か。その基礎的な力を養うために、具体的な作品に即してわかりやすく解説し、鑑賞や分析の方法を学ぶ。	2	(2)	講義	2～	必修

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講義・ 演習・ 実験等	対 象 年 次	備 考
※国語科内容講義（漢文学）	漢詩鑑賞の基本的な姿勢や方法を身につけ、杜甫の詩を読んでその人間観・自然観・政治観を学ぶ。また、毎回の小テストを通じて漢文読解の基礎的能力を身につける。 「杜甫詩鑑賞（その1）」 盛唐の詩人杜甫の詩と生涯について、代表的な詩をじっくり読み味わいながら考えていく。詩の読解と鑑賞を通じて、杜甫の人間観や自然観、社会観や政治観を探り、現代に生きる私たちへのメッセージを読み取る。あわせて漢詩・漢文読解の基礎的方法を学ぶ。	2	(2)	講義	2～	
国語科内容実技（書道）	漢字の楷書や行書、仮名の基本を理解するとともに、漢字と仮名の調和した書き方を理解し、伝統文化である書を日常生活に生かして、豊かな言語生活の担い手のとしての素地を養う。小中学校で書写の指導を行うにあたり、改めて漢字の楷書や行書、仮名の基礎・基本を理論と実践の両面から整理し、書の日常化を図り、書の実践を通して豊かな言語生活を営む工夫を学ぶ。	2	(2)	演習	1～	必修
※国語科内容基礎演習（国語学A）	現代日本語にかかわる事象を取り上げ、言語的な調査・考察を加え、その内容を報告する。受講者各人が研究報告をおこない、その内容に沿って全員で討議をおこなう。語学的な見方・考え方はもとより、調査・分析の方法、また問題設定、解決能力を身につける。 取り上げる事象は、共時的な現代日本語を基本とし、共通語、方言、書きことば、話しことば等を扱う。	2	(2)	演習	2～	2単位以上 選択必修
※国語科内容基礎演習（国語学B）	近代作家の文章について、文体的な観点から演習発表をおこなう。古典・近代文学作品の文章を語句や表現にこだわりながら読む。ことばの意味や用法、表記法、表現法などの分析を通して文体的な特徴を明らかにする。	2	(2)	演習	2～	
※国語科内容基礎演習（国文学A）	明治・大正期の文学（児童文学を含む）を分析し、その特質を探るとともに、文学研究のテーマ設定の仕方と研究方法、口頭発表の仕方、論文の書き方等について実践的に学ぶ。日本近代文学およびその研究方法への理解を深め、自ら研究する力とそれを教科「国語」の指導に生かす力を身につけることを目標とする。明治・大正期の文学（児童文学を含む）の中から主要な作品を取り上げ、その作品に適した方法を選んで読み解いていく。授業は、作品ごとに担当者を決めて研究成果を発表してもらい、それをめぐって受講者全員で討議する形で進める。	2	(2)	演習	2～	2単位以上 選択必修
※国語科内容基礎演習（国文学B）	昭和期以降の文学（児童文学を含む）を分析し、その特質を探るとともに、文学研究のテーマ設定の仕方と研究方法、口頭発表の仕方、論文の書き方等について実践的に学ぶ。日本近代文学およびその研究方法への理解を深め、自ら研究する力とそれを教科「国語」の指導に生かす力を身につけることを目標とする。昭和期以降の文学（児童文学を含む）の中から主要な作品を取り上げ、その作品に適した方法を選んで読み解いていく。授業は、作品ごとに担当者を決めて研究成果を発表してもらい、それをめぐって受講者全員で討議する形で進める。	2	(2)	演習	2～	
※国語科内容基礎演習（国文学C）	日本の古典文学を読み解くための基礎知識と技術を実践的に学ぶ。古典文学を読み味わう力とそれを教科「国語」の指導に生かす力を身につけることを目標とする。くずし字・変体仮名の解読や辞書・索引・注釈書等の使用法について学んだ上で、日本古典文学の著名な作品を読み解き、古語や古文、古典文学に関する知識と理解を深める。授業は、実践形式で進めていく。	2	(2)	演習	2～	2単位以上 選択必修
※国語科内容基礎演習（国文学D）	古典文学を研究するための基礎的な力を実践的に養う。古典文学の本文・校異や古注釈に関する理解を深め、辞書・索引・先行研究等を適切に活用し、先行する作品や時代背景にも目配りして、古典文学を研究する力とそれを教科「国語」の指導に生かす力を身につけることを目標とする。授業は、受講者各人が研究成果を発表し、それをめぐって討議する形式で進める。	2	(2)	演習	2～	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
※国語科内容基礎演習（漢文学A）	漢文読解の基礎的な方法を学び読解能力を養うとともに、文学作品を読み味わう方法を身につける。中国古代の文学の基礎的な文献を読み、漢文資料を読む方法を学ぶ。テキストを一字一句、詳しく調べ深く理解していくために必要な、辞書や索引などの工具類の使用法や、典拠の調べ方などを、その初歩から徹底して指導する。あわせて文学研究の基本的な方法や態度について身につけられるようにする。	2	(2)	演習	2～	2単位以上 選択必修
※国語科内容基礎演習（漢文学B）	漢文読解の基礎的な方法を学び読解能力を養うとともに、文学作品を読み味わう方法を身につける。中学・高校の教科書でも扱われる春秋戦国期から唐・宋代までの文学作品について考察する。テキストの一字一句について詳しく調べ、深く理解していくために必要な辞書や索引などの使用法や、典拠の調べ方などを徹底して指導する。あわせて文学研究の基本的な方法や態度について身につけられるようにする。	2	(2)	演習	2～	
※国語科内容基礎演習（国語科教育A）	教材や授業実践・理論を理解し、自分なりの課題を設け、それを解決するための研究方法・技能を身につけることを目標とする。中学、高校における主たる教材、授業実践・理論を取り上げ、教材研究や授業作りの内実を検討する。	2	(2)	演習	3～	
※国語科内容基礎演習（国語科教育B）	国語科における教科内容学および、教科の指導法に関連的・総合的に学ぶことを通して、国語科の学習指導に関する知見を深める。日本語学、日本文学、国語科教育それぞれの領域から、具体的な教材例や指導例などをもとに国語科の教材開発や学習指導のあり方を学ぶ。	2	(2)	演習	3～	

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表7-9（社会科）（中履修型のみ）

特別支援教育専攻各コース中履修型の学生で、社会科を選択した者は次の表の科目の中から必修・選択必修の科目を含めて32単位以上履修してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
社会系教科内容構成基礎論（社会・地理歴史科）	中学校社会科地理的分野・歴史的分野および高等学校地理歴史の授業に対する関心を高めるとともに、基礎的な内容を理解し技能を習得する。	2	(2)	講義	1～	必修
社会系教科内容構成基礎論（社会・公民科）	中学校社会科公民的分野および高等学校公民の授業に対する関心を高めるとともに、基礎的な内容を理解し技能を習得する。	2	(2)	講義	1～	必修
社会系教科内容概論（日本史）	小中高の歴史学習の場で使用される教科書の内容は国家の歴史を中心に記述されているが、歴史を多面的・多角的に見る眼を養い、今後の歴史教育を担っていくためには、国家の歴史のみならず地域の歴史についても熟知する必要がある。そこで、本講義では、古代～現代にわたる日本の通史を確認しつつ、ある地域（現宮城県・仙台市域）において展開した歴史の諸側面についても講義していく。	2	(2)	講義	1～	必修

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講義・ 演習・ 実験等	対 象 年 次	備 考
社会系教科内容 講義（日本史 A）	小中高の歴史学習の場で使用される教科書の内容は国家の歴史を中心に記述されているが、歴史を多面的・多角的に見る眼を養い、今後の歴史教育を担っていくためには、国家の歴史のみならず地域の歴史についても熟知する必要がある。そこで、本講義では、日本の近世・近代史に関する基礎的な事項を確認した上で、ある地域（東北地方）において展開した歴史についても取り上げ講義していく。なお、報告とディスカッションも行う予定である。	2	(2)	講義	2～	
社会系教科内容 講義（日本史 B）	授業のテーマは、「日本中世の社会と政治」である。到達目標は、①日本中世に関する基礎的な知識を獲得し、適切にアウトプットすることができること、②当時の社会状況や学会の議論を踏まえながら、複眼的にこの時代を捉えることができること、③日本中世について、受講者それぞれが抱いた時代像を説明することができること、の3点を設定する。 中世は武士が政治の主役を担った時代であると同時に、「地方の時代」とも評価される時代である。この講義では、日本中世の基本概念に触れながら、中央の政治動向を特に地方社会との関係性の中で捉え、なぜ武士が政治の主役を担うに至ったのか、なぜ中世は地方の時代と評価されるのか、その答えを探していく。	2	(2)	講義	3～	
社会系教科内容 概論（外国史）	欧米世界を中心に近現代の世界史概説を主たるテーマとし、それぞれの時期における主要な事項の歴史的意義を理解するとともに、中学校社会科の歴史的分野や高等学校地理歴史科の授業づくりに応用することができることを目標とする。グローバル化が本格化し、諸地域相互の関係性が強まる16世紀から21世紀の世界について、それぞれの時期の特徴を理解する上で重要と思われる事項を取り上げ、近年の研究動向に基づきつつ、その性格や歴史的意義を解説する。	2	(2)	講義	1～	必修
社会系教科内容 講義（外国史 A）	19世紀近代との連続性の観点で捉えられがちであった17～18世紀ヨーロッパ国家・社会について、近年の研究動向に基づきつつ、その固有の特徴を解説する。フランス、イギリスといった西欧のみならず、スウェーデン、ポーランド、ロシア、プロイセン、ハプスブルク君主国など北欧・東欧諸国も広く対象とすることにより、近世ヨーロッパ国家の共通性ととともに、歴史的背景・条件に基づく地域的独自性の抽出を図る。さらに従来の見解や高校教科書の記述などとの比較を通じ、歴史的過去に関する理解・認識が固定的ではなく、常に更新される可能性を持つ構図を示す。	2	(2)	講義	2～	
社会系教科内容 講義（外国史 B）	7～17世紀の中国に成立した各王朝の特質と、各時代における対外政策と日中関係の推移を主たるテーマとし、それらに対する理解を中学校社会科の歴史的分野・高等学校地理歴史科の授業づくりに応用する力を涵養する。各王朝がどのような発展・拡大の途をたどり、それが周辺地域といかなる関係を構築してきたのかを講義するとともに、過去の重要な学説や近年の研究動向にも論及し、教科書の叙述の背景にある我が国における中国史認識の変遷についても解説していく。	2	(2)	講義	3～	
社会系教科内容 概論（人文地理 学）	人文地理学は、地球上で展開される人間の諸活動が自然環境や社会環境を反映してどのような地域の特徴を作り出すのかを明らかにする、いわば「輪切りにされた歴史」を把握する学問分野である。本講義は、人文地理学の枠組みから地理の見方や地域の変化を捉える基礎的視点を学習する前半部分と、地域の変化をもたらす産業の在り方や現代的課題を地理学的に考察する後半部分からなる。	2	(2)	講義	1～	必修
社会系教科内容 講義（人文地理 学）	戦後の日本社会がどのような変化を辿ってきたのか、その地理的特徴について説明する。現在、日本が直面している多くの問題は歴史的なつながりで生み出されていること、および地域間関係の中で形成されてきたことを理解することがねらいとなる。	2	(2)	講義	2～	

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講 義 ・ 演 習 ・ 実 験 等	対 象 年 次	備 考
社会系教科内容 実習（人文地理学）	本授業は、特定地域を調査し、地域社会が直面する課題を発見し、解決への方向性を見出すために、地域調査の方法や統計分析の手法を学び、地域のダイナミズムを捉えることがねらいとなる。	2	(2)	実験・実習	3～	
社会系教科内容 概論（自然地理学）	中学校社会科の地域学習に関する授業づくりに必要な自然地理学的視点を養うとともに、基礎的知識・概念・技法を習得することを目標とする。中学校社会科の地域学習にとって基礎となる土地の自然環境特性把握のための視点と方法について、地形を主な切り口としながら学ぶ。地形そのものだけでなく、地形を通した環境や人間活動のとらえ方に目を向け、地域性解明のプロセスと小学校の授業への適用法を学ぶ。	2	(2)	講義	1～	必修
社会系教科内容 講義（自然地理学）	小学校社会科の地域学習における国土の特徴や自然災害に関する学習に焦点を当て、地形の特徴のとらえ方とその応用法を学ぶ。とくに土地利用と地形との関係のとらえ方、地形特性をふまえた災害理解を中心に授業を進める。	2	(2)	講義	2～	
社会系教科内容 実習（自然地理学）	中学校社会科の地域学習に求められる自然地理学的技能の習得および習熟を目標とする。中学校社会科の地域学習で扱われる土地の自然環境に関する諸資料（地図、画像データ、気候データ、統計資料など）の読み取り方、資料の入手・作成・解析方法、さらにその土台となるフィールドワークも含めた自然地理学の基礎的調査手法を学ぶ。	2	(2)	実験・実習	3～	
社会系教科内容 講義（地誌）	中学校社会科の地域学習に関する授業づくりに参考となる、地域を総合的に捉える地誌学的視点を習得することを目標とする。中学校社会科の地域学習では、地域性理解のために土地の自然と人の暮らしを総合的に捉える視点が重要である。そのような地誌学的な視点について、具体的事例の紹介を通して学ぶ。	2	(2)	講義	2～	必修
社会系教科内容 概論（法律学）	法・法律学の基本的な考えかたを習得し、立法趣旨の種となる規範的議論を立てることができることを目標とする。本授業では、教育基本法1条の構成から出発し、法律学を体系的に理解することを目指す。特に注意を払うのは、社会の一員としての役割とそこからはみ出してしまふそれぞれの個性との緊張関係である。これらを考える素材として、学校や教育に関する事案や映像資料を用いる。	2	(2)	講義	3～	2単位以上 選択必修
社会系教科内容 概論（政治学）	政治に関する基礎的知識を習得し、現代政治について「自分自身で考える」能力を身につけ、政治的事柄を基礎的知識に基づいて他者と議論し、説得力ある意見を提示できるようになることを目標とする。政治についての基礎的内容を習得し、「誰がどのように重要な事柄を決めているのか」を理論的に考える態度を養う。	2	(2)	講義	2～	
社会系教科内容 講義（政治学）	本講義は「公共性」をテーマとし、「公的なもの」と「私的なもの」がどのような関係にあるか、その内実を検証し考察を行う。社会インフラ・公共交通機関・公教育・公衆衛生など、われわれの生活が「公共性」と深く結びついている点を確認し、「公的なもの」と「私的なもの」とのあるべき関係を問い直す。	2	(2)	講義	2～	
社会系教科内容 概論（経済学）	歴史上ある時点において確立した「資本主義」と呼ばれる経済体制の来歴、そして経済学がそれをどのように捉えてきたのかを概観した上で、「市場」の基本構造を考察する。	2	(2)	講義	3～	2単位以上 選択必修
社会系教科内容 概論（社会学）	現代社会で起きている多様な事象について、社会学理論を通じて問題を分析する方法を学び、社会学理論の基礎を習得することを目標とする。毎回、現代社会の課題についてテーマ設定を行い、当該の社会学理論の概要を講義する。	2	(2)	講義	2～	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
社会系教科内容講義（社会学）	本講義では、社会学概論で学んだ社会理論等を基盤として、現代社会における具体的な社会事象／社会問題について、調査、報告、討議を行う。参加学生は、それぞれ自身の問題関心に照らしてテーマ設定し、授業で報告を行う。なお、報告テーマは、人種や民族、障害者等の差別・排外問題、格差・貧困問題、気候変動・災害等多岐にわたる。現代社会の仕組みと課題について、自分事として考えてもらいたい。	2	(2)	講義	2～	
社会系教科内容概論（倫理学）	倫理問題を検討する上で前提となる基本的な知識と考え方を身につけ、倫理的な問題設定を自分で行い、異なる立場の者と理論的な議論・応答ができるようになることを目標とする。 私たちは日常生活の様々な場面で倫理問題に直面する。この授業では、そのような問題を理論的に分析し、自らの立場を説得的に表現する上で必要となる倫理的な考え方を紹介する。「善」「自由」「規範」「幸福」といった基本概念と、それに関連する西洋の倫理思想史的背景を中心に解説する。	2	(2)	講義	3～	2単位以上 選択必修
社会系教科内容概論（哲学）	西洋哲学史において取り上げられてきた主要なテーマについて学ぶことによって、現代に生きる私たちが哲学的な問題についての考えを深めるうえで必要な知識を身につけ、自分なりの考えや意見を持つことができるようになることを目標とする。西洋哲学史において取り上げられてきた主要なテーマを取り上げ、当該のテーマについて考えるために必要な哲学史的な知識について概説する。西洋哲学史上、重要な哲学者や思想を紹介する形をとるが、単なる歴史上の人物や思想としてではなく、現代において思考を深めるために必要なツールとして習得してもらうことを目指す。	2	(2)	講義	2～	
社会系教科内容講義（哲学）	日常生活において私たちが突き当たるさまざまな哲学・倫理学的問題に対して、論理的かつ批判的に考えることができるようになることを目標とする。 哲学・倫理学にかかわる具体的な諸問題について、毎回テーマを設定し、ディスカッションを行いながら、テーマについての理解を深める。 必要に応じて、それらの問題を哲学的に論じるために必要な、哲学・倫理学のさまざまな知見を概説する。具体的には、哲学史的な知識のほかに、現代正義論、生命倫理学・環境倫理学等の現代的諸問題に関する基本的な概念と考え方について、必要に応じて概説する。	2	(2)	講義	2～	
社会系教科内容基礎演習（日本史 A）	小中高の歴史学習の場で使用される教科書の内容を正確に理解するためには、教科書記述の背景にある学術的な専門知識を身につけることが肝要である。また、児童生徒に史資料を活用した読み取り作業を行わせるためには、教員の側が史資料に関する基礎的な知識と技能を持つ必要がある。そこで、本演習では、教科書記述の背景にある諸学説や先行研究の整理方法、学術論文の教育への活用法、そして、史資料の取り扱いなどに関する基礎的な知識と技能について学び、報告と討論を通して教科書記述と日本史学に関する基礎的な知識を身につける。	2	(2)	演習	3～	4単位以上 選択必修
社会系教科内容基礎演習（日本史 B）	小中高の歴史学習の場で使用される教科書の内容を正確に理解するためには、教科書記述の背景にある学術的な専門知識を身につけることが肝要である。また、児童生徒に史資料をもとに意見交換や討論を行わせるためには、教員の側が史資料に関する専門的な知識と技能を身につけている必要がある。そこで、本演習では、教科書記述の背景にある諸学説や先行研究の整理方法、学術論文の教育への活用法、そして、史資料の取り扱いなどに関するより高度な知識と技能を習得し、報告と討論を通して歴史を多角的・多面的に見る眼を養うことを目指す。	2	(2)	演習	3～	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
社会系教科内容基礎演習（外国史 A）	西洋史を中心に、歴史研究における専門的な思考法や分析手段の基礎を理解するとともに、中学校社会科の歴史的分野や高等学校地理歴史科の授業づくりに応用することができることを目標とする。歴史教育や歴史教科書の背景の知識として、歴史研究における専門的な思考法や分析手段の基礎を学ぶために、歴史研究に関する入門書を講読し、相互間での討論をもとに理解を深めつつ、受講者当人もまた、それらの内容に関連する文献を独自に調査する。	2	(2)	演習	3～	
社会系教科内容基礎演習（外国史 B）	西洋史を中心に、歴史研究における専門的な思考法や分析手段の理解に基づき、自身で文献や史料を実践的に読解・分析するとともに、中学校社会科の歴史的分野や高等学校地理歴史科の授業づくりに応用することができることを目標とする。歴史教育や歴史教科書の背景の知識として、歴史研究における専門的な思考法や分析手段の理解を深めるために、近年の研究動向に関する解説書を講読するとともに、受講者当人が自身の課題を独自に調査するうえで必要な、具体的な学術文献及び史料の読解を実体験する。	2	(2)	演習	3～	
社会系教科内容基礎演習（人文地理学 A）	本授業は、人文地理学に関する基本的な考え方や分析方法について、人口、自然と歴史、産業、交通、文化といったトピックスに注目し、それらに関する基礎的な文献や学術雑誌を取り上げる。加えて、現代の地域問題に関するテーマについて、統計データや資料に基づいてプレゼンテーションを実施し、社会科地理的分野の授業の教材づくりを目指す。	2	(2)	演習	3～	
社会系教科内容基礎演習（人文地理学 B）	本授業は、人文地理学に関する基本的な考え方や分析方法について、人口、自然と歴史、産業、交通、文化といったトピックスに注目し、それらに関する基礎的な文献や学術雑誌を取り上げる。加えて、現代の地域問題に関するテーマについて、統計データや資料に基づいてプレゼンテーションを実施し、社会科地理的分野の授業の教材づくりを目指す。	2	(2)	演習	3～	
社会系教科内容基礎演習（自然地理学 A）	中学校社会科の地域学習に求められる自然地理学の基礎的知識・概念の習得を目標とする。自然地理学の専門書講読を通じて、中学校社会科の地域学習で扱われる地形・気候・植生などの土地の自然環境に関わる基礎的知識・概念を習得する。	2	(2)	演習	3～	
社会系教科内容基礎演習（自然地理学 B）	中学校社会科の地域学習に求められる自然地理学的知識・概念への習熟を目標とする。自然地理学関係の学会誌に掲載された論文の講読を通じて、中学校社会科の地域学習で扱われる地形・気候・植生などに関わる最新の知見を学び、自然地理学的知識・概念にさらに習熟する。	2	(2)	演習	3～	
社会系教科内容基礎演習（政治学 A）	政治学の基本文献の講読とディスカッションを通じて、政治学における基礎的概念と教養の習得を行う。	2	(2)	演習	3～	
社会系教科内容基礎演習（政治学 B）	政治学の基本文献の講読とディスカッションを通じて、現代政治の諸問題を批判的に考察する能力を習得する。またテキストの批判的読解を踏まえた上で、自己の考えをまとめ表現する能力を身につける。	2	(2)	演習	3～	
社会系教科内容基礎演習（社会学 A）	現代社会における具体的事象についての①問題発見、②先行研究等による事象分析、③課題解決の糸口を探るという一連のプロセスについて、思考、分析力を身につけることを目標とする。現代社会学理論の文献講読とセッション、研究報告を行う。	2	(2)	演習	3～	
社会系教科内容基礎演習（社会学 B）	現代社会における具体的事象についての①問題発見、②先行研究等による事象分析、③課題解決の糸口を探るという一連のプロセスについて、思考、分析力を身につけることを目標とする。現代社会学理論の文献講読とセッション、研究報告を行う。	2	(2)	演習	3～	

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講義・ 演習・ 実験等	対 象 年 次	備 考
社会系教科内容 基礎演習（哲学 A）	哲学・倫理学にかかわる具体的な諸問題について、毎回テーマを設定し、ディスカッションを行いながら、テーマについての理解を深める。 必要に応じて、それらの問題を哲学的に論じるために必要な、哲学・倫理学のさまざまな知見を概説する。具体的には、哲学史的な知識のほかに、現代正義論、生命倫理学・環境倫理学等の現代的諸問題に関する基本的な概念と考え方について、必要に応じて概説する。 受講者が、日常生活において私たちが突き当たるさまざまな哲学・倫理学的問題に対して、論理的かつ批判的に考えることができるようになることを目指す。	2	(2)	演習	3～	
社会系教科内容 基礎演習（哲学 B）	哲学及び倫理学に関する基本的な考え方や概念を踏まえて、各回で設定されたテーマに関する現代的な諸課題を見出し、その解決に向けて自分なりにアプローチできるようになること及び、そのために哲学的・論理的な思考を身につけること、また自分のアイデアや意見をしっかり表現できるようになることを目標とする。 毎回、哲学及び倫理学における主要なテーマを設定し、そのテーマに関連する参考文献など既存の研究をサーベイしてその報告をしてもらう。また、その報告を踏まえてディスカッションを行い、自分なりの考え方を明確にしていく。研究テーマの設定およびディスカッションにおいて、哲学対話の手法を用いる。	2	(2)	演習	3～	
社会系教科内容 基 礎 演 習（社 会・地理歴史科 教育 A）	小学校社会科・中学校社会科の地理・歴史的分野と高等学校地理歴史科の授業づくりに関する基礎的な内容を理解し技能を身につけることを目標とする。小学校社会科・中学校社会科の地理・歴史的分野と高等学校地理歴史科の授業づくりに対する関心を高めるとともに、基礎的な内容を理解し技能を習得する。	2	(2)	演習	3～	
社会系教科内容 基 礎 演 習（社 会・地理歴史科 教育 B）	小学校社会科・中学校社会科の地理・歴史的分野と高等学校地理歴史科の実践事例の分析に関する基礎的な内容を理解し技能を身につけることを目標とする。小学校社会科・中学校社会科の地理・歴史的分野と高等学校地理歴史科の実践事例の分析に関する基礎的な内容を理解し技能を習得する。	2	(2)	演習	3～	
社会系教科内容 基 礎 演 習（社 会・公民科教育 A）	小学校社会科・中学校社会科の公民的分野および高等学校公民科の授業づくりに関する基礎的な内容を理解し技能を身につけることを目標とする。小学校社会科・中学校社会科の公民的分野および高等学校公民科の授業づくりに対する関心を高めるとともに、基礎的な内容を理解し技能を習得する。	2	(2)	演習	3～	
社会系教科内容 基 礎 演 習（社 会・公民科教育 B）	小学校社会科・中学校社会科の公民的分野および高等学校公民科の実践事例の分析に関する基礎的な内容を理解し技能を身につけることを目標とする。小学校社会科・中学校社会科の公民的分野および高等学校公民科の実践事例の分析に関する基礎的な内容を理解し技能を習得する。	2	(2)	演習	3～	

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表7-10（英語）（中履修型のみ）

特別支援教育専攻各コース中履修型の学生で、英語を選択した者は次の表の科目の中から必修・選択必修の科目を含めて32単位以上履修してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
中等英語科内容構成基礎論	中等英語科の指導において扱う内容について、英語学、英語文学、英語コミュニケーション、異文化理解の観点から、構成することができることを目標とする。中等英語科の指導において扱う内容について、英語学、英語文学、英語コミュニケーション、異文化理解の視点から考えたり、検討したりする。	2	(2)	講義	1～	必修
英語科内容概論（英語学）	学校英文法の基礎となっている英語学の基本的知識を学習する。テキストを使いながらも、パワポを利用した講義を行う。	2	(2)	講義	1～	必修
英語科内容講義（英語学）	音声学について学ぶことをとおして、英語音声について理解を深めるとともに、自らが英語を運用したり生徒に指導を行ったりするために必要な音声学に関する基礎的な知識と技能を身につけることができる。英語に関する基礎的な知識および技能のうち、英語の音声構成する要素とその特徴、日本語音声との違いについて学ぶ。	2	(2)	講義	2～	必修
英語科内容演習（英語学 A）	英語学意味論を学習する。テキストを講読しながら演習を行う。	2	(2)	演習	2～	必修
英語科内容演習（英語学 B）	英語学語用論を学習する。テキストを講読しながら、演習を行う。	2	(2)	演習	2～	必修
英語科内容概論（英語文学）	英語文学を代表する作品の文学史的な位置を知り、実際に作品を読んで英語表現を理解する力を養い、作者の生涯や作品の文化的背景について学び、広い文化的視野から作品理解を深める力を養う。イギリス文学（およびアイルランド文学）の作品を中心に引き上げ、各作品の重要な箇所は原文を読む。作品の背景に言及しながら、できるだけ多方面から作品を分析する。対象作品は英語文学を代表し、かつ日本においても良く知られる作品を取り上げる。	2	(2)	講義	1～	必修
英語科内容講義（英語文学）	英語文学作品に共通する特定のテーマについて学び、作品を分析的に理解する力を養う。テキストをもとに英語文学を代表するさまざまな作家の文章を特定のテーマから分析し、作品の技法（表現、物語構成など）や作品の文化的背景について考察する。	2	(2)	講義	2～	必修
英語科内容演習（英語文学 A）	英語文学の作品を精読し、様々な英語表現を学び、正確に英語を読み取る能力を身につけるとともに、英米の歴史や文化に対する理解を深める。授業では、英語文学の短編を題材に語学的、文学的側面から作品を読む。各授業回において、英文和訳、重要な語法、文法などの確認を随時行ない、コメント、ディスカッションをはさみながら作品を読み進めていく。毎回指定の担当者が担当箇所の発表、コメントを行う。	2	(2)	演習	2～	必修
英語科内容演習（英語文学 B）	英語文学の作品を精読し、様々な英語表現を学び、正確に英語を読み取る能力を身につけるとともに、英米の歴史や文化に対する理解を深める。英語文学の短編を題材に、語学的、文学的側面から作品を読む。英文和訳、重要な語法、文法などの確認を随時行ない、コメント、ディスカッションをはさみながら作品を読み進めていく。毎回指定の担当者が担当箇所の発表、コメントを行う。	2	(2)	演習	2～	必修
英語科内容概論（異文化理解）	英語圏の文化を扱った文献を講読し、英語圏の文化についての基本的な理解を深めつつ、多様な文化に触れ、異文化コミュニケーションに積極的に取り組む姿勢を身につけることを目標とする。イギリスの社会を概説したテキストをもとに毎回個別のテーマを設定して考察を進め、広く英語圏の文化への基本的な理解を深める。	2	(2)	講義	1～	必修

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講義・ 演習・ 実験等	対 象 年 次	備 考
英語科内容演習 (異文化理解)	言語から文化まで日本語と英語を中心に違いを理解することを目指す。テキストを講読しながら、演習を行う。	2	(2)	演習	2～	必修
英語科内容基礎 演習(英会話A)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと〔やり取り〕ができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話す。	1	(2)	演習	1～	必修
英語科内容基礎 演習(英会話B)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと〔やり取り〕ができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話す。	1	(2)	演習	1～	1単位以上 選択必修
英語科内容基礎 演習(英会話C)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと〔やり取り〕ができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話す。	1	(2)	演習	1～	
英語科内容基礎 演習(英会話D)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと〔やり取り〕ができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話す。	1	(2)	演習	1～	
英語科内容演習 (英会話A)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと〔やり取り〕ができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話す。	1	(2)	演習	2～	必修
英語科内容演習 (英会話B)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと〔やり取り〕ができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話す。	1	(2)	演習	2～	1単位以上 選択必修
英語科内容演習 (英会話C)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと〔やり取り〕ができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話す。	1	(2)	演習	2～	
英語科内容演習 (英会話D)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと〔やり取り〕ができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話す。	1	(2)	演習	2～	
英語科内容基礎 演習(英作文 A)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語を読んで、英語で書くことができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語を読んで、英語で書く。	2	(2)	演習	1～	必修
英語科内容基礎 演習(英作文 B)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語を読んで、英語で書くことができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語を読んで、英語で書く。	2	(2)	演習	1～	
英語科内容演習 (英作文A)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語を読んで、英語で書くことができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語を読んで、英語で書く。	2	(2)	演習	2～	必修
英語科内容演習 (英作文B)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語を読んで、英語で書くことができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語を読んで、英語で書く。	2	(2)	演習	2～	
英語科内容演習 (プレゼンテー ション)	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと〔発表〕ができるようになることを目標とする。様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて発表をする。	2	(2)	演習	3～	必修

注) 毎週授業時数欄の () は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表7-11 (数学) (中履修型のみ)

特別支援教育専攻各コース中履修型の学生で、数学を選択した者は次の表の科目の中から必修・選択必修の科目を含めて32単位以上履修してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
中等数学科内容構成基礎論	中等数学科内容構成とその背景にある数学を理解し、中等数学科内容の教授方法や教材研究・開発を行うための共通の基礎となる数学の基本事項に関する入門的講義である。	2	(2)	講義	1～	必修
数学科内容基礎講義 (代数学)	中学校・高等学校数学科の教科内容の基礎となる数学的背景として、行列と行列式の計算とその基本性質、および、連立方程式の一般的解法を身につけることを目標とする。数学の重要な柱の一つである線形代数学の基礎である行列と行列式の基本的事項、および、応用上重要な連立方程式の一般的解法について講義する。	2	(2)	講義	1～	必修
数学科内容講義 (代数学 A)	中学校・高等学校数学科の教科内容の数学的背景として、線形空間と線形写像の基本事項、および、行列の対角化を身につけることを目標とする。数学の重要な柱の一つである線形代数学の中心的概念であるベクトル空間と線形写像の基本的事項、および、応用上重要な行列の対角化について講義する。	2	(2)	講義	1～	2単位以上 選択必修
数学科内容講義 (代数学 B)	中学校・高等学校数学科の教科内容の数学的背景として、複素数と一次分数変換の基本事項、および、2次、3次、4次の代数方程式の解の公式とそこから生じる代数的概念を身につけることを目標とする。複素数と一次分数変換、および、対称式と代数方程式の解の公式についての基礎理論を体系的に講義する。	2	(2)	講義	2～	
数学科内容演習 (代数学系 A)	中学校・高等学校数学科の教科内容の数学的背景として、整数や多項式を扱う際の基礎概念として可換環論の基礎、とくに、割り算原理から単項イデアル整域における素元分解の一意性に関する基本事項を身につけることを目標とする。整数や多項式を扱う数学的体系としての可換環論の基礎、とくに、割り算原理から単項イデアル整域における素元分解の一意性について講義および演習をする。	2	(2)	演習	2～	
※数学科内容演習 (代数学系 B)	中学校・高等学校数学科の教科内容の数学的背景として、演算とその役割から生じる代数的構造としての群の基本事項を理解し、その具体的な取り扱いを身につけることを目標とする。演算とその役割から生じる代数的構造としての群、群の関係を調べる準同型写像、および、群の構造の分類、群の作用について講義および演習をする。	2	(2)	演習	3～	
数学科内容基礎講義 (幾何学)	ユークリッド空間における図形 (点集合) を扱う上で基本となる距離と位相に関する基本事項 (開集合、閉集合、コンパクト性、連結性、および連続写像の性質) をテーマとして、それらを理解することを目標とする。ユークリッド空間における距離と位相に関する基本的事項について具体例と共に紹介する。	2	(2)	講義	1～	必修
数学科内容講義 (幾何学 A)	平面幾何の基本となる公理と、直線、線分、角、三角形等の図形や三角形の合同定理をテーマとし、それらと関連する定理を証明と共に理解し図形の性質を調べられることを目標とする。平面幾何学の基本的な概念や図形の性質について、幾何学の公理系に触れながら講義する。直線、角、三角形等の基本的な図形の性質と三角形の合同定理や関連する定理を扱う。	2	(2)	講義	2～	2単位以上 選択必修
数学科内容講義 (幾何学 B)	平面幾何の基本となる公理と、三角形、四辺形、円等の図形や三角形の相似定理をテーマとし、それらと関連する定理を証明と共に理解し図形の性質を調べられることを目標とする。平面幾何学の基本的な概念や図形の性質について、幾何学の公理系に触れながら講義する。三角形、四辺形、円等の基本的な図形の性質と三角形の相似定理と関連する定理を扱う。	2	(2)	講義	2～	

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講義・ 演習・ 実験等	対 象 年 次	備 考
数学科内容演習 (幾何学系A)	平面曲線、空間曲線、空間内の曲面等の図形をテーマとし、それらの表示方法と具体例、および曲率等の基本概念を理解し、具体的な曲線・曲面の曲率等を計算できることを目標とする。平面曲線、空間曲線、空間内の曲面等の図形の表示方法と曲率等の基本概念を理解するための解説・演習を行う。	2	(2)	演習	2～	
※数学科内容演習(幾何学系B)	ユークリッド幾何とは異なるいろいろな幾何学をテーマとし、特徴的な定理を通じてユークリッド幾何との違いを理解することを目指す。非ユークリッド幾何学(双曲幾何)と射影幾何学の考え方と主要な定理、およびそれらとユークリッド幾何との違いを理解するための解説・演習を行う。	2	(2)	演習	3～	
数学科内容基礎講義(解析学)	数学を学ぶ上で基本となる実数の性質について、数列の収束性や(1変数)関数の極限、連続性を通して学ぶ。特に、数学的事実を論理的に導いていく過程を体感し、それを少しずつ実践できるようになることを目標とする。 実数に関するいくつかの公理を前提として、それを基にして実数や数列、連続関数に関する様々な性質が論理的に導かれることを詳細に講義し、レポート課題等によって授業内容のより深い理解を促す。	2	(2)	講義	1～	必修
数学科内容講義(解析学A)	1変数関数の微分と積分の一般論について、高校で学習した内容をより厳密な観点から学び直す。特に、積分の概念の本来の意味付けや、指数関数、三角関数を厳密に定義する方法について理解することを目指す。 数学科内容基礎講義(解析学)の授業内容を前提として、1変数関数の微分と積分に関する一般論、及び、指数関数、三角関数の(1つの)厳密な定義についてを詳細に講義し、レポート課題等によって授業内容のより深い理解を促す。	2	(2)	講義	1～	必修
数学科内容講義(解析学B)	1変数の関数列、関数項級数及び多変数関数の微分に関する一般論について学ぶ。講義においては、数学科内容講義(解析学A)で学んだ1変数関数の微分、積分の一般論を用いて、関数列、関数項級数及びテイラー級数の収束性について述べる。更に、数学科内容講義(代数学A)までで学んだ線形代数学の知識と数学科内容基礎講義(幾何学)で学んだ写像、関数の極限、連続性の概念を用いて、多変数関数の偏微分に関する一般論について論理的かつ厳密に述べていく。特に、陰関数、逆写像の微分や極値問題について理解することを目指す。また、レポート課題等により、授業内容の理解を深めていく。	2	(2)	講義	2～	2単位以上 選択必修
数学科内容演習(解析学系A)	多次元ユークリッド空間におけるジョルダン測度及び多変数関数の重積分に関する一般論について学ぶ。講義においては、数学科内容基礎講義(幾何学)で学んだ集合の内部、閉包の概念を用いて、ジョルダン測度の一般論について述べ、この概念と数学科内容講義(解析学B)で学んだ多変数関数の微分に関する一般論を用いて、多変数関数の重積分に関する一般論について論理的かつ厳密に述べていく。特に、集合のジョルダン可測性や重積分と累次積分の違い等を理解し、累次積分の公式、変数変換の公式等を用いて重積分の計算ができるようになることを目標とする。また、演習等により、授業内容の理解を深めていく。	2	(2)	演習	2～	
※数学科内容演習(解析学系B)	複素関数論の一般論とその応用について学ぶ。講義においては、数学科内容講義(解析学A)で学んだ1変数関数の微分、積分に関する一般論と数学科内容講義(解析学B)で学んだ1変数の関数列、関数項級数及び多変数関数の微分に関する一般論を用いて、複素関数論の一般論について論理的かつ厳密に述べていく。特に、複素微分と実2変数関数の微分との違いやコーシーの積分定理、積分公式について理解し、そこから派生する複素関数論の理論の美しさを体感することを目標とする。また、演習等により、授業内容の理解を深めていく。	2	(2)	演習	2～	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
数学科内容講義（確率論・統計学 A）	確率論の基礎的事項について、数学的視点から測度論、積分論を通して学ぶ。特に、確率論における事象、確率測度、確率分布、確率変数、平均、分散等の概念を、測度論、積分論を通して数学的に理解することを目標とする。 中等数学科内容構成基礎論、数学科内容基礎講義（解析学）、数学科内容講義（解析学 A）の授業内容を前提として、測度論、積分論を通して確率論の基礎事項を講義し、レポート課題等によって授業内容のより深い理解を促す。	2	(2)	講義	3～	必修
数学科内容講義（確率論・統計学 B）	確率論におけるやや発展的な事項について、数学的視点からこれを概観し、統計学との関係について学ぶ。講義においては、測度論、積分論を用いて数学科内容講義（確率論・統計学 A）で学んだ確率空間、確率変数、確率分布等の概念を基に、確率分布の平均、分散の計算方法や関連する事項について述べる。更に、確率変数の独立性と直積確率空間との関係について概観し、大数の法則、中心極限定理を通して確率論と統計学との関係について述べていく。また、レポート課題等により、授業内容の理解を深めていく。	2	(2)	講義	3～	
数学科内容講義（コンピュータ）	中学校・高等学校数学科の教科内容の背景となるコンピュータと数学の関わりについて、具体的なプログラミング実践を通して、プログラム言語の基本事項を理解し、具体的なプログラムの作成とその実行を身につけることを目標とする。コンピュータと数学の関わりについて、具体的なプログラミング実践を通して、プログラム言語の基本事項、および、具体的なプログラムの作成とその実行について講義する。	2	(2)	講義	2～	必修

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表7-12（理科）（中履修型のみ）

特別支援教育専攻各コース中履修型の学生で、理科を選択した者は次の表の科目の中から必修・選択必修の科目を含めて32単位以上履修してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
中等理科内容構成基礎論	理科の内容構成の背景となる学問に関する学術的な専門知識と、教材として実際のかつ具体的に構成していく活動との関連性について理論的に考察する力を獲得する。	2	(2)	講義	1～	必修
理科内容基礎講義（物理学 A）	物理学の基本である力学について、運動方程式を用いて物体の運動の解を導くことができるようになること、および、物体の運動において成り立つ法則の内容と、その法則を使って運動状態を導くことができるようになることを目標とする。物理学の最も基本的な原理である力学は、エネルギー保存則や運動量保存則など、我々の自然観の根幹をなすものであり、あらゆる科学の基礎となる。	2	(2)	講義	1～	必修
理科内容基礎講義（物理学 B）	物理学の基礎となる振動・波動現象を学ぶ。数式の導出方法を理解し、様々な現象の共通点を理解する。また様々な授業形式を経験する。アクティブラーニング形式を取り入れ、振動・波動現象を理解し、必要な数式を導出する。	2	(2)	講義	2～	必修
理科内容基礎講義（化学 A）	化学は物質の性質とその変化、反応を扱う科学である。これを理解するために必要となる法則や原理などの理論的側面と種々の物質の反応等について、主にイオンと分子の観点から述べる。	2	(2)	講義	1～	必修

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講義・ 演習・ 実験等	対 象 年 次	備 考
理科内容基礎講義（化学B）	化学は物質の性質とその変化、反応を扱う科学である。これを理解するために必要となる法則や原理などの理論的側面と種々の物質の反応等について、主に電子とエネルギーの観点から述べる。	2	(2)	講義	2～	必修
理科内容基礎講義（生物学A）	中学校や高等学校の学習指導要領・教科書で扱われている生命現象のうち、個体レベルや生態系レベルなど、マクロなレベルでの事項について取り上げる。具体的には、生物の起源・進化・環境応答・行動・生殖・生態系・保全などに関する基礎的事項について学ぶ。	2	(2)	講義	1～	必修
理科内容基礎講義（生物学B）	中学校や高等学校の学習指導要領・教科書で扱われている生命現象のうち、分子レベルや細胞レベルなど、ミクロなレベルでの事項について取り上げる。具体的には、遺伝子発現・細胞周期・受精・酵素反応・免疫反応などに関する基礎的事項について学ぶ。	2	(2)	講義	2～	必修
理科内容基礎講義（地学A）	地球や惑星を構成する物質を理解し、天体の運動を定量的に考え、さらに、地球を含む惑星や衛星の内部構造・表層環境を理解し、太陽系の進化、銀河系、宇宙のしくみを・なりたちを理解することを目標とする。地球・惑星・天文分野の内容について深い知識と原理を理解する。	2	(2)	講義	1～	必修
理科内容基礎講義（地学B）	大気科学の基本的な事項、主に大気の成分、構造、運動などについて理解することを目標とする。大気科学の基本的事項について解説し、大気のさまざまな現象や地球環境に関する物理的な基本法則を理解する。	2	(2)	講義	2～	必修
理科内容応用講義（物理学）	電磁気学分野は目に見えないから不得意とよく云われる。しかし、身の回りは電化製品・ICTで溢れ、電磁気学の帰結として発見された電磁波（光）は自然界に限らず我々の身の回りの様々な機器で利用されており、教員としては理解しないでは要られない分野になっている。本講義では、力学との対比を基に電磁気学で重要な「場」の概念を理解し、静電場・静磁場から電磁波の基礎を講義する。受講者にグループを作ってもらい、演習を中心に行いたいと考えている。	2	(2)	講義	3～	4単位以上 選択必修
理科内容応用講義（化学）	理科内容基礎講義（化学A）（化学B）での学修の上に立ち、化学反応や分析化学に関わる事項、元素・化合物・同位体の性質とそれらの利用についてより深く学ぶ。さらに、環境中で様々な物質がどのように分布・挙動し、影響しているかを学ぶ。	2	(2)	講義	3～	
理科内容応用講義（生物学）	本講義では、理科の教科内容のうち、生物学分野での学習と認識されながらも、他分野との関連性が比較的強い事項について、理科内容学習の応用として学ぶ。具体的には、中学校や高等学校の学習指導要領・教科書で扱われている生命現象のうち、理科の他分野（物理学・化学・地学）や数学、地理学など、分野横断的で社会的に関心の高い事項について取り上げ、最新の知見を含めて詳しく解説する。	2	(2)	講義	3～	
理科内容応用講義（地学）	宇宙の構造・進化、地球表層の大気と海洋の基本的な事項、地層・堆積物・岩石・化石などに記録される自然環境の変遷過程について学び、宇宙と地球について基礎的なことを理解する。天文分野では、宇宙の時間・空間スケール、元素の起源、星の進化、惑星の形成、天体の運動、物理状態を扱う。気象分野では、地球大気の科学と地球環境について解説する。地質・固体地球分野では、地球の生命と環境がどのような過程を経て成立したのかを体系的に学び、地球環境をとりまく諸問題を地球科学的な立場からの的確に捉える視点を養成する。	2	(2)	講義	3～	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
理科内容基礎演習（物理学）	初等の量子力学や相対論、あるいは熱力学を学ぶ。初等量子力学では、原子や電子といったミクロの現象について学ぶ。この分野で重要な自然現象と、それを予想あるいは説明するための理論を比較しながら、近代物理学の基礎である量子論の概念を学ぶ。特に、シュレディンガー方程式を使った簡単なエネルギー固有値問題が解けるようになることを目標とする。熱力学では、エネルギー保存則やエントロピー増大則を学ぶ。特に、気体や液体の性質と原子分子の運動との結びつきを理解すること、熱力学第1法則と第2法則、そしてエントロピーの意味を理解すること、を目標とする。	2	(2)	演習	3～	2単位以上 選択必修
理科内容基礎演習（化学）	炭素を中心とする有機化合物は、現在までに知られている全化合物中の9割以上を占めると言われている。これらの膨大な有機化合物の構造・性質・反応などに関する発展的内容を講述し、演習を通して体系的に理解できることを目標とする。	2	(2)	演習	3～	
理科内容基礎演習（生物学）	本演習では、生物学分野の講義や実験で学修した基礎的事項について、文献等を活用しながら演習形式の授業を行う。具体的には、動植物の形態、行動、生殖、進化、生態、環境教育などをテーマに、関連する本や論文、学習指導要領の内容等と照らし合わせながら受講者間で議論を進め、理解を深める。また、データの解析方法といった基礎的研究の実践方法についても理解する。	2	(2)	演習	3～	
理科内容基礎演習（地学）	地学分野の講義・実験での習得内容を基にして、各領域の内容をさらに深く理解することができる。教員として必要となる地学事象の教材化を検討できる。4年次の卒業研究に入るための基礎的な知識・技術を身につけられる。地学分野の講義・実験での習得内容を基にして、各領域の内容をさらに深く理解するとともに、理科教員として必要となる地学事象の教材化も含めた実践的な演習。4年次の卒業研究に入るためのトレーニングも含む。	2	(2)	演習	3～	
理科内容基礎実験（物理学）	基礎的な熱、光現象、電気実験、単振子による重力加速度定数の測定などを通し、さまざまな物理量を測定する実験方法についての理解を深める。また、コンピュータを活用して現象の解析や物理的概念を習得する。これらの観察や実験を通して柔軟な思考力や自分で現象を解析し、理由を考察する態度を養う。	2	(4)	実験・実習	2～	必修
理科内容基礎実験（化学）	物理化学、無機・分析化学、有機化学の基本的な実験手法やデータの解析法を修得するとともに、物質の基本的な性質やその変化である化学反応を自ら実験することにより学び、化学の理解を深める。	2	(4)	実験・実習	2～	必修
理科内容基礎実験（生物学）	野外での動植物の採集や分類、肉眼や顕微鏡による動植物の生体・組織・細胞の形態の観察、動植物や微生物を用いた簡単な生理・行動・生殖・遺伝に関する実験等を行う。その過程では、スケッチの描写法やレポートの作成法、パソコンを用いたデータ処理法なども学習する。	2	(4)	実験・実習	2～	必修
理科内容基礎実験（地学）	自然の中での地学的な現象や事物を理解するには、空間的にも時間的にもスケールの多様な観点から把握し認識することが必要と言える。この実験では、地学の各分野の基礎的な事項について理解を深めるとともに、観察・分析・解析などの作業を通してその方法を習得する。	2	(4)	実験・実習	2～	必修

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表7-13 (音楽) (中履修型のみ)

特別支援教育専攻各コース中履修型の学生で、音楽を選択した者は次の表の科目の中から必修・選択必修の科目を含めて32単位以上履修してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
中等音楽科内容構成基礎論	中学校音楽科及び高等学校芸術科音楽の内容を構成する各領域について、基礎的な知識を修得しつつその音楽的な特性を理解し、また技能面についても様々な課題に取り組みつつ学ぶ。	2	(2)	講義	1～	必修
※音楽科内容演習 (ソルフェージュ)	実践的、理論的な音楽言語の基礎能力を習得することを目標とする。聴音、視唱を通し音楽的な聴感覚やリズム感覚、また読譜力を養う。	2	(2)	演習	1～	必修
音楽科内容演習 (声楽)	主として中学校や高等学校で用いられる歌唱教材を通して、発声法や発音法、歌唱法の基礎について理解し、基礎的な演奏技能を身に付ける。西洋音楽的な発声と日本の音楽の発声の両方について学び、実践できるようにする。	2	2	演習	1～	必修
※音楽科内容実技 (声楽 A)	中学校及び高等学校で歌唱の授業を実践するために必要な知識及び技能を身につけることを目標とする。「音楽科内容演習 (声楽)」で学修した声楽に関する知識と技能を用いて、様々な声楽作品の発声法や発音法、歌唱法について理解し、演奏技能を発展的に身につける。	1	(2)	実技	2～	
※音楽科内容実技 (声楽 B)	中学校や高等学校で歌唱の授業を実践するために必要な知識及び技能を身につけることを目標とする。「音楽科内容演習 (声楽)」で学修した声楽に関する知識と技能を用いて、様々な声楽作品の発声法や発音法、歌唱法について理解し、演奏技能を発展的に身につける。	1	(2)	実技	2～	
※音楽科内容演習 (合唱)	合唱作品の様式や作品の背景について理解しつつ、演奏法及び指導法について学修する。様々な時代様式や背景を持つ合唱作品に取り組みながら、合唱に関する知識・理解を深め、演奏法及び指導法について実践的に学ぶ。依頼に応じた外部演奏など、地域との音楽交流活動にも参加する。	2	2	演習	1～	必修
音楽科内容演習 (ピアノ)	鍵盤楽器の奏法を理解し、正しく実践でき、西洋音楽の仕組みやスタイルを理解し、表現できることを目標とする。バロックから近現代にいたる様々な様式のピアノ音楽を学習し、また、それぞれの能力に応じた練習曲や連弾曲等も学習し、ピアノ奏法の研究を深める。	2	2	演習	1～	必修
※音楽科内容実技 (ピアノ)	鍵盤楽器の奏法を深く理解し、高い技術を持って正しく実践でき、時代ごとに異なる西洋音楽の仕組みやスタイルを深く理解し、表現できることを目標とする。バロックから近現代にいたる様々な様式のピアノ音楽を深く学習し、また、それぞれの能力に応じた練習曲や連弾曲等も学習し、難易度の高い楽曲の演奏研究も行う。	2	2	実技	2～	
※音楽科内容演習 (合奏)	弦楽器と吹奏楽の合奏である。担当楽器を割り当て、演奏法の研究を行い、アンサンブル演奏法や指導法を総合的に習得する。	2	2	演習	1～	必修
※音楽科内容演習 (和楽器)	箏の演奏実習を通して、調弦方法、楽譜の読み方、演奏技法を習得するとともに、日本の伝統音楽の旋律やリズムの特徴、楽器の音色や合奏法などを理解する。	2	(2)	演習	1～	必修
音楽科内容演習 (指揮法)	指揮の基本技術やリハーサル・テクニックを習得することによって、より優れた指導力を育成する。指揮法を研究することにより、表現力やコミュニケーション力、さらには洞察力などの向上も含め、多方面での応用力を養成する。	2	2	演習	2～	必修

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講 義 ・ 演 習 ・ 実 験 等	対 象 年 次	備 考
※音楽科内容実技（指揮法）	音楽科内容演習（指揮法）で習得したことを基礎にして、スコアリーディングなどのさらなる高度な音楽技術を学ぶことで、教育現場で実践活用できる技能の習得し、演奏会やリハーサルを見学し、専門家の現場を体験し見聞を広める。	2	(2)	実技	3～	
音楽科内容演習（音楽理論 A）	基本的な和声法の理論を習得することにより調性音楽の原理を理解し、音楽作品の分析ができるようになることを目標とする。四声体バス、ソプラノ課題の演習を通して機能と和声の理論を学ぶ。また実際の作品の分析や編曲を通じ、理解を深める。	2	2	演習	1～	必修
音楽科内容演習（音楽理論 B）	分析や創作の技法をより発展的に学び、応用力を身に付けることを目標とする。和声と対位法を中核に、作編曲や楽曲分析に必要な理論を習得し、実習する。	2	(2)	演習	2～	
※音楽科内容演習（作曲法）	西洋音楽における基本的な形式とその原理を理解することを目指す。音楽の諸形式を学び、考察する。また実作品の分析や、創作にも取り組む。	2	(2)	演習	2～	
音楽科内容講義（音楽学）	音楽学の基本的な考え方を理解するための授業である。多様な音楽にふれ、それらの音楽を作り出した人たちのもつ音楽観を理解した上で、音楽学の多様な研究方法を学ぶ。音楽学の基本的な考え方、音楽学研究の方法と範囲について概観する。また、多様な音楽文化の存在を前提とした上で、音楽とは何かについて検討する。	2	(2)	講義	1～	必修
※音楽科内容演習（音楽学 A）	西洋音楽史の大きな流れを理解するとともに、各時代の音楽様式を理解し、代表的な作曲家や作品についての知識を獲得し、その様式を音楽作品から聞き取ることができるようになることを目標とする。西洋音楽史の流れを概観し、時代による音楽様式の変遷や、音楽家と社会の関係について、音楽例を聴きながら学ぶ。	2	(2)	演習	2～	4単位以上 選択必修
※音楽科内容演習（音楽学 B）	日本の音楽の歴史の大きな流れを理解し、主要な音楽ジャンルについて、成立時代や音楽的特徴などを学び、多くの音楽例を聞きながら、日本の伝統音楽について親しむ。日本における音楽の歴史を概観し、日本音楽のさまざまなジャンルの特徴について、音楽例を聴きながら学ぶ。	2	(2)	演習	2～	
※音楽科内容演習（音楽学 C）	民族音楽学の基本的な考え方を理解するとともに、日本でもよく紹介される世界各地の代表的な楽器や音楽ジャンルやについて、その特徴を理解し、日本の文化、西洋の音楽文化と、諸民族の音楽との関係を視野に入れて音楽を考えることができるようになることを目標とする。世界のさまざまな地域の音楽文化を、視聴覚資料を使用しながら概観し、音楽と社会や文化の関係について考察する。	2	(2)	演習	2～	

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表7-14 (美術) (中履修型のみ)

特別支援教育専攻各コース中履修型の学生で、美術を選択した者は次の表の科目の中から必修・選択必修の科目を含めて32単位以上履修してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
中等美術科内容構成基礎論	美術科の教科について、基本的な教科内容の学問に関する知識を教材として実際のかつ具体的に構成していくことのできる力を身につけることによって、教科指導力に関する専門性の向上を図る。	2	(2)	講義	1～	必修
美術科内容基礎演習（絵画）	あらゆる造形の基礎となるデッサンを学ぶ。観察力、描写力、構成力等の能力を養い、さまざまな表現の可能性の礎を築く目的とした内容となる。	2	2	演習	1～	必修
美術科内容実技（絵画Ⅰ）	油彩の制作を通し、絵画の美術形式、方法論などを実践を通して学習する。更に古典から現代絵画の多様な表現方法についても学ぶ。	2	2	演習	2～	必修
※美術科内容実技（絵画ⅡA）	美術教育の現場で多く実践されている「版画」の基本的な原理を様々な版種を通して学び、その表現効果を理論的かつ実践的に理解し、美術教育のための基本的能力を深めながら、版画の教育現場への応用、発展へとつなげる。	2	2	演習	2～	必修
※美術科内容実技（絵画ⅡB）	油彩の制作を通し、絵画の美術形式、方法論などを実践を通して学習する。更に古典から現代絵画の多様な表現方法についても学ぶ。	2	2	演習	2～	必修
美術科内容基礎演習（彫塑）	美術科の教育現場における基本的な立体表現の実践にテーマを当て、美術科教育の在り方に照らし合わせ、教育実践における立体造形の表現を学習する。さらに、彫塑の基本的な技法を理解し、塑造（モデリング）の技法を通して演習に取り組み、基本的な立体感覚を体験し学習する。	2	2	演習	1～	必修
美術科内容実技（彫塑Ⅰ）	美術科の教育現場における基本的な立体表現の実践にテーマを当て、美術科教育の在り方に照らし合わせ、教育実践における立体造形の表現を学習する。さらに、彫塑の基本的な技法を理解し、実材制作としての彫刻（カービング）の技法を通して実技の作品制作に取り組み、基本的な道具の使用法と技法等を身につけることによって、立体感覚を体験し学習する。	2	2	演習	2～	必修
※美術科内容実技（彫塑Ⅱ）	美術科の教育現場における基本をベースにした、応用的な立体表現の実践にテーマを当て、美術科教育の在り方に照らし合わせ、教育実践における立体造形の表現を学習する。さらに、彫塑の基本的な技法を理解し、彫塑Ⅰで実践した実材制作としての彫刻（カービング）の技法を、さらに応用した立体表現に取り組み、応用的な道具の使用法と技法等を身につけることによって、質の高い立体感覚を体験し学習する。	2	2	演習	3～	必修
美術科内容基礎講義（デザイン）	デザインのさまざまな表現方法を学び基本的な原理や考え方を理解し、グラフィックデザイン、映像表現などの視覚伝達表現、コンピュータを用いた芸術表現などの様々な事例を考察しながら、実践的な方法論に対する理解を深める。	2	(2)	講義	1～	必修
※美術科内容演習（デザイン）	デザインのさまざまな専門的知識や表現方法を学んだ上で、グラフィックデザイン、映像表現などの視覚伝達表現、コンピュータを用いた芸術表現などをより深く学習し、実践的な方法論に対する理解を深めるとともに、演習を行いながら応用、発展へとつなげる。	2	2	演習	2～	必修
美術科内容基礎講義（工芸）	美術科の教育現場における基本的な工芸について、生活との接点にテーマを当て、美術科教育の在り方に照らし合わせ、教育実践における工芸的な様々な造形表現を学習する。さらに、伝統工芸の特徴的な用途や技法を理解し、地域の中で生まれた工芸など「用の美」としての工芸品などの特性について、その地域の風土を含め考察し、基本的な生活様式の中での工芸の造形性を体験し学習する。	2	(2)	講義	1～	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
※美術科内容演習（工芸）	美術科の教育現場における基本的な工芸について、生活との接点にテーマを当て、美術科教育の在り方に照らし合わせ、教育実践における工芸的な様々な造形表現を演習を通して学習する。また地域の中で生まれた伝統工芸の特徴的な用途や技法を理解した上で、「用の美」としての工芸品などの特性について研究する。さらに、基本的な生活様式の中での工芸の造形性を理解し、演習として実際に作品制作を通して学習する。	2	2	演習	2～	必修
美術科内容基礎講義（美術理論・美術史）	美術科の教科について、美術理論・美術史の基本的な教科内容の学問に関する知識を教材として実際のかつ具体的に構成していくことのできる力を身につけることによって、教科指導力に関する専門性の向上を図る。	2	(2)	講義	1～	必修
※美術科内容演習（美術理論・美術史）	美術科の教育現場における基本的な美術表現の概念及び、鑑賞教育を理解し、そのことを前提とした美術史の体系を学習する。さらに、美術科教育の在り方に照らし合わせ、教育実践における美術表現の概念と基本的な原理を理解し、現代の美術表現における国内外の動向について調査し、演習に取り組む中で、基本的な美術科教育の成り立ちをについて、専門的な理解力を高める。	2	2	演習	2～	必修
美術科内容演習（鑑賞）	人間の造形活動の意味を問いかける「鑑賞」のあり方について実践を通して学ぶ。実作品に接して作品を読み解くことを促す学習ツールとしてワークシートを制作する。また、模擬授業形式にて異なる主題で1人2回程度ワークシートの発表を行う。なお、一部創作体験を行う場合がある。	2	2	演習	2～	必修
美術特殊演習A	絵画技法について実技を通じて学ぶ。テンペラ絵具を用いた古典技法や油彩との混合技法、またアクリル絵具をはじめとする様々な画材によるミクスドメディアを体験する。絵が苦手な方にも分かりやすく難易度に応じた指導を心掛ける。また専門性を追求する絵画制作時の実践的指導力を養う内容にも配慮する。	2	2	演習	3～	2単位以上 選択必修
美術特殊演習B	「本授業においては、平面表現（絵画・版画）と立体表現（彫刻）の二面から実践を通じて学習し、美術教育のための基本的能力を深める。」 「小学校図画工作の特徴や技法等を理解し、様々な表現手法、基本的な概念や技術を身につけ指導出来るようになることを目標とする。」	2	2	演習	3～	

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表7-15（保健体育）（中履修型のみ）

特別支援教育専攻各コース中履修型の学生で、保健体育を選択した者は次の表の科目の中から必修・選択必修の科目を含めて32単位以上履修してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
中等保健体育科内容構成基礎論	ヒトの身体・機能およびスポーツ運動からみた体育という観点から、「スポーツとは何か」「体育とは何を教え・育てる教科か」を考察する。あわせて体育学・運動学・教育学・予防医学などの課題を探る。	2	(2)	講義	1～	必修
保健体育科内容講義（体育原理・体育史）	体育の歴史や原理（哲学）に関する知識を獲得するとともに、体育の在り方について検討できる能力を身につけることを到達目標とする。体育の歴史や原理を通じて、現代日本の体育が抱える諸問題を考える。	2	(2)	講義	1～	必修

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講義・ 演習・ 実験等	対 象 年 次	備 考
保健体育科内容 講義（体育社会 学・体育経営 管理学）	産業形態やライフスタイルの変化、高齢化など様々に変容する現代社会において身体活動の意義は見直されつつある。生涯スポーツという語はますます耳慣れた言葉となっている。私たちはどのように身体とつきあおうとしているのだろうか。この授業では身体に着目しつつ学校教育や現代社会について講義する。 地域社会や学校教育における体育・スポーツについて経営管理学の立場から学習する。体育施設の整備やプログラム、クラブ、組織体などについて、その経営管理を具体的に検討し、学校体育のみならず社会体育や地域スポーツにまで範囲を広げ、それぞれの立場から経営管理の実情と方法について学ぶ。	2	(2)	講義	2～	必修
保健体育科内容 講義（体育心理 学）	体育・スポーツ心理学に関する理論についての基本事項を理解し、同時に、体育科教育での運動指導やその他の教育活動に実際に活用する方法について理解する。身体運動における心理的特性、運動制御、運動学習理論および動機づけ等の内容を中心に、実際の教育活動に活用可能なスポーツ・体育心理学の基本的な内容を説明する。	2	(2)	講義	1～	必修
保健体育科内容 講義（運動学A）	実際にハイスピードカメラやパソコンを使用し、スポーツ・運動の動作を画像分析できること、そのうえで身体各部位の動きやその作用する力のメカニズムなどのバイオメカニクスの観点から理解することを目標とする。 スポーツ・運動の動作を身体各部位の動きやその作用する力のメカニズムなどのバイオメカニクスの観点から分析し、身体運動の特性について理解を深めることが本講義のねらいである。内容としては、運動学の基礎、動作の画像解析法と動作分析法の原理および分析結果の活用の仕方等について講義を行う。	2	(2)	講義	2～	必修
保健体育科内容 講義（運動学B）	スポーツ運動学の理論を知識として理解するだけでなく、体育・スポーツにおける運動指導の実践に役立てることのできる能力の養成を目標とする。 マイネルの「スポーツ運動学」、金子の「発生運動学」の理論を基礎として、体育・スポーツにおける運動学習・指導に関する実践的問題を検討する。実践における指導者や学習者の視点から見た、スポーツ運動の発生、構造、伝承に関する理論を学習する。	2	(2)	講義	2～	必修
保健体育科内容 講義（人体生理 学）	身体の恒常性を知ることこの授業のテーマとする。この授業は身体の恒常性を生理学的に説明ができるようになること、また運動と健康に結びつけることを目標とする。この授業は細胞機能、神経機能、筋系、循環器系、内分泌系の仕組みをわかりやすく解説し、さらに運動時やストレス下、環境変化（寒冷や暑熱）への対応の仕組みについても解説する。	2	(2)	講義	1～	必修
保健体育科内容 実験（生理学、 衛生学・公衆衛 生学、学校保健）	人体生理学で学んだ生命現象の機構を動物や自分達の身体で確認し、体育・スポーツ・健康科学の問題解決に用いられる生理学的な手法を修得する。また、衛生学・公衆衛生学分野及び学校保健で学んだ健康の保持・増進のための生活習慣や環境評価に必要な知識・技術の修得も課題とする。さらに疫学分野で用いられる統計処理法、データサイエンスに関する基本的事項についても学習する。	2	3	実験・実習	2～	必修
保健体育科内容 講義（衛生学・ 公衆衛生学）	ライフステージに対応した健康管理に関する基礎的知識および基本的態度・習慣の習得を目指す。また、人間集団の健康・疾病状況を疫学的な観点から理解するための基礎的知識および能力を身につけることを目標とする。さらには、中学校および高等学校にて行われる保健の授業を展開するための基礎的な知識の習得を目標とする。	2	(2)	講義	2～	必修
保健体育科内容 講義（学校保健）	教員が学齢期にある子どもたちのからだや健康を守り、そして、育てられるための基本的な知識や技術を習得することを目標とする。救急処置の知識と技能、健康診断の内容とあり方、子どもの身体発達やかかりやすい病気の知識、健康なライフスタイルや学校環境、及びそれらの指導を取りあげる。	2	(2)	講義	2～	必修

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講 義 ・ 演 習 ・ 実 験 等	対 象 年 次	備 考
※保健体育科内 容基礎実技（体 育実技）	体づくり運動、水泳およびダンス（日本の民謡）を中心に構成され、保健体育科の指導に必要な基本的知識・技術について学習し、技能の習熟を図る。またそれぞれの練習の方法、指導法を包括的に学ぶ。	2	2	実技	1～	必修
※保健体育科内 容実技（体育実 技・球技 A）	サッカー及びバスケットボールの特性を理解するとともに、サッカー及びバスケットボールをプレイするための基本的技術、戦術（特に個人技術、個人戦術）の習得を主題にする。そして最終的にはチームプレイの最小単位である2対2におけるコンビネーションプレイからの攻防を理解して実践できるようになることがこの授業のねらいである。	2	2	実技	1～	小中履修型 は2単位以 上選択必修
※保健体育科内 容実技（体育実 技・球技 B）	・硬式テニスの特性やルールを理解するとともに、基本的技術の習得と技術練習、応用練習を通して、ゲームの進め方を学習する。また、ベースボール型球技の特性やルールを理解するとともに、基本的技術の習得を通してゲームの進め方を学習する。 ・バレーボールのルールと競技特性を理解し、個人的及び集団的技術を習得するとともに、それらを基にした戦術を展開して、ゲームの展開方法を学習する。	2	2	実技	1～	中等連携 履修型は 2科目とも 必修
※保健体育科内 容実技（体育実 技・武道）	剣道：剣道の基本動作と一本打ちの技の修得に重点をおいて行う。「技」の修得は、代表的な技のみに留めて、互格稽古及び簡易試合ができるまで展開する。 柔道：柔道の特性を理解し、投げ技、固め技の基本的な指導法を学び、中学校保健体育での柔道の授業を安全に効果的に実施できるようにする。	2	2	実技	1～	必修
※保健体育科内 容実技（体育実 技・器械運動）	各種目の基本技や組合せ、演技をある程度の技術的レベルで実施できるようになるとともに、器械運動の指導に必要な基礎的知識や理論を理解できることを目標とする。 マット運動、鉄棒運動、跳び箱運動、平均台運動の基本技や発展技、技の組合せ、演技の構成や実施の段階的習得と習熟を図る。また器械運動の特性、技の技術的要素や系統性、練習の方法・段階、安全確保・補助の仕方を学ぶとともに、技の出来映えを観察する能力の向上を図る。	1	2	実技	1～	小中履修型 は1単位以 上選択必修 中等連携 履修型は 2科目とも 必修
※保健体育科内 容実技（体育実 技・陸上競技）	陸上競技の走・投・跳各種目の競技特性や基本的技能を、実技を通して学習する。	1	2	実技	1～	
※保健体育科内 容実技（体育実 技・ダンス）	ダンスの基本を学びながら「踊り表現するからだ」への気づきを深めること、創作ダンスの指導法を理解すること、ダンス作品を創作し発表する過程で培われる発想力やコミュニケーション能力を高めることを到達目標とする。	1	2	実技	1～	必修
※保健体育科内 容実技（体育実 技・野 外 活 動 A）	本授業においては、学校教育における児童・生徒の野外における活動の指導はもとより、家庭や地域において行われる自然体験学習の指導に必要な知識、技術の基本を習得し、計画的なプログラムに沿って、自然の中での活動能力を高めることを目指す。 また、生涯スポーツとしてのスキー運動の特性を理論と実践を通して理解すると同時に、実際に冬山を体験することにより、冬季の自然を理解することをねらいとする。	1	2	実技	1～	1単位以上 選択必修
※保健体育科内 容実技（体育実 技・野 外 活 動 B）	遠泳における泳力の向上を図りながら、合宿経験を通して臨海学校などの海浜行事の運営や指導について体験的に学ぶ。 生涯スポーツとしてのスキー運動の特性を理論と実践を通して理解すると同時に、実際に冬山を体験することにより、冬季の自然を理解することをねらいとする。	1	2	実技	1～	

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表7-16 (技術) (中履修型のみ)

特別支援教育専攻各コース中履修型の学生で、技術を選択した者は次の表の科目の中から必修の科目を含めて32単位以上履修してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
中等技術科内容構成基礎論	中学校の技術科の指導内容について、学術的な背景と教育との関連を講義と演習を通して学ぶ。	2	(2)	講義	1～	必修
技術科内容講義(木材加工)	製図、木材の性質、切削の仕組み等について学習し、簡単な木製品の設計、製図および製作を通して、木工道具および木工機械の基本的な使用法を身に付けます。木材の性質や構造の学習では実験を通して深め、設計・製作では、中学校技術科の学習指導要領に示された学習過程に基づいて活動を行います。	2	(2)	講義	1～	必修
技術科内容実験実習(木材加工)	自分の考えた製作物の製図が描け、木工道具や木工機械を使用し、板材を加工することにより製作物を製作することができるようになることを目標とする。各種木工道具の構造および特徴を学び、道具の使用法および道具の調整(仕立て)方法を修得する。また、基本的な木工機械の構造および操作法を修得する。目的とする作品の設計・製図・材料取り、部品加工、組立・調整および完成までの合理的な作業手順や道具だてに関する方法を身に付ける。	2	(4)	実験・実習	2～	必修
技術科内容講義(金属加工)	金属加工の基礎知識を、手仕上げ、塑性加工、切削加工など、幅広く学ぶ。また、製図に関する基本事項を学ぶとともに実習を含んだ授業を行う。	2	(2)	講義	1～	必修
技術科内容実験実習(金属加工)	金属の曲げ、切削及び接合などの加工技術を工具・道具や工作機械の使用を通して身に付け、習熟させる。	2	(4)	実験・実習	2～	必修
技術科内容講義(材料と加工)	木材、プラスチック、木質材料及び金属が有する特性および機械的性質を学ぶとともに、その特長を活かした作品製作の実践を通してものづくりの技能を習得する。各種機械加工法にも触れ、ものづくりの技術・技能を活かした教材・教具づくりを実践し、様々な教材開発に応用できる力を身につける。3Dプリンタやレーザー加工機などを活用したデジタルファブリケーションについて、一部で実習を取り入れる。	2	(2)	講義	3～	
技術科内容基礎講義(機械)	機械工学の基礎となる力学の知識を獲得し、身近な機械のメカニズム及び身近な機械の各種構成要素を理解し説明できることを目標とする。	2	(2)	講義	2～	必修
技術科内容応用講義(機械)	中学校技術科の「エネルギー変換」分野における機械に関係する部分に焦点をあてて、新しい学習指導要領で重視されるようになった「課題解決」学習に取り組む。	2	(2)	講義	3～	
技術科内容実験実習(機械)	機械設計の基礎的な事項を学び、実際に簡単な機械設計と製作を行う。	2	(4)	実験・実習	2～	必修
技術科内容基礎講義(電気)	電気に関する基礎的な現象を理解し、基礎的なパラメータ計算(電流、電圧、電力など)を計算することができ、電気に関する現象として静電気や磁気に関わる基礎的な現象を理解し、電気回路の受動的要素のコンデンサやコイルを使った交流回路の基礎的な動作を理解することを目標とする。 電気現象を学ぶ上で基礎となる起電力・抵抗からなる電気回路について基本的な要素から学習をする。また、日常生活の中で電気と関わる現象や電気の安全な使い方についても扱うことで、電気に関する興味関心を高める。	2	(2)	講義	1～	必修
技術科内容応用講義(電気)	ダイオード・トランジスタなどの半導体素子、および基礎的な各種の電子部品(コンデンサ・コイル・太陽電池・プザー・リレーなど)の動作原理・特性を学習する。また、それらを使った簡単な電子回路の設計方法についても学習する。	2	(2)	講義	2～	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
技術科内容実験実習（電気）	電気回路の基礎的な内容（直流・交流）について実験を通じて学ぶ。回路計（電圧・電流・抵抗測定）などの基本的な計測機器の使用方法を学ぶ。電気技術基礎の内容と連動させることで電気に関する理解を深める。	2	(4)	実験・実習	3～	必修
技術科内容基礎講義（栽培）	教材植物の分類・生理・環境適応性など、栽培学の基礎を学ぶ。また、主要な栽培技術である、施肥、病害虫・雑草防除、開花制御などについて理解を深めるとともに、新しい生産技術である植物工場・植物バイオテクノロジーなどについても解説する。一部、植物栽培と観察体験を取り入れ、学習を深める。さらに、東北地方の農業や食文化を考える教材として地域在来作物を紹介する。	2	(2)	講義	1～	必修
技術科内容応用講義（栽培／生物育成）	「技術科内容基礎講義（栽培）」「技術科内容実験実習（栽培）」では扱えなかった多様な教材作物の生理的特性・栽培技術について、より深く学ぶ。また、新しい生産技術である植物工場・植物バイオテクノロジーなどについて解説するとともに、計測機器やソフトウェアを活用した作物生長評価技術も体験する。さらに、学習指導要領に含まれる家畜・魚類の飼育技術にも触れる。	2	(2)	講義	2～	
技術科内容実験実習（栽培）	食用作物、野菜（果菜類、葉菜類、根菜類）、花卉などの多種類の作物について、播種から定植・管理・収穫までの一連の技術を体験的に学習する。また、栽培試験を行い、作物実験の基礎を学ぶ。なるべく化学農薬を使わない栽培を実践する中で、安全な食料を生産するための技術について考える。	2	(4)	実験・実習	2～	必修
技術科内容基礎講義（情報とコンピュータ）	中学校の技術分野における単元「情報の技術」についての基礎的な知識と技術について学ぶ。コンピュータの仕組み・情報のデジタル化による処理技術について学ぶ。Webにおいて用いられている技術を学ぶと共に、情報セキュリティ・モラルなどの基礎知識について学ぶ。	2	(2)	講義	1～	必修
技術科内容応用講義（情報とコンピュータ）	中学校の技術分野における単元「情報の技術」についての応用的な知識と技術について学ぶ。問題解決のための双方向性のあるコンテンツや計測・制御技術を活用するプログラミングについて学ぶ。情報通信技術の基礎と活用について学ぶ。	2	(2)	講義	2～	
技術科内容実験実習（情報とコンピュータ）	中学校の技術分野における単元「情報の技術」でのプログラミングの内容と関連する学習を行う。コンピュータによる基礎的な画像処理技術、プログラミング言語・アルゴリズムについて学び、簡単な画像コンテンツの作成およびプログラムの制作実習をする。マイコンボードを使ったプログラミング制御について学び、簡単なロボットカーの制御などを実習する。	2	(4)	実験・実習	1～	必修

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表7-17 (家庭科) (中履修型のみ)

特別支援教育専攻各コース中履修型の学生で、家庭科を選択した者は次の表の科目の中から必修・選択必修の科目を含めて32単位以上履修してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
中等家庭科内容構成基礎論	本科目では、中学校技術・家庭の家庭分野を総括的に理解し、中学校における家庭科の役割を認識することを主要な学習到達目標とする。 授業では、家庭生活について、「食生活、衣生活、住生活の見直しと改善」、「子どもと家族、幼児の遊び、地域の人々とのふれあい、環境や資源を考えた暮らし」等を取り上げ、各々の内容に関する授業の組み立てについて講義する。	2	(2)	講義	1～	必修
家庭科内容講義(情報処理)	児童生徒に学ばせたいコンピュータ・サイエンスとデータ・サイエンスについて理解し、指導や活用のイメージを持つことができるようになることを目標とする。 情報の科学的な理解として、コンピュータの動作原理であるコンピュータ・サイエンスについて、情報モラルやセキュリティについて、そして教育データを対象として指導上の参考にするためにデータ・サイエンスを教員としてどのように活用できるのか AI のプログラミングを通して学ぶ。	2	(2)	講義	1～	必修
家庭科内容講義(家庭電気)	電気・磁気現象に関する基礎知識を身につけることを目標とする。家庭における電気やその関連機器の基礎的性質等について学習する。	2	(2)	講義	1～	必修
家庭科内容講義(家庭機械)	ものづくり技術の原理が理解できることを目標とする。機械の進歩、エネルギーと機械、機械材料、運動機構、機械制御などについて学ぶ。	2	(2)	講義	1～	必修
家庭科内容講義(被服学A)	学生が中等家庭科の被服領域を教授するのに必要な専門的知識を自然科学の視点から習得し、衣生活を快適に過ごすための能力も併せて身につけることを目標とする。繊維・糸・布についての種類や構造、性質、製造方法を概説し、豊かな衣生活を過ごすための実践方法について考察する。	2	(2)	講義	3～	必修
家庭科内容講義(被服学B)	学生が家庭科の被服領域を教授するのに必要な専門的知識を自然科学の視点から概説する。衣服の機能性に影響を与える影響について、素材・糸・布についての種類や構造、性質、製造方法を概説し、豊かな衣生活を過ごすための実践方法について考察する。	2	(2)	講義	3～	
家庭科内容講義(食物学A)	私たちが食する食べ物の身体における代謝過程を理解することを目標とする。食品の科学的性質、消化と吸収、栄養素と体内での代謝について解説する。	2	(2)	講義	2～	必修
家庭科内容講義(食物学B)	私たちの食生活の成り立ちを日本の食の歴史、現在の世界の食生活や食環境を通じて知ることで、持続可能で栄養バランスの取れた健康的な食生活とはどのような食生活かを考える。また、現在の自分自身の食生活を振り返り、これからの食生活のあり方についても考えていく。	2	(2)	講義	3～	
家庭科内容講義(住居学A)	家庭科の住居学に関する専門的内容を理解し、授業づくりに反映するための基礎を習得する。住居の成り立ちや役割について、生活、社会、環境、技術などさまざまな観点から分析し、理解を深める。また、日常の生活空間における課題から、今後の住居の在り方を検討する。	2	(2)	講義	3～	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
家庭科内容講義 (住居学B)	本科目では、住環境形成のしくみや、健康・快適・省エネルギーな調整の方法について学習する。特に、遮音・音響、採光・照明、換気・通風、断熱・省エネルギー、湿気・結露といった事象を通して、家庭科の住居学に関する専門的内容を理解し、授業づくりに反映するための基礎を習得することを目的とする。基礎原理に基づく対処法の検討を行う技術習得のために、身近な空間の環境計測・評価を行う。	2	(2)	講義	3～	
家庭科内容講義 (保育学A)	本科目では、家庭科教育の「A 家族生活と家族」分野の内、保育領域に焦点を当て、その指導に必要とされる知識を身につける。とくに、生涯発達の見点に立ち、人の発達や生活における諸様相とその特徴を理解し、そこで求められる適切な保育者の援助や環境構成の在り方について検討を行い、専門的知識の修得を目指す。	2	(2)	講義	3～	必修
家庭科内容講義 (保育学B)	少子化、経済活動の悪化など、現代においては家族を取り巻く社会的な状況が急激に、多様に変化している。そのような中で、保育者に子育て家庭に対する支援が求められてきた。本科目では、(1) 子育て家庭を取り巻く社会的状況の在り方や歴史的な変遷を調査し、そこでどのような支援が保育所・幼稚園に求められているのか検討を行う。そして、(2) これから保育者に求められる専門性について理解する。さらに、(3) 保育に携わる者の専門性育成に関する時間的展望を把握することを目指す。	2	(2)	講義	3～	
家庭科内容講義 (家庭経営学)	私たちは多様な家族を形成し、ひとりひとりが一定の役割を担いながら家庭での生活を持続的に経営している。しかし、家庭とは家族だけの閉じられた環境ではなく、社会環境から様々な影響を受け、日々変化していくものである。そのため、私たちには現代社会の抱える困難と向き合いながら、主体的に生活経営する能力が求められている。そこでこの授業では、今日の家庭環境が形成されてきた歴史過程を学ぶとともに、現代の家庭生活に生じている問題を多面的に検討していく。	2	(2)	講義	1～	必修
家庭科内容講義 (家庭科教育)	「家族・家庭生活」、「衣食住の生活（食生活、衣生活、住生活）」、「消費生活・環境」の三つの基本的な知識を身につけ、中学校において各々の分野に関する授業を組み立てる理論について講義を行う。	2	(2)	講義	1～	必修
家庭科内容演習 (家庭科教育)	家庭科教育を支える基礎的な研究論文の抄読と家庭科の授業への展開を考える。各領域の研究に関わる研究論文や専門書を取り上げ、内容紹介や討論を通して理解を深める。	2	2	演習	3～	必修
家庭科内容実験 実習(被服学A)	人体と被服の関係を考慮し、被服構成について学び実習する。被服製作を行い、家庭科教育衣生活領域における被服の知識、技術の基礎、応用を身につける。立体構成としての作品（秋冬ものの裏付きセミタイトスカート、半袖ブラウス）を製作し、作品製作を通し、被服構成について、また縫製についての基礎、応用を学ぶ。	1	(3)	実験・実習	1～	必修
家庭科内容実験 実習(被服学B)	ものづくり技術の原理が理解でき、確かな技能を身につけることを目標とする。「ものづくりを」を通して、技能（操作法）の習得とものづくりにある原理・原則について学習する。最終的には繊維・糸・布の基本的な性質および構造について把握する。	1	(3)	実験・実習	1～	必修
家庭科内容実験 実習(住居学B)	住居の仕組みや働きに関して、計測機器の特性を考慮しながら実験・調査することができるようになることを目標とする。住居環境、住居構造に関する実験・調査に基づいて、レポート・発表を行う。	1	(3)	実験・実習	3～	必修
家庭科内容実験 実習(保育学A)	本科目では、家庭科教育の「A 家族生活と家族」分野の内、保育領域に焦点を当て、その指導に必要とされる知識を身につける。とくに、生涯発達の見点に立ち、人の発達や生活における諸様相とその特徴を理解し、そこで求められる適切な保育者の援助や環境構成の在り方について検討を行い、専門的知識の修得を目指す。	1	(3)	実験・実習	1～	必修

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講義・ 演習・ 実験等	対 象 年 次	備 考
家庭科内容実験 実習(保育学B)	保育所幼稚園、子育て支援センターなどにおける保育・幼児教育の実践場面をもとに、乳幼児の発達や成長、保育者の役割や援助などについて、受講者一人一人が焦点化して、質的・量的な研究技法を用いて分析を行う。そして、その結果と考察をもとに、家庭科学習の保育・家族領域の授業づくりを行う。	1	(3)	実験・実習	3～	必修

注) 毎週授業時数欄の () は、前期または後期のみの時数を示す。

⑤特別支援専門科目

特別支援専門科目は、特別支援教育全般に関する専門的な知識と指導力を身につけるとともに、2年次から所属するコースの領域に応じた専門性を培うための科目です。自分の所属するコースの専門科目を履修してください。

特別支援専門科目の授業科目の詳細と履修方法については、所属するコースに応じて、授業科目表7-18から授業科目表7-21までの該当する表を確認してください。

授業科目表7-18 (視覚障害教育コース)

特別支援教育専攻視覚障害教育コースの学生は、次の表の科目の中から必修・選択必修の科目を含めて31単位以上履修してください。

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講義・ 演習・ 実験等	対 象 年 次	備 考
特別支援教育基礎理論	近年、障害児・障害者を巡るさまざまな考え方や制度が大きく変わりつつある。この講義では、発達障害を中心とした特殊教育から特別支援教育への変遷を概説することを通して、特別支援教育に関わる基礎的な知識を獲得すること、さらには、障害のある児童生徒に向き合うための資質を涵養すること、この教育が「教育の原点」と言われることの意味を探ることをねらいとする。	2	(2)	講義	1～	必修
視覚障害の心理・生理・病理	視覚障害は視力、視野、色覚等の視機能の永続的低下である。視覚障害を理解するには、その背景にある視機能や視知覚特性の基本的な理解が必要である。また、聴覚や触覚の特性の理解も必要である。そうした知覚、生理の基礎を踏まえた上で視覚障害と関連の深い代表的な眼疾患について学び、加えて盲児や弱視児の発達や心理の特性について理解を深める。	2	(2)	講義	2～	必修
視覚障害の教育課程・指導論	視覚障害教育に関する教育課程のありかたと、視覚障害に関わる様々な課題に対する指導法の概要を理解し、具体的・実践的な教育実践例を踏まえながら、「見えない・見えにくい」児童生徒に対する教育の本質を考えることができる基礎的な資質を養うことができるようになることを目標とする。特別支援教育における視覚障害教育の実際と課題について考える。	2	(2)	講義	2～	必修
視覚障害への教育支援 A	様々な視覚障害の教育的支援方法に関する知識や支援に関する具体的な技能を獲得する。視覚障害による様々な困難さについて、事例を通して理解を深め、それぞれに応じた支援方法を獲得する。特に、視覚を介さない盲児を対象とし、触覚を主とした感覚の特性に基づいた支援ができるようにする。	2	(2)	講義	2～	必修

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講義・ 演習・ 実験等	対 象 年 次	備 考
視覚障害への教育支援 B	教育的見地から視覚障害児の困難を把握し支援につなげることができるとを旨とする。医学的な検査と教育的な評価の違いについて理解し、見えにくさを把握するための様々な評価について実践的に理解を深める。さらに、それを補助具や合理的配慮につなげることに実践的に取り組む。	2	(2)	講義	2～	必修
聴覚・言語障害の心理・生理・病理	この講義では、聴覚や言語に障害のある幼児、児童又は生徒の心理に関し、生命活動の調整という視点から「言語」や「コミュニケーション」の問題に迫っていく。	2	(2)	講義	2～	8単位以上 選択必修
知的障害の心理・生理・病理	知的障害及び関連する諸障害の定義及び関係諸概念、生理・病理的背景等について理解を深めるとともに、困難状況の把握と教育支援の方法に関する心理学的アプローチを学ぶことをねらいとする。	2	(2)	講義	2～	
肢体不自由の心理・生理・病理	肢体不自由児の置かれた生活行動における課題状況の分析と指導方法・内容を検討する。あわせて、重度運動障害への教育的支援に活用する教材教具とそれらを活用した指導実践についてもふれ、肢体不自由児の適応とその支援に関して検討する。あわせて、宮城県内をはじめ東北地方等を中心に地域の特別支援学校等での指導実践や、地域の自宅で訪問看護を受けている重症運動障害者と ICT を活用して交流し、その生活の実態を適宜紹介する。	2	(2)	講義	2～	
病弱の心理・生理・病理	障害や教育的ニーズの側面から明確な概念規定が難しい慢性疾患児・病弱児の置かれた生活行動における課題状況の分析と指導方法・内容を検討する。あわせて、宮城県内をはじめ東北地方等を中心に地域の特別支援学校等での指導実践や、小児病院などでの療育活動について適宜紹介する。	2	(2)	講義	2～	
聴覚・言語障害の教育課程・指導論	教育的係わり合いの場における係わり手と係わられ手のコミュニケーションの成立・促進に関する重要な諸点について事例をもとに解説し、それらを学校教育の中で展開する際に教育課程の編成とどのように関連をもたせるかを講義する。	2	(2)	講義	2～	
知的障害の教育課程・指導論	特別支援教育とは、一人一人の子どもの固有なニーズを的確に把握し、必要な支援をきめ細かく提供する教育である。知的障害児とその周辺の子どもたちは、生活や学習等において種々の困難を示しており、この講義では、それらを改善・克服するための教育内容、指導の理論と技術について学習する。また、宮城県をはじめとする地域の特別支援学校(知的障害)での実践等についても適宜紹介する。	2	(2)	講義	2～	
肢体不自由の教育課程・指導論	肢体不自由のある児童生徒に対する教育課程及び指導方法について理解する。肢体不自由教育に関する歴史から、教育課程、具体的な指導法、近年のトピックまで広く解説する。教育現場で実践を行うにあたっての基礎となる知識を獲得することと、実際にお子さんと係わる際に必要な視点について理解を深め自分なりの考えを持てるようになることが目標である。	2	(2)	講義	2～	
病弱の教育課程・指導論	病気の児童生徒に対する教育課程及び指導方法について理解する。病弱教育に関する歴史から、教育課程、具体的な指導法、近年のトピックまで広く解説する。教育現場で実践を行うにあたっての基礎となる知識を獲得することと、実際にお子さんと係わる際に必要な視点について理解を深め自分なりの考えを持てるようになることが目標である。	2	(2)	講義	2～	
聴覚・言語障害への教育支援 A	この講義では、聴覚障害児に対する教育支援のあり方について、聴覚障害やコミュニケーション手段(聴能・手話・読話等)の基本知識、聴覚障害教育の歴史的変遷、聴覚障害児の教育的ニーズに応じた指導方法を学ぶ。あわせてその関連領域である言語学、発達心理学、認知心理学等も学習する。	2	(2)	講義	2～	

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講 義 ・ 演 習 ・ 実 験 等	対 象 年 次	備 考
聴覚・言語障害への教育支援 B	この講義では、聴覚や言語に障害のある幼児、児童又は生徒に対する教育支援のあり方について、実践事例をもとに検討を進め、よりよい「教育的係わり合い」とは何かを検討する。	2	(2)	講義	2～	
視覚障害への教育支援演習 A	文献の精読や研究に取り組むことを通して視覚障害教育の専門性を深める。本演習では、「研究」という手法が実践における思考手法として重要であることを認識したのちに、研究法の基礎を文献の精読を通して習得し、それに基づいてグループで視覚障害に関する研究を行い、視覚障害教育の実践や研究に必要な知識・技能の習得を目指す。さらに、そうした活動を通して、視覚障害に関する知見を深める。	2	(2)	演習	3～	2単位以上 選択必修
視覚障害への教育支援演習 B	乳幼児の定型発達をふまえて、視覚障害乳幼児の実態とそのニーズを把握できる視点をもつことができ、かつ幅広い視野に立ち、視覚障害教育に関する課題意識を持つことができ、卒業研究の基礎とすることができるようになることを目標とする。視覚障害乳幼児の個々の実態を客観的にとらえ、個々のニーズを適切に把握することができる基本的な知識と技術を獲得し、実践研究の基礎を理解する。	2	(2)	演習	3～	
発達障害への教育支援 A	特別支援教育の精神医学および心理学的側面についての基礎的理解ができ、児童虐待およびその関連障害と学校教育における支援について理解や実態把握ができるようになることを目標とする。「障害」を有する子どもたちの教育・指導に関わる諸問題について、精神医学および心理学の側面から論ずる。	2	(2)	講義	2～	2単位以上 選択必修
発達障害への教育支援 B	この講義では、学級集団および個別指導における、学習障害（LD）、注意欠如多動性障害（ADHD）、自閉症スペクトラム障害（ASD）、および発達障害に伴う言語障害のある児童生徒について、その定義、学習困難の特徴、行動上の問題と具体的な支援について理解を深めることをねらいとする。	2	(2)	講義	2～	
発達障害への教育支援 C	この講義では、通常学級に在籍する学習障害（LD）、注意欠如多動性障害（ADHD）、自閉症スペクトラム障害（ASD）など、いわゆる知的障害を伴わない発達障害および言語障害について、認知特性から生ずる学習困難の特徴を理解し、そのアセスメントや行動上の問題等に対する具体的な指導・支援の方法について、発達障害への支援 A または B の内容をさらに発展させて実践的理解を深めることをねらいとする。	2	(2)	講義	3～	必修
重度・重複障害への教育支援	特別支援教育における重度・重複障害教育のあり方について、その基本的定義から歴史の変遷、指導の実践を学ぶ。特に、コミュニケーションと探索活動という教育上の主要なテーマについて詳細に取り上げる。	2	(2)	講義	2～	必修
特別支援教育総論	特別支援教育の免許に関わる重複・LD等領域を中心に、5領域（視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱）もあわせてその心理や指導法に関する基礎的な事項を学ぶ。	2	(2)	講義	1～	必修
特別支援学校実習（事前・事後指導1単位を含む。）	特別支援学校における指導の実践を理解すること、個々の児童生徒の実態等に応じた指導・支援を実践すること、特別支援教育に関する専門的な知識・技能を実践を通して学ぶことを目標とする。事前指導では、特別支援教育と教育実習の意義・実際・方法に関する講話を実施する。実習では、指導教諭による学習指導及び配当学級の児童生徒を観察するほか、学習指導案を作成しての授業実践を行う。事後指導では、実習を通して得られた学びに関する振り返り等を行う。	3		実習 （事前・事後指導は講義）	4	必修

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表7-19 (聴覚・言語障害教育コース)

特別支援教育専攻聴覚・言語障害教育コースの学生は、次の表の科目の中から必修・選択必修の科目を含めて31単位以上履修してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
特別支援教育基礎理論	近年、障害児・障害者を巡るさまざまな考え方や制度が大きく変わりつつある。この講義では、発達障害を中心とした特殊教育から特別支援教育への変遷を概説することを通して、特別支援教育に関わる基礎的な知識を獲得すること、さらには、障害のある児童生徒に向き合うための資質を涵養すること、この教育が「教育の原点」と言われることの意味を探ることをねらいとする。	2	(2)	講義	1～	必修
聴覚・言語障害の心理・生理・病理	この講義では、聴覚や言語に障害のある幼児、児童又は生徒の心理に関し、生命活動の調整という視点から「言語」や「コミュニケーション」の問題に迫っていく。	2	(2)	講義	2～	必修
聴覚・言語障害の教育課程・指導論	教育的係わり合いの場における係わり手と係わられ手のコミュニケーションの成立・促進に関する重要な諸点について事例をもとに解説し、それらを学校教育の中で展開する際に教育課程の編成とどのように関連をもたせるかを講義する。	2	(2)	講義	2～	必修
聴覚・言語障害への教育支援A	この講義では、聴覚障害児に対する教育支援のあり方について、聴覚障害やコミュニケーション手段（聴能・手話・読話等）の基本知識、聴覚障害教育の歴史的変遷、聴覚障害児の教育的ニーズに応じた指導方法を学ぶ。あわせてその関連領域である言語学、発達心理学、認知心理学等も学習する。	2	(2)	講義	2～	必修
聴覚・言語障害への教育支援B	この講義では、聴覚や言語に障害のある幼児、児童又は生徒に対する教育支援のあり方について、実践事例をもとに検討を進め、よりよい「教育的係わり合い」とは何かを検討する。	2	(2)	講義	2～	必修
視覚障害の心理・生理・病理	視覚障害は視力、視野、色覚等の視機能の永続的低下である。視覚障害を理解するには、その背景にある視機能や視知覚特性の基本的な理解が必要である。また、聴覚や触覚の特性の理解も必要である。そうした知覚、生理の基礎を踏まえた上で視覚障害と関連の深い代表的な眼疾患について学び、加えて盲児や弱視児の発達や心理の特性について理解を深める。	2	(2)	講義	2～	8単位以上 選択必修
知的障害の心理・生理・病理	知的障害及び関連する諸障害の定義及び関係諸概念、生理・病理的背景等について理解を深めるとともに、困難状況の把握と教育支援の方法に関する心理学的アプローチを学ぶことをねらいとする。	2	(2)	講義	2～	
肢体不自由の心理・生理・病理	肢体不自由児の置かれた生活行動における課題状況の分析と指導方法・内容を検討する。あわせて、重度運動障害への教育的支援に活用する教材教具とそれらを活用した指導実践についてもふれ、肢体不自由児の適応とその支援に関して検討する。あわせて、宮城県内をはじめ東北地方等を中心に地域の特別支援学校等での指導実践や、地域の自宅で訪問看護を受けている重症運動障害者とICTを活用して交流し、その生活の実態を適宜紹介する。	2	(2)	講義	2～	
病弱の心理・生理・病理	障害や教育的ニーズの側面から明確な概念規定が難しい慢性疾患児・病弱児の置かれた生活行動における課題状況の分析と指導方法・内容を検討する。あわせて、宮城県内をはじめ東北地方等を中心に地域の特別支援学校等での指導実践や、小児病院などでの療育活動について適宜紹介する。	2	(2)	講義	2～	

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講 義 ・ 演 習 ・ 実 験 等	対 象 年 次	備 考
視覚障害の教育課程・指導論	視覚障害教育に関する教育課程のありかたと、視覚障害に関わる様々な課題に対する指導法の概要を理解し、具体的・実践的な教育実践例を踏まえながら、「見えない・見えにくい」児童生徒に対する教育の本質を考えることができる基礎的な資質を養うことができるようになることを目標とする。特別支援教育における視覚障害教育の実際と課題について考える。	2	(2)	講義	2～	
知的障害の教育課程・指導論	特別支援教育とは、一人一人の子どもの固有なニーズを的確に把握し、必要な支援をきめ細かく提供する教育である。知的障害児とその周辺の子どもたちは、生活や学習等において種々の困難を示しており、この講義では、それらを改善・克服するための教育内容、指導の理論と技術について学習する。また、宮城県をはじめとする地域の特別支援学校(知的障害)での実践等についても適宜紹介する。	2	(2)	講義	2～	
肢体不自由の教育課程・指導論	肢体不自由のある児童生徒に対する教育課程及び指導方法について理解する。肢体不自由教育に関する歴史から、教育課程、具体的な指導法、近年のトピックまで広く解説する。教育現場で実践を行うにあたっての基礎となる知識を獲得することと、実際にお子さんと係わる際に必要な視点について理解を深め自分なりの考えを持てるようになることが目標である。	2	(2)	講義	2～	
病弱の教育課程・指導論	病気の児童生徒に対する教育課程及び指導方法について理解する。病弱教育に関する歴史から、教育課程、具体的な指導法、近年のトピックまで広く解説する。教育現場で実践を行うにあたっての基礎となる知識を獲得することと、実際にお子さんと係わる際に必要な視点について理解を深め自分なりの考えを持てるようになることが目標である。	2	(2)	講義	2～	
視覚障害への教育支援 A	様々な視覚障害の教育的支援方法に関する知識や支援に関する具体的な技能を獲得する。視覚障害による様々な困難さについて、事例を通して理解を深め、それぞれに応じた支援方法を獲得する。特に、視覚を介さない盲児を対象とし、触覚を主とした感覚の特性に基づいた支援ができるようにする。	2	(2)	講義	2～	
視覚障害への教育支援 B	教育的見地から視覚障害児の困難を把握し支援につなげることができるとを旨とする。医学的な検査と教育的な評価の違いについて理解し、見えにくさを把握するための様々な評価について実践的に理解を深める。さらに、それを補助具や合理的配慮につなげることもにも実践的に取り組む。	2	(2)	講義	2～	
聴覚・言語障害への教育支援演習 A	この演習では、『教育的係わり合い』の場において生じるさまざまな『障害状況』を対象に、実践を進める際に必要な『教育』、『言語』、『行動』、『コミュニケーション』を中心に、学生が自らの価値観と対峙させながら考え、『教育的係わり合い』の基本的視点について整理し、卒業研究に繋げていければと考えている。	2	(2)	演習	3～	2単位以上 選択必修
聴覚・言語障害への教育支援演習 B	研究法についての基本的知識を学びながら、実際の教育支援において重要となるケースへの係わりの視点や指導の構造などについて、文献紹介を基本に解説する。また参加学生が各自の関心あるテーマについてそれぞれに調べレポートを作成する。	2	(2)	演習	3～	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
発達障害への教育支援 A	特別支援教育の精神医学および心理学的側面についての基礎的理解ができ、児童虐待およびその関連障害と学校教育における支援について理解や実態把握ができるようになることを目標とする。「障害」を有する子どもたちの教育・指導に関わる諸問題について、精神医学および心理学の側面から論ずる。	2	(2)	講義	2～	2単位以上 選択必修
発達障害への教育支援 B	この講義では、学級集団および個別指導における、学習障害（LD）、注意欠如多動性障害（ADHD）、自閉症スペクトラム障害（ASD）、および発達障害に伴う言語障害のある児童生徒について、その定義、学習困難の特徴、行動上の問題と具体的な支援について理解を深めることをねらいとする。	2	(2)	講義	2～	
発達障害への教育支援 C	この講義では、通常学級に在籍する学習障害（LD）、注意欠如多動性障害（ADHD）、自閉症スペクトラム障害（ASD）など、いわゆる知的障害を伴わない発達障害および言語障害について、認知特性から生ずる学習困難の特徴を理解し、そのアセスメントや行動上の問題等に対する具体的な指導・支援の方法について、発達障害への支援 A または B の内容をさらに発展させて実践的理解を深めることをねらいとする。	2	(2)	講義	3～	必修
重度・重複障害への教育支援	特別支援教育における重度・重複障害教育のあり方について、その基本的定義から歴史の変遷、指導の実践を学ぶ。特に、コミュニケーションと探索活動という教育上の主要なテーマについて詳細に取り上げる。	2	(2)	講義	2～	必修
特別支援教育総論	特別支援教育の免許に関わる重複・LD等領域を中心に、5領域（視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由障害、病弱障害）もあわせてその心理や指導法に関する基礎的な事項を学ぶ。	2	(2)	講義	1～	必修
特別支援学校実習（事前・事後指導1単位を含む。）	特別支援学校における指導の実践を理解すること、個々の児童生徒の実態等に応じた指導・支援を実践すること、特別支援教育に関する専門的な知識・技能を実践を通して学ぶことを目標とする。事前指導では、特別支援教育と教育実習の意義・実際・方法に関する講話を実施する。実習では、指導教諭による学習指導及び配当学級の児童生徒を観察するほか、学習指導案を作成しての授業実践を行う。事後指導では、実習を通して得られた学びに関する振り返り等を行う。	3		実習 （事前・事後指導は講義）	4	必修

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表7-20（発達障害教育コース）

特別支援教育専攻発達障害教育コースの学生は、次の表の科目の中から必修・選択必修の科目を含めて31単位以上履修してください。

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講義・ 演習・ 実験等	対 象 年 次	備 考
特別支援教育基礎理論	近年、障害児・障害者を巡るさまざまな考え方や制度が大きく変わりつつある。この講義では、発達障害を中心とした特殊教育から特別支援教育への変遷を概説することを通して、特別支援教育に関わる基礎的な知識を獲得すること、さらには、障害のある児童生徒に向き合うための資質を涵養すること、この教育が「教育の原点」と言われることの意味を探ることをねらいとする。	2	(2)	講義	1～	必修
知的障害の心理・生理・病理	知的障害及び関連する諸障害の定義及び関係諸概念、生理・病理的背景等について理解を深めるとともに、困難状況の把握と教育支援の方法に関する心理学的アプローチを学ぶことをねらいとする。	2	(2)	講義	2～	必修
知的障害の教育課程・指導論	特別支援教育とは、一人一人の子どもの固有なニーズを的確に把握し、必要な支援をきめ細かく提供する教育である。知的障害児とその周辺の子どもたちは、生活や学習等において種々の困難を示しており、この講義では、それらを改善・克服するための教育内容、指導の理論と技術について学習する。また、宮城県をはじめとする地域の特別支援学校（知的障害）での実践等についても適宜紹介する。	2	(2)	講義	2～	必修
視覚障害の心理・生理・病理	視覚障害は視力、視野、色覚等の視機能の永続的低下である。視覚障害を理解するには、その背景にある視機能や視知覚特性の基本的な理解が必要である。また、聴覚や触覚の特性の理解も必要である。そうした知覚、生理の基礎を踏まえた上で視覚障害と関連の深い代表的な眼疾患について学び、加えて盲児や弱視児の発達や心理の特性について理解を深める。	2	(2)	講義	2～	12単位以上 選択必修
聴覚・言語障害の心理・生理・病理	この講義では、聴覚や言語に障害のある幼児、児童又は生徒の心理に関し、生命活動の調整という視点から「言語」や「コミュニケーション」の問題に迫っていく。	2	(2)	講義	2～	
肢体不自由の心理・生理・病理	肢体不自由児の置かれた生活行動における課題状況の分析と指導方法・内容を検討する。あわせて、重度運動障害への教育的支援に活用する教材教具とそれらを活用した指導実践についてもふれ、肢体不自由児の適応とその支援に関して検討する。あわせて、宮城県内をはじめ東北地方等を中心に地域の特別支援学校等での指導実践や、地域の自宅で訪問看護を受けている重症運動障害者とICTを活用して交流し、その生活の実態を適宜紹介する。	2	(2)	講義	2～	
病弱の心理・生理・病理	障害や教育的ニーズの側面から明確な概念規定が難しい慢性疾患児・病弱児の置かれた生活行動における課題状況の分析と指導方法・内容を検討する。あわせて、宮城県内をはじめ東北地方等を中心に地域の特別支援学校等での指導実践や、小児病院などでの療育活動について適宜紹介する。	2	(2)	講義	2～	
視覚障害の教育課程・指導論	視覚障害教育に関する教育課程のありかたと、視覚障害に関わる様々な課題に対する指導法の概要を理解し、具体的・実践的な教育実践例を踏まえながら、「見えない・見えにくい」児童生徒に対する教育の本質を考えることができる基礎的な資質を養うことができるようになることを目標とする。特別支援教育における視覚障害教育の実践と課題について考える。	2	(2)	講義	2～	

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講 義 ・ 演 習 ・ 実 験 等	対 象 年 次	備 考
聴覚・言語障害の教育課程・指導論	教育的係わり合いの場における係わり手と係わられ手のコミュニケーションの成立・促進に関する重要な諸点について事例をもとに解説し、それらを学校教育の中で展開する際に教育課程の編成とどのように関連をもたせるかを講義する。	2	(2)	講義	2～	
肢体不自由の教育課程・指導論	肢体不自由のある児童生徒に対する教育課程及び指導方法について理解する。肢体不自由教育に関する歴史から、教育課程、具体的な指導法、近年のトピックまで広く解説する。教育現場で実践を行うにあたっての基礎となる知識を獲得することと、実際にお子さんと係わる際に必要な視点について理解を深め自分なりの考えを持てるようになることが目標である。	2	(2)	講義	2～	
病弱の教育課程・指導論	病気の児童生徒に対する教育課程及び指導方法について理解する。病弱教育に関する歴史から、教育課程、具体的な指導法、近年のトピックまで広く解説する。教育現場で実践を行うにあたっての基礎となる知識を獲得することと、実際にお子さんと係わる際に必要な視点について理解を深め自分なりの考えを持てるようになることが目標である。	2	(2)	講義	2～	
視覚障害への教育支援 A	様々な視覚障害の教育的支援方法に関する知識や支援に関する具体的な技能を獲得する。視覚障害による様々な困難さについて、事例を通して理解を深め、それぞれに応じた支援方法を獲得する。特に、視覚を介さない盲児を対象とし、触覚を主とした感覚の特性に基づいた支援ができるようにする。	2	(2)	講義	2～	
視覚障害への教育支援 B	教育的見地から視覚障害児の困難を把握し支援につなげることができるを目指す。医学的な検査と教育的な評価の違いについて理解し、見えにくさを把握するための様々な評価について実践的に理解を深める。さらに、それを補助具や合理的配慮につなげることにとも実践的に取り組む。	2	(2)	講義	2～	
聴覚・言語障害への教育支援 A	この講義では、聴覚障害児に対する教育支援のあり方について、聴覚障害やコミュニケーション手段（聴能・手話・読話等）の基本知識、聴覚障害教育の歴史的変遷、聴覚障害児の教育的ニーズに応じた指導方法を学ぶ。あわせてその関連領域である言語学、発達心理学、認知心理学等も学習する。	2	(2)	講義	2～	
聴覚・言語障害への教育支援 B	この講義では、聴覚や言語に障害のある幼児、児童又は生徒に対する教育支援のあり方について、実践事例をもとに検討を進め、よりよい「教育的係わり合い」とは何かを検討する。	2	(2)	講義	2～	2単位以上 選択必修
知的障害への教育支援演習 A	この演習では、知的障害・自閉症・LD・ADHD等を含む内外の実践研究を中心とした文献講読、レポート発表と討議、学校又は施設見学、グループ研究を行い、これらを通じて発達障害児に関わる研究動向、教育・福祉・労働の現状と課題を把握し、教職において求められる基礎的な実践研究の方法とまとめ方を学ぶことをねらいとする。	2	(2)	演習	3～	
知的障害への教育支援演習 B	卒業研究を進める上で必要となる基礎的スキルを身に付けるとともに、知的障害及び関連する諸障害に関する文献講読や宮城県内の特別支援学校の見学または情報収集を通じて、各自の研究課題を明確化していくことをねらいとする。	2	(2)	演習	3～	
知的障害への教育支援演習 C	この演習では、文献講読と発表、ロールプレイング、討議を行い、知的障害・発達障害に関する先行研究や現代的課題をふまえた自らの研究課題を明確化し、それに関する専門的知識・技術・考え方について、実践を通して自らのものとすることをねらいとする。	2	2	演習	3～	

授 業 科 目 名	授 業 概 要	単 位 数	毎 週 授 業 時 数	講義・ 演習・ 実験等	対 象 年 次	備 考
発達障害への教育支援 A	特別支援教育の精神医学および心理学的側面についての基礎的理解ができ、児童虐待およびその関連障害と学校教育における支援について理解や実態把握ができるようになることを目標とする。「障害」を有する子どもたちの教育・指導に関わる諸問題について、精神医学および心理学の側面から論ずる。	2	(2)	講義	2～	2単位以上 選択必修
発達障害への教育支援 B	この講義では、学級集団および個別指導における、学習障害（LD）、注意欠如多動性障害（ADHD）、自閉症スペクトラム障害（ASD）、および発達障害に伴う言語障害のある児童生徒について、その定義、学習困難の特徴、行動上の問題と具体的な支援について理解を深めることをねらいとする。	2	(2)	講義	2～	
発達障害への教育支援 C	この講義では、通常学級に在籍する学習障害（LD）、注意欠如多動性障害（ADHD）、自閉症スペクトラム障害（ASD）など、いわゆる知的障害を伴わない発達障害および言語障害について、認知特性から生ずる学習困難の特徴を理解し、そのアセスメントや行動上の問題等に対する具体的な指導・支援の方法について、発達障害への支援 A または B の内容をさらに発展させて実践的理解を深めることをねらいとする。	2	(2)	講義	3～	必修
重度・重複障害への教育支援	特別支援教育における重度・重複障害教育のあり方について、その基本的定義から歴史の変遷、指導の実践を学ぶ。特に、コミュニケーションと探索活動という教育上の主要なテーマについて詳細に取り上げる。	2	(2)	講義	2～	必修
特別支援教育総論	特別支援教育の免許に関わる重複・LD等領域を中心に、5領域（視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱）もあわせてその心理や指導法に関する基礎的な事項を学ぶ。	2	(2)	講義	1～	必修
特別支援学校実習（事前・事後指導1単位を含む。）	特別支援学校における指導の実践を理解すること、個々の児童生徒の実態等に応じた指導・支援を実践すること、特別支援教育に関する専門的な知識・技能を実践を通して学ぶことを目標とする。事前指導では、特別支援教育と教育実習の意義・実際・方法に関する講話を実施する。実習では、指導教諭による学習指導及び配当学級の児童生徒を観察するほか、学習指導案を作成しての授業実践を行う。事後指導では、実習を通して得られた学びに関する振り返り等を行う。	3		実習 （事前・ 事後指導は 講義）	4	必修

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表7-21 (健康・運動障害教育コース)

特別支援教育専攻健康・運動障害教育コースの学生は、次の表の科目の中から必修・選択必修の科目を含めて31単位以上履修してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
特別支援教育基礎理論	近年、障害児・障害者を巡るさまざまな考え方や制度が大きく変わりつつある。この講義では、発達障害を中心とした特殊教育から特別支援教育への変遷を概説することを通して、特別支援教育に関わる基礎的な知識を獲得すること、さらには、障害のある児童生徒に向き合うための資質を涵養すること、この教育が「教育の原点」と言われることの意味を探ることをねらいとする。	2	(2)	講義	1～	必修
肢体不自由の心理・生理・病理	肢体不自由児の置かれた生活行動における課題状況の分析と指導方法・内容を検討する。あわせて、重度運動障害への教育的支援に活用する教材教具とそれらを活用した指導実践についてもふれ、肢体不自由児の適応とその支援に関して検討する。あわせて、宮城県内をはじめ東北地方等を中心に地域の特別支援学校等での指導実践や、地域の自宅で訪問看護を受けている重症運動障害者とICTを活用して交流し、その生活の実態を適宜紹介する。	2	(2)	講義	2～	必修
肢体不自由の教育課程・指導論	肢体不自由のある児童生徒に対する教育課程及び指導方法について理解する。肢体不自由教育に関する歴史から、教育課程、具体的な指導法、近年のトピックまで広く解説する。教育現場で実践を行うにあたっての基礎となる知識を獲得すること、実際にお子さんと係わる際に必要な視点について理解を深め自分なりの考えを持てるようになることが目標である。	2	(2)	講義	2～	必修
病弱の心理・生理・病理	障害や教育的ニーズの側面から明確な概念規定が難しい慢性疾患児・病弱児の置かれた生活行動における課題状況の分析と指導方法・内容を検討する。あわせて、宮城県内をはじめ東北地方等を中心に地域の特別支援学校等での指導実践や、小児病院などでの療育活動について適宜紹介する。	2	(2)	講義	2～	必修
病弱の教育課程・指導論	病気の児童生徒に対する教育課程及び指導方法について理解する。病弱教育に関する歴史から、教育課程、具体的な指導法、近年のトピックまで広く解説する。教育現場で実践を行うにあたっての基礎となる知識を獲得すること、実際にお子さんと係わる際に必要な視点について理解を深め自分なりの考えを持てるようになることが目標である。	2	(2)	講義	2～	必修
視覚障害の心理・生理・病理	視覚障害は視力、視野、色覚等の視機能の永続的低下である。視覚障害を理解するには、その背景にある視機能や視知覚特性の基本的な理解が必要である。また、聴覚や触覚の特性の理解も必要である。そうした知覚、生理の基礎を踏まえた上で視覚障害と関連の深い代表的な眼疾患について学び、加えて盲児や弱視児の発達や心理の特性について理解を深める。	2	(2)	講義	2～	8単位以上 選択必修
聴覚・言語障害の心理・生理・病理	この講義では、聴覚や言語に障害のある幼児、児童又は生徒の心理に関し、生命活動の調整という視点から「言語」や「コミュニケーション」の問題に迫っていく。	2	(2)	講義	2～	
知的障害の心理・生理・病理	知的障害及び関連する諸障害の定義及び関係諸概念、生理・病理的背景等について理解を深めるとともに、困難状況の把握と教育支援の方法に関する心理学的アプローチを学ぶことをねらいとする。	2	(2)	講義	2～	
視覚障害の教育課程・指導論	視覚障害教育に関する教育課程のありかたと、視覚障害に関わる様々な課題に対する指導法の概要を理解し、具体的・実践的な教育実践例を踏まえながら、「見えない・見えにくい」児童生徒に対する教育の本質を考えることができる基礎的な資質を養うことができるようになることを目標とする。特別支援教育における視覚障害教育の実際と課題について考える。	2	(2)	講義	2～	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
聴覚・言語障害の教育課程・指導論	教育的係わり合いの場における係わり手と係わられ手のコミュニケーションの成立・促進に関する重要な諸点について事例をもとに解説し、それらを学校教育の中で展開する際に教育課程の編成とどのように関連をもたせるかを講義する。	2	(2)	講義	2～	
知的障害の教育課程・指導論	特別支援教育とは、一人一人の子どもの固有なニーズを的確に把握し、必要な支援をきめ細かく提供する教育である。知的障害児とその周辺の子どもたちは、生活や学習等において種々の困難を示しており、この講義では、それらを改善・克服するための教育内容、指導の理論と技術について学習する。また、宮城県をはじめとする地域の特別支援学校（知的障害）での実践等についても適宜紹介する。	2	(2)	講義	2～	
視覚障害への教育支援 A	様々な視覚障害の教育的支援方法に関する知識や支援に関する具体的な技能を獲得する。視覚障害による様々な困難さについて、事例を通して理解を深め、それぞれに応じた支援方法を獲得する。特に、視覚を介さない盲児を対象とし、触覚を主とした感覚の特性に基づいた支援ができるようにする。	2	(2)	講義	2～	
視覚障害への教育支援 B	教育的見地から視覚障害児の困難を把握し支援につなげることができることを目指す。医学的な検査と教育的な評価の違いについて理解し、見えにくさを把握するための様々な評価について実践的に理解を深める。さらに、それを補助具や合理的配慮につなげることも実践的に取り組む。	2	(2)	講義	2～	
聴覚・言語障害への教育支援 A	この講義では、聴覚障害児に対する教育支援のあり方について、聴覚障害やコミュニケーション手段（聴能・手話・読話等）の基本知識、聴覚障害教育の歴史の変遷、聴覚障害児の教育的ニーズに応じた指導方法を学ぶ。あわせてその関連領域である言語学、発達心理学、認知心理学等も学習する。	2	(2)	講義	2～	
聴覚・言語障害への教育支援 B	この講義では、聴覚や言語に障害のある幼児、児童又は生徒に対する教育支援のあり方について、実践事例をもとに検討を進め、よりよい「教育的係わり合い」とは何かを検討する。	2	(2)	講義	2～	
知的障害への教育支援演習 A	この演習では、知的障害・自閉症・LD・ADHD等を含む内外の実践研究を中心とした文献講読、レポート発表と討議、学校又は施設見学、グループ研究を行い、これらを通じて発達障害児に関わる研究動向、教育・福祉・労働の現状と課題を把握し、教職において求められる基礎的な実践研究の方法とまとめ方を学ぶことをねらいとする。	2	2	演習	3～	2単位以上 選択必修
知的障害への教育支援演習 B	卒業研究を進める上で必要となる基礎的スキルを身に付けるとともに、知的障害及び関連する諸障害に関する文献講読や宮城県内の特別支援学校の見学または情報収集を通じて、各自の研究課題を明確化していくことをねらいとする。	2	2	演習	3～	
知的障害への教育支援演習 C	この演習では、文献講読や発表、ロールプレイング、討議を行い、知的障害・発達障害に関する先行研究や現代的課題をふまえた自らの研究課題を明確化し、それに関する専門的知識・技術・考え方について、実践を通して自らのものとすることをねらいとする。	2	2	演習	3～	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
肢体不自由への教育支援演習	肢体不自由教育に関する文献抄読と議論、パソコン教材作成体験、特別支援学校の見学等を通して肢体不自由教育に関連する研究動向を把握し、具体的な指導法や教材・教具について理解するとともに実践的な技術を修得する。	2	(2)	演習	3	2単位以上 選択必修
病弱への教育支援演習	病弱教育領域における各種指導法や関連する理論及び国内の研究動向について基礎的な理解を得るとともに、教材・教具に関する実践的な知識や技術を修得し、病弱教育領域における各種アプローチ法や関連する理論、国内の研究動向について理解を深め、自らの考えを述べるができるようになることを目標とする。病弱教育に関する文献抄読と議論、特別支援学校の見学等を通して病弱教育に関連する研究動向を把握し、具体的な心理社会的発達や行動の分析方法について理解するとともに実践的な技術を修得する。	2	(2)	演習	3	
発達障害への教育支援 A	特別支援教育の精神医学および心理学的側面についての基礎的理解ができ、児童虐待およびその関連障害と学校教育における支援について理解や実態把握ができるようになることを目標とする。「障害」を有する子どもたちの教育・指導に関わる諸問題について、精神医学および心理学の側面から論ずる。	2	(2)	講義	2～	2単位以上 選択必修
発達障害への教育支援 B	この講義では、学級集団および個別指導における、学習障害（LD）、注意欠如多動性障害（ADHD）、自閉症スペクトラム障害（ASD）、および発達障害に伴う言語障害のある児童生徒について、その定義、学習困難の特徴、行動上の問題と具体的な支援について理解を深めることをねらいとする。	2	(2)	講義	2～	
発達障害への教育支援 C	この講義では、通常学級に在籍する学習障害（LD）、注意欠如多動性障害（ADHD）、自閉症スペクトラム障害（ASD）など、いわゆる知的障害を伴わない発達障害および言語障害について、認知特性から生ずる学習困難の特徴を理解し、そのアセスメントや行動上の問題等に対する具体的な指導・支援の方法について、発達障害への支援AまたはBの内容をさらに発展させて実践的理解を深めることをねらいとする。	2	(2)	講義	3～	必修
重度・重複障害への教育支援	特別支援教育における重度・重複障害教育のあり方について、その基本的定義から歴史の変遷、指導の実践を学ぶ。特に、コミュニケーションと探索活動という教育上の主要なテーマについて詳細に取り上げる。	2	(2)	講義	2～	必修
特別支援教育総論	特別支援教育の免許に関わる重複・LD等領域を中心に、5領域（視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱）もあわせてその心理や指導法に関する基礎的な事項を学ぶ。	2	(2)	講義	1～	必修
特別支援学校実習（事前・事後指導1単位を含む。）	特別支援学校における指導の実践を理解すること、個々の児童生徒の実態等に応じた指導・支援を実践すること、特別支援教育に関する専門的な知識・技能を実践を通して学ぶことを目標とする。事前指導では、特別支援教育と教育実習の意義・実際・方法に関する講話を実施する。実習では、指導教諭による学習指導及び配当学級の児童生徒を観察するほか、学習指導案を作成しての授業実践を行う。事後指導では、実習を通して得られた学びに関する振り返り等を行う。	3		実習（事前・事後指導は講義）	4	必修

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。

特別支援専門科目履修上の注意（各領域要件科目一覧表）

特別支援専門科目履修上の注意

「履修のしおり」の授業科目表7-18～21で「8（発達12）単位以上選択必修」となっている以下の科目については、太枠で囲んだセットの組み合わせで8（12）単位以上修得していることが1種免許状取得の要件となっているので、計画的に履修するよう注意して下さい。

視覚障害教育コース

聴覚・言語障害の心理・生理・病理
聴覚・言語障害の教育課程・指導論
聴覚・言語障害への教育支援 A
聴覚・言語障害への教育支援 B

知的障害の心理・生理・病理
知的障害の教育課程・指導論

肢体不自由の心理・生理・病理
肢体不自由の教育課程・指導論

病弱の心理・生理・病理
病弱の教育課程・指導論

発達障害教育コース

視覚障害の心理・生理・病理
視覚障害の教育課程・指導論
視覚障害への教育支援 A
視覚障害への教育支援 B

聴覚・言語障害の心理・生理・病理
聴覚・言語障害の教育課程・指導論
聴覚・言語障害への教育支援 A
聴覚・言語障害への教育支援 B

肢体不自由の心理・生理・病理
肢体不自由の教育課程・指導論

病弱の心理・生理・病理
病弱の教育課程・指導論

聴覚・言語障害教育コース

視覚障害の心理・生理・病理
視覚障害の教育課程・指導論
視覚障害への教育支援 A
視覚障害への教育支援 B

知的障害の心理・生理・病理
知的障害の教育課程・指導論

肢体不自由の心理・生理・病理
肢体不自由の教育課程・指導論

病弱の心理・生理・病理
病弱の教育課程・指導論

健康・運動障害教育コース

視覚障害の心理・生理・病理
視覚障害の教育課程・指導論
視覚障害への教育支援 A
視覚障害への教育支援 B

聴覚・言語障害の心理・生理・病理
聴覚・言語障害の教育課程・指導論
聴覚・言語障害への教育支援 A
聴覚・言語障害への教育支援 B

知的障害の心理・生理・病理
知的障害の教育課程・指導論

5 専門教育科目 その5 卒業研究 (4単位)

卒業研究は、全専攻に共通して設定されている科目です。その内容、方法、履修の手順等は、所属する専攻・コースごとに定められています。また、卒業研究には参加資格があり、これに関しても専攻・コースによって必要単位数が異なります。

卒業研究の履修に関しては、**第14章**の説明を確認してください。

XI

第 11 章 キャリアステップアップ科目

■1 キャリアステップアップ科目の履修

- (1) キャリアステップアップ科目の目的
- (2) キャリアステップアップ科目の全体構成
- (3) 卒業までに修得する必要がある単位数

■2 教育体験初年次演習

- (1) 教育体験初年次演習のねらい
- (2) 単位数と履修方法
- (3) 履修上の留意点

■3 教育実践探究演習

- (1) 教育実践探究演習のねらい
- (2) 単位数と履修方法
- (3) 履修上の留意点

■4 教育実習

■5 教職実践演習

- (1) 教職実践演習のねらい
- (2) 単位数と履修方法
- (3) 教職実践演習と履修カルテ



第11章 キャリアステップアップ科目

1 キャリアステップアップ科目の履修

(1) キャリアステップアップ科目の目的

キャリアステップアップ科目とは、本学の教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）に記載のあるとおり、1年次から4年次までの4年間にわたって、観察・参加・実習という方法で継続して教育実践に関わることにより、学校教育の実際を体験的・総合的に理解することをねらいとした科目群です。すなわち、「大学での学問体系に裏打ちされた学修と教育現場での体験に基づいた学修とを有機的に結びつける」ことによって、「学問の大切さを知り、生涯にわたって学び続けようとする教員」をめざして、「自己研鑽を積み重ねていく意欲と能力を涵養する」ことをねらいとした科目群といえます。

(2) キャリアステップアップ科目の全体構成

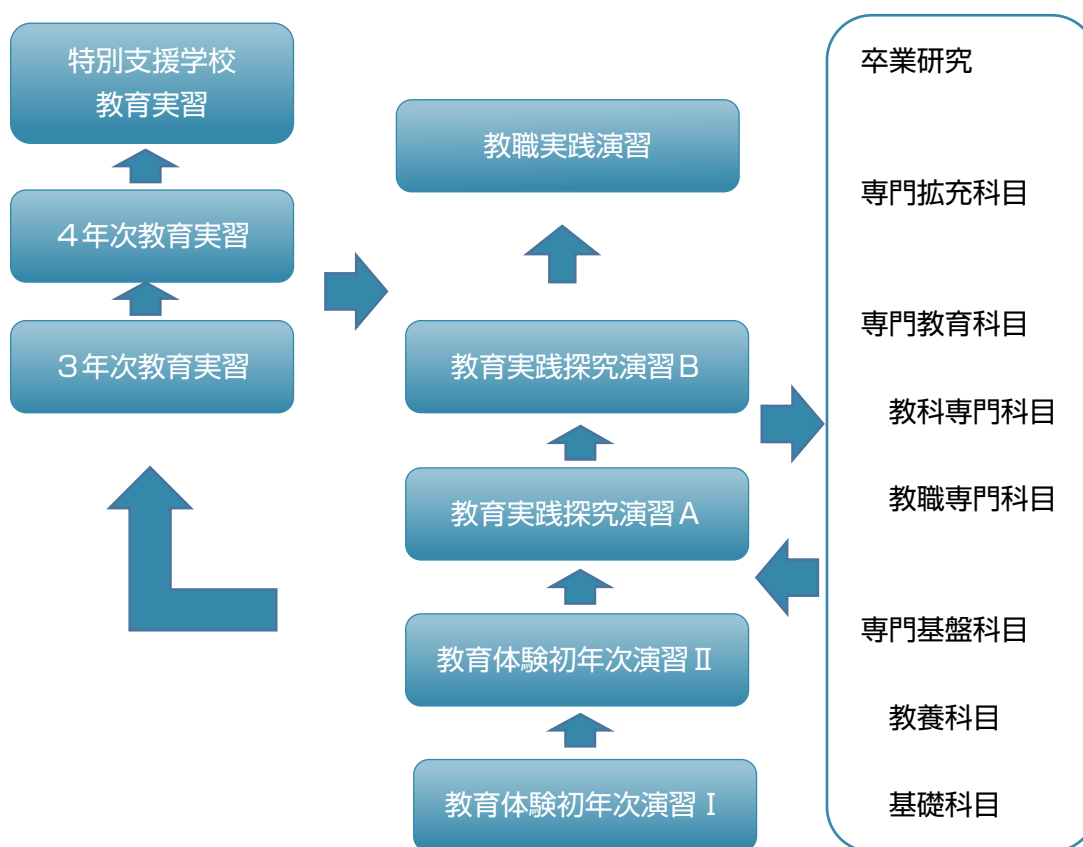
キャリアステップアップ科目は、次の授業科目によって構成されています。

- 教育体験初年次演習Ⅰ（1年次前期開講、2単位）
- 教育体験初年次演習Ⅱ（1年次後期開講、2単位）
- 教育実践探究演習A（2年次開講、2単位）
- 教育実践探究演習B（3年次開講、2単位）
- 3年次教育実習（事前事後指導を含んで3単位）
- 4年次教育実習（事前事後指導を含んで4単位）
- 特別支援学校実習（事前事後指導を含んで3単位）
- 教職実践演習（4年次開講、2単位）

なお、中等教育専攻、芸術体育・生活系教育専攻および特別支援教育専攻の「中履修型」における「教育実践探究演習A」と「教育実践探究演習B」は、中学校における教科の指導法としての授業科目である「教育実践指導法A」と「教育実践指導法B」をもって、この科目に振り替えるものとします。

本学の教育課程におけるキャリアステップアップ科目の全体構成は、次の図1のとおりですので、それぞれの科目の意義や役割を十分に理解したうえで履修してください。

図1 キャリアステップアップ科目の全体構成



(3) 卒業までに修得する必要がある単位数

キャリアステップアップ科目に属する授業科目は、いずれも全専攻必修科目です。上記(2)に示した授業科目を卒業までにすべて履修してください。

キャリアステップアップ科目をすべて履修すると、芸術体育・生活系教育専攻の中等連携履修型以外の学生は、全17単位修得することになります。芸術体育・生活系教育専攻の中等連携履修型の学生は、二枚目の中学校教員免許状取得のために、所属する教科の「教育実践探究演習A（教育実践指導法A）」「教育実践探究演習B（教育実践指導法B）」に加えて、選択したもう一つの中学校の教科（国語、英語、数学、のいずれか）の「教育実践探究演習A（教育実践指導法A）」「教育実践探究演習B（教育実践指導法B）」を履修する必要があります。したがって、芸術体育・生活系教育専攻の中等連携履修型の学生が卒業までに修得すべきキャリアステップアップ科目の単位数は、全21単位となります。

2 教育体験初年次演習

(1) 教育体験初年次演習のねらい

教育体験初年次演習は、卒業後の将来を見据えつつ、教職への関心を培い、教職への意欲・情熱・使命感等を高めるとともに、4年間を見通した学修計画を立てて主体的に学ぶ姿勢を作るというキャリア教育的な要素を持った授業科目です。さらに、大学での専門的な学修や研究に取り組むための技術・能力を磨き、入学直後の1年間をかけて教育大学の学生としての資質・技能をじっくりと育てるという初年次教育的な要素も併せ持っています。

(2) 単位数と履修方法

＜履修時期と単位数＞

履修時期は、教育体験初年次演習Ⅰが1年生の前期、教育体験初年次演習Ⅱが1年生の後期です。Ⅰ・Ⅱのいずれも必修2単位の科目です。

＜履修方法＞

教育体験初年次演習は、所属する専攻ごとに、履修すべきクラスが定められています。教育体験初年次演習のクラス指定、および各クラスの授業概要については、履修する年度の『開講科目一覧』および電子化シラバスを確認してください。

(3) 履修上の留意点

教育体験初年次演習の履修にあたっては、以下の3点に留意してください。

- ① 教育体験初年次演習Ⅰ・Ⅱの授業では、附属学校園等の参観活動をクラス単位で行いますが、その際に通常の時間割とは異なる時間を参観活動に充てる（授業の一部が「集中」となる）ことがあります。
- ② 教育体験初年次演習Ⅱは、教育体験初年次演習Ⅰを履修済の場合に履修できます。
- ③ 万一、教育体験初年次演習Ⅰ・Ⅱの単位が修得できなくても2年次に進級することはできますが、必修の授業科目ですので、進級後に指定のクラスを受講して単位修得する必要があります。

3 教育実践探究演習

(1) 教育実践探究演習のねらい

1年次開講の教育体験初年次演習Ⅰ・Ⅱが幼児・児童・生徒理解や学校理解、教職理解を主とした総合的・全般的な体験・観察実習活動を取り入れていたのに対して、2年次および3年次開講の教育実践探究演習A・Bは、それを発展させる形で、教員が遂行する職務の中でも重要な位置を占めている学習指導や生徒指導により焦点をあてます。教育実践探究演習は、3年次以降の教育実習に向けて、学問体系に基づいた学修と体験的な学修とを有機的に結び付けることで実践的指導力を磨き、さらに教職キャリアのステップアップを意識していくことをねらいとした授業科目です。

(2) 単位数と履修方法

＜履修時期と単位数＞

履修時期は、教育実践探究演習Aが2年生の前期または後期、教育実践探究演習Bが3年生の前期または後期です。A・Bのいずれも必修2単位の科目です。

芸術体育・生活系教育専攻の中等連携履修型の学生は、所属する教科の「教育実践探究演習（教育実践指導法）A・B」に加えて、二枚目の中学校教員免許状取得のための「教育実践探究演習A（教育実践指導法A）」を2年次以降に、「教育実践探究演習B（教育実践指導法B）」を3年次以降に履修してください。これらも必修2単位の科目です。

＜履修方法＞

教育実践探究演習は、所属する専攻ごとに、履修すべきクラスが定められています。教育実践探究演習のクラス指定、および各クラスの授業概要については、履修する年度の『開講科目一覧』および電子化シラバスを確認してください。

(3) 履修上の留意点

教育実践探究演習の履修にあたっては、以下の2点に留意してください。

- ① この科目の履修にあたっては、次の三つの「協働」が重視されている点に留意してください。すなわち、「学問的な知見と実践的な体験との協働」「教科教育と教科専門との協働」「2年次学生と3年次学生との協働」の三つの「協働」です。そのために、授業によっては、「教育実践探究演習A」と「教育実践探究演習B」とを合同で行い、2年生と3年生との学び合い活動が取り入れられる場合があります。
- ② 中等教育専攻、芸術体育・生活系教育専攻および特別支援教育専攻の「中履修型」における「教育実践探究演習A」「教育実践探究演習B」については、教育課程上は、教職科目の中の教科の指導法に関する科目のひとつである「教育実践指導法A」「教育実践指導法B」に振り替えて履修することとなっています。中等教育専攻、芸術体育・生活系教育専攻および特別支援教育専攻の「中履修型」の学生は、「教育実践探究演習A」「教育実践探究演習B」として、取得する教科の教員免許状（1枚目の免許状および基礎免許状）に対応した「教育実践指導法A」「教育実践指導法B」を履修してください。芸術体育・生活系教育専攻の中等連携履修型の学生は、それに加えて選択した教科の教員免許状（2枚目の免許状）に対応した「教育実践指導法A」「教育実践指導法B」も併せて履修してください。

4 教育実習

教育実習は、キャリアステップアップ科目の中で重要な位置を占めています。履修登録の仕方等、他の授業科目とは異なるところもあり、指示事項・留意事項をよく理解して履修する必要があります。教育実習については、第12章の説明を確認してください。

5 教職実践演習

(1) 教職実践演習のねらい

教職実践演習は、キャリアステップアップ科目をはじめとした大学でのさまざまな授業科目の履修や課外活動等を通じて学生が身につけた資質能力が、教員に必要な資質能力として有機的に統合されているかどうかを確認することをねらいとした授業科目です。その際に、教員に必要な資質能力として、次のような事項が挙げられます。

- 教職に対する使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項
- 多様な他者と交わる際の社会性や対人関係能力に関する事項
- 幼児・児童・生徒に対する理解や学級経営等に関する事項
- 教科・保育内容等の実践的な指導力に関する事項

教職実践演習は、大学生活の中で上記のような資質能力が身についたのかどうかを学生自身が振り返る、「学びの軌跡の集大成」としての位置を持つとともに、キャリアステップアップ科目の総まとめとなる科目です。すなわち、学生はこの科目の履修を通じて、将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるのかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その確かな定着を図ることにより、卒業後の教職生活をより円滑にスタートできるようになることが期待されています。

(2) 単位数と履修方法

＜履修時期と単位数＞

履修時期は4年生の後期です。必修2単位の科目であり、卒業予定者全員が履修することとなります。

<履修資格>

教職実践演習を履修するためには、履修を希望する年度に、それぞれの専攻・コースで卒業要件となっている教員免許状に関する教育実習のすべての単位を修得済か、あるいは単位修得の見込みがなければなりません。

<履修方法>

教職実践演習は、所属する専攻ごとに、履修すべきクラスが定められています。教職実践演習のクラス指定、および各クラスの授業概要については、履修する年度の『開講科目一覧』および電子化シラバスを確認してください。

(3) 教職実践演習と履修カルテ

<履修資料の蓄積と「履修カルテ」>

教職実践演習の履修は4年生の後期となりますが、上記(1)に記したように、4年間の学生生活全体を振り返るという科目であるため、入学の段階から準備を始める必要があります。その準備とは、皆さんがいつでも自らの学修内容や学生生活を振り返り、自己評価を行い、そして次の目標を確認することができるようにすることです。そのためには、学修の成果物やレポート、成績の資料などを蓄積するとともに、振り返りの考察・自己評価・目標設定などを記録しておく「履修カルテ」が必要になります。本学では、「履修カルテA」と「履修カルテB」という2種類の「履修カルテ」を用意していますが、皆さんは在学中に、次のことを継続して実施してください。

- 入学から卒業まで、さまざまな授業で作成したレポートや成果物、教育実習の実習日誌、課外活動の資料など、4年間の大学生活を振り返る際に必要なものを整理してファイルなどにまとめ、大切に保管してください。デジタルファイルの資料なども同様です。
- 成績が開示される期間に、各自で成績表を印刷するなどして保管してください。
- 成績や蓄積した学修の資料などを参考にしながら、自らの学修を振り返り、定められた期間内に「履修カルテ」を定期的に更新してください。

<「履修カルテ」の作成と管理>

「履修カルテ」の入力フォームはデジタルファイルとして配付されます。ファイルの配付方法や記入方法については、入学後の適切な時期に連絡します。

「履修カルテ」には、新入生が入学後にすぐに記入する項目や、必ず毎年度、定期的に記入しなければならない項目があります。また、「履修カルテ」は、教職実践演習における4年間の振り返りだけでなく、必要に応じて教員の学生指導にも利用されます。クラス担任が「履修カルテ」の提出を求めたり、個人面談の際に利用したりすることがあります。必要なときにいつでも「履修カルテ」を提出できるように作成・管理してください。

なお、「履修カルテ」には個人情報が含まれますので、その取り扱いには十分注意してください。また、デジタルファイルの消失を避けるために、適宜バックアップを保存するなどの対策を行ってください。

XII

第 12 章 教育実習

- 1 教育実習の履修資格
- 2 実習校・実習期間
- 3 教育実習の履修登録
- 4 教育実習履修の留意事項
 - (1)「教育実習生記録」の提出
 - (2)「事前・事後指導」
- 5 追実習
- 6 成績評価等
- 7 教育実習等特例措置

第12章 教育実習



1 教育実習の履修資格

すべての教育実習には、履修資格が設けられています。教育実習履修の前年度末までに、次の表に示した要件を満たしていない場合、教育実習を履修することはできません。指定された学年で教育実習を履修できない場合、4年間で卒業することができなくなりますので、表の下の注の部分も含めてきちんと理解してください。

3年次教育実習			4年次教育実習			高等学校実習		
下記の①～④の単位を含めて、合計49単位以上修得していること。			下記の①～③のいずれも満たすこと。			下記①～④のいずれも満たすこと。		
①	教職入門	2単位	①	卒業研究参加資格を有すること		①	卒業研究参加資格を有すること	
②	教育の原理 発達と学習 の心理 教育の制度・経営 教育と地域社会	4単位 以上	②	3年次教育実習を修得していること		②	3年次教育実習を修得していること	
③	教育体験初年次演習 I	2単位	③	小学校実習（全専攻共通）の場合 初等教育実践探究演習 A、B 各教科の初等教育法 中学校実習（特別支援の中履修型を除く）の場合 各教科の中等実践指導法 A、B 各教科の中等教育法 中学校実習（特別支援の中履修型）の場合 各教科の中等実践指導法 A、B 各教科の中等教育法 中学校の専門科目	8単位 以上 4単位 以上 4単位 以上 18単位 以上	③	各教科の中等教育法	2単位 以上
④	幼稚園実習の場合 初等教育実践探究演習 A 各保育内容の指導法 各教科の初等教育法 小学校実習（特別支援の小履修型を含む）の場合 初等教育実践探究演習 A 各教科の初等教育法 中学校実習（芸術体育・生活系、特別支援の中履修型を含む）の場合 各教科の中等実践指導法 A 各教科の中等教育法	4単位 以上 4単位 以上 2単位 以上				④	中学校の専門科目	18単位 以上

特別支援学校実習	
下記①～④のいずれも満たすこと。	
①	小学校4年次実習または中学校4年次実習の参加資格を有すること
②	「特別支援教育基礎理論」2単位を修得していること
③	取得しようとする免許領域（視覚・聴覚・知的・肢体・病弱）のいずれかひとつの領域に関わる「〇〇の心理・生理・病理」、「〇〇の教育課程・指導論」のうちから4単位以上を修得していること
④	「発達障害への教育支援 A」、「発達障害への教育支援 B」、「発達障害への教育支援 C」、「重度・重複障害への教育支援」、「特別支援教育総論」のうちから2単位以上を修得していること

〔注〕

- 中等教育専攻の場合、「各教科の中等実践指導法 A、B」は、所属するコースの教科のものに限る。
- 芸術・生活系教育専攻の場合、「各教科の中等実践指導法 A、B」は、芸術・生活系の教科（音楽、美術、保健体育、技術、家庭）に関わる科目を指す。中等連携履修型の場合、国語、数学、英語に関する科目は含まないので留意すること。
- 特別支援教育専攻「小履修型」の場合、「初等教育実践探究演習 A、B」は、初等教育専攻の授業を履修すること。
- 特別支援教育専攻「中履修型」の場合、「各教科の中等実践指導法 A、B」は、選択した教科に関わる授業を履修すること。
- 「各教科の中等教育法 A、B」および「中学校の専門科目」については、免許を取得しようとする教科に関わるものに限る。ただし、芸術・生活系教育専攻の場合、芸術・生活系の教科（音楽、美術、保健体育、技術、家庭）に関わる科目を指す。中等連携履修型の場合、国語、数学、英語に関する科目は含まないので留意すること。
- 「中学校の専門科目」とは、中等教育専攻及び芸術・生活系教育専攻の専門教育科目を指す。（国社英数理：授業科目表5-5～5-9、音楽保健系：授業科目表6-9～6-13）
- 中等教育専攻、芸術・生活系教育専攻の「中等連携履修型」及び特別支援教育専攻「中履修型」で、副免許状として幼稚園免許状取得のために小学校4年次実習を履修する場合、「初等教育実践探究演習 A、B」は所属する専攻の「各教科ごとの中等実践指導法 A、B」（特別支援教育専攻の学生は選択したもの）をもって充てる。
- 初等教育専攻及び特別支援教育専攻「小履修型」で、副免許状として高等学校免許状を希望し、中学校4年次実習を履修する場合は、「高等学校実習」の要件を満たすこと。また、「各教科の中等実践指導法 A、B」を受講する場合は、免許を取得しようとする教科に関わるものに限る。
- 初等教育専攻、中等教育専攻及び芸術・生活系教育専攻で、副免許状として特別支援学校教諭免許状を取得希望の場合、希望者数が特別支援学校実習の受入人数を大幅に超える場合は、人数制限を行う可能性がある。

2 実習校・実習期間

教育実習（3年次教育実習、4年次教育実習）は、原則として、次の表に示すとおり実施します。

実施時期や、「事前・事後指導」の日程に関しては、『開講科目一覧』を確認してください。また、必要事項の連絡は、ポータルサイトからの配信や掲示によっても行いますので、それらにも注意してください。

専攻	履修年次	コース・履修型	授業科目名	実習校	実習期間
初等教育専攻	3年次	幼年期教育創生コース	幼稚園実習	附属幼稚園	2週間
		上記以外のコース	小学校3年次実習	附属小学校	
	4年次	全てのコース	小学校4年次実習	協力小学校	3週間
中等教育専攻	3年次	全てのコース	中学校3年次実習	附属中学校	2週間
	4年次		中学校4年次実習	協力中学校	3週間
芸術体育・生活系教育専攻	3年次	小中履修型	中学校3年次実習	附属中学校	2週間
		中等連携履修型	中学校3年次実習	附属中学校	2週間
	4年次	小中履修型	小学校4年次実習	協力小学校	3週間
		中等連携履修型	中学校4年次実習	協力中学校	3週間
特別支援教育専攻	3年次	小履修型	小学校3年次実習	附属小学校	2週間
		中履修型	中学校3年次実習	附属中学校	
	4年次	小履修型	小学校4年次実習	協力小学校	3週間
		中履修型	中学校4年次実習	協力中学校	
		全てのコース	特別支援学校実習	附属特別支援学校、または協力特別支援学校	2週間

3 教育実習の履修登録

各教育実習を履修するには、前年度に「教育実習履修届」を提出しなければなりません。これを怠った場合は、翌年度に教育実習を履修することはできませんので、注意してください。

「教育実習履修届」提出に関する詳細については、ポータルサイト・掲示にてお知らせします。

ただし、4年次での特別支援学校実習を履修する方で以下に該当する場合は、2年次の時点で履修届を提出する必要があります。

- ・特別支援教育専攻の発達障害教育コース及び健康・運動障害教育コース
- ・初等教育専攻、中等教育専攻、芸術体育・生活系教育専攻の特別支援学校教諭免許状の副免許取得希望者

4 教育実習履修の留意事項

(1) 「教育実習生記録」の提出

各教育実習の履修にあたっては、その都度、定められた期日までに「教育実習生記録」を提出しなければなりません。提出方法、提出時期等に関しては、ポータルサイト・掲示にてお知らせします。

(2) 「事前・事後指導」

すべての教育実習には、「事前・事後指導」1単位が含まれており、事前指導を受けなければ実習を履修することはできません。「事前・事後指導」の日程等に関しては、『開講科目一覧』を確認してください。また、ポータルサイト・掲示も見落とさないようにしてください。

5 追実習

疾病その他のやむをえない理由によって、所定の期間に教育実習を履修できない場合、許可を得て別の期間に追実習を履修することができます。詳細は、教務課窓口にお問い合わせください。

6 成績評価等

各教育実習（「事前・事後指導」を含む）の成績評価は、実習校、各担当教員から提出される資料や、学生が提出する「教育実習日誌」等の資料をもとに、本学の学部実習専門委員会が行います。

7 教育実習等特例措置

やむを得ない事情により教育実習等の科目を履修することができない場合は、クラス担任と相談し承諾を得た上で、「教育実習等特例措置取扱要領」に従って教育実習等特例措置（以下「特例措置」という。）適用の申請をすることができます。特例措置適用の可否は大学による審査の上で決定されます。

特例措置の申請が認められた場合、その学生は、教育実習等の科目の代替科目を履修することになります。しかし、その適用を受ける内容によっては、卒業時に教育職員免許状が取得できなくなります。

特例措置の願い出は、2年次授業期間終了時以降から特例措置を受けようとする各学期の開始前までに、教育実習等特例措置申請書（別記様式）を、クラス担任の意見書を添えて、教務課に提出して、学長に許可をお願い出てください。

ただし、最終年次学生については、やむを得ないと判断できる場合には、学期開始後においても申請を受理し、審査することがあります。

なお、申請にあたっては、3年次教育実習の履修資格を満たしている必要があります。

特例措置により免除が可能となる科目（免除科目）は、次のとおりです。

ただし、「初等教育実践探究演習 B 又は各教科の中等実践指導法 B」を単独で申請することはできません。

また、幼稚園実習、小学校3年次実習、小学校4年次実習、特別支援学校実習（小履修型の学生）は、教職実践演習（幼・小）と組み合わせて申請しなければなりません。

中学校3年次実習、中学校4年次実習、特別支援学校実習（中履修型の学生）は、教職実践演習（中・高）と組み合わせて申請しなければなりません。

免 除 科 目	単 位 数
初等教育実践探究演習 B 又は各教科の中等実践指導法 B	2
幼稚園実習（事前・事後指導1単位を含む）	3
小学校3年次実習（事前・事後指導1単位を含む）	3
小学校4年次実習（事前・事後指導1単位を含む）	4
中学校3年次実習（事前・事後指導1単位を含む）	3
中学校4年次実習（事前・事後指導1単位を含む）	4
特別支援学校実習（事前・事後指導1単位を含む）	3
教職実践演習（幼・小）	2
教職実践演習（中・高）	2

この適用を受けた学生は、免除科目の合計単位数以上の単位を代替科目から修得しなければなりません。代替科目は「本学で開設している」全ての授業科目から選択して履修することができます。

ただし、特別支援教育専攻に在籍する学生で、特別支援学校実習を免除された者は、専門教育科目の特別支援専門科目の単位を、「特別支援学校実習」を除いて31単位以上、卒業までに修得しなければなりません。

XIII

第 13 章 介護等体験

- 1 介護等体験
- 2 実施学年・実施施設・体験期間
- 3 実施施設の種類
- 4 体験内容
- 5 介護等体験の費用
- 6 介護等体験を行うための要件
- 7 介護等体験の参加手続き
- 8 介護等体験の証明書の提出

第13章 介護等体験

1 介護等体験

教育職員免許法の特例等に関する法律により、小学校教諭および中学校教諭の免許状取得希望者には、障害者・高齢者等に対する介護等の体験が義務づけられています。本学の卒業要件を満たしても、介護等体験の証明書がなければ、小学校教諭および中学校教諭の免許状を取得することはできません。

本学においては、介護等体験を以下のとおり実施します。

2 実施学年・実施施設・体験期間

実施学年・実施施設・体験期間は、下の表にまとめたとおりです。

専 攻	実施学年・実施施設・体験期間
初 等 教 育 専 攻	①2年次・・・社会福祉施設等において、原則として連続する5日間
中 等 教 育 専 攻	②3年次・・・特別支援学校において、原則として連続する2日間 (上記①、②の両方を体験すること)
芸術体育・生活系教育専攻	ただし、特別支援学校教諭の免許状を副免許状として取得する場合には、上記②については免除となる。
特 別 支 援 教 育 専 攻	特別支援学校における教育実習をもって、介護等体験とする。

注：6級以上の障害を有する者は免除されます。

3 実施施設の種類の種類

介護等体験の実施施設は下記のとおりです。

社会福祉施設等・・・法令に定める施設等で、宮城県および仙台市の関係機関と協議して定めた施設等。

特別支援学校・・・宮城県内の特別支援学校。

4 体験内容

社会福祉施設等や特別支援学校において、障害者・高齢者等に対する介護・介助や、交流等を行います。また、受け入れ施設の職員に必要とされる業務の補助（掃除、洗濯その他）も体験内容に含まれます。

5 介護等体験の費用

社会福祉施設等における体験については、受け入れに必要な経費の徴収が行われますが、これは学生個人の負担となります。費用の詳細は、事前指導の中でお知らせします。

6 介護等体験を行うための要件（事前指導および健康診断等）

介護等体験を行うためには、次のことが必要です。事前指導の実施に関する詳細は、掲示にてお知らせします。

- 介護等体験に対応する事前指導を受講すること。
- 定期健康診断を受診すること。
- 「学生教育研究災害傷害保険」および「学研災付帯賠償責任保険」に加入していること。

以上の要件を満たさないと、介護等体験が実施できなくなる場合があります。

7 介護等体験の参加手続き

介護等体験を行うには、下記のとおり、参加手続きをする必要があります。

詳細は掲示にてお知らせします。

- 社会福祉施設等…1年次末に、指定の「申し込み書」に介護等体験費用を添えて教務課窓口提出する。
- 特別支援学校…2年次10月に、教務課に申込手続きを行う。

※特別支援学校での介護等体験について

2年次10月に行われる特別支援学校教諭の副免許状取得に関する希望意向調査において、「希望あり」と回答した学生については、3年次における特別支援学校での介護等体験については免除となります。ただし、その後、何らかの事情により、特別支援学校教諭の副免許状の取得を取りやめた場合には、4年次において、本学の附属特別支援学校での、2日間の介護等体験が必要となります。その際には、3年次末までに、必ず「追加履修申し込み書」を教務課窓口提出してください。

※教育実習等特例措置が認められた者の介護等体験

教育実習等特例措置の適用を受けた者は介護等体験への参加は認められません。

なお、すでに介護等体験の申し込みを済ませた者については辞退の手続きが必要になります。

8 介護等体験の証明書の提出

介護等体験の証明書は、教育職員免許状の申請に必要な書類です。証明書は、介護等体験（特別支援教育専攻の場合は特別支援学校での教育実習）の最終日に、受入先から交付されますので、受領後1週間以内に教務課窓口提出してください。

XIV

第 14 章 卒業研究

- 1 卒業研究
- 2 卒業研究の参加資格
- 3 卒業論文の作成・提出・審査
 - (1) 卒業論文の作成
 - (2) 卒業論文題目の提出
 - (3) 卒業論文の提出
 - (4) 卒業論文の審査

第14章 卒業研究



1 卒業研究

「卒業研究」は、4年間の学修成果を集約するものとして、全専攻において設定されている科目です。指導教員の指導を受けながら論文を作成する（制作・演奏を含む）形と、指導教員が毎週実施する指定の演習に参加して研究を行う形の二つがあり、いずれをとるかは教員ごとに定めています。

「卒業研究」の履修にあたっては、以下の決まりに従う必要があります。

2 卒業研究の参加資格

「卒業研究」には参加資格が定められています。

「卒業研究」参加の前年度末までに84単位以上修得した上で、3年次の教育実習の単位を修得し、なおかつ指定科目の修得単位数が下表に示す単位数を超える者でなければ、「卒業研究」に参加することはできません。

「卒業研究」に参加できない場合、4年間で卒業することはできませんので注意してください。

なお、教育実習等特例措置で、3年次の教育実習（幼稚園実習、小学校3年次実習、中学校3年次実習）の免除の適用を受けた者は、それぞれのコース・履修型で定められた卒業研究参加資格から、3年次の教育実習の単位を修得することが免除されます。

専攻	コース・履修型	3年次の教育実習	指定科目の修得単位数	履修前年度末までの総修得単位数
初等教育専攻	幼年期教育創生コース	幼稚園実習	22単位以上 (対象：幼稚園の領域科目、小学校の専門科目、コース専門科目)	84単位以上
	上記以外のコース	小学校3年次実習	22単位以上 (対象：小学校の専門科目、コース専門科目)	
中等教育専攻	全コース	中学校3年次実習	28単位以上 (対象：中学校の専門科目、コース専門科目)	
芸術体育・生活系教育専攻	小中履修型	中学校3年次実習	28単位以上 (対象：小学校の専門科目、中学校の専門科目※1、コース専門科目)	
	中等連携履修型	中学校3年次実習	28単位以上 (対象：中学校の専門科目※1、コース専門科目)	
特別支援教育専攻	小履修型	小学校3年次実習	36単位以上 (対象：小学校の専門科目、特別支援専門科目)	
	中履修型	中学校3年次実習	44単位以上 (対象：中学校の専門科目、特別支援専門科目)	

※1：芸術体育・生活系教育専攻における指定科目の修得単位数の「中学校の専門科目」は芸術体育・生活系の教科（音楽、美術、保健体育、技術、家庭）に関わる科目を指しています。中等連携履修型の選択教科である国語、数学、英語に関する科目は含みませんので、特に中等連携履修型の者は留意してください。

3 卒業論文の作成・提出・審査

指導教員の指導を受けながら論文を作成する（制作・演奏を含む）形の「卒業研究」を行う専攻・コースにおいては、次の決まりに従う必要があります。

(1) 卒業論文の作成

指導教員の決定、卒業論文題目の選定方法は、各専攻・コースによって定められています。卒業論文作成の手順、方法についても、各専攻・コースの指示に従ってください。

(2) 卒業論文題目の提出

卒業論文（制作・演奏を含む）提出者は、下記の日時までに、指導教員の承認を受けて「卒業論文題目届」を教務課に提出する必要があります。これを怠ると、卒業論文を提出することはできません。

ただし、海外に留学中の者（休学して海外の大学等で学んでいる者を含む）については、提出期限を8月31日（休日のときは次の平日）までとします。

卒業論文題目届

提出期限：卒業予定年度の5月31日（休日のときは次の平日）17時まで
提出先：教務課窓口

なお、届け出た論文題目を変更する必要がある場合は、指導教員の承認を受けて12月20日（休日のときは次の平日）17時までに「卒業論文題目変更届」を教務課に提出してください。

(3) 卒業論文の提出

卒業論文は、下記の日時までに教務課に提出しなければなりません。これに遅れた場合、卒業論文は受理されませんので注意してください。

卒業論文の提出期限は以下のとおりです。

卒業論文の提出

提出期限：1月16日（休日のときは次の平日）正午まで
ただし、以下の学生は、提出期限を2月8日（休日のときは次の平日）正午までとする。
・初等教育専攻の理科・技術・家庭科に関する教員が指導教員である学生
・芸術体育・生活系教育専攻の生活系教育コースに所属する学生
・論文題目提出期限の日時において海外に留学中の学生（休学して海外の大学等で学んでいる者を含む）。
提出先：教務課窓口
《注》卒業論文の体裁については、各専攻・コースの指示に従ってください。

なお、卒業論文のほかに「論文抄録」を提出させる場合もあります。これについては、各専攻・コースの指示に従ってください。

(4) 卒業論文の審査

卒業論文の審査は下記の方法で行います。

- ①論文提出者には、試問（発表行事を含む）を行う。
- ②審査は、指導教員を含め2名以上の教員が行う。

XV

第 15 章 専門拡充科目

- 1 専門拡充科目の趣旨
- 2 専門拡充科目の履修
 - (1) 単位数と履修方法
 - (2) 履修上の留意点
- 3 専門拡充科目の推奨パッケージ例

第15章 専門拡充科目

1 専門拡充科目の趣旨

専門拡充科目は、学校教員としての「専門性の更なる高度化」をめざした授業科目です。その際の「専門性の更なる高度化」については、専攻・コースに対応したみなさん自身の専門分野とは異なる分野・領域の資質・能力を修得するという「専門性の拡大」という方向性と、みなさん自身の専門分野およびある特定の分野・領域に関する資質・能力をさらに一層深化させるという「専門性の充実」という方向性との二つの側面を持っています。専門拡充科目は、ますます高度化・複雑化する学校現場でのさまざまな教育課題の解決に柔軟的かつ複眼的に対応できる学校教員の育成をめざして、本学が独自に設定した科目群であり、他校種や他教科の教員免許状や資格の取得、および隣接する分野・領域や他分野・領域に関する資質・能力を身につけることを推進する、という意味を持っています。

2 専門拡充科目の履修

(1) 単位数と履修方法

専門拡充科目にあてる単位数については、専攻・コース・履修型によって違いがあります。基本的には、卒業要件として取得する教員免許状が一種類の専攻・コースでは、ある程度多めの単位数を割り当てている一方で、卒業要件として取得する教員免許状があらかじめ二種類と定められている専攻・コースでは、この科目にあてる単位数は少なくなっています。なお、芸術体育・生活系教育専攻では、卒業要件としている二種類の教員免許状の学びを充実させることに単位数を割いているために、この授業区分での履修は課さないこととしています。

履修にあたっては、1年生から4年間にわたって、所定の単位数以上の授業科目を計画的に履修してください。

(2) 履修上の留意点

専門拡充科目の履修の際には、次の2点に留意してください。

① 専門拡充科目として認定される単位について

この授業科目群で開設している科目については、原則として、この授業区分のために独自の授業科目を開設しているのではなく、「専門教育科目群」や「専門基盤科目群」の中で開設されている授業科目を適宜組み合わせることによって、履修モデルとしての推奨パッケージをいくつか提示する形で出講しています。したがって、推奨パッケージに含まれている授業科目でも、すでに専門基盤科目または専門教育科目として単位を修得した授業科目は、重ねて履修することはできません（一部の「重ね履修可」の科目を除く）。そのような科目が含まれていても、推奨パッケージの選択は可能ですが、その場合、単位修得済みの授業科目を除いて履修してください（専門拡充科目として修得できる単位数は、推奨パッケージの合計単位数よりも少なくなりますので注意してください）。

専門基盤科目や専門教育科目と重ねて履修できない、ということに留意して、卒業に必要な専門拡充科目の単位を修得するためには、はやめに4年間の履修計画を立てる必要があります。1年生のうちから、将来を見据えて、どの授業科目を、どの授業区分で履修するのか、履修計画をしっかりと立てるようにしてください。

② 推奨パッケージの選択について

推奨パッケージは、特定の方向に向けた「専門性の拡大」または「専門性の充実」という明確な目的のもとで設定されています。何を目的とするパッケージなのか理解したうえで、自分自身の将来を見据えた履修計画を基に、自覚的・主体的に厳選して履修モデルとしての推奨パッケージを選択するようにしてください。卒業までに修得が必要な専門拡充科目の単位数をこえるように、推奨パッケージを組み合わせることが必要ですが、目的をもって履修すること、内容が身につくように計画的な履修を心掛けることが大切です。

なお、推奨パッケージは、履修モデルとして練られたもので、パッケージとしての履修を基本とし、それを推奨していますが、専門拡充科目の単位をそろえるために必要な場合、パッケージの中から授業科目の一部を選んで履修することもできます。

3 専門拡充科目の推奨パッケージ例

専門拡充科目の推奨パッケージ例については、『開講科目一覧』に記載しているので、そちらを確認してください。なお、入学年度以降に新たに開講された推奨パッケージについても、履修は可能です。

推奨パッケージには、履修単位数の多少という視点でみれば、20単位から30単位程度の比較的大きな単位数を履修する大型のパッケージがある一方で、10単位前後の小型のパッケージも用意しています。また、履修のねらいという視点でみれば、学校教員としての副免許状の取得をめざす推奨パッケージ例として、たとえば、特別支援学校教諭の2種免許状を取得するためのパッケージや、小中免許併有をめざして中等教育専攻の学生が小学校教諭2種免許状を取得するためのパッケージなどを用意しています。こうしたパッケージの他にも、学校教員としての特定の分野・領域に関する資質・能力を身につけるための推奨パッケージ例として、たとえば、「情報活用能力育成教育」関係の科目をプラスして学ぶためのパッケージや、「学校防災・安全教育」関係の科目をプラスして学ぶためのパッケージなどを用意しています。

XVI

第 16 章 副免許状の取得

- 1 本学で所要資格を取得できる免許状
- 2 副免許状の取得に関わる教育実習の履修
- 3 幼稚園、小学校、中学校、高等学校教諭の免許状取得を希望する場合
 - (1)「教科(領域)に関する科目」の履修
 - (2)「各教科(保育内容)の指導法に関する科目」の履修
 - (3)「教育の基礎的理解に関する科目」の履修
 - (4)「道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目」の履修
 - (5)「教育実践に関する科目」の履修
 - (6)「大学が独自に設定する科目」の履修
- 4 特別支援学校教諭の免許状取得を希望する場合
- 5 中学校、高等学校教諭の免許状の「教科に関する科目」(免許法相当科目表)

第16章 副免許状の取得

この章では、「副免許状」の取得を希望する場合の履修方法について、本学の教育課程に即して説明します。

「副免許状」とは、各専攻の卒業要件を満たすことにより取得資格が得られる免許状（6ページ参照）以外の免許状を指します。

1 本学で所要資格を取得できる免許状

必要単位を修得すれば、次の免許状取得の所要資格を得ることができます。

ただし、時間割の都合等で、希望する授業をすべて履修することは実際には不可能ですので、どの免許状を取得するとよいか、よく考えて、無理のない履修計画を立てるようにしてください。

- ・ 幼稚園教諭一種免許状（以下、「幼1種」と略す）
- ・ 幼稚園教諭二種免許状（以下、「幼2種」と略す）
- ・ 小学校教諭一種免許状（以下、「小1種」と略す）
- ・ 小学校教諭二種免許状（以下、「小2種」と略す）
- ・ 中学校教諭一種免許状（以下、「中1種」と略す）
- ・ 中学校教諭二種免許状（以下、「中2種」と略す）
- ・ 高等学校教諭一種免許状（以下、「高1種」と略す）
- ・ 特別支援学校教諭一種免許状
- ・ 特別支援学校教諭二種免許状

2 副免許状の取得に関わる教育実習の履修

教育職員免許状を取得するためには、所定の教育実習を履修する必要があります。副免許状の場合も、これは同じです。とはいえ、取得を希望する副免許状に関わる校種と同一の校種で必ず教育実習を行わなければならない、というわけではありません。また、中学校、高等学校の免許は、教科ごとに異なりますが、教育実習は教科ごとに履修する必要はありません。特別支援学校に関わる免許も、領域ごとに異なりますが、教育実習は領域ごとに履修する必要はありません。したがって、副免許取得を希望する校種によっては、別途教育実習を行わなくても、卒業要件として履修する教育実習の単位の修得によって教員免許状取得の所要資格を得ることができます。

なお、特別支援学校実習については、希望者数が実習校の受入人数を大幅に超える場合は、人数制限を行う可能性があるため、必ずしも希望者全員が履修できるとは限りません。

下の表は、学生の所属別に、各校種の副免許状取得に必要な教育実習（卒業要件以外の教育実習）をまとめたものです。

《表1》

学生の所属	副免の校種	幼稚園	小学校	中学校	高等学校	特別支援学校
初等教育専攻 (幼年期教育創生コース)	—	—	—	—	中学校4年次実習	特別支援学校実習 (4年次)
初等教育専攻 (幼年期教育創生コース以外)	—	—	—	—	中学校4年次実習	特別支援学校実習 (4年次)
中等教育専攻 (各コース)	小学校4年次実習	—	—	—	—	特別支援学校実習 (4年次)
芸術体育・生活系教育専攻 (小中履修型)	—	—	—	—	—	特別支援学校実習 (4年次)
芸術体育・生活系教育専攻 (中等連携履修型)	小学校4年次実習	—	—	—	—	特別支援学校実習 (4年次)

副免の校種 学生の所属	幼稚園	小学校	中学校	高等学校	特別支援学校
特別支援教育専攻 (小履修型)	—	—	—	中学校4年次実習	—
特別支援教育専攻 (中履修型)	小学校4年次実習	—	—	—	—

「—」は、副免許取得に関わる教育実習を別途履修する必要がないことを示します。副免許状の取得に関わる教育実習を履修する必要があるのかないのか、この表によって各自確認してください。

副免許状の取得に関わって教育実習を履修する必要がある場合は、卒業要件としての教育実習と同様に、所定の手続きをへて実習を履修することになります。教育実習への履修登録や、教育実習履修の留意事項等については、卒業要件としての教育実習の場合と同じですので、第12章「教育実習」の説明を確認してください。

3 幼稚園、小学校、中学校、高等学校教諭の免許状取得を希望する場合

副免許状として「幼1種」「幼2種」「小1種」「小2種」「中1種」「中2種」「高1種」の取得を希望する場合、次の6つの科目区分のそれぞれについて、免許状の種類に応じて定められた単位を修得する必要があります。なお、《表2》から《表5》の「—」は、単位を修得しても修得単位数に加えることができないことを意味していますので、留意してください。

- (1) 教科（領域）に関する科目
- (2) 各教科（保育内容）の指導法に関する科目
- (3) 教育の基礎的理解に関する科目
- (4) 道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目
- (5) 教育実践に関する科目
- (6) 大学が独自に設定する科目

6つの科目区分の合計修得単位数は、次のとおりです。

《表2》

科目区分	最低修得単位数						
	幼1種	幼2種	小1種	小2種	中1種	中2種	高1種
(1) 教科（領域）に関する科目	6	6	10	4	20	※教科により異なる	20
(2) 各教科（保育内容）の指導法に関する科目	10	6	20	12	8	2	4
(3) 教育の基礎的理解に関する科目	12	12	10	10	10	10	10
(4) 道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目	6	6	10	10	10	10	8
(5) 教育実践に関する科目	9	9	9	9	9	9	5
(6) 大学が独自に設定する科目	8	0	0	0	2	0	12
合 計	51	39	59	45	59	※教科により異なる	59

以下、この6つの科目区分ごとに、修得を必要とする単位数の説明を行います。

(1)「教科（領域）に関する科目」の履修

「教科（領域）に関する科目」については、取得を希望する免許状の種類に応じて、次の《表3》にしたがって必要単位を修得してください。

なお、「中1種」「中2種」「高1種」の免許状取得に必要な最低修得単位数は、教科により異なるので、《表10-1》から《表10-10》までの「免許法相当科目表」(211ページ～221ページ)のうち、取得を希望する免許教科の表を参照してください。

《表3》

区分	授業科目	単位	幼1種	幼2種	小1種	小2種	中1種	中2種	高1種
幼稚園	保育内容（健康）	2	6	6	—	—	—	—	—
	保育内容（人間関係）	2							
	保育内容（環境）	2							
	保育内容（言葉）	2							
	保育内容（表現）	2							
小学校	初等国語科内容概論	2	—	—	10	4	—	—	—
	初等社会科内容概論	2							
	初等算数科内容概論	2							
	初等理科内容概論	2							
	初等生活科内容概論	2							
	初等音楽科内容概論	2							
	初等図画工作科内容概論	2							
	初等家庭科内容概論	2							
	初等体育科内容概論	2							
	初等外国語活動・外国語内容概論	2							
中学校 高等学校	取得しようとする教科の 「免許法相当科目」による		—	—	—	—	20	※教科により 異なる	20 ※家庭は26
合 計			6	6	10	4	20	※教科により 異なる	20 ※家庭は26

留意事項

1. 「教科（領域）に関する科目」の単位修得に関しては、後述の本章『(6)「大学が独自に設定する科目」の履修」(207ページ)も参照すること。

(2)「各教科（保育内容）の指導法に関する科目」の履修

「各教科（保育内容）の指導法に関する科目」については、取得を希望する免許状の種類に応じて、次の《表4》にしたがって必要単位を修得してください。

《表4》

区分	授業科目	単位	幼1種	幼2種	小1種	小2種	中1種	中2種	高1種
幼稚園	各保育内容の指導法	各2	10 ※1	6 ※2	—	—	—	—	—
小学校	初等国語科教育法	2	—	—	10教科 20単位	音・図・ 体から 2教科 を含め 6教科 12単位	—	—	—
	初等社会科教育法	2							
	初等算数科教育法	2							
	初等理科教育法	2							
	初等生活科教育法	2							
	初等音楽科教育法	2							
	初等図画工作科教育法	2							
	初等家庭科教育法	2							
	初等体育科教育法	2							
	初等外国語活動・外国語教育法	2							
中学校 高等学校	各教科の中等教育法	各2	—	—	—	—	8	2	4
	各教科の中等実践指導法	各2	—	—	—	—		—	—
合 計			10	6	20	12	8	2	4

留意事項

1. **幼1種**を取得する場合、上の表で※1を付した「各保育内容の指導法」に関する科目は、4単位まで小学校教諭免許状にかかわる各教科初等教育法（ただし、社会、理科、家庭、外国語は除く）をもってあてることができます。この取り扱いを受けるためには、同時に小学校教諭免許状を取得する必要があります。**幼2種**を取得する場合、上の表で※2を付した「各保育内容の指導法」に関する科目は、2単位まで小学校教諭免許状にかかわる各教科教育法（初等）（ただし、社会、理科、家庭、外国語は除く）をもってあてることができます。この取り扱いを受けるためには、同時に小学校教諭免許状を取得する必要があります。
2. **中2種（国語）**を取得する場合は、「中等国語科教育法 A」の1科目2単位を修得すること。
3. **中1種（社会）**を取得する場合、「中等社会科教育法 A」、「中等社会科教育法 B」、「中等社会・地歴科教育法」、「中等社会・公民科教育法」の4科目8単位を修得すること。中2種（社会）を取得する場合は、「中等社会科教育法 A」または「中等社会科教育法 B」のどちらか1科目2単位を修得すること。
4. **高1種（地理歴史）**を取得する場合、「中等社会科教育法 A」、「中等社会・地歴科教育法」の2科目4単位を修得すること。
5. **高1種（公民）**を取得する場合、「中等社会科教育法 B」、「中等社会・公民科教育法」の2科目4単位を修得すること。
6. **中2種（数学）**を取得する場合は、「中等数学科教育法 A」の1科目2単位を修得すること。
7. **中1種（理科）**を取得する場合、「中等理科教育法 A」、「中等理科教育法 B」、「中等理科実践指導法 A」、「中等理科実践指導法 B」の4科目8単位を修得すること。**中2種（理科）**を取得する場合は、「中等理科教育法 A」または「中等理科教育法 B」のどちらか1科目2単位を修得すること。

(3)「教育の基礎的理解に関する科目」の履修

「教育の基礎的理解に関する科目」については、取得を希望する免許状の種類に応じて、次の《表5》にしたがって必要単位を修得してください。

《表5》

授業科目	単位	幼1種	幼2種	小1種	小2種	中1種	中2種	高1種
教育の原理	2	2	2	2	2	2	2	2
教職入門	2	2	2	2	2	2	2	2
発達と学習の心理	2	2	2	2	2	2	2	2
特別支援教育理解	2	2	2	2	2	2	2	2
教育の制度・経営	2	2	2	2	2	2	2	2
教育と地域社会	2							
幼稚園教育課程論	2	2	2	—	—	—	—	—
合 計		12	12	10	10	10	10	10

留意事項

1. 「教育の基礎的理解に関する科目」の単位修得に関しては、『(6)「大学が独自に設定する科目」の履修」(207ページ)も参照すること。

(4)「道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目」の履修

「道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目」については、取得を希望する免許状の種類に応じて、次の《表6》にしたがって必要単位を修得してください。

《表6》

授業科目	単位	幼1種	幼2種	小1種	小2種	中1種	中2種	高1種
道徳の理論及び指導	2	—	—	2	2	2	2	—
総合的な学習の時間の指導法 (特別活動を含む。)	2	—	—	2	2	2	2	2
教育課程と教育方法	1	1	1	1	1	1	1	1
情報活用能力育成実践論	1	1	1	1	1	1	1	1
児童・生徒理解	2	—	—	2	2	2	2	2
幼児理解	2	2	2	—	—	—	—	—
教育相談 (カウンセリングを含む。)	2	2	2	2	2	2	2	2
合 計		6	6	10	10	10	10	8

(5)「教育実践に関する科目」の履修

「教育実践に関する科目」については、取得を希望する免許状の種類に応じて、次の《表7》にしたがって必要単位を修得してください。

なお、教育実習の履修については、本章「**2 副免許状の取得に関する教育実習の履修**」(201ページ)を参照してください。

《表7》

授業科目	単位	幼1種	幼2種	小1種	小2種	中1種	中2種	高1種
幼稚園3年次実習	3	7 (幼稚園、小学校の各実習を充てる)	7 (幼稚園、小学校の各実習を充てる)	7 (幼稚園、小学校、中学校の各実習を充てる)	7 (幼稚園、小学校、中学校の各実習を充てる)	7 (小学校、中学校、高等学校の各実習を充てる)	7 (小学校、中学校、高等学校の各実習を充てる)	3 (中学校、高等学校の各実習を充てる)
小学校3年次実習	3							
小学校4年次実習	4							
中学校3年次実習	3							
中学校4年次実習	4							
高等学校実習	3							
教職実践演習	2	2	2	2	2	2	2	2
合 計		9	9	9	9	9	9	5

留意事項

1. 教職実践演習については、卒業要件として修得する単位ですべての免許状にあてることができるので、2科目（教職実践演習（幼・小）、教職実践演習（中・高）の両方）を修得する必要はありません。
2. 「教育実践に関する科目」の単位修得に関しては、『(6)「大学が独自に設定する科目」の履修』(207ページ)も参照すること。

(6)「大学が独自に設定する科目」の履修

「大学が独自に設定する科目」については、次の《表8》①～④に該当する授業科目の単位を修得し、取得を希望する免許状の種類に応じた必要単位を修得してください。

《表8》

授業科目		単位	幼1種	幼2種	小1種	小2種	中1種	中2種	高1種
①「教科（領域）に関する科目」《表3》			「教科（領域）に関する科目」の最低修得単位数をこえて修得した単位						
②「教育の基礎的理解に関する科目」《表5》			「教育の基礎的理解に関する科目」の最低修得単位数をこえて修得した単位						
③「教育実践に関する科目」《表7》			「教育実践に関する科目」の最低修得単位数をこえて修得した単位						
④ 大学が独自に設定する科目	学校論	2		—	—	—		—	
	適応支援論	2		—	—	—		—	
	生涯学習論	2		—	—	—		—	
	子ども学	2		—	—	—		—	
	幼年期の育ちと学び（幼1種のみ）	2		—	—	—	—	—	—
合 計			8	—	—	—	2	—	12 ※家庭は6

留意事項

- ①欄の「教科（領域）に関する科目」については、取得しようとする教科の「免許法相当科目」から修得すること。「免許法相当科目」は《表10-1》から《表10-10》までの「免許法相当科目表」(211ページ～221ページ)を参照すること。
- ④欄の「幼年期の育ちと学び」については、幼1種の免許状を取得する場合にのみ、「大学が独自に設定する科目」の修得単位数に含めることができる。

4 特別支援学校教諭の免許状取得を希望する場合

初等教育専攻、中等教育専攻および芸術体育・生活系教育専攻の学生が、他の校種の免許状のほかに 特別支援学校教諭の免許状を取得しようとする場合は、次の《表9-1》、《表9-2》にしたがって「特別支援教育に関する科目」の必要単位を修得してください。ただし、特別支援学校実習については、希望者数が実習校の受入人数を大幅に超える場合は、人数制限を行う可能性があるため、必ずしも希望者全員が履修できるとは限りません。

どの科目を履修すればよいかを整理した一覧表を表9-1、表9-2に掲載しています。副免許状として特別支援学校教諭免許状の取得を考えている場合、必ずこの一覧表を確認して履修するようにしてください。

特別支援学校教諭の免許状には下記の5領域があり、それぞれの領域に必要な単位数を満たした場合に、免許状に領域名が付記されます。

視覚障害者に関する教育の領域
聴覚障害者に関する教育の領域
知的障害者に関する教育の領域
肢体不自由者に関する教育の領域
病弱者に関する教育の領域

したがって、取得しようとする領域の第1欄～第4欄について それぞれの授業科目の単位を修得するようにして

ください。

なお、第1欄～第4欄とは、特別支援学校教諭の普通免許状の授与を受ける場合の特別支援教育に関する科目のカテゴリーをあらわすものとなります。【 】内は免許法上必要単位数です。()は、2種免許状の最低修得単位数を示します。

第一欄：特別支援教育の基礎理論に関する科目【2(2)】

第二欄：特別支援教育領域に関する科目【16(8)】

うち、心身に障害のある幼児、児童又は生徒の心理、生理及び病理に関する科目【2(2)】

心身に障害のある幼児、児童又は生徒の教育課程及び指導法に関する科目【2(2)】

第三欄：免許状に定められることとなる特別支援教育領域以外の領域に関する科目【5(3)】

第四欄：心身に障害のある幼児、児童又は生徒についての教育実習【3(3)】

(参考)：教育職員免許法別表第一、教育職員免許法施行規則第七条

《表9-1》

【令和4（2022）年度以降入学者用】

特別支援学校教諭 1種 免許（初等教育専攻、中等教育専攻、芸術体育・生活系教育専攻学生用）

免 許 領 域		5領域						4領域						3領域※2						2領域	
	視覚障害	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	聴覚障害	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	知的障害	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	肢体不自由	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	病弱	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第1欄	特別支援教育基礎理論	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第2欄	心理	視覚障害の心理・生理・病理	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		聴覚・言語障害の心理・生理・病理	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		知的障害の心理・生理・病理	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		肢体不自由の心理・生理・病理	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		病弱の心理・生理・病理	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	教育	視覚障害の教育課程・指導論	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		聴覚・言語障害の教育課程・指導論	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		知的障害の教育課程・指導論	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		肢体不自由の教育課程・指導論	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		病弱の教育課程・指導論	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	心理又は教育	視覚障害への教育支援A	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		視覚障害への教育支援B	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		聴覚・言語障害への教育支援A	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		聴覚・言語障害への教育支援B	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		(第2欄合計単位数)	28	24	24	24	20	20	20	20	20	20	16	16	16	16	16	16	16	16	16
第3欄		発達障害への教育支援A	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修	○ 選択必修
		発達障害への教育支援B	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		発達障害への教育支援C	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		重度・重複障害への教育支援	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		特別支援教育総論	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第4欄	特別支援学校実習※1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(総単位数)		41	37	37	37	33	33	33	33	33	33	29	29	29	29	29	29	29	29	29	29

※1 初等教育専攻、中等教育専攻、芸術体育・生活系教育専攻の学生は原則として知的障害特別支援学校で教育実習を行う。

※2 知・肢・病の3領域では単位不足のため免許要件を満たさない。

＜参考＞特別支援学校実習の履修資格

教育実習履修の前年度末までに、次の表に示した要件を満たしていない場合は、教育実習を履修することは出来ません。

特別支援学校実習	
下記の①～④のいずれも満たすこと	
①	小学校4年次実習または中学校4年次実習の参加資格を有すること
②	「特別支援教育基礎理論」2単位を修得していること
③	取得しようとする免許領域（視覚・聴覚・知的・肢体・病弱）のいずれかひとつの領域に関わる「○○の心理・生理・病理」、「○○の教育課程・指導論」のうちから4単位以上を修得していること
④	「発達障害への教育支援A」、「発達障害への教育支援B」、「発達障害への教育支援C」、「重度・重複障害への教育支援」、「特別支援教育総論」のうちから2単位以上を修得していること

《表9-2》

【令和4（2022）年度以降入学者用】

特別支援学校教諭 **2種** 免許（初等教育専攻、中等教育専攻、芸術体育・生活系教育専攻学生用）

免 許 領 域		5領域	4領域					3領域※2										2領域
	視覚障害	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○					○
	聴覚障害	○	○	○	○		○	○	○					○	○	○		○
	知的障害	○	○	○		○	○	○			○	○			○	○		
	肢体不自由	○	○		○	○	○			○	○			○	○		○	
	病弱	○		○	○	○	○		○			○	○			○	○	
第1欄	特別支援教育基礎理論	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第2欄	心理	視覚障害の心理・生理・病理	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○					○
		聴覚・言語障害の心理・生理・病理	○	○	○	○		○	○	○				○	○	○		○
		知的障害の心理・生理・病理	○	○	○		○	○	○			○	○		○	○		
		肢体不自由の心理・生理・病理	○	○		○	○	○			○	○		○	○		○	
		病弱の心理・生理・病理	○		○	○	○	○		○			○	○		○	○	
	教育	視覚障害の教育課程・指導論	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○					○
		聴覚・言語障害の教育課程・指導論	○	○	○	○		○	○	○				○	○	○		○
		知的障害の教育課程・指導論	○	○	○		○	○	○			○	○		○	○		
		肢体不自由の教育課程・指導論	○	○		○	○	○			○	○		○	○		○	
		病弱の教育課程・指導論	○		○	○	○	○		○			○	○		○	○	
	(第2欄合計単位数)		20	16	16	16	16	16	12	12	12	12	12	12	12	12	12	8
第3欄		発達障害への教育支援A	○選択必修	○選択必修	○選択必修	○選択必修	○選択必修	○選択必修	○選択必修	○選択必修	○選択必修	○選択必修	○選択必修	○選択必修	○選択必修	○選択必修	○選択必修	○選択必修
		発達障害への教育支援B																
		発達障害への教育支援C	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		重度・重複障害への教育支援	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		特別支援教育総論	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第4欄	特別支援学校実習※1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(総単位数)			33	29	29	29	29	29	25	25	25	25	25	25	25	25	25	21

※1 初等教育専攻、中等教育専攻、芸術体育・生活系教育専攻の学生は原則として知的障害特別支援学校で教育実習を行う。

※2 2領域については、第2欄の5領域すべてのうちから任意の2領域の「心理・生理・病理」、「教育課程・指導論」の単位を修得することで、その2領域の免許が取得可能。表は「視覚」「聴覚」2領域の場合を例示したもの。

＜参考＞特別支援学校実習の履修資格

教育実習履修の前年度末までに、次の表に示した要件を満たしていない場合は、教育実習を履修することは出来ません。

特別支援学校実習	
下記の①～④のいずれも満たすこと	
①	小学校4年次実習または中学校4年次実習の参加資格を有すること
②	「特別支援教育基礎理論」2単位を修得していること
③	取得しようとする免許領域（視覚・聴覚・知的・肢体・病弱）のいずれかひとつの領域に関わる「○○の心理・生理・病理」、「○○の教育課程・指導論」のうちから4単位以上を修得していること
④	「発達障害への教育支援A」、「発達障害への教育支援B」、「発達障害への教育支援C」、「重度・重複障害への教育支援」、「特別支援教育総論」のうちから2単位以上を修得していること

5 中学校、高等学校教諭の免許状の「教科に関する科目」(免許法相当科目表)

《表10-1》国語

- ・中学校1種及び高等学校1種については、下記授業科目から、必修を含めて20単位以上修得すること。
- ・中学校2種については、下記授業科目から必修を含めて10単位以上修得すること。(最低修得単位数：10単位)

免許法に定める区分	授 業 科 目 名	中学校 単位数	高等学校 単位数	備 考
国 語 学 (音声言語及び文章表現 に関するものを含む)	国語科内容概論(国語学)	2	2	必修
	国語科内容講義(国語学 A)	2	2	
	国語科内容講義(国語学 B)	2	2	
	国語科内容基礎演習(国語学 A)	2	2	
	国語科内容基礎演習(国語学 B)	2	2	
国 文 学 (国文学史を含む)	国語科内容概論(国文学 A)	2	2	必修
	国語科内容概論(国文学 B)	2	2	必修
	国語科内容講義(国文学 A)	2	2	
	国語科内容講義(国文学 B)	2	2	
	国語科内容基礎演習(国文学 A)	2	2	
	国語科内容基礎演習(国文学 B)	2	2	
	国語科内容基礎演習(国文学 C)	2	2	
	国語科内容基礎演習(国文学 D)	2	2	
漢 文 学	国語科内容概論(漢文学)	2	2	必修
	国語科内容講義(漢文学)	2	2	
	国語科内容基礎演習(漢文学 A)	2	2	
	国語科内容基礎演習(漢文学 B)	2	2	
書 道 (書写を中心とする)	国語科内容実技(書道)	2	/	必修(中のみ)
教科及び教科の指導法 に関する科目における 複数の事項を合わせた 内 容 に 係 る 科 目	中等国語科内容基礎論	2	2	
	国語科内容基礎演習(国語科教育 A)	2	2	
	国語科内容基礎演習(国語科教育 B)	2	2	

注) この表のうち、/と記載されている科目は、当該校種の免許単位に加えることができない。

《表10-2》社会、地理歴史、公民

- ・中学校1種及び高等学校1種については、下記授業科目から必修及び選択必修を含めて20単位以上修得すること。
- ・中学校2種については、下記授業科目から必修及び選択必修を含めて10単位以上修得すること。（最低修得単位数：16単位）

免許法に定める区分			授 業 科 目 名	中学校 単位数	高等学校 (地歴) 単位数	高等学校 (公民) 単位数	備 考
中学校	高等学校						
社会	地理歴史	公民					
日本史・ 外国史	日 本 史		社会系教科内容概論（日本史）	2	2	/	必修 (中、高・地歴のみ)
			社会系教科内容講義（日本史 A）	2	2	/	
			社会系教科内容講義（日本史 B）	2	2	/	
			社会系教科内容基礎演習（日本史 A）	2	2	/	
			社会系教科内容基礎演習（日本史 B）	2	2	/	
	外 国 史		社会系教科内容概論（外国史）	2	2	/	必修 (中、高・地歴のみ)
			社会系教科内容講義（外国史 A）	2	2	/	
			社会系教科内容講義（外国史 B）	2	2	/	
			社会系教科内容基礎演習（外国史 A）	2	2	/	
			社会系教科内容基礎演習（外国史 B）	2	2	/	
地 理 学 (地 誌 を 含 む)	人文地理 学・自然 地 理 学		社会系教科内容概論（人文地理学）	2	2	/	必修 (中、高・地歴のみ)
			社会系教科内容講義（人文地理学）	2	2	/	
			社会系教科内容実習（人文地理学）	2	2	/	
			社会系教科内容基礎演習（人文地理学 A）	2	2	/	
			社会系教科内容基礎演習（人文地理学 B）	2	2	/	
			社会系教科内容概論（自然地理学）	2	2	/	必修 (中、高・地歴のみ)
			社会系教科内容講義（自然地理学）	2	2	/	
			社会系教科内容実習（自然地理学）	2	2	/	
			社会系教科内容基礎演習（自然地理学 A）	2	2	/	
			社会系教科内容基礎演習（自然地理学 B）	2	2	/	
	地 誌		社会系教科内容講義（地誌）	2	2	/	必修 (中、高・地歴のみ)

免許法に定める区分			授 業 科 目 名	中学校 単位数	高等学校 (地歴) 単位数	高等学校 (公民) 単位数	備 考
中学校	高等学校						
社会	地理歴史	公民					
「法律学、 政治学」		「法 律 学 (国 際 法 を含む)、 政 治 学 (国 際 政 治 を 含 む) 」	社会系教科内容概論（法律学）	2	/	2	2単位以上 選択必修 (中、高・公民のみ)
			社会系教科内容概論（政治学）	2	/	2	
			社会系教科内容講義（政治学）	2	/	2	
			社会系教科内容基礎演習（政治学 A）	2	/	2	
			社会系教科内容基礎演習（政治学 B）	2	/	2	
「社会学、 経 済 学」		「社会学、 経 済 学 (国 際 経 済 を 含 む) 」	社会系教科内容概論（経済学）	2	/	2	2単位以上 選択必修 (中、高・公民のみ)
			社会系教科内容概論（社会学）	2	/	2	
			社会系教科内容講義（社会学）	2	/	2	
			社会系教科内容基礎演習（社会学 A）	2	/	2	
			社会系教科内容基礎演習（社会学 B）	2	/	2	
「哲 学、 倫 理 学、 宗 教 学」		「哲 学、 倫 理 学、 宗 教 学、 心 理 学」	社会系教科内容概論（哲学）	2	/	2	2単位以上 選択必修 (中、高・公民のみ)
			社会系教科内容概論（倫理学）	2	/	2	
			社会系教科内容講義（哲学）	2	/	2	
			社会系教科内容基礎演習（哲学 A）	2	/	2	
			社会系教科内容基礎演習（哲学 B）	2	/	2	
教科及び教科の指導法に関する 科目における複数の事項を 合わせた内容に係る科目			社会系教科内容構成基礎論（社会・地 理歴史科）	2	2	/	
			社会系教科内容構成基礎論（社会・公 民科）	2	/	2	
			社会系教科内容基礎演習（社会・地理 歴史科教育 A）	2	2	/	
			社会系教科内容基礎演習（社会・地理 歴史科教育 B）	2	2	/	
			社会系教科内容基礎演習（社会・公民 科教育 A）	2	/	2	
			社会系教科内容基礎演習（社会・公民 科教育 B）	2	/	2	

注) この表のうち、/と記載されている科目は、当該校種の免許単位に加えることができない。

《表10—3》英語

- ・中学校1種及び高等学校1種については、下記授業科目から必修を含めて20単位以上修得すること。
- ・中学校2種については、下記授業科目から必修を含めて10単位以上修得すること。（最低修得単位数：12単位）

免許法に定める区分	授 業 科 目 名	中学校 単位数	高等学校 単位数	備 考
英 語 学	英語科内容概論（英語学）	2	2	必修
	英語科内容講義（英語学）	2	2	
	英語科内容演習（英語学 A）	2	2	
	英語科内容演習（英語学 B）	2	2	
英 語 文 学	英語科内容概論（英語文学）	2	2	必修
	英語科内容講義（英語文学）	2	2	
	英語科内容演習（英語文学 A）	2	2	
	英語科内容演習（英語文学 B）	2	2	
英 コミュニケーション	英語科内容基礎演習（英会話 A）	1	1	必修
	英語科内容基礎演習（英会話 B）	1	1	
	英語科内容基礎演習（英会話 C）	1	1	
	英語科内容基礎演習（英会話 D）	1	1	
	英語科内容演習（英会話 A）	1	1	必修
	英語科内容演習（英会話 B）	1	1	
	英語科内容演習（英会話 C）	1	1	
	英語科内容演習（英会話 D）	1	1	
	英語科内容基礎演習（英作文 A）	2	2	必修
	英語科内容基礎演習（英作文 B）	2	2	
	英語科内容演習（英作文 A）	2	2	必修
	英語科内容演習（英作文 B）	2	2	
	英語科内容演習（プレゼンテーション）	2	2	
異 文 化 理 解	英語科内容概論（異文化理解）	2	2	必修
	英語科内容演習（異文化理解）	2	2	
教科及び教科の 指導法に関する科目 における複数の事項 を合わせた内容に係 る 科 目	中等英語科内容構成基礎論	2	2	

《表10—4》数学

- ・中学校1種及び高等学校1種については、下記授業科目から選択必修を含めて20単位以上修得すること。
- ・中学校2種については、下記授業科目から選択必修を含めて10単位以上修得すること。(最低修得単位数：10単位)

免許法に定める区分	授 業 科 目 名	中学校 単位数	高等学校 単位数	備 考
代 数 学	数学科内容基礎講義（代数学）	2	2	2単位以上選択必修
	数学科内容講義（代数学 A）	2	2	
	数学科内容講義（代数学 B）	2	2	
	数学科内容演習（代数学系 A）	2	2	
	数学科内容演習（代数学系 B）	2	2	
幾 何 学	数学科内容基礎講義（幾何学）	2	2	2単位以上選択必修
	数学科内容講義（幾何学 A）	2	2	
	数学科内容講義（幾何学 B）	2	2	
	数学科内容演習（幾何学系 A）	2	2	
	数学科内容演習（幾何学系 B）	2	2	
解 析 学	数学科内容基礎講義（解析学）	2	2	2単位以上選択必修
	数学科内容講義（解析学 A）	2	2	
	数学科内容講義（解析学 B）	2	2	
	数学科内容演習（解析学系 A）	2	2	
	数学科内容演習（解析学系 B）	2	2	
「確率論、統計学」	数学科内容講義（確率論・統計学 A）	2	2	2単位以上選択必修
	数学科内容講義（確率論・統計学 B）	2	2	
コ ン ピ ュ ー タ	数学科内容講義（コンピュータ）	2	2	必修
教科及び教科の指導法に関する科目における複数の事項を合わせた内容に係る科目	中等数学科内容構成基礎論	2	2	

《表10—5》理科

- ・中学校1種及び高等学校1種については、下記授業科目から必修及び選択必修を含めて20単位以上修得すること。
- ・中学校2種については、下記授業科目から必修及び選択必修を含めて10単位以上修得すること。（最低修得単位数：16単位）

免許法に定める区分	授 業 科 目 名	中学校 単位数	高等学校 単位数	備 考
物 理 学	理科内容基礎講義（物理学 A）	2	2	2単位以上選択必修
	理科内容基礎講義（物理学 B）	2	2	
	理科内容応用講義（物理学）	2	2	
	理科内容基礎演習（物理学）	2	2	
化 学	理科内容基礎講義（化学 A）	2	2	2単位以上選択必修
	理科内容基礎講義（化学 B）	2	2	
	理科内容応用講義（化学）	2	2	
	理科内容基礎演習（化学）	2	2	
生 物 学	理科内容基礎講義（生物学 A）	2	2	2単位以上選択必修
	理科内容基礎講義（生物学 B）	2	2	
	理科内容応用講義（生物学）	2	2	
	理科内容基礎演習（生物学）	2	2	
地 学	理科内容基礎講義（地学 A）	2	2	2単位以上選択必修
	理科内容基礎講義（地学 B）	2	2	
	理科内容応用講義（地学）	2	2	
	理科内容基礎演習（地学）	2	2	
物 理 学 実 験 （コンピュータ活用を含む）	理科内容基礎実験（物理学）	2	2	必修
化 学 実 験 （コンピュータ活用を含む）	理科内容基礎実験（化学）	2	2	必修
生 物 学 実 験 （コンピュータ活用を含む）	理科内容基礎実験（生物学）	2	2	必修
地 学 実 験 （コンピュータ活用を含む）	理科内容基礎実験（地学）	2	2	必修
教科及び教科の指導法 に関する科目における 複数の事項を合わせた 内 容 に 係 る 科 目	中等理科内容構成基礎論	2	2	

高等学校については、
2単位以上選択必修

《表10—6》音楽

- ・中学校1種及び高等学校1種については、下記授業科目から必修を含めて20単位以上修得すること。
- ・中学校2種については、下記授業科目から必修を含めて10単位以上修得すること。（最低修得単位数：18単位）

免許法に定める区分	授 業 科 目 名	中学校 単位数	高等学校 単位数	備 考
ソルフェージュ	音楽科内容演習（ソルフェージュ）	2	2	必修
声 楽 (合唱及び日本の伝統的な歌唱を含む)	音楽科内容演習（声楽）	2	2	必修
	音楽科内容実技（声楽 A）	1	1	
	音楽科内容実技（声楽 B）	1	1	
	音楽科内容演習（合唱）	2	2	必修
器 楽 (合奏及び伴奏並びに和楽器を含む)	音楽科内容演習（ピアノ）	2	2	必修
	音楽科内容実技（ピアノ）	2	2	
	音楽科内容演習（合奏）	2	2	必修
	音楽科内容演習（和楽器）	2	2	必修
指 揮 法	音楽科内容演習（指揮法）	2	2	必修
	音楽科内容実技（指揮法）	2	2	
音楽理論・作曲法（編曲法を含む）・音楽史（日本の伝統音楽及び諸民族の音楽を含む）	音楽科内容演習（音楽理論 A）	2	2	必修
	音楽科内容演習（音楽理論 B）	2	2	
	音楽科内容演習（作曲法）	2	2	
	音楽科内容講義（音楽学）	2	2	必修
	音楽科内容演習（音楽学 A）	2	2	
	音楽科内容演習（音楽学 B）	2	2	
教科及び教科の指導法に関する科目における複数の事項を合わせた内容に係る科目	音楽科内容演習（音楽学 C）	2	2	
	中等音楽科内容構成基礎論	2	2	

《表10—7》美術

- ・中学校1種及び高等学校1種については、下記授業科目から必修を含めて20単位以上修得すること。
- ・中学校2種については、下記授業科目から必修を含めて10単位以上修得すること。（最低修得単位数：10単位）

免許法に定める区分	授業科目名	中学校単位数	高等学校単位数	備考
絵画 (映像メディア表現を含む)	美術科内容基礎演習（絵画）	2	2	必修
	美術科内容実技（絵画Ⅰ）	2	2	
	美術科内容実技（絵画Ⅱ A）	2	2	
	美術科内容実技（絵画Ⅱ B）	2	2	
彫刻	美術科内容基礎演習（彫塑）	2	2	必修
	美術科内容実技（彫塑Ⅰ）	2	2	
	美術科内容実技（彫塑Ⅱ）	2	2	
デザイン (映像メディア表現を含む)	美術科内容基礎講義（デザイン）	2	2	必修
	美術科内容演習（デザイン）	2	2	
工芸	美術科内容基礎講義（工芸）	2	／	必修（中のみ）
	美術科内容演習（工芸）	2	／	
美術理論・美術史（鑑賞並びに日本の伝統美術及びアジアの美術を含む）	美術科内容基礎講義（美術理論・美術史）	2	2	必修
	美術科内容演習（美術理論・美術史）	2	2	
	美術科内容演習（鑑賞）	2	2	
教科及び教科の指導法に関する科目における複数の事項を合わせた内容に係る科目	中等美術科内容構成基礎論	2	2	

注）この表のうち、／と記載されている科目は、当該校種の免許単位に加えることができない。

《表10—8》保健体育

- ・中学校1種及び高等学校1種については、下記授業科目から必修及び選択必修を含めて20単位以上修得すること。
- ・中学校2種については、下記授業科目から必修及び選択必修を含めて10単位以上修得すること。（最低修得単位数：18単位）

免許法に定める区分	授業科目名	中学校 単位数	高等学校 単位数	備 考
体 育 実 技	保健体育科内容基礎実技（体育実技）	2	2	必修
	保健体育科内容実技（体育実技・球技 A）	2	2	2単位以上選択必修
	保健体育科内容実技（体育実技・球技 B）	2	2	
	保健体育科内容実技（体育実技・武道）	2	2	必修
	保健体育科内容実技（体育実技・器械運動）	1	1	1単位以上選択必修
	保健体育科内容実技（体育実技・陸上競技）	1	1	
	保健体育科内容実技（体育実技・ダンス）	1	1	必修
	保健体育科内容実技（体育実技・野外活動 A）	1	1	
	保健体育科内容実技（体育実技・野外活動 B）	1	1	
「体 育 原 理、 体 育 心 理 学、 体 育 経 営 管 理 学、 体 育 社 会 学、 体 育 史」・運動 学（運動方法学を 含 む）	保健体育科内容講義（体育原理・体育史）	2	2	2単位以上選択必修
	保健体育科内容講義（体育社会学・体育経営 管理学）	2	2	
	保健体育科内容講義（体育心理学）	2	2	
	保健体育科内容講義（運動学 A）	2	2	2単位以上選択必修
	保健体育科内容講義（運動学 B）	2	2	
生 理 学 （運動生理学を 含 む）	保健体育科内容講義（人体生理学）	2	2	必修
衛 生 学・ 公 衆 衛 生 学	保健体育科内容講義（衛生学・公衆衛生学）	2	2	必修
学 校 保 健 （小児保健、精 神保健、学校安 全及び救急処置 を 含 む）	保健体育科内容講義（学校保健）	2	2	必修
教科及び教科の 指導法に関する 科目における複 数の事項を合わ せた内容に係る 科 目	中等保健体育科内容構成基礎論	2	2	
	保健体育科内容実験（生理学、衛生学・公衆 衛生学、学校保健）	2	2	

《表10—9》技術 ※高等学校一種工業の免許は取得できない

- ・ 中学校1種については、下記授業科目から必修を含めて20単位以上修得すること。
- ・ 中学校2種については、下記授業科目から必修を含めて10単位以上修得すること。（最低修得単位数：16単位）

免許法に定める区分	授 業 科 目 名	中学校単位数	備 考
木 材 加 工 (製図及び実習を含む)	技術科内容講義（木材加工）	2	必修
	技術科内容実験実習（木材加工）	2	
金 属 加 工 (製図及び実習を含む)	技術科内容講義（金属加工）	2	必修
	技術科内容実験実習（金属加工）	2	
機 械 (実 習 を 含 む)	技術科内容基礎講義（機械）	2	必修
	技術科内容応用講義（機械）	2	
	技術科内容実験実習（機械）	2	必修
電 気 (実 習 を 含 む)	技術科内容基礎講義（電気）	2	必修
	技術科内容応用講義（電気）	2	
	技術科内容実験実習（電気）	2	必修
栽 培 (実 習 を 含 む)	技術科内容基礎講義（栽培）	2	必修
	技術科内容応用講義（栽培／生物育成）	2	
	技術科内容実験実習（栽培）	2	
情報とコンピュータ (実 習 を 含 む)	技術科内容基礎講義（情報とコンピュータ）	2	必修
	技術科内容応用講義（情報とコンピュータ）	2	
	技術科内容実験実習（情報とコンピュータ）	2	
教科及び教科の指導法に関する科目における複数の事項を合わせた内容に係る科目	中等技術科内容構成基礎論	2	
	技術科内容講義（材料と加工）	2	

《表10—10》家庭

- ・ 中学校1種及び高等学校1種については、下記授業科目から必修及び選択必修を含めて20単位以上修得すること。
- ・ 中学校2種については、下記授業科目から必修及び選択必修を含めて10単位以上修得すること。（最低修得単位数：14単位）

免許法に定める区分		授業科目名	中学校 単位数	高等学校 単位数	備考
中学校	高等学校				
家庭経営学 (家族関係学及び家庭経済学を含む)	家庭経営学 (家族関係学及び家庭経済学を含む)	家庭科内容講義（家庭経営学）	2	2	必修
被服学 (被服製作実習を含む)	被服学 (被服製作実習を含む)	家庭科内容講義（被服学 A）	2	2	必修
		家庭科内容講義（被服学 B）	2	2	
		家庭科内容実験実習（被服学 A）	1	1	1単位以上選択必修
		家庭科内容実験実習（被服学 B）	1	1	
食物学 (栄養学、食品学及び調理実習を含む)	食物学 (栄養学、食品学及び調理実習を含む)	家庭科内容講義（食物学 A）	2	2	必修
		家庭科内容講義（食物学 B）	2	2	
		家庭科内容実験実習（食物学 A）	1	1	1単位以上選択必修
		家庭科内容実験実習（食物学 B）	1	1	
住居学	住居学 (製図を含む)	家庭科内容講義（住居学 A）	2	2	必修
		家庭科内容講義（住居学 B）	2	2	
		家庭科内容実験実習（住居学 A）	1	1	1単位以上選択必修
		家庭科内容実験実習（住居学 B）	1	1	
保育学 (実習を含む)	保育学 (実習及び家庭看護を含む)	家庭科内容講義（保育学 A）	2	2	必修
		家庭科内容講義（保育学 B）	2	2	
		家庭科内容実験実習（保育学 A）	1	1	1単位以上選択必修
		家庭科内容実験実習（保育学 B）	1	1	
	家庭電気・家庭機械・情報処理	家庭科内容講義（家庭電気）	／	2	必修（高のみ）
		家庭科内容講義（家庭機械）	／	2	必修（高のみ）
		家庭科内容講義（情報処理）	／	2	必修（高のみ）
教科及び教科の指導法に関する科目における複数の事項を合わせた内容に係る科目	教科及び教科の指導法に関する科目における複数の事項を合わせた内容に係る科目	中等家庭科内容構成基礎論	2	2	
		家庭科内容講義（家庭科教育）	2	2	
		家庭科内容演習（家庭科教育）	2	2	

注）この表のうち、／と記載されている科目は、当該校種の免許単位に加えることができない。

XVII

第 17 章 その他の資格の取得

■ 1 学校図書館司書教諭の任用資格の取得

- (1) 学校図書館司書教諭とは
- (2) 任用資格の取得
- (3) 履修上の留意点

■ 2 授業科目表

授業科目表11－①(学校図書館司書教諭)

第17章 その他の資格の取得

卒業に必要な単位に加えて、さらに所定の単位を修得すると、教育職員免許状のほかに「学校図書館司書教諭」の任用資格を取得することができます。この章では、資格の取得について説明するとともに、開設されている資格関連科目の詳細とその履修方法が記された「授業科目表」を掲載します。表の見方については第2章「6 授業科目表の見方」(11ページ～)を参照してください。

1 学校図書館司書教諭の任用資格の取得

(1) 学校図書館司書教諭とは

学校図書館司書教諭は、学校図書館法に基づき学校に配置される専門職です。小学校・中学校・高等学校または特別支援学校の教育職員免許状を有し、かつ学校図書館の管理・運営や図書館メディアを活用した教育についての知識・技能を修得したうえで、学校図書館の専門的職務を担う教諭のことをいいます。

平成15年度以降、12学級以上を擁するすべての学校に学校図書館司書教諭を置くことが学校図書館法で義務づけられました。情報化が進む今日、学習情報センター、メディアセンターとしての学校図書館の役割が重視されるようになってきましたが、このような状況の中で学校図書館司書教諭の役割への期待もまた高まってきているといえるでしょう。多様なメディアの発達に対応した情報サービスや、児童・生徒の主体的な学習活動の推進およびメディアリテラシー能力の育成のための適切な支援等を行うことが、近年、学校図書館司書教諭に求められています。

(2) 任用資格の取得

学校図書館司書教諭の資格は、教育職員免許状を有する者が、文部科学大臣の委嘱をうけた大学等で「学校図書館司書教諭講習規程」による講習を受け、所定の単位を修得することによって得られます。また、大学在学中に当該科目の必要単位をすべて修得し、さらに教育職員免許状を取得した場合は、上記の講習に書類参加すれば修了証書が授与されます。大学で必要な単位を修得しただけでは資格の取得にはなりませんので、注意してください。

本学では、「学校図書館司書教諭講習規程」で定められた学校図書館司書教諭の資格取得関連科目を、次に示す表のとおり5科目開設しています。この5科目の単位をすべて修得すれば、学校図書館司書教諭の資格取得に必要な単位を満たすことができます。授業科目の詳細や履修方法については、「授業科目表11-1」(224ページ～)を確認してください。

【大学において修得すべき科目および単位数】

学校図書館司書教諭講習規程		左記に対応する本学の授業科目名			
科 目 名	単位数	授 業 科 目 名	単位数	対象年次	備 考
学 校 経 営 と 学 校 図 書 館	2	学 校 経 営 と 学 校 図 書 館	2	1～	必 修
学 校 図 書 館 メ デ ィ ア の 構 成	2	学 校 図 書 館 メ デ ィ ア の 構 成	2	1～	必 修
学 習 指 導 と 学 校 図 書 館	2	学 習 指 導 と 学 校 図 書 館	2	1～	必 修
読 書 と 豊 か な 人 間 性	2	読 書 と 豊 か な 人 間 性	2	1～	必 修
情 報 メ デ ィ ア の 活 用	2	情 報 メ デ ィ ア の 活 用	2	1～	必 修

(3) 履修上の留意点

本学において学校図書館司書教諭の資格取得を希望する場合、上記に掲載されている授業科目の単位をすべて修得する必要がありますが、これらの科目には隔年開講となっているものもあります。履修計画を立てる際には、『開講科目一覧』で開講予定を確かめてください。

なお、上記5科目は第6章「授業科目表2」に教養科目として掲載されています。授業科目表11-1はそれ

らの科目を学校図書館司書教諭の資格取得向けに集約した再掲表となります。また、上記5科目は専門拡充科目の履修推奨パッケージとして『開講科目一覧』に提示されています。教養科目として履修することも、専門拡充科目として履修することもできますが、どちらか一方の授業区分の単位となり、両方の単位として数えることはできませんので注意してください。

2 授業科目表

授業科目表11-1（学校図書館司書教諭）

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
学校経営と学校図書館	司書教諭科目全体の総論として、教育活動の視点から学校図書館の理念と教育的意義を押さえ、その機能と役割について基本的な理解をはかる。そのために、教育行政とのかかわりにおける学校図書館の歴史、学校図書館法、司書教諭の役割と学校図書館活動など、学校図書館全般について理解を深め、司書教諭としてのあるべき姿を考える。	2	(2)	講義	1～	必修
学校図書館メディアの構成	学校図書館メディアの種類・特性と教育的意義を理解し、児童・生徒、教員に適切な情報を提供できるよう図書館資料の選択・収集と構成、図書資料を中心とした組織化について学び、実務能力の育成を図る。	2	(2)	講義	1～	必修
情報メディアの活用	学校図書館を中心に、教育現場における多様な情報メディアの特性と活用の方法を学ぶ。コンピュータや教育用ソフトウェアの活用のほか、視聴覚メディアの活用、データベースと情報検索、インターネットによる情報検索と発信について理解を深め、実務能力の育成を図る。	2	(2)	講義	1～	必修
読書と豊かな人間性	児童・生徒の発達段階に応じた読書教育の理念と方法を探る。読書の意義と目的に対する理解を深めるとともに、児童・生徒向け図書館メディアの種類や活用法、読書指導・支援の方法等を学び、さらに読書を通じた家庭・地域との連携についても考える。	2	(2)	講義	1～	必修
学習指導と学校図書館	学習指導において、学校図書館の果たす役割は大きい。その認識・理解を深めるとともに、学校図書館メディアの活用をめぐる、児童・生徒の発達段階や、各教科の特性に応じた指導方法を学び、司書教諭として児童・生徒・教員にどのような支援ができるのかを考える。	2	(2)	講義	1～	必修

注）毎週授業時数欄の（ ）は、前期または後期のみの時数を示す。





履修のしおり

令和5年度(2023年度)入学生用

令和5年3月31日発行

編集・発行者: **宮城教育大学 学務専門委員会**

〒980-0845 仙台市青葉区荒巻字青葉149番地

電話: (022) 214-3331

FAX: (022) 214-3621

印刷所: (株) ホクトコーポレーション

